

# 偽・錬鉄の魔法使い

syuu

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

第四聖杯戦争終盤に溢れ出た呪いの泥は冬木の街を飲み込み火の海へと変えた。正史とは違い、その泥に飲み込まれた『■■■■しろろ』に汚れた聖杯が開けた『根源』へと通じる穴から出て来た魂（バケモノ）が宿る。根源の渦と聖杯の泥に犯された魂は過ぎた力と知識を手に入れ、成り代わる。

これは、黒く染まった別のエミヤの物語。

# 目次

1 少年の二面性	1
2 少年の魔法	14
3 少年の戦	29
4 化け物の約束	55
5 戦いの狼煙	67
6 死闘の戦友	103
7 開戦の前哨戦	127
8 義理の共乱	150
9 虚映の使い	178
10 認外の摩擦	206
11 氷材の錬装	232
12 失考の対談	267

1 3 疑念の解消	292
1 4 経路の破戒	315
1 5 温求の無意識	340
1 6 欺瞞の正体	365
1 7 剣銃の森轟	396



# 1 少年の二面性

髪の白い赤い目の女の子と楽しく一緒に本を読む自分とそれを微笑ましげに見つめる優しい両親の姿。

あるときは森全体に白く化粧を施したように吹き積もった雪が舞い降る冬の景色、お父さんが生きていたときは三人で雪達磨を作って遊んでいた。

あるときはお母さんと一緒に屋敷の裏に生えたハーブを干してお湯に入れてハーブティーを作っていた。

あるときは三人になってしまった悲しみを乗り越えるためにお母さんが俺と妹の二人のために一緒に本を読んでくれた。

他愛無い日常がいくつも記憶という名の映像として色褪せることなく繰り返されていた。

ああ、またこの夢だ。

そこは人の目には届かない物静かな深い森の奥に聳え立つ古めかしい屋敷。そこが

俺の家だ。

嘗て白くて長い綺麗な髪と赤い目を持つお母さんと妹、お母さんとは正反対に黒くて短い髪と黒い目の俺とお父さんの四人で笑い合って泣いて過ごした大事な我が家。

幸せが沢山あった何年も前の遠い遠い記憶の中での出来事。

そして、いつも最後はノイズの入った出来の悪い古いテレビのように記憶が断片的に流れ最後は崩れ始める。

崩れた世界の後に残るのは暗く赤い空と地上に無数に蠢く生き物とは呼べない何かに侵食される地平線の見えない世界。ただその中心にいる自分以外誰もいない淋しいけして ■■■ 世界。

「先輩、先輩？ 大丈夫ですか」

「ああ大丈夫だ。今から起きる」

先輩が俺の部屋をノックする音と呼び声に目が覚めると俺の視界は暗い世界からカーテンの隙間から差し込む朝日に照らされた自分の部屋の白い天井を見上げていた。

ベッドから起き上がり机の上に置いた眼鏡を掛け扉の鍵を開けると青みがかつた髪

をした後輩が地元高校の穂群原学園指定制服の上にエプロンを掛け心配そうに俺を見ていた。

「おはようございませす先輩。随分と麗さされていたみたいですけど……」

「ああ、おはよう、桜。下にまで聞こえていたのか？」

この良く出来た後輩の名前は間桐桜、俺の所属している調理部の募集（掛け持ち可）に集まつてた数少ない一年生部員の一人だ。

一年くらい前に自分の作つた料理を俺に紹介して来るようになりいつの間にか我が家のメニュー取り仕切るようになっていた。なんていうか、いろいろ際どい視線を感じることがもあり。一部の人からはお前ら付き合っているんだろ？ という認識が広まっているが基本は放置ノリコメントしている。

「いいえ、いつもの時間に起きてこない先輩を起こそうと思つて部屋の前に来たら唸り声が聞こえて……最初先輩が風邪でも引いて唸っているのかと」

「少し夢見が良くなくなかつたからな。目に隈とか出来ているか？」

俺が目元を指しながら桜に見やすいように顔を近づけると桜は頬を赤く染めて慌てて答える。

「だ、大丈夫ですよ先輩。顔色も良いみたいですし」

「そうか、藤ねえは？」

「リビングのソファで先輩が来るのを待っています」

「そっか。顔洗ってくるから桜は先に戻ってくれ」

「はい」

「遅いぞー、お姉さん待ちくたびれちゃった」

「食べるのか読むのか見るのかどれかにしろって。テレビ見ないなら消すぞ」

俺が顔を洗い寝巻きの上はこの洋館には似合わない防寒用の羽織り着てリビングに下りるとショートカットの二十代半ばの美人（本人談）が行儀悪くも寝転がりながら箸と新聞を持ちリモコンをソファの前にある茶菓子の置いてある背の低いテーブルの隅に放置しており。本人の生活感と性格が実に表れていた。因みにこんなズボラな人だが俺の学校のクラス担任であり英語科の教師である。

俺の前の家の地主の孫で切嗣父さんとはかなり仲が良く。俺と年甲斐もなくよく切嗣父さんをめぐって戦い合った戦友であり義理の姉のような人だ。

「桜ちゃんの朝ごはん。今日の献立は？」

「鮭の切り身と浅葱の味噌和え、蓮根と人参の金平です」



「いや〜ん美味しそう。昨日の夕飯が餃子中華だったから和食にしてくれたのね。いただきまーす!!」

「本当。元気だねえ、藤ねえは」

衛宮切嗣は十年前の出来事が原因で孤児となった俺を引き取ってくれた養父だ。素晴らしく優しくそしてとても■しい人で俺の秘密を知っても一人の人間として見てくれて、俺の秘密を隠すために特別な医（人形）師の作である器具を与えて俺を普通の人間と変わらない生活くれた恩人であり俺のような『異形』を狙う連中との戦う術を教えしてくれた師でもあるのだ。五年前に返そうにも返せない恩を返す前に亡くなってしま。衛宮の屋敷に帰るのが辛くなってしまった。

後俺個人の裏の事情的な理由で海外（修行）留学に二年ほど行っていたのだが。その間、藤ねえが切嗣父さんの遺言だか忘れ形見である俺を気遣ってか未だに衛宮邸の管理をやって屋敷が痛まないようにしてくれている。

その理由は勿論……

「ううん、美味しい。桜ちゃんこの味噌和えと鮭とつても美味しいわよ」

「あ、それは昨日先輩が放課後に作り置きしていたやつです」

「へえ、なかなか合うわね」

そりゃそうだ、何しろ俺は今日の朝食に鮭が出ることを知っていたのだから。

「それより藤ねえ、いつもと同じように食べて大丈夫なのか？」

「え？ ……あ!?! いっけない教員会議に遅刻しちゃう！ハッグハンムグ——ご馳走様!!」

壁にかけてある時計を見て藤ねえは慌てて残りをつかむと器を台所の水に漬けて椅子の下に置いておいたヘルメットを持って玄関口に止めてあるバイクにエンジンをかける。

「あ、そうだ。ねえ、あの話考えてくれた？」

昨夜の話のことだろう。珍しい藤ねえが修学旅行と飯の献立以外で記憶力を費やすとは。

今思えばあんな夢を見たもののあの話が出たのが原因なのかもしれない。

「前から言っているけど俺は未だ切嗣父さんの家に帰るつもりはないぞ」

違う、帰ることが出来ないんじゃない。衛宮の屋敷に帰る資格を俺は海外（修練）に行っている間に捨てたんだ。だって八年前のあの日に俺は……。

「昔のことを考えるとあなたにも思うところはあるんでしょうけど、いつまでも引き摺っている桜ちゃんにモテないぞ」

悪戯気に放ったその言葉の矛盾に俺は思わず笑いを噴き出してしまった。藤ねえが

いかぶしげに眉をひそめる。俺が恥ずかしげに反論するとても期待していたのだろう、生憎とその手の挑発には桁違いに年季の差がある。

「プツハハハハ。なら心配ないや」

「何よその自信ありげな態度はー」

「だって切嗣父さんなんか初恋を引き摺っていても藤ねえにモテていたんだから」

「……~~~~?~?!! ちよつと、なにを言っているのよ!! 話は放課後までにまとめておきなさいよ!!」

「はいはい、事故るなよ藤ねえ」

照れ隠しのつもりなのだろうバイクを洋館の入り口である門まで走らせて顔を赤くしながら「首洗つて待つてろよおお」を奇声を上げ走り去っていった。

俺は門を閉めて洋館の中に戻りリビングに置かれているテーブルと四つの椅子を見てため息を吐く。

衛宮の屋敷を半ば見捨ててまでして引越した時、先ず最初にそろえた家具の一つだ。「馬鹿だよな。こんなことをしてもあの頃に戻るわけがないのに」

桜は先に食べ終わったのか台所で藤ねえと自分の器を洗っていた。俺も残っている

切り身を口に放り込み食事を再開した。

「先輩、こちらの後片付けは終わりました」

「こつちも丁度食べ終わったところだ、ご馳走様」

「お粗末さまです、一緒に洗いますね」

食べ終わりを器を重ね台所まで持つてくると桜は俺の持つていた器を受け取り一旦水に漬けて未だ泡の残るスポンジで食器を洗い始めた。

最初の頃は、俺が一人でやっていたことなのだが桜が自ら進んで後片付けを手伝うといい始め、いつの間にか台所の水場は桜の指定席になっていた。非常に素晴らしい心意気なのだが俺に関しては一人でやったほうが早いのであるが無邪気な善意を無碍にするほど俺は終わってはいない。

「いつも悪いな桜。助かっているよ」

「いいえ、私が好きでやっている事ですし」

「今夜の晩飯も期待してくれ」

そう答えると俺は、羽織をハンガーに掛け桜が洗った食器の水気を拭き取り食器棚に戻す。

「あの、先輩。あの話って何ですか？」

「ああ、あれ聞こえてたのか」

「すみません、盗み聞きとかするつもりじゃなかったんですけど」

桜が不安げに俺に先ほど藤ねえの話を聞いたことを聞いてきた。聞くつもりはなかったのだからすぐに桜は頭を下げて謝る。

「藤ねえの声は無駄にでかいから仕方ないよな。まああれだ今のこの洋館に引越す前の家に戻ってきて欲しいんだと」

「先輩の前の家……ってあの武家屋敷みたいな噂の」

「桜も知っているんだ？ まっ、三年も住んでいれば愛着も湧くし向こうの方が学園から遠いから引越すとしたら卒業した後だな」

「そうですね。（私の家からも遠くなっちゃいますし）」

同意した後の声が小さくなり聞き取り辛く成る。

「桜？」

「いえ、何でもありません！ それより先輩、今日よろしければ弓道部の朝練を見学しませんか？」

何を言ったのか聞こうとしたら誤魔化すように後ろを向きエプロンを脱ぎ畳むと部活の勧誘をしてきた。

何でも三年の先輩たちがこの夏の大会を境に退部したため体育会系の部活は人手不足なのだそうだ。

悪いが桜、俺は武道を習う余裕は無い。それに今日は本当に都合が悪いため断る一択しかないのだ。毎回調理部に尽くしてくれるお前の優しさに答えたいが……許せ。

「今日は『庭の手入れ』しなきゃいけないからな。たぶん待っていたら朝練には間に合わなくなるだろうから先に一人で行っててくれ」

「わかりました。お先に失礼します」

「行ってらっしゃい」

「行ってきます。先輩、今日の夕飯楽しみにしていますね」

「さてと、やつと行ってくれたか」

俺は、桜を見送ると今まで一般人『衛宮』の顔を外し魔術使い『衛宮』の顔を取る。洋館の本館と裏の離れとを繋ぐ渡り廊下への扉に手を付き魔術を行使するための呪文を唱える。

「術式、起動。汝らが我が道を拒むことは許されん」

扉が俺の言葉に反応し歪に淀み始めると二枚の赤と金の装飾を持ったカードが歪みから飛び出し俺の前に二、三周飛び回ると門番のように扉の脇に張り付く。その二枚にはそれぞれ、『錠』、『迷』とそれぞれの名前に相応しい絵柄が描かれており、俺が扉を潜るのを待っているかのように佇んでいた。

「侵入妨害は継続、再度扉に結界を張れ……ふーつ。急かすやがる」

扉を開けて中に入り、本当の渡り廊下を進むとそこには大きな温室のような工房が広がっている。パツと見ではわからないが工房を形作る防弾ガラスと骨組みに使用されているチタン合金の柱にはそれぞれ一枚一枚に魔術的加工が施されこの工房の主の命令一つで侵入者に対する完全な過剰防衛システムと成り得る。

「さてと、準備は重畳」

魔力を通してながら透明な硝子扉を開け奥へと進み薬品生成の場から銀の器とビニール素材の手袋と手術用の白衣を着込み、錬金術の修練場からは俺が自分で作った鉈包丁を右手に構える。

「来い」

眼鏡を外しひっそりと目を閉じ、ゆっくりと開くと工房の中にいる使い魔として飼育している鳩達が一斉に俺の周りに集まる。まるで何者かに心を奪われたかのように自

分という個を失ったかのような様子に俺は自分のした事にもかかわらず生唾を飲む。

そのうちの一只の首根っこを左手でしっかりと掴み上げると、何度も打ち付けた跡のあるまな板に押し付け……………。

「はあ、はあ、はあ、はあ、はあ」

緊張に心臓の鼓動が早く鳩の首元に狙いを定めた包丁が大きく振るえていた。

「ん、……………く、ンッ!!」

深呼吸をし、心を沈めて覚悟を決めて大きく振り上げると俺は無邪気に小首を傾げる鳩のつぶらな瞳に一瞬怯むも鳩の小首を切断するのに十二分な威力で一気に振り下ろし……………。

この工房の様子を見ればわかるように俺こと『衛宮』は、魔術師としては性格がかなり悪い。いやそれ以上だ。

他の正統派の魔術師が見ればあまりと言えば余りの工房の使用用途に唾然とし目も当てられないことだろう。

それで正しい。



俺は出来損ないだ。

魔術師としても、

錬金術師としても、

魔法使いとしても、

そして何より人として『正義の味方』エミヤを継ぐ者としても、出来損ないだ

自分勝手に

嘘吐きで

無粋で

臆病で

卑怯者で

捻くれ者で

自己中心的で

生きる目標も無いくせに人の命を資源扱いする外道で、

どうしようもなく救えなくて、

救えない存在だ。バケモノ

ただ一つ誇れるものがあればそれは……………。

## 2少年の魔法

いつも通りの通学路を一人、俺は左手中指に包帯を巻き右手に鞆を持ち行き交う穂群原学園生や通勤する人々には目も暮れずに気落ちし、ただただ只管歩ひんすちき続ける。

結局、あの後何度も鉈を振り下ろすも押さえつけている鳩に一度も当たることなく十回目に屠殺を諦め。礼装カード達の魔力供給に自分の血に自前の魔力を込めて、供給が間に合わない高位カード達には洋館の霊脈を吸い上げ休息を取らせる形で代用する始末。

十年前に『根源』という情報だか力だかよくわからない場所を通り抜けて来たせいで父さん（切嗣は『触れた』だけだと思ってるが）俺は普通の魔術師エンゲンが生涯何代も掛けて到達する法すべを当然のように使えた。手を合わせて物質に触れる（一工程シンシクルアクション）だけで勝手に魔術回路が起動し普段使っている魔術とは違い、自分の中にある世界に刻み込めるはずの魔術基盤に似ているものとアクセスし対象の構成をまるで息をするかのように把握し自分が思い描いた形にその形を変えた。スプーンをフォークに、折り紙を鶴の形に、壁や床に穴を開けるといった形状変化だけでなく、液体である水を固体である氷や気体である水蒸気に変える状態変化まで規模にも依るがどれも一瞬から数秒で実現してし

まった。

切っ掛けは切嗣父さんに引き取られてそう日の経っていない時。お茶を淹れる湯が欲しいとヤカンに水を入れていると水が一気に熱湯になり、発現当初は切嗣父さんを唾然とさせてしまった。そのあとすぐに切嗣とうさんは俺を安心させるように優しく笑い掛けると手を掴み俺を土蔵に連れて何が起きたのか俺に説明を求めて俺は、魔術を教わる前であったために感覚的に目の前で起こったことを話した。

厳格に堅い顔をした切嗣父さんは厳密にはそれは魔法ではなくそれから派生した、もしくは原点となる錬金術と似て非なるものであるのだと説明してくれた。

元々四分の一は人バケモノではなかったであつた俺は母方の隔世先祖遺伝返りで魔眼の一睨みで色々なことが出来たが自分でも身に覚えのない異能が発現した時には驚きを隠せずむしろ切嗣父さんに捲くし立てる勢いで興奮していた。

自分の力はどんな物なのか、一体何ができるのか、正に新しいおもちゃを得た子供のよう父さんに切嗣父さんに質問をした。切嗣（魔術師）にしてみればなんとという皮肉だつたのだろうか。魔法使いを名乗つた自分の養子がよりにもよつて本当の魔法使いだつたとは。

困つた顔をしながら切嗣は俺にも分かるようにその力について説明をしてくれた。

魔法使いと魔術師は神秘に関わる裏の世界においてその存在は大きく異なるもので一見どちらも同じ不可能な奇跡の技であるように見えるが『結果』という一面において

大きな違いがある。

例えば魔術で物質を操り敵を拘束、殺害、攪乱、したとしてもそれらの結果は魔術を用いなくとも別の手段で代用が可能であるモノを指す。

対して魔法は現代のどの文明の技術、資金や時間を注ぎ込もうとも絶対に実現不可能な「結果」をもたらすものを指している。

現在確認されている魔法は五つ。切嗣ウツシが知っているのはそのうちの第三法と呼ばれる魔術協会の中でも禁忌中の禁忌とされる究極の錬金術——『魂ヘッスンズ・ファイールの物質化』。

物質界において体という枷に引きずられ劣化する魂を、それ単体で存続できるように固定化し精神体のまま魂単体で自然界に干渉を可能とする高次元体を作り出し、次の段階に向かう生命体として確立する。端的に言えば、真の不老不死。

幸か不幸か俺が持つそれはその第三魔法であった。といっても、実際に使えるのはその末端である錬金術の簡易行使のみで本当に生命を作り出すには膨大な魔力が必要だと補足された。

この冬木の地に降臨した聖杯アキの奇跡キセキによって手に入れた力は、嘗て第三魔法アインツツベルンの担い手に婿養子として迎え入れられた切嗣だからこそ知りえたのだ。

先程の俺の工房に繋がる扉に結界を張っているカード型の礼装は、海外に留学しているときに作り出したもので第三魔法のシステムを一部組み込んでいる。

端的にいうとそれぞれ一枚一枚に命があり、概念という移し身に意思（魂）を宿らせ。契約者、もしくは使用者の魔力供給と詠唱をトリガーに現界する精霊クラスの生命体。

普段は、カード化封印という形を取る事でカードそのものを媒体として実体化させてこの世に繋ぎ止めている。

当然、生きている以上それぞれの性格や個性、欲求があり勝手に封印を解いて奇怪現象を起こし神秘の漏洩をさせないよう敢えて魔力を糧とする不完全な不老不死として完成させた。

今日はその魔力供給の日であったのだが……如何せん屠殺用の使い魔に情を掛けるとは、切嗣父さんの言いつけを守りきれしていない。

魔術（魔法）、ひいては神秘に携わる者としては一定以上の情は邪魔でしかないと教わってきたのに自らが家族と認めてしまったものに危害を加えることが出来ない自分が歯痒い。

最初で最後の魔術の修練に反抗した分野だと言ってもいいだろう。だが切嗣父さんは俺を叱ることなく悲しそうに笑いながら「でもそれは、僕が嘗て出来なかったことだ」と優

しく頭を撫でてくれた。

「おはよう、間桐」

「あ？ 何だ衛宮か。今僕に話し掛けないでくれよ」

教室に到着し、桜の兄である間桐慎二に挨拶早々随分な返事を貰ってしまった。何か気に食わないことでもあったのだろうか完全否定体制に触らぬ神に崇り無しと眼鏡を少しズラし一瞬だけ目を赤くし周囲の生徒の記憶を読み取って納得すると自分の席に座る。

「やれやれ、今日の間桐は一段と気が立っている様子だ。災難だったな衛宮」

後ろからやや古風な言葉遣いを投げ掛ける俺と同じ眼鏡のこいつは柳洞一成。この穂群原学園の現生徒会長であり霊地として最高級の地に立地している柳洞寺の息子で、俺が十年から八年前までの二年間毎月通い詰めていたせいか半ば幼馴染のような関係だ。

「ドーせ、禄でも無い無茶やって盛大に振られでもしたんだろ」

間桐慎二が目に分かるほどに狼狽する。こいつ個人のことは余り好きには成れないがこういつった性格の正直さが少々羨ましいのも事実だ。後、文武両道で異性にモテるところも。

「……相変わらず耳が早いな、俺にはそういった類の話はさっぱりだ。で相手は誰だ？」

「さあ？ 廊下で小耳に挟んだ程度だからな」

「え〜み〜や〜？」

面白いほどに反応してくる間桐を観察するのは実に愉快だが、そろそろ話題をずらすべきだと思い一成のほうを向き先日渡された生徒会企画案を取り出す。

「それより一成、この間頼んだ部費の割り当てについてなんだけどさ」

「うむ、この学園は体育会系の部活に力を入れている。そのせいで文化系の部費の割り当てが心もとないのは調理部の部長としては死活問題だな。といってもそれは一昨年までの話、去年からお前と藤村先生が文字通り職員室から体育会系の部員の胃袋を掴んだお陰で文化系にもそれなりの部費が行き渡るようになった筈だが？」

「いや、そうじゃなくて。部費二倍近く増量されていない？ それに校内の敷地に庭園を作って良いってちよつとやり過ぎなんじゃ。後、藤ねえは顧問になって味見しているだけだから」

「何をいっておる衛宮!! この穂群原の（味を知った）生徒ひいては教師が皆衛宮達の手

料理を楽しみにしているのだぞ？

前回の穂群原学園祭では模擬店の売り上げで体育会系一位の二倍どころか三倍に届く勢いで売り捌きおったおまえが何を言っている!？」

一成が言っているのは、調理部設立当初部費の割り当てが余りに偏っていたことを直訴したところ校長に「実力を見せろ、そうすれば割り当ても考えてやっても良いぞ」(意訳)言われ取り敢えずやれるだけやってみて、これが予想以上に上手くいったのだ。客足が悪ければ最悪、最終手段をしようと思ったのだが幸運にも藤ねえの伝手で集まった人達が客寄せとなり完売となったのだ。

「確かに、衛宮達の売っていた果実大福は良く出来ていたな」

「あの一見中身が何が入っているのか分からない挑戦意識をくすぐる遊び心もさることながら予め入っている種類を展示し食せないものが有れば除ける気遣い。皆感服してたぞ？ 分かるか衛宮、これはお前を期待しているからこそその提案だ」

「部費はともかく、土地利用まで許可してくれる学園の期待に俺が潰されそうなんだけど」

「経験豊富でありながらなにを謙遜している。今日も今日とて間桐妹と共に登校せずに来たものお前の家の家庭菜園の世話があったからなのだろう？」

流石に、一年以上同じ学校に通っていてあんだだけでかい洋館に一人住んでいけば自然



と興味の対象にはなるか。

「事前調査は済ませていると?」

「そういうことだ。そもそも衛宮は自己の評価をもう少し考えてだな——

とまあ、今日もいつも通り平和な日常が始まり日が暮れるまで俺は一般人『衛宮』として学生生活を満喫している。

偶に、魔術協会から偽名で掲げているフリーの雇われ魔術師としての依頼が舞い込んでくることもあるが今週は

珍しく特に何も無い。この調子なら週末の休日を満喫できる。

授業が終わり、家庭科室での部活動も予定通りの時間帯で仕込みが終わったその頃戦いの兆しは見え始めていたんだ。

「今日も上手くいったな」

「後は、焼くか揚げるかどうか悩みどころだよな」

「あつでも、ピーマンに詰め込めば……って部長!?! 左手から血が出てますよ!!」

「あつ、本当だ」

部活動で挽肉の仕込みが終わり皆がそれぞれの献立を考えているとき突然、後輩達から左手の甲から血が出ていることを知らされ手を捲くり傷口を捜す。

「あれ？ おかしいな傷が無いぞ」

今朝の魔力供給時に傷付けた中指から流れてきたのかと包帯を外すも、血は皮膚から滲み出る様に筋を作り床に滴っていた。取り敢えず痛みも無いのでガーゼを貼り付け様子を見ることとし。今日の活動はお開きとなった。

「やれやれ、今日はよく血を見る日だな」

半ば事情を知らない人が聞いたら危ない人認定を受ける台詞を吐きながらいつも通りの通学路を歩く。夕日が沈み辺りはもう暗く街灯に明かりが付き始めていた。

「な!？」

曲がり角を通り坂の上へと登ろうとし視線を上に見上げるとそこには小さな女の子が立っているのが見え、俺は一瞬その容姿に目を奪われる。

女の子はそんな俺の様子を気にすることなく歩き続け擦れ違い際に、こう囁いた。

「早く呼ばないと死んじゃうよ。お兄ちゃん」

小さな鈴のような清純とした小鳥の囁りを人の声帯で表した如き声。 違う。

北欧の貴族令嬢が着るような上品な紫のコートと帽子。 違う。

雪のような白さを持った長い髪。 違う。

そして宝石のような赤い瞳

違う。

何もかもが似ていても

それが違うと分かっていても

気の迷いだと判っていても

「茉莉？」

俺は本当の妹の名を呟いていた。

「あ、おかえり桜」

「ただいま戻りました。先輩……どうしたんですか、その左手」

先に家に帰り、部活で仕込んだ挽肉で茄子の素揚げのタレを作っていると桜が帰ってきて早速治療処置の増えた俺の左手を見て目を張る。桜の爪の垢を煎じれば藤ねえももう少しお淑やかで物静かな人にならないかな。……うん、無理だ想像出来ない。

「大したことじゃないさ、桜も手伝ってくれ」

「はい……元気が無いですけど本当に大丈夫ですか？」

「平気だつて桜は心配性だな」

本当は嘘だけで見栄を張りたがる自分が頼りなく思えてしまう。だが実妹と似た女の子を見掛けただけで昔を思い出し軽いホームシックに罹っているなどかつこ悪すぎる。

「ですけ「たつだいまく、今日の夕飯は何〜?」

桜が何か言いかけたがタイミング悪く藤ねえが帰宅してとつにゆうきたお陰でうやむやとなり夕食が始まった。

食べ終わり、食器を洗い終わってリビングに戻ると桜の姿が消えていた。

「あれ? 桜は?」

「なーんか今日は、少し早めに帰らなきやいけないんだつて」

藤ねえがソファに寝転がってリモコンを弄りながら口に挟んでいた煎餅を離しそういう。何もいわずに出て行くとは誤魔化してでもそれらしいことを言うべきあつたか。それよりも……。

「一人で行かせたのか？」

「大丈夫だつて、うちの若いのに迎えに越させただから」

「教師が生徒を良識あるとはいえヤーさんに預けるなよ」

「仕方ないでしょ、桜ちゃんに伝言頼まれちゃったんだから」

「伝言？」

「今日は疲れているみたいだから風呂入ったら早めに寝てくれつてさー。お姉さんも同意見だから言うけどあんたちよつと顔色悪いわよ」

そこまで悪かったとは、後で鏡で確認しておこう。

「そっか、じゃあ今日は早めに寝ておくよ」

「うん、素直でよろしい。おやすみ、■郎」

「ああ、おやすみ」

朝、目が覚めるといつも通りの日常が待っていた。

桜と一緒に朝飯を作り、藤ねえがやってきて皆で一緒にご飯を食べて学校に行くそんな日常が待っていると思っていた。

「おい、桜。その手の痣はどうしたんだ？」

それは、藤ねえが先に学校に行つて皿洗いが終わった頃のこと、桜の手の甲に何かで掻き消したような痣の痕があつたのだ。

「あ、そのこれは」

今更に反対の手で痣を隠ししどろもどろになる桜、それは痣が見つかったことよりも何を説明すればよいのか分からずに説明を渋っている様子に見えた。

「また、間桐に何かされたのか?」

「違います!! 兄さんは関係ないんです。これは……私が自分でやっちゃつたことで」  
「桜………そこまで言うのなら俺も深くは聞かない」

特に変わった様子も無く本当に桜本人がやらかした事なのか、慎二を庇つてはいるがこれは『兄が疑われるのは侵害だ』と表現するほうが納得がいく庇い方だった。

実際隠し事なら俺のほうが多いし。

「すみません、先輩。後、週末はいつも通りの予定がありますので今日は来れません」  
「分かつてる。じゃあ一緒に学校に行こうか」

「はい!!」

少なくとも暴力を振るわれている様子は無いようだし桜が自分から話してくるまで様子を見よう。

学校に着くと何やら異様な空間と成り果てていた。生徒の様子もさることながらこの学校の敷地内が酷く湿気った下水のような不快感を感じた。魔力が密集しすぎて変質した合成獣<sup>キメラ</sup>を処分した時に似たような匂いを嗅いだ覚えがある。

しかも、この不快感は基点がいくつも存在してしかもg……。

「先輩、先輩？」

「ああ、何だ？」

「あれ」

桜の指差す方向は職員室、そこに二十人ほどの人だけ出ていた。

「行ってみるか」

「はい」

俺たちが向かう頃には更に十人程の生徒が集まり人の壁も向こう側は完全に見えなくなっていた。

といつても、俺が目を凝らせばこんな人壁、無いも同然。

「主将!？」

「イヤー参った参った。あ、おはよう間桐に衛宮」

「美綴」

人だかりの奥から弓道部の主将を務める同級生の美綴綾子が髪を整えながら人の波に開放された爽快感を味わっていた。

桜がこの人だかりについて奥から出ていた彼女に聞いてきた。

「この人だかりは一体どうしたんですか？」

「どうしたもこうしたも無いわよ、遠坂の奴が外国人の転校生を連れてきたんだよ!」

なんだ、ただの転校生か。俺の興味は一気に失せた。ずっと日本で生活してきた連中にしてみれば物珍しく感じるだろう。二年間ずっと留学していた俺にしてみれば外国人（ついでに人外）なんて珍しくも無い。

「それが美人のなんのって、衛宮？」

「先輩？」

「人だかりの原因分かったから先に教室行ってくる。じゃあ桜明日の夕飯から頼むな」

このとき、目を凝らしていれば俺は一度■されることは無かった。そして彼女と出会うことも叶わなかっただろう。



### 3 少年の戦

「——では、今日はここまで。何か質問があれば昼休みのうちに職員室で受け付ける。……号令」

昨日まで何ら変わらない日常であったこの学園に明らかに異常が入り込んでいた。それは間違いなく魔術という神秘が織り込まれた異常。詳しいことはまだわからないが、とても友好的な輩やからの仕業ではないことはこの腐臭にも似た不快感極まる魔力が物語っている。

何より不愉快なのはこの魔術は明らかに一般人を巻き込む目的で施されているというところ。授業の合間の休み時間にざっと校舎を回ったがどれも馬鹿の物覚えのように同じ型で構成されていた。

防御目的にしる儀式目的にしる最低限の人払いや認識阻害の対策も無いお粗末な形式であった。

明らかに素人、しかもこの霊地である冬木の管理セカンドオーナー者である遠坂に喧嘩を売っていると言つて良いほどの愚考だ。

同じく魔道を扱う者として神秘の漏洩の対策をしていればこの不審な施術者に敵意

は感じようとも害意までは感じなかったのだが……。

術の詳細を調べる為に人気の無い所に行こうと教室を出ようとすると。

「衛宮、今日は一緒に食わんのか？」

一成が昼飯の準備をせずに出て行こうとする俺を引き止める。

「今日、弁当を忘れたみたいでさ。購買でなんか買ってそこら辺で済ませてくる」

本当は持つてきているが、普段から教室か生徒会室で食べている俺が急に場所を選んで食事するのは不自然だし、ここは出来るだけ早目に潰しておきたい厄介事を優先すべきだろう。一成がついて来る可能性を考慮して無難な嘘を吐く。

おそらくこれを仕掛けた奴は魔術の使い方は三流だが術の質が悪すぎる。

「珍しいこともあるものだ。今日の天気予報は外れか？」

「じゃ、行ってくる」

訝しげに窓を見る一成に別れを告げると購買のある下の階へと向かっていった。

「術式、起動」

俺は、購買で買ったジュースと焼き蕎麦パンの入ったビニール袋を脇において屋上の

床に手を付き、解析魔術を行使する。

どうしてこんなところにいるのかというと最初は、体育館の裏や弓道場を目を凝らしてみただが今日は運悪く人がいて魔術を使うわけにはいかないので、仕方なくそれら以外でこの学園で昼休みに誰も寄り付かないところを探していると普段は鍵の閉まっているはずの屋上が開いており、もしやと思い行ってみると案の定。例の魔術が施されていた。

「——対象解析を開始

——種別、用途を逆算

——対応可能策を検索」

コンクリートの中にある、否、いる、『コレ』自体は魔術師であるのなら誰もが御馴染みのそれであり、構成自体は単純なモノだった。ただ問題があるとすればこれ等が単体であつたなら簡易な初等魔術でも対処は可能なのだが、基点の量が異常であり普通の方法では風潰しに探していくより術者を叩いた方が効率的な仕様となつていた。

「!? 回路、停止」

術者が工房にでも引き籠もられたら厄介だと思つていたそのとき、誰かが階段を上つて来る気配を察知し急ぎ魔術回路のスイッチを切つて、フェンスに寄りかかりパンを齧る自然体を装い、首だけ振り返るとそこには……。

「あら衛宮くん。屋上で空を見ながら昼食ですか?」

穂群原の制服に長い黒髪をツインテールにした遠坂家六代目頭首、セカンドオーダー遠坂凜が立っていた。

「えっと、遠坂……だよな」

「ええ、そうですよ」

「穂群原の優等生がどうしてこんなところに?」

「実は今朝、私の外国の知り合いで学校見学をして屋上の扉の鍵を閉め忘れてしまいでしてね。それで昼休みの内に鍵を借りて鍵を掛けようと……衛宮君こそ普段は教室でお弁当なのに今日は購買で済ませているんですね」

どうして遠坂が俺の昼飯事情を知っているのか突っ込み待ちなのかと思っただがいっつの思考は外見とはかけ離れているのは分かっている。一成に予め警告されなければ彼女の作り笑顔に潜む悪魔に気付かなかった。恐ろしい擬態能力だ。

「別に、今日は一成と生徒会室で食べようと思ったんだけど弁当を忘れて……。それで

購買寄つて階段を上つてゐる途中で風が吹いてゐるのに気付いて、気になつて上つてみれば扉が開いてたつて訳さ」

「それは失礼しました。ですが屋上は一般生徒が許可無く立ち入るのは禁止されていますし早く戻つたほうがよろしいですよ」

「五分や十分そこらなら平気だつて。遠坂も一緒にどうだ？」

まさに見た目と周囲の評価にそぐわない優等生な回答といえる。もつとも、その優等生が屋上の鍵を閉め忘れていったので猫をかぶつてゐる状態では大きく出れないのだろう。隠しているつもりなのか左手が拳を作り小刻みに揺れてゐる。

「……では、五分だけ御一緒させて貰いますね」

「何!?! あの女狐とわさかと二人で昼食だ?!? 何か心的外傷トラウマになるようなことは言われなかつたか? 貴重な食物に細工はされなかつたか?」

放課後の生徒会室に一成と俺は雑談しながら各々の作業に取り組んでおり、一成は次の入学生の説明会企画の考案をまとめ、俺は家庭科室倉庫に死蔵されていたホットプレートを分解し半田鰻を片手に作業用のゴーグルとマスクを装着しながら点検と修理

を行い昼休みのことを話すと一成が飛び上がるように驚きながら俺の心身を心配する。「大丈夫だつて、種類の違うパンを交換して軽く世間話してそれだけだつて。ハイこれ直ったよ」

「ああ、すまん……つて、前半!! 奴の手に渡ったものを口にしたらと言う事か!」  
「そういうことになるけど、あれは意外だったな。あのお嬢様オーラ全開の遠坂が賄いシリーズを買っていたとは」

「悪いことは言わん、衛宮。今すぐ吐き出すか胃薬を準備しておけ」

一成の遠坂に対する反応はどんどんエスカレートして行き、過剰で過激なモノとなつていく。というか遠坂、お前何をしでかしたんだ？

「寺の住職の息子の一成がそこまで邪険に扱うとは相当だな」

「当然だ。中学時代に同じ生徒会に勤めていたが、あの女狐の手口を間近で見た俺だからこそ奴の危険性を誰よりも理解しておる」

「まっ、その話にも興味は有るけど今日はこれで終わりにしよう」

「グーグルとマスクを外し眼鏡を掛けると修理の終わったホットプレートを部屋の隅に寄せる。」

「おお、もう直ったのか?」

「いや、特に損傷の激しいものは未だだけどこれ以上やると遅くなっちゃうからな。残

りはまた今度だ」

「調理部の備品だけでも自前で修理してもらえるのであれば、こちらは大助かりだ」

「その分、食材に部費を回せるのならという条件の下でやって俺も助かるからwin-win関係っていうやつだな。じゃあまた来週」

「ああ、またな」

「でさあ、その店であいつが——」

生徒会室を出て階段を下りると間桐慎二が二人の……おそらく後輩であろうと思われる女生徒二人と楽しそうに雑談しながら廊下を通るのに出くわす。

「随分と機嫌が良さそうだな。間桐」

「なんだい衛宮、こんな遅くまで残って生徒会の胡麻播りかい？」

この減らず口のワカメがどうしてこうも女子にモテるのか我が学園の七不思議のひとつだといってもいいだろう。

それにしても、いつもの間桐なら邪魔立てするなど羽虫を追い払うように扱うのだが

何か良い事があったのか本当に今日は機嫌が良さそうだ。

「生憎、文化系の部活には弓道部のような体育会系と違って備品の修理費が十分に回ってこなくてね」

「へえ、……衛宮、暇なんだ？ だったら僕のために弓道場の掃除代わりにやってくれないか」

「え、でもそれ間桐先輩が藤村先生に言われたことじゃ」

「いいって、いいって。それに掃除なんかしていると新都のお店閉まっちゃうよ？ なあ頼むよ、僕はこの通り忙しいし」

女侍らせて遊びに行くことをステータスだと思っている野郎のどこが忙しいのかご教授願いたいところだが。

俺は雑用を押し付けてくる間桐を無視して階段を降り帰りを急ぐ。

「悪いな間桐、今夜は俺も先約がある」

「なっ!?! おい、衛宮!!」

「そこまで急いでいるのならその二人に協力してもらって三人でやればいいさ。じゃあな」

断られると思わなかったのだらう間桐は慌てて俺の後を追おうと何か言い返そうとするが、その言葉を続けるその前に俺が遮るように最も効率的な提案をしそのまま真つ



直ぐ昇降口へと向かい帰宅して行つた。

「攻撃用の礼装カイドは大半が霊脈からの魔力供給の最中だったが最低限の武装はしてきたし、そこらの死徒クラスの魔術師一人くらいなら大丈夫だよな？ ……つよし。術式craft起動」

自宅の洋館に戻ると直ぐに俺は工房の地下へと向かい礼装カイドの魔力量を確認し比較的に供給が済んでいる十数枚を懐に仕舞い再び学園へ赴くと明かり一つない、誰もいない校舎の中に入り昼休みに調べた屋上でもう一度術の調査を始めた。

「つつ!? ……やつぱりこの魔術、基点が動いている」

月と星、それから街からの夜景でしか光源はないが、今は目を閉じて学園に仕掛けられた魔術をどうにかするために奮闘しているため左程の問題ではない。いざとなれば目を強化して視力の底上げを行えば薄暗い夕方と同じぐらいの視界になるのだから。

今重要なのは、術の基点が昼間と違い大きくズレている点だ。

基本的に術を施した場合、詠唱や陣の構成などの余分な無駄を省くためにその場に刻

印を行い施術者の回路の起動などの魔術行使といった一定条件を満たすことで起動するのが普通なのだがこの起点は学園のどの建物や土地にも刻み込まれていない。術式自体が生き物として動いて自分から魔力を集めていたのだ。

「気持ち悪すぎる、こんなモノまで使って魔力を集めようとするなんて」

それは、生き物としてなら俺の魔眼で一気に片が付くと眼鏡をズラし目を赤くさせ術式そのものとなっている使い魔を集めると、そのおぞましい姿を見た時に口から零れていた。

蟲、蟲。

それらは、コンクリートの僅かな隙間や通気口や下水のパイプを通り屋上に無数に塊となつてやってきた。

まるで巨大な鞭虫のようにうねり、草木に吸い付くアリマキのように群れ上がり、光に寄付く蛾のように俺の周りを埋め尽くしていた。

「目を奪う」

あまりの生理的嫌悪感に自然と目にいつもより大目に魔力を送り蟲共の意識を、俺自身に注目を集めさせ動きが急激に止まる。俺の存在そのものにしか反応せずそれ以外

何も感じられないようにする。

音も、

温度も、

匂いも、

光も、

命令も、

本能も、

呼吸も、

欲も、

それこそ何も感じなくなるほどただ魔力を貪るだけの存在である筈の蟲共はただ『魅了』されていた。

「目を合わせる」

限定礼装である眼鏡を外した瞬間、俺の視界に入っていた蟲の使い魔たちが一齐にその体を硬直させ次第に灰色に固まり乾燥し切って、自重に耐え切れずに自壊する飴細工のように崩れていった。

石化<sup>キユベレイ</sup>の魔眼

他者の運命に介入する強力な魔眼は魔術協会においてノウブルカラー（特例）とされ

るが、その中でも最高ランクとされる天然由来の神秘。

それの中あで捉えられた視界に捉えた蟲共は一匹残さず石に変わり無様に砕け散った。

「これなら、いける」

眼球のない線状の蟲に視線を直接交えることなく石化させることができるか不安であったが予想以上に上手くいった。夥しい数の蟲に埋め尽くされた屋上には俺と無数の砂礫しか残されていなかった。

「後は、別館と弓道場の場所で集めて処理してしまえば」

—— 『なんだ、全部ぶつ壊しちゃまうのか。勿体ねえ』

「!? ?」

唐突に、蟲の居場所を確認しようと広範囲に意識を広げ情報を集めようとしたところ。予想外の思考を盗んでしまった。

馬鹿な、誰かに見られただと? そんな筈はない、ちゃんと学園内の隅々まで目を凝らして人がいないか確認をしたしここから見える校門からは誰も通っていないことは分かっている。

ならば今の声は一体なんだ？

と、もう一度声のした方向に目を凝らし確認をする。

「……………あ」

屋上のフェンスにしゃがみ込む獯猛な豹を思わせるようなそれは、明らかに人の形を成していた。しかしそれは、明らかに人ならざる異形であった。

目を凝らすことでようやく陽炎カゲロウのように半透明に見える深い青髪の赤眼の青年。

髪の色に合わせたような肩当以外に金属を使っていない時代錯誤な軽装の蒼い鎧、そしてその手に持つ禍々しい赤を帯びた一目で神秘の塊であると分かる長槍。

見てしまった。見てしまった。見てしまった。

『ん、坊主。俺が見えるのか？』

「ああ、あ」

うろたえる俺の姿は滑稽に見えただろうが、それほどまでに今まで相手取ってきた魔術師や異形の怪物たちとは明らかに異なる畏敬の神秘を持ち合わせていた。

男は楽しそうに笑いながらそれは足を延ばし立ち上がりフェンスから滑るように降りると獯猛に槍を構え……………。

「そうか、そうか……んじゃ悪いが死んでくれや」

実体化し、死刑を宣告すると常人では考えられない脚力で飛躍し俺の目の前に飛び込んで槍の穂先を向けていた。

「!? 目を醒ます」

気付けば、俺は必要最小限の動きで槍の穂先を躲し青い男の構える槍の下を潜り抜けた下の階に繋がる階段に向かって走っていた。

「ほう……あの状況からよく俺の槍を躲せたな、時代が時代なら一端の戦士に成れただろうに。……あん？ なんだよ。わーってる、わかってるよマスター。見られたからには口封じってか」

青い男は、赤い長槍を二、三玩ぶように回した後、逃げた黒蛇を追い掛ける。

何だ、何なんだ。アレは!? 階段を駆け降り我武者羅に廊下を走り逃げ惑う中、俺は先程の男の異常性に焦りに近い緊張感を感じていた。最初は幽霊の類と思い立ったが

それはとんだ勘違いだ。特にあの赤い槍、アレだけは途轍もなく不味いのは判った。おそらくあれで相手に負傷を負わせることで呪いを与える魔槍や呪槍の類のモノ、魔術師が作り出す一級魔術礼装が玩具に見えてしまう程の代物。

なんでそんなものを奴が持っているのか……。

「よお」

「なっ!」

廊下の曲がり角を走り抜けようとしたら突然、虚空から現れるように男が姿を現した。恐らく先程の目を凝らさなければ見えない霊体化をし壁や床を通り抜け、先回りしたのだろう。

笑みを浮かべながら青い男は俺を魔槍で狙わず右足を大きく蹴り上げた。おれは両手で蹴りを受け止めるもそのまま3-Aの扉が外れる勢いで激突し教室の奥まで吹き飛ばされる。

背中椅子や机の脚がぶつかり最後には床に叩き付けられるように倒れこんだ。

肺に突発的な衝撃が襲ってきたことにより咳き込み目には涙が滲み出てきた。

「こんな粋が良い獲物たたくいをさっさと終わらせるのは俺の流儀に反するんだが……悪く思うなよ」

口ではそう言いながら赤い槍を器用に振り回しながら壁を破壊し、ご丁寧に教室内に  
ある俺と男の間にある椅子をまるで紙風船のように振り払った。

床に倒れこむ俺の傍らに立ち槍を構える。せめてもの情けのつもりか魔槍で貫く俺  
の顔を真つ直ぐ見ており。

よく見ると俺とは違う色素による赤を宿す瞳孔に、俺の赤く染まった目と薄く笑う顔  
が映っていた。

「目を合わせる」

.....。

槍の男は、赤い魔槍を構えたまま動くことも喋ることも出来ないまま生きた彫刻像  
か、動作不良を起こした人形オートマタの様に停止していた。

元々何らかの抗魔力を持っていたのか。石化こそしないが、数分の停止にまで持って  
行けただけでも十分だ。

呼吸を整え、気を落ち着かせると俺は両手の掌を合わせ男の槍によって破壊された机  
の脚を掴み取り魔力を流し込んで唯の金属棒を薄くワイヤーのように伸ばしながらそ  
の鋼線を用いて簡易的な封印を施す。槍を構えた状態の男に何重にも何百回と馬鹿み



たいに同じ封印を施し下位妖物の類なら物理的にも魔術的にも絶対に抜け出せない結界を編んだ。

当然この程度で止まる相手だとは思っちゃいない。

ある程度痛めつけてから情報を得ようと攻撃の要である懐のカード型礼装を三枚選び、抜き取ろうとしたそのとき。

「随分と珍妙な力を持っているが、この拘束を見るにお前は魔術師のようだな」

予定より早く硬直が解け、男の姿が消えかけるも封印の術式が起動し霊体化しようとした男の顔が驚きに染まった。

「霊体化を強制的に封じただと？ ……いや、違うな。これはこの鋼線そのものが半霊体化して俺を縛り続けているのか。チツ、仕方ねえ……なっ!!」

今度はこちらが驚く番であった。

掛け声と共に封印に使用したワイヤーの三分の一が弦を張り過ぎた糸のように独特の金属音を発しながら切れ始めたのだ。

たった一度であの封印の要を見破られしかもワイヤー同士の摩擦を考えると理論上二百t以上物理的エネルギーが必要となる拘束を引き千切るとは予想外……いや、規格外の相手だ。

完全に拘束を引き千切られる前に俺はもう一度掌を合わせ床に手を付くと教室内に

煙幕を張り床に穴を開け下の階に降り立ち。目的の場所に向かって行った。

赤い魔槍を持った男は封印を自らの筋力と魔術を用いて強引に引き千切ると肢体に纏わり付いたワイヤーを一瞬霊体化することですべて外すと槍を振るい窓ガラスを破壊すると教室内に充満する鬱陶しい煙を外に出した。

「敵わない相手と判ればすぐさま遁走か、いい判断だ。……俺よりも脚が速ければな」  
煙の晴れた教室の床に開いた人が一人入るほどの穴を見ながら静かに姿を消した。

暗くいつもと違う学園の風景に惑わされ、二回ほど曲がり角を間違えて進み俺は焦っていた。

ここが自身の工房でない以上魔術師としての力を十全に引き出せない以上、未熟でありながらも錬金術を嗜んでいる俺にとってあそこは必要な材料（武器）の宝庫だ。

探しているのは錬金術の始まりにして現代の一般家庭にも馴染みのある場所。

落ち着け、現状を把握しろ。今俺が相手をしているモノはなんだ？ それに対抗する

ための策は？

使えるものは何でも使つて最良の結果を生み出すのが六代目魔術使い、衛宮■郎だろ  
うが!!

「違う、これも違う!! 藤ねえの奴、最後に何処置きやがった」

散々駆け回つた後なんとか見つけた二階の家庭科室で俺は厨房で、槍の男をこの場で  
仕留めるためにある物を探していた。

下の棚にあつた調味料の数々を脇へと追いやり最後の奥にあつた白い砂のようなモ  
ノが詰まつたビニール袋を見つける。

「あつた!!」

ラベルの商品名を確認すると手を合わせ袋の中身に翳し、錬金術を行使する。

砂糖のように白かつた中身が鉄を粉状にしたような白銀の光沢に変わる。

「あだつ!?!」

物質の調整が終わり、奴を待ち構えていると家庭科室の天井裏から男の声が聞こえて  
きた。霊体化からの奇襲を防ぐために張つた結界がうまく機能したようだ。

すぐさま目を凝らし男の場所を探ると丁度、俺の真上に居り実体化して天井裏から足を上げ蹴り破ろうとしていた。

「投影、開始」

教室に張った結界を解除し教室の扉まで走って天井から降りてきた男に投影で生み出した低反動の短機関銃サブマシンガンを右手に持ち、撃ち続ける。

グラデーションエアー  
投影

強化、変化の上位に類する魔術で人間の魔力によってオリジナルの鏡像を物質化する魔術であり、本来なら元となる物質を人間の穴だらけなイメージで再現と本来通りの性能は望めない非常に効率の悪い魔術なのだが、俺の場合今使える魔術の中で錬金術の基礎である変化の次に得意な魔術である。

所詮、人間の幻想でしかないため、世界の修正力によって数分で消滅する儚い物である筈なのだが、今のところ俺が壊れると念じるか投影物に応じた物理的衝撃を与えない限り消えることはない。最長記録は十年前に投影した家具が今でも残っている。

今投影しているのは切嗣父さんが持っていた銃を、俺用に改造を施されたもので反動は殆どない代わりに威力も当然低い。こんなもので倒せる相手ではないが牽制にはなる。

と左手に持った練成物を前に放り投げると大きく弧を描き槍の男の傍にまで投擲され。俺が床に落ちる前に短機関銃サブマシンガンの弾を当てると白銀の粉末が男の前で煙のように充

満し袋に入っていた数枚の紙が飛散する。

「また目隠しのつもりか？ 芸がないな!!」

Ignition  
「燃える!!」

青い男が吼えるを無視して仕込んでいたルーンを起動させると家庭科室が数百の力メラのフラツシユを一度に浴びせたように激しく光る。

予め目を腕で覆っていた俺には大したダメージはないが青い男は目が見えないのか両手を床に付き明後日の方向を向いている。

俺が探していたのは豆乳を豆腐に固めるためのにがり<sup>Mg</sup>、それを純化させ粉末状にすることに<sup>g</sup>より酸素と結合しやすくなりなまじ粉塵爆発を起こしたことにより強い発光を促したのだ。

正攻法で勝てない相手に勝つには搦め手で行けばいい。切嗣<sup>父さん</sup>が俺に魔術を教えたと同時に戦い方も平行してその技術を叩き込まれた。

本気ではなかったとはいえ、時計塔では必修である薬学科の魔眼持ち講師に宝石級の太鼓判を押された石化を数秒の停止にまで抵抗<sup>レスist</sup>された以上、一<sup>シングルアクション</sup>工程の簡易魔術では歯が立たない。少なくとも礼装を交えた三小節以上の高出力の魔術を行使するしかない。

『Fly』

『Shot』

『Erase』!!

Annaphora  
照応。

By feather  
羽翼よ、

Because it change the wings to iron of arrow  
鉄と成りて矢の如く射よ」

懐から抜き取った三枚の礼装カイドが集まり一つの塊となった途端、俺の周りに無数の羽毛が現れ舞い上がる。

「Injection  
射 出!!」

一枚一枚がその形状をより鋭く変化させ、攻撃対象である魔槍の男目掛け一斉に襲い掛かった。

殺った。そう思った。

だが、俺の放った魔弾は一つも男を貫くことはなく男の振るった赤い魔槍によって大部分が紙のように叩き落される。何枚かは槍に捻じ込むように引っ付いているが件のそれには傷一つ付かない。

「やるじゃねえか、俺以外の槍使いランサーなら手傷を負ってただろうが。相手が悪かったな」

ランサーと名乗った男は感心したように口笛を吹く。目が見えないのが判ったのか、顔を閉じ、槍の持つていない手で虚空に指で何かを描いていた。

ルーンの魔術だ。それも治癒の刻印を自身に掛けようとしており、明らかに目の回復を狙っている。

「くっ、Injection  
射 出!!」

もう一度同じ魔術を行使し妨害を目論むもまた、槍の一振りでも無効化される。

今の俺の手持ちではとても手に負えないと判ると。俺はもう一度目を赤くし、男の視力が回復する前にひっそりとその場を動かさずにじっとしていた。

ランサーは、視力が回復し俺を視界に捉えていたのに、俺が目の前にも拘らず、まるで俺が見えていないかのようになりを見渡し俺の真横を横切り、学園内で大声で俺を探し周るも最後まで俺を見つけないことができず諦めたのか学校の敷地を出た。

それを確認すると俺はすぐさま通路を走り抜け家の洋館へと戻ると、工房へと繋がる扉の番をしている礼装の効果を範囲を広げ屋敷そのものを異界化させると一息付き、リビングのソファに体を横にし夢現に休んでいた。

あの、ランサーと名乗っていたアレは一体なんだっただろうか。個の感情を持ち、霊体化や物理的干渉を可能とする実体化を切り替えることが出来るという点では俺のカード達とよく似ている。まさか……!?

身体を休めながらこれまでの経緯についてまとめようとしていたところ、身体中に動悸にも似た衝撃が襲い掛かる。何者かがこの洋館に張った結界に干渉し魔術回路の負

荷が生じたのだ。

この感覚は『探索』のルーン？

屋敷の扉にトラックでもぶつかったような衝撃がドアをノックするかのようにも響き渡る。

間違いない、やつが俺を追って来たのだ。

飛び起きるようにソファから立ち上がると、急いで自身の工房へと渡り廊下の扉を開けようと取っ手に手を掛け開くのと同時に表の扉が破壊される。

「やれやれ、小僧一人にこうも翻弄されるとは俺もついていないな。……だが今度は逃がさん」

男は、いやランサーは今までの『突き』の構えとは打って変わって、槍の持ち手を後方に『放つ』構えを取っていた。

そして何より、力強く込められる魔力の量が赤い魔槍の真価を發揮させようとしているのがわかっていた。

おれは激痛が伴うのも構わず魔術回路を起動させ一枚の礼装カードを右手に持つ。

「敵性The defensiveness or perception for the enemyに対し万全の防御御」

「まさか、サーヴァントではなく魔術師相手にこれを使用するとはな。……その心臓貫



い受ける——

刺し穿つ死棘の槍!!」

「Shield  
盾!!」

赤い魔槍と赤い宝玉を埋め込まれた翼のような盾が拮抗する。

「うおおおおおお!!」

ランサーが大きく咆哮し額に青筋を立てながら徐々に盾の守りを削るように進み……。

ガラスが砕け散るように盾が破壊された。魔力を使い切り朦朧としていた俺はその衝撃に身を任せ大きく吹き飛び開きかけた渡り廊下を通り抜け工房の入り口にまで行きたった。

「Wood  
樹」

痛む身体を無理やり動かし工房の入り口である硝子扉を潜ると、礼装カイドの暴走覚悟に詠唱破棄の開放を行い気休めと分かりながらも樹木による扉の封殺を試みる。

八年前のあの日から自身の罪の象徴にして最強の魔法礼装である、あの石を使おうと

魔力枯渇から来る倦怠感と戦いながら歩こうとすると樹木で封じた扉が爆発されたかのように破壊された。

「坊主、お前は誇っていいぞ。俺の『とっておき』を食らって無傷で済んだんだ。ひよつとしたら本当に七人目だったのかもな——不幸だった自分を呪え」

土煙から出てきたランサーが槍を構え、放心状態の俺を貫こうと散歩のような歩調で間合いを詰める。

嫌だ、もう一度まだ……死逢にいたくたくない。

「お母さん!!」

## 4 化け物の約束

俺の一番最初の『記録』は、妹の茉莉とお母さんの子宮の中にいた時のことだ。暗く暖かい赤い水の中でお母さんと茉莉、そして自分の三人分の心臓の鼓動が響いていた。時折お母さんのお腹に耳を澄ませているお父さんの声が聞こえてくることもあった。

そのことを覚えていると、誰かに話すことはなかった。別に秘密にしていた訳ではない、唯切っ掛けがなかっただけのことだ。何故なら俺にとって、それは当たり前のことであり、一種の常識としてなんら疑問すら抱くことなく受け入れていたのだから。

生まれて直ぐ自分と妹の産声を聞き、体を清めるお湯の温かさも。

父に似た黒い髪と祖母に似た蛇の鱗のような模様のある頬を優しく懐かしげに撫でるお母さんの泣きそうな笑顔も。

たどたどしく俺を抱き上げるお父さんが、俺と『目を合わせ』て石のように固まりお母さんが悲鳴を上げて驚きハーブティーを溢したことも。

茉莉と俺二人での夜泣きに右往左往する両親二人の慌てっぷりも。

みんな覚えていた。

言葉を理解することもなく自分が何者であるか、いや自我でさえ芽生えていない筈であるのに鮮明に残るこの体験は、まさしく『記録』と呼ぶに相応しい俺の目に焼き付いた思い出という名のアルバム。

この『目に焼き付ける』能力は俺のお気に入りだった。

そう、『だった』のだ。

理由は、確か二つあった………と思う。

一つ目の理由についてはよく覚えている。

今まで宝物のような記録を焼き付けるこの目が嫌いになつたのは暑い夏が、何度も何十と過ぎた頃だった。

お母さんはいつまで経っても綺麗な姿で、俺達兄妹がゆっくりと成長していく中で、お父さんは新しい季節が訪れる度にその身体は少しずつ褪せていた。俺と同じく黒かった髪や髭は、炭に混ざる灰の様に白くなり、顔には木の年輪の様に皺が増えていった。

昔は、茉莉と俺を連れて一緒に屋敷の傍の森でよく遊ん貰っていたが、夏が四十ほど

やってきたその年にお父さんは病気を患い、床に伏せて起きる時間よりも寝ている時間の方が多くなっていた。

季節が三回巡って来た頃には、熟れ過ぎた木の実のように肌の艶がなくなり、杖を突いて歩くその姿は、御本に出てくる魔法使いの老人や立ち枯れた杉の木を思わせる。

物を食べる必要性を感じない祖母の血縁である俺たちは、何も食べなくとも生きて行けるが人間であつたお父さんはそうは行かない。毎日二食から三食、栄養を摂らないと一気に体を弱めてしまうとお母さんが拙いながらもお父さんに食事を食べさせる姿は絵になつていた。

それでも、お父さんは俺たちに弱気なところは一切見せず、陽気に笑いながら

あくる夏の夕暮れ時、昼間の太陽が照らした屋敷の壁がまだ熱を残していた。少し蒸し暑いその日はお父さんが自分の死期を悟り死ぬ前に俺はお父さんと二人きりで、男同士の大事な話があると言つた。

茉莉はお母さんに連れられ、下の台所でお茶を淹れて来ると言つて寝室から出て行つた。そのときのお母さんの顔は心に何かを押し込んだような、秘密を隠した泣きそうな笑顔だつた。

「さて。先ずはお父さんとお母さんが、どうやって出会つたか話そうか」

俺は、その時に驚いていた。両親は俺たち兄妹に自分たちは、「人と目が合うとその人を石に変えてしまう能力を持って生まれてきた」と教えられ森の外にいるニンゲンと呼ばれる生き物は俺たち一族のその力を恐れている……と。

お母さんは体が貧弱というか極端に体力がなく子供である俺にすら劣り、お茶の葉や薪を取りに行く時以外に、屋敷の外に出ることは一切なかった。だから、お父さんと一緒に出るしかなかったがいつも目の届く範囲でしか遊ぶことは許されなかった。

どうしてお父さんはニンゲンなのにお母さんと一緒に住んでいるのかいつも疑問だった。

「お父さんは良いんだよ。絵本に出てくるニンゲンは、怪物を倒すことばかりだけど中には怪物と一緒にいる変わり者のニンゲンがいるだろう？」お父さんはそういう種類のニンゲンなんだ」

嘘だと思った。だって怪物と一緒にいるニンゲンは、怪物に優しくないしその怪物を引き連れて他のニンゲンの意地悪をする悪いニンゲンばかりだった。でもお父さんは違う、そんなことはしない。優しく、強くて、ずうっと森の中にあるこの屋敷で暮らしているんだから。

そのことを話すとお父さんは、俺を抱きしめ十秒ほど震えるて、抱き方を変えて高く抱き上げたかと思つたら行き成り足だけ持ち逆さまに揺らしたりグルグルと振り回し「可愛いやつめ」と満面の笑みで笑っていた。急なことで俺が「怖いから下ろして!!」とお父さんに泣きつくくと笑顔を崩さずに、「ごめんごめんと謝りながら続けて」でもね、ニンゲンつてのは一人ひとりが良い奴でも集団になると変わってしまうんだ」懐かしげにそういつたお父さんは、俺たちが大きくなるまで外の世界のことと、昔のことを話すことはなかった。

そうであつたのに、お父さんは昔のことを話し出した。楽しくどこか空白なお父さんの様子を見て。俺は未熟な子供の思考でありながらも察してしまつた。この人は二度と会うことの出来ない、どこか遠いところに行こうとしているのだと。

話の出だしは、それ以上に俺を驚かせた。お父さんはこの森の外の世界から大勢の間と一緒に化け物退治をしに来たのだそうだ。当時、怪物退治予定日に土砂降りの雨が降り森の一番近くにある村で一休みをして、後日村人に止められるもお父さんの仲間が森の中に入っていった。

地凶もなく、村の伝承を頼りに動物の気配のない山道を彷徨い案の定お父さん達は、半日も経たない内に遭難したそうだ。その日の夜に眠つた場所が悪かつたのか増水し

た川が鉄砲水となりお父さんは仲間と離ればなれになった。

荷物も食料も流され、当てもなく森の奥に進んで行き、籠いっぱいの子を抱えたお母さんと出くわしたのだ。

そこから先は、簡単に言うとお父さんの一目惚れ。最初は化け物に扱き使われている囚われのお姫様か何かと思っていたらしい。

若いころのお父さんは、相当なロマンチストだったようだ。だが確かに自分で言うのもなんだが、お母さんは美人だ。

比較する対象がお父さんの記憶の中にいるニンゲンの女だけだから、ハッキリとはわからない。でもそれが身内最良人としても構わなかった。

「一人ひとりには良い奴でも集団になると変わってしまう」と言ったあの言葉は、逆の事を指していたんだ。仲間から引き離されたお父さんは自分の目でお母さんという生涯の伴侶を得たのだ。

「——これを渡しておく」

話が終わり、お父さんがいつも首に掛けているお母さんとお揃いの鍵のペンダントを俺の首に掛ける。

「お父さん？」



「お前は、お母さんに勉強を教えてもらったお陰でお父さんより賢い男になった。目の能力が、お義母さん……お祖母ちゃんに似たお陰で、この家の誰よりも強い男になった。だから、お父さんの代わりにこの家を守りなさい」

「でも、おれまだお父さんみたいに大きくないよ？　すぐ泣くし、マリともよく喧嘩したりそれに」

鍵を握り締め、情けなく涙を流しながら言い訳を始めた俺に、お父さんは鱗が覗く両頬を包み込みながら親指で涙を拭う。そして自分も涙を出しながら。

「大丈夫だ、お前なら絶対、大丈夫だ」

何度も、何度も、俺を宥めていたのか、それともお父さんが自分自身に暗示を掛けていたのか同じことを呟っていた。

その三日後、家族全員に看取られながら眠るようにお父さんは死んだ。

その時の『記録』が目を閉じた瞼の裏に何度も出て来て俺は、自然と目の能力を出来るだけ使わないようにしていた。

元々、家族しかいない森でたまに訪れるのは毎年春にやってくる渡り鳥や小鳥、小動物がいいところだったし俺たち三人は食べ物がなくとも生きて行けた。



周りを見るとニンゲンの子供がたくさんおり、俺は何かをすることもなく前を見続けた。

暫くすると、俺にお礼を言ってい男の人から養子にならないかと話を持ち掛けられた。

嘗てお父さんに家族を託された時の事を思い出したのか、容姿が似ていたのが原因か、唯の気まぐれか、俺はその人の養子になることを承諾した。

その後が大変だった。切嗣に化け物を引き取ったことに後悔はないのかと、化け物である証拠を見せるように目の能力を使おうとしたらある変化に気付いた。

頬にあつた鱗が消え、髪には所々赤毛が覗いており、顔が少し変わっていた。

そして何より慌てたのが能力が使えなくなっていたこと。正確には、いつもの様に自分の意思で使えなくなっていたのだ。

空腹というものを体験し。

食べ物というものを味わい。

友達というものが出来て。

魔術や魔法を教わり。

ニンゲンはニンゲンでしかないことを知った。

そんな走馬灯を垣間見ているとランサーは槍をまつすぐ落とした。

肉を突き刺す音が工房中に響き渡った。……だが血は流れない。

ランサーの魔槍が俺の心臓を貫いたことを感觸で以て理解した。……だが血は流れない。

心臓の鼓動が小刻みに不規則なものとなり体内に血液が溢れ出すのを感じた。……だが血は流れない。

「フー、……ん？」

ランサーは、自分を労うかのように息を漏らし目を閉じるも、槍を刺した時の違和感が拭えず槍の穂先をよく見ると俺の目が赤くまだ死んでいないことを知る。

心臓の痛みを通じて魔術回路が走り俺の目に、いつもより熱く魔力を送っていた。いや、目だけでなく身体全体を駆け巡り、最後は体内に収まり切れないほどのエネルギーが溢れ光となり始めた。

「ドワァ!?!」

魔力の熱は俺の身体を通り抜け、工房の床に地割れのように光の筋を作りながらラン

サーを胸に刺さっていた槍ごと吹き飛ばした。

先程まで、枯渇寸前まで戦っていたのにも関わらず一体どこからこれほどの魔力が、生成されたのか疑問に思ったが、そんな思考するを暇があれば胸の治癒に専念すべきと判断し、目を醒まし傷ついた肉体を作り変える。

「まさか本当に七人目となったのか!？」

ランサーが工房の壁際に吹き飛ばされ倒れるもすぐに槍を構えながら、俺の頭上にいる光る人型を警戒する。

「……あ、ー!」

胸の治癒が終わった途端、身体が疲労を思い出したように力が抜けその場に腰を下ろし自分の頭上を見上げる。

そこにいたのは、

自らの理想に殉じその結果を覆したいと懇願する剣使いではなく。

嘗て強きものと戦うことを望み身内すらその対象とする槍使いでもなく。

受け継いだ意思を生涯守り通し世界の命により殺戮を繰り返す弓使いでもなく。

ただ只管にある鳥を自らの剣技で以て捕らえようとしたり偽りの亡霊ではなく。

神によって人生そのものを裏切りと殺戮で埋め尽くされた魔術師でもなく。

世界に名を轟かす正真正銘の神の血筋を持つ大英雄の狂戦士でもない。

「サーヴァン、r……」。聖杯の……参上、……ます。貴方が」

疲労に耐え切れず意識を落とす中、髪の毛の長い綺麗な女の人の声が聞こえていた。

## 5 戦いの狼煙

万能の願望機。『聖杯』の召喚を行うための儀式、聖杯戦争を行う霊地として選ばれ、そしてその願望機を完成させるために七人の魔術師と、彼らに呼ばれる七体の英霊サイヴァントの七組が殺し合う戦場である冬木の地。

その管理セカンドオーナー者である遠坂家六代目魔術師頭首、遠坂凜とわさかりんは、焦っていた。

二日前に徹夜して金庫に施された封印を、解読したときに出てきた大粒の宝石を失くしてしまったのだ。

なぜ、彼女が金庫の封印を解いたかという点。先代に当たる父が参加した、第四次聖杯戦争から僅か十年足らずに冬木の聖杯が、マスターの選定を行い始めたのだ。

聖杯降臨システムに深く関わっている始まりの御三家、聖杯の製作者であり聖杯降臨の器である小聖杯の管理を担う『アインツベルン』、聖杯とマスターの召喚に答えた英霊を律する令呪システムを作り上げた『間桐』、そして聖杯降臨に適した土地の提供者である『遠坂』。この三つの陣営に属する魔術師を聖杯は、それぞれ一人ずつ優先的に選出するように作られている。

過去四度に渡る殺し合いである聖杯戦争。霊地冬木の霊脈を枯らさないように、六十

年周期でゆっくりと時間かけて聖杯降臨を可能とするまで魔力を吸い上げる筈の大型杯。だが、前回から今回の第五次聖杯戦争は十年足らずで十分な魔力が貯まった事實は変わらない。

現遠坂家頭首である若干、十七歳の少女の左手に刻まれた三つの痣のような聖痕が、——聖杯戦争の参加者の証である令呪が宿るのは——当然の流れであり何者にも代えられない大きな川の流れのような運命であった。

本来なら、後五十年ほど後の戦いに参加する予定であった何の準備もない(万年金欠)宝石魔術師が聖杯戦争に参加するための聖遺物、触媒が無い状況で前回の参加者である父の遺産を探すのは当然の行動であった。

その日、先代が凜に残した暗号付きの金庫の中身は、大粒の赤い宝石のペンダントと、元は石盤か何かだったのだろうか？ 砕けた石のガラクタが入っており、残念ながら英霊の召喚に使えるような触媒などなく期待は外れてしまった。

しかも、金庫を開けたときに封印解除の余波の影響か、この遠坂邸の結界に揺らぎを起こし、屋敷中の時計という時計が、勝手に進み出し短針が一周してやっと止まったかと思つたら、きつかり一時間、どの時計も進んでずれていたのだった。

魔術を極めようと日夜努力している関係上、奇怪な現象には慣れてるほうだったが、時計の針が止まった後、少々動揺しながら工房を出てテレビをつけて日にちを確認



しようとした彼女の行動は自然なことだろう。

あの絶対封印物の黒歴史量産系愉快型ステッキのこともあるだろうし……………。

兎に角、ガラクタの方は使い道はないが、宝石の方には膨大な量の魔力が込められていた。特に予め何か魔術が刻印されていない分、汎用性は高く、使い手の腕の見せ所といったところだろう。

よく鑑みて見ると金庫を開けて宝石を見つけた時の彼女は、どこか高揚としていた。すぐさま寝室へ学校の登校時まで仮眠を取り、起きた後、首に掛けずにそのまま自分の机の上に、放置しておけば良かったのだ。

放課後、いつも通りに優等生の仮面を被りながら弓道場で後輩の様子を窺っている。と、このの所どうも積極的につかつかつてくる同級生。うんざりした様子を緊張と捉えるこの男の頭のめださは、一体どこから湧いてくるのやら。非常にどうでもいい事であった。

毎度毎度諦めない姿勢はご立派なものだが、いい加減鬱陶しい。四、五言ほど牽制にあしらおうとした時に、朝には有った胸の上の宝石の重みが無くなっていたことに気づく。

二、三十秒ほど固まっていると、何か勘違いをして「無視するな」と叫ぶ同級生を無

視して校舎内を探し回った。

その後、一応通路も一通り調べたのだが案の定見つからず、警察に紛失届けを出すも心情は絶望的だった。

拳に収まる程の宝石などネコババされれば絶対に戻ってくることはない。少なくとも自分だと警察に届けるかどうかは、拾った時の家庭事情※に直結していると自信を持って言える。

その翌日も職員室に届けられていないか確認をしたが、矢張り届けられておらず。帰宅したときには、既に太陽が沈みかけており、玄関の奥にある電話に夕日がかかっていた。

留守番電話のメッセージが記録されているのを確認すると、三年掛けて使い方を制覇マスターした手馴れた動きで「ぼたん」を押す。

『凜、私だ。一応、今回の戦いの監督役である以上、私との接触は避けるべきなのだが。監督役として今回の戦争の結末を見届けなければならぬ。もし棄権するのであれば魔術協会から新たにマスターを補給せねばならなくなる。早急にサーヴァントを召喚しろ。先日、五騎目の召喚が霊器盤によって観測された。これで残るクラスはセイバーとr』

「セイバーが残っていると分かれば、十分よ」

あのいけ好かない、非常に不本意ながら、兄弟子に当たる似非神父：言峰綺礼ことみねきれいの声など呪詛にしかならないと、メッセージを切り、音声と履歴の消去動作を行う。

「宝石も気になるけど、今は触媒の方を考えなくちゃいけないわね」

もう一度、あの工房のなかを探そう。凜は、自室に戻り普段着に着替えると埃の被った倉庫を漁り始めた。

「触媒、触媒。家に、どこかの英雄と縁のある聖遺物なんてあるのかしら？」

工房内に溜まった未開封の箱の山、遠坂凜は、マスクを装着し頭に三角巾を装着し、大掃除さながらの触媒探索行っていた。

だが、開かれる小包や箱の中身は、遠坂の宝石魔術に使用される宝石や鉱石の原石やそれらを素材とした魔術礼装、そして古今東西の書物の数々だけであった。

「……ああんもう!! めんどくさい。こうなったら触媒なしで召喚を、あら？ 何よこの箱？」

破れかぶれで、聖遺物の触媒を使うことなくサーヴァントを呼ぼうと、先代が使った召喚陣から、机や礼装を退かして部屋の四隅に移動させようと手に掛ける。ふと、いつ

も椅子代わりをしていた、未開封の大きな箱が残っていたことに気付いた。

擦り切れていた搬入紙のそこには、大きく「From 時計塔<sup>London</sup>、To Rin Tohsaka」と達筆な筆跡が残されていた。

「魔術協会経由での匿名配達品？ 一体いつの荷物よ……げつ、もう三年になるじゃない」

工房に置いてあった物だが、一応、箱に何らかの魔術的トラップが施されていないかどうかを確認し、包みを剥がして箱の蓋を持ち上げると其処には、美しい青の鞆が白い緩衝材の中に埋もれていた。

凜は、一瞬その工芸品としての美しさに見惚れていると今度は、その鞆の魔術的価値に顔を青くする。

「これって、もしかして」

「大丈夫、この鞆を触媒にすれば。確実に最優<sup>セイ</sup>の英霊<sup>エイバ</sup>を呼ぶことができるわ」

凜は、失くした宝石のことなど忘れて、黄金を基調とし、妖精文字の刻まれた青いら

インの装飾に彩られる聖遺物を手に持つ。先日、針を元に戻した時計の時間を確認すると、触媒となる剣の鞘を工房の祭壇（机）に置くと、凜は中央に開けた空間の召喚陣の真ん中に立ち、魔力を込めた宝石を融解させ陣に浸み込ませる。

午前二時、それは凜の魔力が一番高くなる丑の刻。ベストコンディションでサーヴァントの召喚に望んでいるのだ。

魔力の込められた宝石の滴は、次第に線に沿って染み渡ると淡く輝き、陣を完成させる。

「素に銀と鉄。礎に石と契約の大公。祖には我が大師シュバインオーグ。

降り立つ風には壁を。四方の門は閉じ、王冠より出で、王国に至る三叉路は循環せ

よ」  
閉じよ、閉じよ、閉じよ、閉じよ、閉じよ、閉じよ、閉じよ。

繰り返すつどに五度。

ただ、満たされる刻を破却する

—— 告げる。

汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に。

聖杯の寄るべに従い、この意、この理に従うならば応えよ

誓いを此処に。

我は常世総ての善と成る者、  
我は常世総ての悪を敷く者。

汝三大の言霊を纏う七天、

抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ——！」

詠唱と共に、自分の中にある魔術回路をすべて開き、高く宣言すると、工房内に満ち足りたエーテルが風となり強く発光し確かな魔力の消費に、絶対の自信と確信を持った。「これは当たり前」だと。

「サーヴァント、セイバー。聖杯の寄る辺に従い参上した。問おう、貴女が私のマスターか？」

光と風とともに現れ、其処にいたのは、精錬な金髪と翡翠のような瞳を持った青い戦装束ドレスと銀の鎧を身に包んだ少女の姿であった。

「はあああああああああああああ!?!」

この時、凜は、自身の家訓である『余裕を持って優雅たれ』を無視しても、流石にご先祖に怒られることはないと思つた。

「行き成り騒いじやつて、悪かったわね。セイバー、貴女がまさか女だったただなんて予想外だったものだったから」

その後、淑女にしてあるまじき失態をしても、セイバーは焦ることなく凜を宥めに入った。

対して凜の驚愕は衰えず、彼女の真名を聞くと更に大きく感嘆を上げたのだ。アーサー王伝説の主人公、アーサー・ペンドラゴンことアルトリア・ペンドラゴン。名にしよう騎士王である彼女ほど、セイバーのクラスに相応しい英霊はいないだろう。

オツシヤアアアと一通り叫ぶと、凜は彼女に自己紹介と契約を交わし、セイバーはそれに答えると自分を呼び寄せた触媒に興味を示しだした。

「それについてはもう慣れました。性別を偽って生涯を閉じた私の一生が、今も語り継がれているのならそれは本望です。

ですが、リン。あなたは一体何を触媒として私を呼んだのですか？」

「ああ、あれのことね。それなりの剣士の英霊が呼べると踏んでいたけど、アーサー王が呼ばれるだなんて、大当たりも良いところ。」

まさか千五百年も行方不明だった全て遠き理想郷を、この目で見ることは思っていないかったわ……セイバー？」

「……………」

祭壇の上に置かれた鞆を指差し空気が変わったセイバーを呼ぶ。

懐かしげに鞆に手を伸ばしていた彼女の表情が一気に硬くなり、当てていた手を強く押し付け始めたのだ。

「これは……リン、この鞆は、私の全て遠き理想郷ではありません」

唐突にセイバーは、全て遠き理想郷から手を放すと悲しそうに眼を閉じ、凜の使用した触媒が偽物であることを告げた。

「えい!? でも、これが本物だから、貴女は私の召喚に答えたのでしょ?」

「はい、私もこの鞆を手にするまでは、本物と疑いませんでした。ですがこれは私の魔力を通さずに別の人物の魔力でその機能を模倣しています」

セイバーが、悲しげに語る青き鞆の名は、全て遠き理想郷。かの騎士王の持つ神造兵装である人々の希望を込めて作られた聖剣約束された勝利の剣を収める鞆であり。

その真髄は、アーサー王が死後、戦いにより負傷した自分の肉体を癒す神秘の島のこ



とを指した伝承を基にした、絶対的な遮断にも似た防御と蘇生に近いレベルの治療。そしてその所有者に不老の力を与える逸話にある。

だが、この贋作には魔法の域に達するほどの性能はなく、セイバーの見立てでは、このまま魔力供給が行われぬ場合、精々概念武装として重傷を二、三度治す程度の力しか持たない。

「つて、それってどんな魔術技師でも理論上不可能よ。自分で一から魔術礼装を作った似たような効果を持つ物を製作するならともかく、これは貴女の持っていた鞆とまったく同じ形をしているのでしょ？」

「はい、私の魔力に反応しない点を除けば、重さも感触もどれも瓜二つです。リンは一体どういった経緯でこれを手に入れたのですか？」

「三年くらい前に、家に魔術協会から急に届いたもので……今日偶然見つけたばかりで、私もよく分からないのよ。こういった物を貰う伝が有る訳無いし」

「でしたら仕方ありません。分からない以上、これを使用するのは止めておいた方が賢明でしょう」

「絶対、本物の聖遺物だと思ったのに」

「世界に召し寄せられた『英霊の座』を欺くほどの出来です。リンが気に病む事ではありません。見たところ、リンは魔術師としての素養は高く、魔力の質も私の体に馴染んでい

ます」

「ウツ、本契約をすると、其処まで分かっちゃうものなの？」

「はい。私がこの時代に呼び出されたのは初めてでは、ありませんから経験上、ある程度の良し悪しは分かります。リンから供給される魔力は一級品ですが、どこかあやふやで供給される量に統一性がありません」

初めてじゃないって、数多の英雄の中から何度も呼ばれるとかどんな確率よ。

凜は、セイバーの心情を隠さずに正直に答えられた自分のコンデイションに対し本気で心配し始める。

「うう、それはきつと疲れていて魔力がきちんと練れていないとか関係……あるかしら」  
「リン、誤解をなさらないで下さい。未だ見てもいないあなたの実力を疑う訳ではありません。今日は特にサーヴァントの召喚を行い魔力の消費して疲れている筈です」

「……………そう言って貰うと助かるわ。此処のところ探し物があつて碌に寝ていなくて……………聖杯戦争の詳しい方針は朝に話しましょう。お休みなさい、セイバー」

「良い夢を、マスター」

朝、凜はセイバーに起こされ彼女が用意した目玉焼きと生野菜のサラダといった簡単な朝食と一緒に食べ、今後の方針について語り合っていた。

「つまり、不正規な召喚の影響か、今の貴女は霊体化が出来ない状況ってことね」

セイバーが淹れた少し渋めの紅茶を口に含み、凜はセイバーが食事を共にする理由を確認する。

「はい、通常のサーヴァントと違い、私は常に現界している状態です。そのため不躰ながら、その分を補うため多少ですが食物の摂取で魔力を補給させてもらいました」

「ああ、食事については別にいいのよ。私は、そんなに朝は食べないから少し驚いただけだから。問題は、霊体化が出来ないということよ」

よく勘違いされるが、聖杯によって呼ばれるサーヴァントは現世にその身と魂を完全に復活されている訳ではない。どちらかといえば、彼女たちの存在を表すなら一個人ではなく現象と捕らえるのが正解だ。

通常、聖杯戦争の召喚に応じたサーヴァントは、総じて英霊の座に召し上げられた『死者』であり、マスターから供給される魔力エナジーによって現界しこの世にその身を繋ぎ止めている。

彼らの利点にして欠点は、マスターからの魔力供給を意図的に遮断するなどの現界を解くことで霊体化……俗に幽霊のような状態になることが可能なのだ。

霊体化には、多数の利点があり、マスターが負担する魔力の消費を抑えたり、この世の物理的な影響から外れて壁をすり抜けたら、普通の人間には知覚が不可能となる。それと同時に霊体化したサーヴァントは、この世の物理的な干渉を行えないといった欠点がある。霊体化して敵のマスターを討つにはサーヴァントを現界させる必要があるということ。

「戦闘には支障をきたさない程度の問題です」

「セイバー、違うのよ。まだ七騎のサーヴァントがそろっていない状況だけど、貴女、学校に行くときも四六時中私と行動を共にするってことの意味分かっている？」

凜の場合、魔力供給に関してはそれ程深刻な問題ではない、六代に続いた魔導の血筋は彼女に五十もの魔術回路を宿らせていた。平均的な魔術師の回路数の二倍に当たる彼女が生み出す魔力の量はセイバーが全力の戦闘を行うのに十分なものであった。しかし彼女が持つ学生の身分がその行動を大きく制限させることは目に見えている。

「サーヴァントである私は、マスターをあらゆる危険から守なければならぬ。リンが学び舎に行くのでしたらご同行します」

「やっぱり、分かっていなかったか。……仕方ない」

元々、魔術師としての気質を父に学ばずに、後見人である兄弟子に自身の性格をむしろ伸ばすように魔術の修練を行ってきた凜は、曲がったこと嫌い、正々堂々といったフラインプレーを好む、魔術師としてちぐはぐな精神を持つている。無論敵者には容赦しない冷徹さも持ち合わせているが、それにも甘さが見えることもしばしば。

故に、凜は、

「いい、セイバー？ 私の言うことをよく聞いて」

「うむ、なるほど、遠坂のご両親の縁者が学園の見学にか」

「はい、葛木先生。ですから今日から、しばらく体験入学という形をお願いします」

朝、まだ一時間目の授業が始まる前の職員室で、凜は左手に持つ煙水晶をチラつかせ、この場にいる全員に効果時間制限付きの暗示魔術を掛けていた。

暗示の内容は、セイバーが遠坂凜と共に行動しても違和感を覚えな、そして数週間後にはセイバーのことを忘れるというもの。

と言つても、あくまで暗示であつて記憶操作ではないため、余りに印象に残るような出来事は誤魔化し切れない。セイバーには、出来るだけ目立たないように自分の服を貸しており、暫くは自分の後ろに付いて来るように言つておいた。

神秘の秘匿は魔術師としての常識。神秘はその知名度（信仰）によつて奇跡の規模を拡大させるが、一方で使い手が多くなるほど世界に刻まれた魔術基盤の配分量が行使される分だけ分割され、衰退するという特性を持つ。

故に魔術師はその存在を公にしてはならないのだ。

「さてと、セイバー。こっちは終わったから、早速、学園内を案内するわね」

セイバーを連れて職員室を出ていくと、それに彼女たちのことを興味深く思っている生徒たちが追い掛けようとするも、職員室内に居た教師たちに呼び止められ。

彼女たちは、誰にも邪魔されることなく学園内を歩き続けた。

「リン、先程の魔術は一体？」

普通ならだれも寄ってこない別館の非常階段の踊り場に着き、セイバーは凜に質問をする。

「あれは一種の感染魔術よ。私たち……正確にはセイバーがこの学園内に居ても違和感を感じないって暗示を他の人の口伝を通じて広げるもので、魔術の知識を予め知っている者や、魔術回路を起動させている他の魔術師には効果が著しく下がるのが難点だけど、今回はそれを逆に利用させて貰うの」

そう、逆に言えば、その魔術に掛からないものは自然と魔術に何らかの関わりを持つ者であるという証明にも成り得る。凜は、万が一に備え学園内の関係者にマスター、引いてはマスター候補を炙り出す策を講じていたのだ。

セイバーもどこか納得した表情をして、凜の行動の意味を知る。

「なるほど、事前に戦いの足場を整える算段でしたか。ですが、一般人に魔術を行使させているのですか？」

セイバーにどこかの外れなことを言われ、凜は苦笑する。

「んー、ちよつと違うわね。……そう、感覚的には狼煙や渡し火のようなものかしら？」

魔術を行使した私の言霊を他の人が元々持っている魔力を通じて互いに共有させられることで暗示の効果が発揮されているのよ。無論、伝言ゲームのようなものだから末端に行けば行くほど、その効果は薄まるんだけどね」

学園内という仕切られた領域の中でこそ發揮される魔術なのよ。と凜がセイバーにも伝わるように言葉を選び、説明する。

「……なるほど、木ノ葉を隠すなら森の中に、情報の隠ぺいを行うために人の情報の伝達を利用した訳ですか」

「そういうこと。本当なら貴女に、認識を阻害させるお守りアミュレットを渡せば良かったんだけど……」

「う、すみません。リン」

手に持った宝石を見ながら、つい愚痴をこぼす凜に、セイバーは気まずく謝罪をする。

三大騎士の一角を担う劍士セイバークラスが保有する対魔力、セイバーのランクは文句なしのA。現代の魔術師が使う既存の術では、余程のことが無い限り、彼女に傷一つ付けるどころか、敵のサーヴァントの魔術攻撃ですら不可能であろう。

それ故に、マスターからの補助の術式のサポートが受けられないという弊害があるのだか。

勿論、治癒や念話といったプラスに働く魔術まで無効化しているわけではなく、呪いや魔術行使による攻撃といった物に対して効果を發揮するスキルなのだが、凜の手持ちの魔術で試した限りでは、認識阻害はマイナス方面に該当するらしい。なので仕方なくセイバーではなく、学園の内情に暗示をかける手間を焼いたのだ。



「気にしなくていいのよ。対魔力が高くて悪いことはそうないはずだし。つで、セイバー。貴女気付いている？」

凜にとつて魔術を一つ使うということは宝石を消費するということ等しい。攻撃は、魔術刻印に刻まれているガンドを撃つたり、一つの宝石を数回に分けて小分けに行使用して使える回数を増やしたりして遣り繰りするが、今回はモグリモグリの魔術師、魔術使いでは無く、聖杯に選ばれた魔術師マスターと英霊サクリファクトが相手なのだ。戦場を自営に有利な環境を整えるのに出し惜しみなどしない……予定だ。

マスターの気を引き締めた声に、セイバーもその言葉の意味を察する。

「はい、僅かにですが。魔力の残照が見られます。それも複数」

その魔術は、一般人にこそ違和感程度に抑えられているが、魔力の塊であるセイバーや魔導を担う魔術師である凜を欺くことはできず、むしろ彼女の逆鱗ぎせきに触れる。凜の周りが怒りと魔術回路から漏れる魔力により空気が二重の意味で揺らいだ。

「チツ、足の速いマスターもいたものね。しかも、よりにもよつてこの冬木わつの管理た者がいる学校に魔術工作を施すなんて。いい度胸だわ、徹底的に叩き潰してやる。セイバー、学校が終わつたら一応、冬木の町並みを見てもらおうと思つていたけど最悪、学校での戦闘も考えておいて」

「ではリン、まずは見晴らしの良い所へ案内をお願いします」

「はああああ。まさか、一つも見つからないとは思わなかったわ」

一通り、セイバーに学園内を案内しながら魔術の痕跡を探り、昼休みになった頃。凜は結局、その残照の正体をつかめずに溜息を吐く。

「すみません、私の保有スキル『直感』は主に戦場で培われた受動的なもので、…私を対象に術が施されていれば簡単に済むのですが」

通常の結界といった、呪刻を施されるタイプの魔術なら簡単に……とまでは行かないものの基点そのものが動く魔術の捕捉は難しい。解析に特化したものならいざ知らず、凜にはそういったスキルはたしなみ程度にしか納めていない。精々、宝石の鑑定に使い、どの属性に適しているか調べる程度のモノだ。

「仕方ない、とりあえず昼食にしましょう。セイバー、食堂に行くわよ」

「はい」

学生食堂の前に着いた凜は、ふと壁に設置されている時計を見る。

時計の長針はすでに半周りを過ぎており。すぐに食べ切れるものを選んでおくようにセイバーに言う。誰も並んでいない券売機に凜は手を出したまま宙を掻き、定ま

らずメニューとボタンの羅列に目を泳がし始め……。

「ええつと……………どのぼたんを押せばいいのかしら？」

他の学年生徒も集まる購買や学食だが、以外にもその席は二、三割程度の空席が確認できる。自分以外にも、自炊する生徒が多いのだなど凛はセイバーと一緒に券売機に律儀に並んだがいいがその先の行動に移せず、固まってしまふ。普段は、宝石の購入費に充てるために節約する関係上、券売機を触るのは初めてだったりする。

機械音痴には少し、ハードルが高かったようだ。それを見兼ねたセイバーが

「リン、まずは買うものを決めて、それに見合う硬貨を入れ、メニューの下の光っている部分を押すのです」

狼狽える凛にセイバーが後ろから助け船を出しちやつかりポリウム定食を購入する。

この騎士王、かなり現代に馴染んでいる。

時間が無いのに、そんなの頼んで食べられるのかと聞くと、セイバーはいつもの口調より少し機嫌よく「問題ありません」と返してきた。

自分は購買に、セイバーは定食を貰うため厨房の窓口に一旦別れ、品物を受け取ると令呪の契約で確認することなく自分の命令通り、目立たない隅の方で先に食べているセイバーを見つける。

「ねえ、セイバー。さつき、券売機を何の問題なく使って見せたけど、聖杯ってそんな知識も貴方達に伝えてくるの?」

「うぐ? はい、聖杯戦争が行われる地の言葉やら、その時代のある程度の常識は召喚の際に伝えられるので、タクシーの呼び方や電車の乗り方も当然、知識として知っています」

敢えて、誰も座っていない隅の方に座っているセイバーの正面席に座り、凜は箸を器用に使い食事を行う自分のサーヴァントを見て、聖杯のシステムに疑問と興味を寄せ

る。

「なるほどね、道理で車やバスを見ても驚かないのそう言う事なの」

「ふええ、ふえふふおぼおべ」

「あー……………今は食事に集中しましょう、!?!」

口にご飯を詰め込んだまま喋ろうとするセイバーに、そのまま食事を進めるよう声を掛けたその時、今までとは違う魔術行使の魔力を察知し、ピタリと止まる。感覚的には高さまでは分からないが、頭上方向にそれほど強くない魔力を感じる。

自分と、知り合いの子になってしまったあの子以外の魔術師が、この学園内に居るという確信を得た彼女の行動は早かった。

テーブルに出した昼食のサンドイッチとお茶をビニール袋に放り込み、セイバーには

念話<sup>パス</sup>を繋ぐ。

『取り敢えず、違和感のない程度に大急ぎで食べて、後から追ってきて』

『了解しました。もし敵のサーヴァントがいる場合は、令呪を使ってでも呼んでください』

じゃあ悪いけど、と凜は、急ぎ足で学園食堂を出ると大急ぎで階段を上る。

近づけば近づくほど魔術を行使している場所の大まかな位置が詳細なものとなる。

ここまま進むと屋上に居るのか？ と正体不明の魔術師を追いつめることが出来る  
と思い、なぜ屋上があいているのかその原因を思い出しましたやってしまったと自分の、  
いや我が家の呪いのような気質を嘆く。

すると、上っている途中で魔力の反応が消え、逃げられたかと思うも、何か手掛かり  
が残されている可能性を信じ屋上へと向かう。

扉を開けると、そこには、間桐桜がお世話になっている眼鏡を掛けた同級生がのんき  
にもパンを齧りながら食事をしていた。

放課後、凜は、学園内の魔術の残照の件を一旦保留とし、新都中心に起きている原因  
不明のガス漏れ事故とされている一般人を対象とした魔力強奪跡の現場をセイバーと

共に冬木市の地理を大まかに案内をしていた。

「全くもってややこしいっいたらありやしないわ!! なんだって今日に限って購買で、しかも屋上で昼食を食べているのよ!!」

「リン、その『エミヤ』というご学友が魔術師という可能性は無いのですか?」

移動中は静かであった凜は、事件現場ビルの屋上で愚痴を零し……もはや怒りを通り越し、厭きれていた。対してセイバーは、凜から話を聞いてからどこか落ち着きが無く様子もどこかおかし。

正確には、同級生の衛宮の容姿を聞いた後、「キリ……イールがいながら、ナニを……カリバーンがあれば一発」とブツブツ呟き通した後、凜の愚痴に負けまいぐらい執拗に衛宮について突っ掛かっている状況であった。

「ありえない、とは言い切れないけど殆ど白ね。あいつ魔術師って感じの性格じゃないし、調理部の部長を務めるような俗世に染まるような人物が魔術師だとは考え難いわ。もし、魔術師であるとしたら……」

「リン?」

「私の目を欺くほど、魔力の隠ぺいに長けた凄腕の魔術師ってことになるけどね」

そう、自分の記憶が確かなら、彼は手に何かを隠すように包帯を巻いていなかっただろうか?

その後、二人は新都の街を一通り見周り、敵のサーヴァントともマスターにも遭遇せず、帰りの帰路を歩く。深夜の人気の無い住宅街は、まるで最初から人がいない廃墟のような静けさがあつた。

「最後に、もう一度学校の方に行くわよ。セイバー、もしかしたら、仕掛けを施した魔術師が様子を見に来ているかもしれないし」

「そうですね、ただし建物の中に入るのは控えておいた方が良いでしょう」

「当然よ。術の正体は分からなかったけど、あんな<sup>カビ</sup>黴臭い魔力の術だもの絶対、碌な仕掛けじゃないわ……………セイバー？」

学園に向け歩を進めてながら話していると、セイバーの姿が、青の戦装束と銀色の鎧に包まれた戦闘態勢に入っていた。

セイバーは、風の魔力の渦巻く不可視の剣を構えて凜の前に立つと静かに告げる。

「リン、目的の建物の方角に、激しい魔力のぶつかり合いが感じられる。その内一方はサーヴァントだと思われます。指示を」

「まさか、まだ監督役が七騎の召喚を確認していないのに、どうして……………ちよつと待つて、『一方は』？」

明らかに早すぎる他の陣営の活動に凜は、焦りを見せるも、セイバーの言葉に引っかけり気になる部位を繰り返す。戦闘自体は、別に問題が無い訳ではないがとりあえず良しとしておこう。監督役である教会側が聖杯戦争の開戦を宣言する前の戦闘後を処理するのか疑問だが、最終的には、六騎のサーヴァントが脱落すればいい。

自分たちが、生き残ればいいのだ。

だが、一方で、サーヴァントによる戦場地住民の殺戮といった神秘の漏洩や、今後の聖杯戦争に影響を及ぼすような行動は場合によつては、監督役の権限でもつて処罰、厳罰、最悪自分以外の六つの陣営を相手取る討伐対象となる可能性すらある。

それはさておき、今セイバーはなんと言った？

「信じられませんが、おそらくリンが考えているのと同じことだと……」

「英霊相手に戦いを挑む魔術師マスタってこと？」

「そうなります」

馬鹿な、と英霊の存在をシステムだけでも知っている者達からすれば、鼻で笑うであろう。

根本的に、英霊とは人が精霊に近い存在に偉業を元に押し上げられた、人ならざる人。世界の守護者として滅びの回避のために存在し、災いの原因を刈り取る。

『世界』の外にある『英霊の座』に留められ、輪廻・因果を超えた不変の存在となつてい



る

聖杯戦争に召喚される英霊は、本体の『座』から呼び出された複製や触覚の一部のよ  
うなものだが、その戦闘能力は人の動きでは到底追い着けるものではない。

「全く、簡単にいくとは思っていなかったけど。とんでもない化け物が参戦してきたよ  
うね」

「どうしますか？」

セイバーの言葉は、マスターである凛の安全を考えてのものであるだろう。乱戦になれば守  
りきれぬかどうか分からない。その気遣いが凛の決意を固めた。

「……行くわ、行ってやろうじゃない。誰の管理地で好き勝手やっているのか思い知ら  
せやらないと。セイバー、案内して」

「わかりました」

学園に着くと、以外や昼間に比べて、魔力の濃度が幾分か下がったような気がした。

おそらく、今この場で戦っている者達は、学校に魔術を仕掛けた施術者とは無関係な  
のだろうと予想を立てる。

もつとも校舎に亀裂が走ろうと、窓が割れようとお構いなしに暴れている以上、冬木

の管理者である彼女との敵対はほぼ確定でだろうが。

呆れたと、凜がセイバーに突撃を命令しようとしたそのとき。

「リン!! 伏せてください!!」

直感のスキルを持つセイバーが、危険を察知しリンを庇う様に覆いかぶさり、しゃがむように肩を押さえ込んだのだ。

瞬間、一瞬だけ昼間になったのかと思うほどの光が瞼を閉じて、セイバーを盾にしているにも拘らず暗い視界の中に差し込まれる。目の強化を行う前であったのは幸いであつたと、安堵しゆっくり目を開け安全を確認する。

「セイバー。ありがとう、もう大丈夫よ。光の強さには驚いたけど、目も普通に見えるし大事はないわ」

「私も特に問題ありません。ですが、あの光は一体? ……!!? サーヴァントが此方に近づいてきています。警戒して私の傍から離れないで」

セイバーの警告に、凜はポケットに入っている宝石を手に戦闘態勢に入る。

二階の教室の窓から一瞬赤い一閃が走り、ガラスが砕け散った。

「どこだああああ、どこにいる!!」

槍の穂先から持ち柄まで真っ赤に染め上げられたような、長槍を持った軽装の蒼い男が何かを捜し求めるように大声で叫びながら飛び降りてきた。間違いなく、サーヴァン

ト。槍ランサーの英霊だ。

「くつそ、マスター。逃げられた、そつちからは確認できるか？」

近くにいる、凜とセイバーに気付かず、おそらく彼のマスターであろう人物との念話を始めた。

セイバーと凜は一瞬呆気にとられるも直ぐに目の前の男の魔力の多さに警戒する。下手すればセイバー以上の英霊であるのかも知れない、そう思えるほどそのサーヴァントは強力であった。

「あ？ 女のサーヴァントとそのマスター？ んなもんどこにも……ああ今確認した」

にやりと笑う男は、槍を構えずに近づいてきた。

「それ以上近づくな、ランサー」

六メートルほどの距離まで後一步というところで、セイバーが風を唸らせながら隙を見せることなく剣を構える。

「そう、カリカリすんなって。俺はお前と戦う気なんか更々ねえからよ」

「そういうことは、せめてその獣の如くぎらついた殺気をしまつて言うべきであったな」  
言葉自体は、軽いものの、セイバーの言う通りその視線は、彼の魔力の多さも相まつて気の弱い小動物どころか猛獣すらも逃げ出す程の凄まじさであった。

「おっと、悪い、悪い。なあ、嬢ちゃん。この建物から魔術師の坊主が一人、出てこなかったか？」

「それに答える義理が私たちにあると思っっているの。ランサー？」

魔術師、と言う単語に食って掛かりそうになるが、ここは押さえ時だと自分を律し答えを是とも非とも捕らえなれない返事ではぐらかす。

「まあ、義理はねえが、嬢ちゃん達にとつちや厄介なことになる可能性があるな」

「どういうことだ？」

ランサーの勿体ぶつた物言いと悪戯好きなピエロのような怪しい笑みにセイバーは警戒を強める。

「俺のマスターは、霊体化したサーヴァントの存在を感知できる魔術師を危険視して始末する方針なんだと。俺としちゃあ、そいつとそいつに呼び出されるサーヴァントと戦いんだがな」

「正気とは、思えないわね」

「全くだ、うちのマスターは合理主義っつーか」

「あなたのマスターじゃなくて、その魔術師についてよ。サーヴァント相手にサーヴァントをぶつけないなんて自殺行為もいいところじゃない」

「しょうがねえんじやねえか？ ああ坊主、まだマスターじゃなかったみたいだしな」

「戦いに関わりのない者を襲ったのか!? ランサー!!」

「おいおい、魔術師なんてもんは、常に死と隣り合わせな生活をしている連中だろうが。そうだろ? 嬢ちゃん」

セイバーの憤りに、ランサーは呆れ気味に赤い槍を首の後ろに回し、無防備に構えを解く。

その姿に凜は、警戒は継続しつつもランサーの逃がした未確認の魔術師の情報を引き出そうと口を開く。

「……………なるほどね。貴方のマスターは、霊体化したサーヴァントを知覚できる魔術師がマスターになる前に手を打ちたい。貴方は貴方でその魔術師と戦いたいと、そして出来ればマスターとして参戦させてそのサーヴァントとも戦いたい……………こんなところかしら?」

「ま、最初はこっちも一般人に……………て訳でもないが、魔術師以外に霊体を見破られて驚いたからな。思わず襲つちまって戦り合ったって訳だ」

「ではランサー。三大騎士クラスで、最速のサーヴァントと名高い貴方から逃げ果せた魔術師の特徴は、どういったものかしら?」

何気に毒を含んだその質問に、静かに眉を顰めるもランサーはニヤリと笑う。

「そうだな、まず服装だが昼間この建物に出入りするガキ共と同じ服装をした短い黒髪

だったな」

その言葉に、凜は呆れ果ててため息を零す。いくらなんでも情報が曖昧過ぎるのだ。外国ならいざ知らず、日本人の殆どは黒髪だ。まあ、この学園の生徒である可能性が出てきたのは意外であったが。

さらに情報の提示を要求する。

「もつと決定的な特徴はないのかしら？」

「ああ、あと俺のマスターが言うには、ほぼ間違いなく封印指定クラスの魔眼持ちだそう  
だ」

「はあ!？」

予想斜め上の情報に、凜は思わず叫ぶ。

それほどの大物が、一年以上通い続けているこの学園内にいるかもしれない………と  
いうことではなく、自分がその存在を知ることができなかつたかもしれない可能性を恐  
れた。

「その様子からして、見てはいないようだな」

「リン………」

「え？ は！ しまった」

大きなリアクションして自分がこれ以上知っていることはないことを悟られてし

まったのだ。彼女の前に立つセイバーが、正直すぎる自らのマスターの将来を若干心配していた。

「マスターがこれ以上いても、何も引き出せないなら戻れだと言。じゃあな」

「ちよつと、待ちなさい!!」

凜が呼び止めるも、用のなくなつたランサーは、霊体化して二人の前から姿を消した。

「……ああ、またやつちやつた」

「リン、その……」

明らかに落ち込んでいるその姿にセイバーはどうやって声を掛けたものかと、取りあえず武装を解き下手に刺激しないよう彼女の方を向き見守ることにした。

「うん、やつちやつたものはしょうがない。今ある物だけであいつより先に見つけ出せばいいのよ。セイバー」

「はっ?」

しばらくすると、一転してテンションが高くなつた凜は、セイバーの手を掴み、そのまま学園の敷地外へと校門を目指す。

「どちらへ向かうつもりなのですか?」

「一旦帰って準備をするのよ」

ですからなんの？ と修飾語の足りない凜の暴走にセイバーは、遠坂邸まで付き合わされ無言で早歩きの主に手を取られたまま歩き続けた。

「セイバーもうちよつと、その柵を左に移動して頂戴」

「はい」

遠坂邸に着くと凜は、真っ直ぐに自らの工房へ向かうと大きな机を引っ張り出し、二枚の地図を広げ重ねると、羅針盤のような物を中央に置くと部屋の模様替えを始めるように家具や礼装を動かし始めた。はじめは見ているだけのセイバーだったが重たそうに大きな家具を動かす彼女の姿を見て、英霊の身である私ならそこらの重機でさえ持ち上げられると、手伝いを申し立てた。

「最後に、その赤い置物をこの部屋の東に置いて終わりよ」

「分かりました。ですがリンこれには一体何の意味が？」

「まあ見てて……」

Die meiste n

番



下準備が済むと凜は、地図の置かれたテーブルの前に立ち魔術回路を起動させ、羅針盤のような礼装を手にし、呪文を詠唱するために口を開く。

羅針盤がクルクル回り針の先端が赤く怪しく輝くと、何かを貫く勢いで地図の一点を指した。

「ここは、この屋敷の場所を指しているようですが？」

「これはね、魔力針って言う魔力のもつとも強い場所を指す礼装なの。昔、これを使って街を探索したりしていたんだけど。今これが指しているのはこの工房内の魔力じゃない。冬木の地脈を記録する特殊な用紙……ああ、この地図の下に重ねてある紙よ。それ限定に展開しているの。これを利用すれば、どの位置に魔力を込められた工房があるかが分かるもので」

「つまり、件の魔術師の居場所を探し当てる算段だと」

「そういうこと……でもやつぱり今、この冬木の地で一番魔力の発せられているのは家か、仕方ない。二……<sup>zweit</sup>……って、え？ 何なのこの魔力量。むちやくちやな大ききさじやない。それに、ここって」

「リン？」

二番目に大きな魔力を発する土地を調べようとすると前に魔力針が大きく揺れ、遠坂の屋敷とは違う場所を指した。

「……………衛宮くんの家じゃない」

## 6 死闘の戦友

遠坂凜が抱いていた、同級生「衛宮」の第一印象といえば、学園内で有名なポジションの割りに不思議と生徒の話の話題に出てこない『目立たない一般人』といったものだった。

容姿等に、特に変わったところはなく。髪は黒く短く切り揃えており、身長も平均で顔も整っている方だが、大人しい表情のせいかそれといった話は聞いたことはなかった。特徴といえば、目が悪いのか黒縁の眼鏡を掛けていることぐらいだろうか？

典型的な日本人を代表しているような、そんな生徒であった。

これといって、自分に接点の無い凜が彼に特別気に掛ける事も無く、入学当初からクラスは別で、一応確認として全校生徒相手に、魔術関連の不法侵入者がいないか鍛錬も兼ねて調べたときに一度顔を合わせたことはあるが、魔力の量も一般人の域を出ず、顔と名前が一致しているかどうかもあやふやな有象無象の市民Aといった具合であった。

ちなみに、凜が件の彼がこの学園ではちよつとした、有名人であったということを知ったのは、学園祭が終わって暫く経ったころ。体育会系の部活が有名で優遇されがち

な穂群原学園に、校長と半ば賭けのような取引の末、調理部という文化系の部活が新しく設立された頃であった。

聞くとところによると、彼は前々から普通の生徒とは一風変わっていたらしく。三年前から毎週土日は大きな籠を背負い近くの野山で野草の採集をして、帰りにはいつも籠から溢れるほどの量を入れて、帰宅する姿を目撃されている。

何処かの部活に入ることは無く、凜と同様帰宅部であり。帰りによく藤村先生と一緒に帰る姿を確認されており、一時不穏な噂が流れかけたが、それはすぐに無くなつて行つたそうだ。

何でも、藤村先生は元々子供供<sup>フレンドリー</sup>っぽいところがあり、当時の二年、三年の勇者<sup>バカ</sup>な先輩達が「あのタイガーに春が来たのか!？」と本人に確認をして散つて逝つた（全員ちゃんと生きてはいる）

後の生き残りの話によると、藤村先生が学生時代の頃にお世話になつた人の家の子が彼であつたようなのだ。

話を聞いて調べたのだが、彼は十年前の冬木の大災害の生き残りであり。当然、衛宮親子には血縁関係はなく養父子の関係であつたようだ。当時は、今の衛宮が住居としている洋館ではなく、昔からの住宅が処残る武家屋敷に住まいを構えており。藤村先生は、地主の縁者とその購入者といった伝手で知り合つたらしくそれなりの親交があつた

ようなのだが……八年前に衛宮の屋敷で何か事件があったらしく凜の情報源である同級生の話では、そこから先は色々禁忌<sup>タブー</sup>扱いされており情報があやふやで憶測の域を出ないものらしい。

確かな市の記録によると、五年前から三年前の二年間。一人で外国に留学していたらしく、三年前にひよっこり冬木市に戻って来る時、元の実家に立ち寄らずに、今住んでいる洋館を土地ごと購入して、そのまま中学校に転入するも彼と同じ中学出身の同級生から言わせれば、三年という最終学年の二期期という中途半端な時期に入っていて皆受験で忙しく話しかけることも特になかったとのこと。

一年のときは、それ以外に何か問題も賞罰を起すことはなく、一般的な（一年で一部活の部長という点は別だが）生徒と同じく日常を過ごしていた。

だが、二年の冬に同級生の間桐慎二の妹である桜が、彼の家に通いつめていたという聞き捨てならない話を聞いた時には、流石に寛容出来ず桜にそれとなく理由を聞いたのだが、帰ってくる返事は「遠坂先輩には関係ありません」の一点張り。実際その通りなのだから強く出ることも出来ない。凜は遠見で洋館の敷地外から確認するも、藤村先生も常に一緒にいることを確認して一先ず安心し、保留としていた。

だが、

十年前の大災害の生き残りで。

教師と家族同然の縁を持ち。

休日とはいえ、三年間も野草を集める奇特的な趣味があり。

部活の後輩をしよっちゅう自宅に招待する。

外国からの帰国学生ときたものだ。

どう考えても怪しい。

これほどの一般的な生徒とは、かけ離れた特異な点をこれほど持ちながら今まで魔術師である遠坂凜が、その人物に対し元妹関連で深く知りえながらも、ただの一般人として記憶していたこと自体がおかしいのだ。

まるで、そのことに意識を逸らされ続けていたかのような。

「……セイバー、彼の家に向かうわ。私を抱えて大急ぎで連れて行って!!」

頭の中の違和感が湧き上がってくるのと同時に、凜は自らの体に強化を施し、サーヴァントに叫びに近い声で指示を出す。

「失礼します。急ぎとの要望なので、かなり揺れます。舌を噛まないように」

主を抱えたセイバーは、遠坂の屋敷を飛び出すと、人間には不可能な跳躍を見せ家々を飛び越え、夜の明かりを頼りに先ほど見た地図と町並みを空中で見比べると目的の屋

敷に向かうのに最短のルートを選ぶ。見知った土地の、——嘗て故郷の草原を駆け巡るかの如く—— ように、アスファルトの上を自身の保有する魔力放出のスキルを応用し、半ば跳ぶように走り続ける。

下手な自動車以上の速度で進む二人が目指す衛宮の洋館………………。そこはかつて、第三次聖杯戦争において外来の魔術師が参戦するために、土地を買い占めて建設された屋敷であり、そして英霊を召喚するには打って付けの霊脈が通る大源マナの豊富な霊地であったことなど一体誰が知りえたのだろうか。

防弾どころか戦車の砲弾でもなければ傷が付かない、魔術という特殊な技術により強化を施されたガラスとチタンの支柱によって作られた広い植物園。だが今、その入り口があつた扉は、爆破されたかのように無残にもガラスは砕け、軟らかい飴のようにひしゃげた支柱が辛うじて残されていた。

そしてその風通しの良くなった温室の工房には、二つの人の形を成した神秘の塊が（…………正確には三人だが）いた。

薄明るくぼんやりとまどろみを誘うほどの光量で、室内を照らすのは電気の照明ではなく、魔力が異常なまでに濃くなり自然と光に変換されることによる、満月のような優しい銀色の明かりが偶然にも、衛宮の足元を中心に描かれていた幾何学模様の召喚陣から発光しているのだ。

先のランサーと名乗る赤い槍を持つ男の襲撃により、衛宮が使い魔として飼育している鳥達が一斉に空へと飛び立ち、洋館の庭に植生している木々に逃げ込む。

代わりにその工房を彩るのは、床の召喚陣に注ぎ込まれた魔力と召喚に応じ参上した英霊を構成するエーテルの余波の影響によって急速に成長し、満開の花を咲かせる薬草や毒草、非常食や趣味として育てた草木の数々であった。

季節によって咲かせる時期が異なる花々たちが、一斉に咲かせる奇跡を垣間見せる。

「やりやがったな、坊主。俺が見込んだ通り、マスターになりやがったか。……にしても随分といい女を呼びやがって」

その新たに現れたサーヴァントを見たランサーは、喜びに振るえて、良き難敵となつた衛宮に賛辞の言葉を送ると召喚されたその英霊の容姿を見定め、つい言葉を零す。

光と風の中から現れたのは、扇情的な肢体のラインを強調する黒い丈の短いボディコート、両目を覆うバイザー（眼帯）を身に着けながらも分かるほどに整った顔立ちをし



た、脹脛まで届く薄紫色の長い髪の女性の姿を象るサーヴァントだった。

彼女は、両足が地に着くと薄っすらと犬歯の覗く口から魅力的な声を出す。

「サーヴァント、ライダー。貴方の呼び声に応え、参上しました。……………この様子からして、我がマスターが襲われていると見て相違ありませんね。ご安心をマスター、貴方は私が守ります」

衛宮の叫びに応えるように現れたその女性は、臆気ながらも繋がっている契約を確認すると、自分の前に力が抜けて倒れる少年にしゃがみ込み、優しく声をかけた。

「私の名に賭け誓いをここに。貴方を我が主として認めます。」

これより我が騎乗の手綱は、貴方と共にあり、貴方の運命は私と共にある。ここに、契約は完了しました……………あの男と違い、律儀な御仁のようですね。ランサー」

仰向けのままに、魔力の枯渇による意識の混濁に飲まれながらも、自分を見つめるマスターの頬に手を添えて壊れ物を扱うように撫でると、ライダーと名乗った彼女は、召喚後の本契約を結び、そのまま立ち上がると衛宮を襲っていたランサーを警戒し、手いつの間にか仰々しい刺突と拘束を目的とした、長い鎖が繋がれている大きな釘のような剣を、二刀持ち構える。

それに応えるようにランサーは、召喚の際に吹き飛ばされ倒れた時に髪や鎧に付いた塵を払い落とし、鬪争に満ちた目でライダーを見る。

「ハッ、生前のことを話したあ。随分と、余裕があるじゃねえか。ライダー」

「……召喚の際に、自分のクラスを名乗ったのは失敗でした」

ライダーが手に持った釘剣に付いた長い鎖が、蛇のようにうねりながら、乾いた金属音を立てる。

互いに戦意を剥き出しに得物を構え、隙を窺い、相手を討ち取らんと虎視眈々に睨み合っていた。

先に動いたのは、ライダーであった。右手の釘剣をランサー目掛けて投擲し、それに付いた鎖を掴み、腕を振るい彼の槍の穂先に撒き付けて拘束を試みる。間合いの違う武器では、不利であると悟り、ランサークラスの強みである敏捷な動きを封じる算段なのだ。

当然それをただ見るだけで、立ち尽くすランサーではなく、自らに向かい来る釘剣を、鎖が伴う前に弾き飛ばすと、ライダーに自慢の赤槍を構えて持ち前の俊敏な走りで一気に近づく。

天井に向かい、吹き飛ばされる自分の得物見てライダーは、口端を吊り上げると今も釘剣と共に吹き飛び続ける鎖を自身の拳に乗せ引き寄せるように振り下ろし、巧みに操りランサーと自分の間に複雑に絡む鎖が躍り出る。

ランサーは、無闇に振るえば槍に絡み付かるかもしれないと悟ると、槍を自分の背に隠すように構えながら、鎖の無い左側へと進路を選びライダーから通り過ぎる頃、慎重に、だがけて槍に込める力を殺さないままライダーの右首筋を狙う。

ライダーは、ランサーと同等の持ち前の敏捷さで以って、逆手に持つ釘剣で受け流し、自らの筋力を一段階上げる魔獣や怪物の類が持つ保有スキル 怪力でランサーを壁まで投げ飛ばすか、そのまま引き込み、その強靱な握力で以って頭を潰すかしようと、左手を受け流した赤槍の柄へと伸ばす。

槍を受け流され、不自然に伸ばされた左手を見たランサーは、数々の戦場で培われた経験と勘に従い、後方へと飛び退く。

「敵の得物を掴もうとするたあ、アブねえ真似をする奴だ。想像以上に機転の利くいい動きをしやがる」

「……………」

互いに、身軽な獣のように構えるも、ランサーは手負いの獲物を狙う豹のように、感心し称賛を浴びせ、円状に歩きながらライダーの鎖を警戒し、ライダーは、マスターの側から離れずに母猫が天敵から我が子を守るようにランサーを、眼帯により隠された双眸から黙ったまま睨み付ける。

両者は、数手で相手の実力を加味し、拮抗したこの状況をどう打破するか思考をしながら相手と睨み合う。

しかしながら、同じ不動の状態であるが、警戒の理由はそれぞれ異なっていた。

ライダーは生前の出生上、英雄を募る若者達を一方的に虐殺するという経験であれば数多く持つが、同等以上の実力を持つ敵との『闘い』を知らないが故に。

ランサーは、悪名高き怪物の討伐や英雄を打ち立てた猛者たちとの豊富な経験を持ち、たつた数手で以って相手が自らと鎬しのぎを削り得ると看破出来る程、『戦い』を知ることが故に。

迂闊に動けなかった。

互いに同じくらしいの敏捷さと筋力を持ち。

互いにマスターからの援護を期待できない状況にあるのだから。

二体のサーヴァントの緊迫した空気が、片方に崩れたのは本当に偶然であった。

——目を覚ます。

衛宮が、十年前に今の体に落ち着いた時から不安定に発動する、不老不死の精神を宿す赤い瞳が、彼の意識を強制的に覚醒させ、二体のサーヴァントが互いに不動を貫いていた均衡を崩す。

「ぐっ、があ、……ゴホッゴホッゴホッ」

瞼を開き、倒れた状態のまま体を横にして『く』の字に曲げると、口を押さえ嗚咽と咳を出し、更に体を縮みこませた。一通り落ち着くと思い出したように胸を押さえ込み、心臓を貫かれたことにより破けた服を見て衛宮は気絶する前の自分の状況を把握するため、沈黙に口を閉じながら意識を戻した時とは違う赤い輝きを持つ瞳に変える。

——目を盗む。

近くにいた、自分の視界に立つ二つの人の形を成した神秘の塊の記憶が、頭の中に雪崩れ込……まずにそれぞれの思考のみ入り込んで来た。

二体とも、予想以上に抗魔力が高いのか、彼らの記憶を読みきれずに現状の思考のみ掬い取れた。

双方は共に、冬木の聖杯と自身のマスターの召喚に応えてこの場におり、自らに課せられた定めと契約、願いのために戦い合っている。

一方は、自分を殺すために。

一方は、自分を守るために。

戦い合っているのだ。

どちらが、自分の味方なのかは顔を上げ一目見ればすぐに分かる。自分を標的に槍を構えるランサーと、その間に立つ長い鎖の付いた短剣を持つ髪の長い女性。

「ほおー、あの魔力を枯渇した状態で目が覚めたか。まあ無理すんな、ドワタア……!？」

衛宮は、ランサーを睨みながら、横に倒れていた体を仰向けに転がし、両手が自由な姿勢になると、尽かさず両手を打ち鳴らしながら合わせると、工房の床に左手を付き動けずにいたランサーの足元に床の材質を圧縮した即席の（それでも直径3mはある）岩の拳が大蛇のように襲い掛かり、ランサーを突き上げて、そのまま放物線を描くように再び床に激突させる。無論、拳の上にいるランサーは、そのまま床と拳との間に声を上げる前に挟まれ潰れる。

練成によつて隆起した床の隙間から覗くのは、温室の工房の地下に繋がる本物の『衛宮』の工房。

錬金術の鍛錬場と黒魔術用の薬草を育てるしか用途のない仮初の工房の下は、冬木の地でも間桐邸を凌ぐほどの、豊富な霊脈が通っているのだ

衛宮は、右手を伸ばし地下へと続く、木の虚穴のような闇に向かい、魔術回路の酷使による体の疲弊を無視してでも戦える目的の魔法礼装カードに、意識を呼びかけながら呪文の詠唱を始める。

「Watch out to see the armed. Stop all motor nerve. I leave all of the sword play. 武裝を転換。体感意識を全て遮断し、全ての戦闘行動を一任する。」  
 『剣!!』

礼装の名前を言い終わるか、終わらないかの瞬間、床にめり込んだ岩の拳に輝が入り、ランサーの地の奥から響くような怒号を合図に碎け散った。土煙が工房内に充満し碎け散らされた瓦礫が飛礫となりライダーに少くない量が飛来する。ライダーは、自分に迫りくる瓦礫の破片を打ち払い釘剣を構え、ランサーの強襲に備えていると土煙から赤い呪槍が彼女の横を通り過ぎ、<sup>マスター</sup>衛宮目掛け一閃に空気を裂きながらこのまま行けば間違いない胴体を貫き彼の体を再び串刺しにする。

「マスター!?!」

ライダーが叫び、主の安否を確認しようと振り返ると、甲高い金属音が轟き、体鳴楽器のような余韻を残す音が工房内を反響する。

ランサーが放った真名開放がなされていない槍は、因果の逆転を行うことなく衛宮に より、大きく回転しながら弾き飛ばされ空気を掻き回しながら、衛宮が立っている場所から大分離れた、右方向へ放物線を描き床に突き刺ささった。

土煙の影だけで判断するなら、今衛宮は、両刃の付いた18世紀には貴族の誇りの象徴や芸術品として扱われるようになった細長剣<sup>レイピア</sup>と呼ばれる剣を持っていた。

土煙が衛宮の振るう剣から発せられる不自然な風圧によって払われ、彼の姿を見たラ

ライダーは、急に現れた剣よりも、その騎士然とした自身のマスターの隙のない歩調に疑問を持つ。

あの状態でどうやって動いているのだろうか？

ライダーは生前の経験上、人の保有する魔力の量を感じする能力が長けており、どれほどの量で魔力を奪われた人間が立つことが難しくなるか、気絶するか、死ぬのか、それらの状態を細部にまで、どうすればぎりぎりまで生かせるのかを知っている。

今の主の状態は、気絶と死ぬ前の中間ほどの枯渇に該当するほどの危険な状態だ。下手を打てば、良くて昏睡状態、最悪の場合は……死。

であるにも拘らず、マスターの近辺から魔力による空気の揺らぎが見られる。枯渇しているのに、体の外には大量の魔力があるといった矛盾した状態。その疑問は、彼が自分の近くに寄ることによりすぐ解明するのだった。

「……………あ、る……………」

能面を被ったような、表情の無いのままライダーの傍まで歩くと、衛宮は先程までの息を苦しげに絞り出すような声でなく、壊れかけたオルゴールの連想させる途切れた口調でライダーに話し掛ける。

「じ……………の、からだ。……………を守、れ。サー、ヴァント!!」

「っ!! 分かりました」



その声は、自分のマスターから発せられたモノではなく、彼の持つ尋常ならざる魔力の籠った細身の剣からマスターの体を通して伝えられたのだと本能的に察した。

無駄な装飾が無い、その剣は決して常人によつて手に掛けられた物ではなく、その刀身から鏝、握りに至るまで神秘の塊として、サーヴァントの持つ宝具と肩を並べてもなら遜色もない一品であつた。

おそらく、その容はかたちは使い手に加護授ける聖剣ではなく、その体を使い操る魔剣の類なのだろう。

動けない自分の体を、十全に動かすために使われたその魔剣は、主の使い魔ライダーにその身の安全を守るように声をかけ、一陣の風のように土煙の中を走り抜け。ランサーが立っていると思われる場所に、刺突の一撃を振るう。

「うおつと!」

ランサーが、間一髪で剣の一撃をかわすと、弾き飛ばされた自分の愛槍の元へ駆け寄る。

最速の英霊と名高いその俊足は、衛宮の傍にいたライダーの横を通り過ぎ、床に刺さった赤槍を握る。

「驚いたぜ。その実力、策略ともに、正に英霊と一騎打ちを望んでもおかしくない程の、見事なものだ……なっ!」

槍を手にし、魔力の枯渇で倒れながらも戦う衛宮に不意打ちを貰ってもランサーは、悪い気にはならなかった。

相手に対し、死力を尽くして限界を超えようとも生き残ろうと足掻くその姿に好感を持っていた。

相手が現代に生れ落ちたことを嘆き、戦士として激励を送ると、手に戻った槍の感触に違和感を感じた。

その穂先を鑑みるように、凝視し違和感の正体を知った。

ライダーの霊体化された鎖が、絡み付かれていたのだ。

槍を動かすたびに鎖が擦れ合う乾いた音が、ランサーとライダーの間に繋がれていた。気付けば、穂先の根元には更に三重四重に二本の鎖が巻かれ、見るからに力尽くに引き千切るには骨が折れそうだ。

金属音の先に、鎖を実体化させて手に持ったライダーが、口元を吊り上げランサーに告げる。

「逃がしはしません」

ライダーの後ろから衛宮が現れ、剣を振り上げ、ランサーの心臓を貫こうと利き足を踏み込む。

「……し、……ね。!?!」

踏み抜き、後一步でランサーを貫くことが出来るといったところで、彼の足が纏もれて慌てて床に剣を立てて杖代わりに体を支える。

「あ…………るじっ？」

その体は、疲労の限界を越えて腰が抜けて、立ち上がることが出来ず。衛宮の体を操る『剣』は、いやな汗が流れ震える右手を見て。最後には、花びらの絨毯に倒れ込み。数秒と掛からないうちに剣の形が崩れ、一枚の札カードが木の葉のように舞い落ちた。ついに、魔力が尽きたのだ。

「くっ、」

倒れこみ、浅い呼吸を繰り返す自分のマスターの様子を見たライダーは、両手に持った鎖を右手に集めてランサーを逃がさないように力を込め。両目を隠す眼帯を外そうと、左手を頭の後ろに回そうとする。

「なあ、もうこれで今夜は、分けてことにしねえか？」

ランサーの横破りな提案にライダーの手が止まる。其の隠された双眸には、困惑と希望がちらつくも、冷静に対応する彼女の声色は一変とてそれを悟らせない平淡なものだった。

「どういった理由で？ 貴方は、私のマスターを脱落させるために襲っていたのではないですか？」

ライダーの問いにランサーは、鎖が絡まれていることを忘れたかのように右手で頬を  
けだるそうに掻いた。

「一言でいやあ、勿体ねえと思った」

「？」

「俺が、この聖杯戦争に参戦した理由はひとつ!! 死力を尽くし強者と戦い抜き通すこ  
と……ただ、それだけだ。聖杯になんざ端から興味はねえんだよ。撃ち合って、殺り  
合って分かったが、お前らの実力はこんなもんじゃねえのは一目瞭然だ。今度刃を交え  
るときは、全力で来い! 俺もマスターと共に戦い死力を尽くそう」

言いたい事だけ言うと、ランサーは霊体化し姿と気配を晦ましてしまった。

「マスター、大丈夫です。今、少しですが魔力と体の回復を……」

ランサーが去り、奇襲の危険が無くなったことを確認したライダーは、息苦しそうに  
倒れこんでいるマスターである衛宮の傍に駆け寄り、腰を下ろす。そして、唐突に左手  
に持った釘剣を右手首に沿え斜めに滑らせた。

「私の血は、不完全ながらも死と生命の両方の性質を持ちます。完全ではありませんが  
右側から流れる血は、死者を蘇らせ、左側から流れる血は人を殺す力を持つと……一気  
に飲みなさい」

それは、大地の女神の成り損ないであったこと。理性を失い怪物に変容した後、英雄

によって討たれその首から流れた血が、生命のない砂漠の大地に降り注ぎ、その環境に適応した蠍や毒蛇が生まれた伝承に由来する。

「うぐつ、ん」

鮮血の滴る手首を、口元に押し付けられた衛宮は、口内に注がれた血液を一気に飲み下す。サーヴァントの豊富な魔力の籠った血液が、通常の魔力供給とは比べ物にならないほど馴染み、体内に浸透し、次第に呼吸が安定すると、衛宮は上半身だけ起こした。

「はあ、はあ、……………お前たちは一体？」

困惑した自身のマスターの様子にライダーは、右手の傷を塞ぎ終わらせ怪訝そうに衛宮を見る。

「あなたは、どうやら自覚を持って召喚を行った訳では無いようですね。でしたら、聖杯戦争のとそのサーヴァントの存在を知らないのも無理は——」

「違う」

その様子に、聖杯戦争に巻き込まれた事情を知らない、魔術師であると当たりを付けたライダーは、聖杯戦争に関する説明をしようとしたが、すぐに否定によって語りの説明を遮られる。

それも当然だ、衛宮は聖杯戦争の知識を養父からその大本を半ば事故として譲り受けているのだから。

彼が、狼狽しているのはそのことではなく。

「サーヴァントの、召喚が俺の意識的な行動じゃないのは、その通りだけど。俺が、気にしているのは、なんで今の時期に聖杯戦争が始まっているのかってところだ。次の聖杯戦争は、五十年後の筈だ」

前回の第四次聖杯戦争は十年間に終結し。案の定、表上勝者を……聖杯の獲得者を出さないまま終結した。

そして、六十年間のインターバルにより、第五次の聖杯戦争が始まる筈であるのだ。「……私の聖杯から与えられた知識の中には、それに対する回答を得られるものはありません」

ですが、私があなたのサーヴァントであるのは、その左手の令呪から繋がる経路パスから容易に分かる筈です。と添えられたその言葉通り、使い魔との繋がりに似た契約の証であるラインと。聖杯から七人のマスターに刻まれる三つの聖痕が、確かにあった。

「そうか、無いものは仕方ないよな。魔術協会からの依頼が急減したのはそのためか、クソツ……ちよつと持つてくるものがあるから、そこで待つていてくれ。……あれ？」

衛宮は、ライダーが敵でないことに一安心して床に落ちた『The Sword 剣』の礼装カードを手に取り仕舞うと、先程ランサーの襲撃によって取り損ねた魔法礼装を取りに行こうと立ち上がるうとするが、手に力が入らず再び倒れてしまった。

「なん、で？ ……うわ!」

ライダーが、横に着きマスターの腕を掴み、自身の肩を貸して立ち上がらせる。

「無理をなさらないで下さい。ある程度回復したとはいえ、あれほどの魔力の枯渇から、それほど時間が経っていないのですから」

「いや、その有難いんだが。どうも、その」

「さあ、マスターどこに向かうつもりだったのですか？ 不躰ながらお供致しますよ」

肩を回し互いに体を密着させている状態にあるこの状況で、ライダーの妖艶な肢体と包容力抜群の胸部の膨らみが彼の胸板に当たり、赤面する衛宮を、どこか微笑ましく悪戯っぽく口元を吊り上げるライダー。

完全に玩具として遊ばれている。

「モウ、イイデス。 ……そのまま進んでさっき開けた穴の中から、地下室に向かう」

ランサーにぶつけて、押しつぶした岩の拳の腕に当たる部位が砕かれずに柱とした残っており、手を合わせてそれに触れたまま錬金術の物体形状変化を行使し穴から岩で作られた螺旋の階段が作られた。ライダー諸共、直接沈むように地下へ潜る。

そこには、何か特別な施行が凝らされている訳ではなく、ただマナの溢れる——その地上へと繋がる穴が無ければ洞穴となんら変わりない——土と岩の壁のドーム状の空

間が広がっていた。

*The call to everyone* *S e t*  
「全ての礼装に告ぐ。集まれ!!」

その岩壁の淵や狭間から、赤に金色の装飾が施されたカードが、地下室を飛び回り、最後には衛宮の懐に入り込む。

全てのカードが集まったことを確認すると、彼はライダーにドームの中心まで連れて欲しいと頼み、支えられながら進むと、肩に回していた手を戻し再度手を合わせて、床に翳すと土の床から古びた宝石入れのような箱が出て来た。

『開け』

ライダーは、最初空気の抜けるような音がしたと思ったが、衛宮が発した全ての音を聞いた途端、その言葉の意味を本能的に理解した。

蛇語、おそらくそう表現するのが一番適切であろう言語は、けして人には理解できない太古の技術だ。

おそらく、マスターも自分と同じように社会や人とは異なる生を受けて苦労したのではと、同情的な眼差しを向ける。

「!？」

封印の解けると自動的に、ゆっくり開いたその箱から出てきたのは、赤い輝きと共に



溢れた魔力の渦と轟音を思わせる衝撃だった。

「投影、開始」<sup>trace</sup><sub>o</sub><sup>n</sup>

その魔力量にうろたえるライダーを無視して衛宮は、一本の包帯を投影し、箱の中にある魔力の発生源たる赤い寶石に巻きつけて魔力の嵐を抑えこむ。

かつて、衛宮が幼少期に患わせた魔眼の暴走を抑えるために巻いていた、魔力殺しの聖骸布……のレプリカ。さしずめ魔力封じ、といったところか。それを器用に巻き付け捻りを加え結び付けて、ペンダント型にして首から下げていると、気付けば先程の弱弱しかった魔力の量が回復し、一人でも立ち上がり歩けるまでになった。

その、封印が施されていたのは、衛宮■郎が八年前に偶然辿り着いてしまった禁忌の魔法。魂の物質化の果てに出来た、究極の錬成増幅器。

その名は、『賢者の石』。

「なあ、お前は一体どのクラスの英霊なんだ?」

「え? ……と? ……と? ……」

目的の礼装を手にした二人は、早々に地下を降りたときに使った階段を上って地上に

戻ると、衛宮は思い出したように、ライダーのクラスを聞いてきた。

彼女が召喚と同時に名乗りを上げた時、彼は既に意識が朦朧としており、はつきりと聞こえなかったのだ。

名乗った筈であったライダーは、暫く唾然とし衛宮の言葉の真意を思考するも心当たりがなく、語り掛ける言葉が見つからずに内心、冷や汗が止まらずにどういつた紹介をすれば良いか分からず沈黙を保ち続ける。

「? ああ、名乗りを聞く前に俺から紹介するのが礼儀だな」

目を合わせたように、固まって動かなくなつたライダーの様子を見た衛宮は、彼女の焦りを察することなく礼儀を重んじて接して欲しかったのかと勘違いしたまま。破けた服を錬成し直し、姿勢を正して紹介を始める。

「俺の名前はクロウ。衛宮家六代目当主、衛宮久郎えみやくろうだ」

「……っ! はい。此度の聖杯戦争に措いて騎乗兵ライダーのクラスをもつて現界しました。ゴルゴン三姉妹が末妹、メデューサ。貴方を守るサーヴァントです」

その、自身のマスターの紹介に習って、真名と共にライダーはもう一度、主を守ること目の前で誓つた。

## 7 開戦の前哨戦

冬の季節が長いことが由来とされているがそれに対して温暖な気候が特徴である「冬木」市。流石に夜になれば気温は低下し、吹き荒れる木枯らしは頬を痛いほど寒く吹きつける。

凜は、セイバーに抱きかかえられて深夜の闇に寝静まる冬木の街並を跳び回っていた。目指す先は、魔力針が不可解な反応を示した、衛宮久郎が住まいを構える古めかしい洋館。

生前、湖の精霊から貰った風の加護を纏う剣騎士が、主を抱えながら大きく跳躍し目の館が見え始めた。

「……!? つ、セイバー」

その様子を魔術による視力の強化で遠目から見下ろしていた凜がセイバーの肩を叩き、跳躍による移動を止め、地上から走るように指示を出す。

セイバーは頷くと、道路を滑るように駆け抜け、衛宮の洋館の門の前に着き敵が近くにいないことを確認すると凜を降ろし両手を前に出し風の魔力によって編まれた敵の目に対し不可視とする鞆に包まれた聖剣を持つ。

インビシブル・エア  
風王結界。

湖の精霊から受けた風の加護を依り代とした生前、御付の魔術師であったマーリンの指導によって完成された武器を見えなくする鞆の術式。それは正確には宝具ではなく四大元素中の風を操る魔術に該当する。しかし彼女が手にしたその鞆の力は、竜の因子を持つ魔力炉心によって台風一つ分相当の風量を振るうことを可能とする神秘の塊となった。

こと接近戦に措いては、空気の圧縮によって光を屈折させ不可視とした宝剣を隠すという観点に二重の意味で有利に運ぶ。

そのあまりの宝剣の逸話の知名度を隠すための真名封じに。

その武器の間合いを悟らせない初見殺しとして。

数多の宝具の中でもこれほど聖杯戦争に有利と働く宝具は滅多に無いだろう。

セイバーが戦闘体制に入り、凜は険しい顔で衛宮の洋館を睨む。

柵を越えて見える広大な土地には、洋館とその周囲に聳え立つ木々が鬱蒼としており裏庭にあるガラスで出来た温室が枝葉の間から覗いていた。

時計の針が、深夜を廻るその建物からは、明かりは無く。一見、どこにも異常は見られないが強化された凜の視力は、屋敷を覆う柵と門を越えた洋館の入り口の扉がそこだけ竜巻にでも見舞われたように無くなっている現場を捉えた。

「行くわよ」

「はっ」

宝石を手に持ち、不可視の剣を構えた主従は門を開き、敷地内に足を踏み込んだ。

門から屋敷の扉までの間を繋ぐ、おそらく屋敷と道路を繋げるために後から敷かれたコンクリートの道に、冬の冷たい風に乗ってきた枯れ葉が擦り切れる乾いた音を立てる。

日本の古い武家屋敷とは違う、遠坂邸や間桐邸のような洋式の建築物に凜は、自分の実家とこの洋館の敷地の広さを無意識のうちに見比べ、溜息を吐く。

元々遠坂家は、冬木の地に広大な土地を所有していた地主の家系であったが、かの第二魔法の使い手の系譜であることから魔術の中でも最も資金コストの掛かる宝石魔術を主体とする費用の出費が原因で、霊格の低い土地から切り崩したり土地の貸付けたりした結果。現遠坂邸とその周辺の土地に地所を構えるほどの規模となってしまった。

これには、時代の流れや各遠坂家の頭首達の呪いによる資金不足が原因かと思われるが、実際には六代目からの後見人の杜撰な土地管理によって重要な土地が他家や企業に渡ってしまったのが大きい。結果、今の遠坂の土地所有範囲は、外来の間桐に大きく下回ってしまったのだ。

まあ、術一つ行使するだけで数十、数百万相当の宝石を浪費してしまう金食い虫の魔

術を二百年も、その魔術特性を変質させることなく次代に受け継がせてきた遠坂が優秀であることには変わりはないだろう。

詰まる所、この洋館が建つこの土地も遠坂家が所有していた有力な霊地の一つであったのだが今から七十年以上の昔のことだ。十年前の大災害で市民館が無くなり、その後に新都で新設されたは良いものの戦前の古い記録は、遠坂の古い書庫の奥の方に埃を被っていた。

「起動」  
Anfang

無論そんなことを知らない凛は、サーヴァントの襲撃によって破壊された扉があつたと思われる館の入り口前に立ち、衛宮邸の崩れた扉枠に手を付き、魔術の痕跡を探す。

左腕に刻まれた遠坂家が代々受け継いできた魔術刻印が淡く輝き、記録された刻印が彼女の解析魔術のサポートを行い始める。

魔術刻印、それは先代の魔術師が次の後継に受け継がせる一族の研究成果の記録。

その一族特有の魔術に馴染むよう調節された体の外部から取り込む魔術回路のようなもの。先達が行使した魔術が体に刻まれ安定化した刻印式であり魔道書。

このことで、刻印保有者は魔力を通すだけで魔術の行使が可能となり、また中には刻印自体に意思を有するものがあり術者が重傷を負っても勝手に魔術刻印が起動し治癒

を行うこともある。

代を重ねることに扱える魔術の補佐に適した刻印を刻むことでその量は増えていき、『へと導く足がかりとなる。親から子へ（もしくは血縁者）受け継がせるだけで代の浅い家系の者は、激痛を伴い薬品などの補助を行い自己の体を組み替え刻印をなじませる。

魔術師が、血統と家系の存続年数を重要視する一因である。

「とんでもないペテンだわ。あいつ!!」

「リン、建物の奥にサーヴァントが一体います。進みますか?」

その洋館に施された魔術結界の痕跡を確認した凜は案の定、顔を顰める。自分の許可なく立ち入ってそ知らぬ顔で日常を満喫しているあの男にはそれなりの報復をと息巻いていた。

辺りを警戒していたセイバーは、明かりのない玄関の奥を睨みマスターに指示を仰いだ。

「っ、遅かったか……」

セイバーの言葉に凜の沸騰していた思考が冷却され一旦落ち着く。

おそらくこの洋館に施された魔術結界の跡を見るに、学園でランサーの襲撃を受けた魔術師は、同級生の衛宮に間違いない。そして彼はもう既に殺されている。

玄関を潜り、廊下の奥に吹き飛ばされた扉の残骸を見た凜は、そう判断しセイバーを連れ洋館の中を歩き回る。

一階か地下にあると思われる、この家の者が作成した魔術工房を探しているのだ。

魔術師は基本魔術を用いて戦う者ではなく、研究によつて根源を目指す生き物だ。故に、その敵は基本的に同じ根源を目指す魔術師であり、自身の研究成果を守るため魔術師の工房は自然と強固な籠城となる。研究の成果の副産物によつて生まれたセキユリテイは、当然魔術という名の神秘で積み上げられたものだろう。

神秘の塊であるサーヴァントに敵う筈もない。

無論、自身の工房に逃げ込むのは魔術師としてなら落ち度はない。繋がる道に仕掛けられた罠と自信の工房の研究成果である礼装を用いて敵を撃退するのは、常套手段。

魔術師の英霊である魔術師キヤスターも同じことでステータスを大きく上回る他のサーヴァントに対抗するのだから。

そう、あくまで英霊同士であるのなら。

人と英霊は、その体の作りからして大きく異なる。ましてや、神秘の薄まった現代の魔術師が過去の偉業を成し遂げた英雄に対し大きく劣っていることなど火を見るより明らかだ。勝ち目など無い。

最弱の暗殺者アサシンでならまだ希望はあったが、相手は高い対魔力スキルを有する三大騎士



クラスの槍兵<sup>ランサー</sup>。生存は絶望的だ。

「セイバー、どうだった？」

「いえ、ここから下はどうやら酒や干草を寝かせるための酒蔵か物置のようでした。争った形跡も見られません」

「そう。もう少しだけ奥に行ってみるか……」

せめて、死に顔だけでも確認しておこうと洋館の敷地内にいるランサーであろうサーヴァントを無視して、最初に怪しいと踏んだ地下へと続く階段を調べたがどうやら工房ではなかったようだ。

「それと、リン。先程から妙なのですが」

「どうしたの？」

「敵のサーヴァントが同じ場所から殆ど動いていません」

「なんですって!？」

もう用は済んで撤退したと思っていたランサーが、まだこの洋館の中にいるかもしれない。

セイバーの気配感知を頼りに更に館の奥へ向かった。畏や隠し扉の類がないか嚴重に警戒しながら進むと、ついに屋敷の裏側へと辿り着いてしまった。リビングと客間のある部屋を無視して、壁際の渡り廊下へと繋がる開いた扉を見た凜はセイバーに話しか

ける。

「ねえ、セイバー。本当にこの先にいるの？」

「間違いありません。安全を確認するため、私が先に進みますのでその後付いて来て下さい」

「……まさか、こんな開放的な温室ところに工房を作るとは……予想外だったわ」

蝶番が壊れている扉を撫でながら凜は、視界の先にあるガラスの扉が爆破されたような破壊痕を見て呆れる。

まさか、この洋館に着いて先ず最初に見た所が工房だったとは、一杯食わされたものだ。

渡り廊下に、特に畏もなくなんら問題なく進むと。暗い温室の中に二人分の人影が確認できた。

一人は、顔を抑え崩れるように座り込んでいて。もう一人は、その座り込んでいるほうの周りを落ち着きなくうろつき目に見えて狼狽しているのがわかった。狂っている様子は見られないことから、おそらくアサシンかライダー、大穴でアーチャーの何れか

のサーヴァントだろう。

「うっ、うっ、グズっ」

よく耳を澄ませ見ると嗚咽と鼻を吸る音が聞こえた。そしてその声は大分掠れていたが凜にはつい昼頃聞いた衛宮の声だとすぐに気付き、彼の命に別状が無いことに安堵する。

普段の彼女であれば、呪いの籠ったガンドの連射を浴びせた後、どういふことなのか聞かためになん縛るのだが……。

「さてと、衛宮くんの命に別状が無いのが分かったのはいいけれど」

「ええ、これは少々厄介というより」

再び、涙を流すマスター(仮)とそれ慰めるべきか右往左往しているサーヴァント(仮)の様子を見る。どういった経緯であのような場の空気になったのかは正直想像出来ない。断定モグリ of 魔術師として追っていた人物が、サーヴァントとはいえ人前で涙を見せるその状況に面を食らったのだ。

魔術師としては人情的な彼女は彼にもそれなりの事情があるのだろうと納得する。否、納得してしまふ。

「(気まずい(です)わ……)」

騎士道を重んじる従者と、人道的な主人は、背中を見せている敵の首級を獲る機会を得てしてもその奇怪な状況に動けずにいた。

それは、ほんの数分前のこと。

ランサーが戦いの仕切り直しを一方的に提案して撤退した後、魔法礼装による魔力供給を終え。温室のような衛宮久郎の見せ掛けの魔術工房は、満開の花々が咲き誇り。その工房の主と双眸を隠した長髪の英霊サイヴァントが互いに正式に名を交わしたすぐ後のことであつた。

「メデューサ……ってことは、その髪は」

真名を聞いた久郎は、胸に熱が籠る感覚に追われていた。心なしか声に震えが混じる。

「はい。一本一本が、私の名からメデュシアナと呼ばれる蛇で任意に動かすこともできません」

このように、とライダーが表情に変化が訪れたマスターからの質問に機械的に答える。彼女の髪の毛は、手で触れることなく空気の流れによって靡くのは異なる、まる

で別の独立した生物のようにうねりを上げ動き出した。

「つ……ぐ、……うう……」

その自在に動く髪を見た久郎は、一瞬だけあまりに予想外な事態に息を急に途切らせて驚愕に目を大きく開き、口を手で押さえると崩れるように膝を付いてなんら脈絡もなく行き成り泣き始めたのだ。口を塞いでいるため声は漏れないが鼻をぐずらせ喉から出る嗚咽は、止めることは出来なかつた。

「ど、どうしましたマスター……!? そういえば、先程着衣が不自然に裂かれていました。まさかランサーに襲われた時の傷が痛むのですか? ……」

対面していた姿勢を横にずらし、両手で口と目を押さえ込んで涙を流し続ける久郎を、ライダーはぎこちな口調と動きで困惑するもマスターの身体を第一に考え心配するその姿勢はサーヴァントの鑑であった。泣き通して返事の出来ないマスターの傍に寄って後ろから優しく背中を撫でるその動作はどこか不慣れでぎこちないがその慰める姿は神々しく英霊に恥じない立派なものだった。

それに対し、久郎は相変わらず声を出さぬよう自身を押さえつけるように泣き続けた。顎と両手に力を込め嗚咽さえ漏らさないように筋肉を強張らせると耳に音響の壊れた甲高い耳鳴りが襲ってきた。それを無視して感情を塞ぎ止めようと更に強く身体を縮み込ませた。時間にしてほんの数分であったが、彼の体感時間では十分以上泣き続

けたな感じがした。

衛宮久郎は、ニンゲン社会に馴染むことが非常に難しい程の神秘を備えて生を受けた。取り分け一族の中でもその血筋を汲む母親や妹を大きく上回るその才能は、ヒトの身に余る代物であった。

『メデューサ』の目にまつわる能力を受け継いでいたのだ。

メデューサ。

今、久郎が生きる。この世界の神話として語られる怪物になった女神の名のことではなく、異なる世界が生まれた太古の時代から生物の種の誕生と絶滅、生物社会の発展と衰退を見届け続け、記録していた意識体であったものが自身が何者であるかということに疑問を持ち、それを知るために実体化したバケモノの種族を指しての『メデューサ』。髪の本一本一本に目にまつわる能力を持った蛇の力でもって、自身が何ものであるかを知るために世界中を旅し、バケモノと蔑まれ諦めて一人で静かに暮らそう考えたときに、バケモノに一目惚れした少年兵と時を過ごす内に愛を知り、二人とも恋に落ちた。

バケモノは、子を成し。ヒトとバケモノが交わったその子どもにも親には大きく劣るものの人ならざる力を受け継いだ。

そしてその子どもが大きくなり、更にヒトと交わって生まれた子ども。それが久郎だ。

キリツク  
養父の教えによると、人外と交わって生まれた新たな家系、この世界では混血の末裔と呼ばれるらしいのだが。

日本では、元々『鬼種』の混血の一族が住み着いている噂が残されていたことと、彼の師がサキュバスの混血であったことから。切嗣は、特に珍しがっていないかった。

だが、神話の『メデューサ』の存在を知ったときは、自分達と同じ仲間がこの世界にもいるのかと本気で信じていた。

魔術の鍛錬をしているときにそれとなく聞いたのだが神代の伝説には、脚色や真実が曖昧なものが多く期待しないほうが良いと言われていた。

そう言われた時、どこか遣る瀬無い気持ちと孤独感が込み上げてきた。本当に遠くまで来てしまったのだな……と。

声を抑え、なんとか泣き通して胸が熱くなる衝動が落ち着くと感情も自然と収まってきた。

ライダーと顔向けせず横を向いたまま、顔から押さえ付けていた手を離す。涙などで濡れた手を見た久郎は赤い小さな稲妻を走らせ、行き成り両手に出現したやわらかいティッシュで涙を拭き、鼻をかみ、丸くして後ろに投げ捨て、もう一度赤い閃光が走るとゴミは四散し、最初から何もなかったかのように消えた。

深呼吸を繰り返して、目を開くと彼の双眸は瞳を赤く輝かせ腫れた本当の素顔を偽る。

——目を欺く。

「良かった。俺たちだけじゃ、……俺は一人じゃなかったのか」

そう呟いた久郎の声は先程の声は、半ば泣き崩れていた者の物ではなく。その内容を含めて二重の意味でライダーに疑問を持たせた。

「? ……マスター、貴方は一体何を言っているのですか?」

「すまない。今、言ったことは忘れてくれ」

後、泣いたことも。と振り返ったその顔は、本来目鼻を赤く腫れさせ、目元から頬に掛けて涙が流れた跡が見える筈なのだが久郎の顔は、紹介を名乗り合う前の状態であった。

「あの、!? マスター!」

無理をなさらなくとも。と続く筈だったその言葉は、工房の入り口から漏れたサーヴァントとマスターの魔力を感じたことにより、警告を放つ言葉に変わった。ライダーが、久郎と正体不明の侵入者との間に入ると同時に敵の魔術が放たれた。

久郎を標的として放たれた黒い呪いの魔弾がライダーの対魔力により無効化される。

ガンドの魔術。本来の意味は幽体離脱をして自由に「飛び」まわる魔術のことだが、北欧系統の魔術では、魔力の塊を指や杖に乗せ生物対象に「飛ばし」ぶつけて体調を崩す



呪いを指す。人に物や指を向けるのが失礼になるのがこの逸話によるものとされている。

特に、その魔弾が物理的な威力を持つものを『フィンの一撃』とも呼ばれる。

久郎に放たれたのは正にそれであった。

「やっぱり。貴方、魔術師だったのね」

そこには、赤いコートに長い髪をツインテールにした同級生、否。傍らに青いドレスと銀の鎧を纏った金髪の少女のサーヴァントを率いた魔術師が左手を構え、敷地内の木々と月を背景に不適に笑っていた。

学校で会うときの厭に丁寧な言葉遣いとは違う本音の込められたその物言いを更に続け、こう放った。

「どういうことか、きっちり聞かせて貰おうじゃないの。衛宮くん？」

その笑みは完璧であるか故に、貼り付けた偽者であると分かってしまった。

どういった理由は分からないが遠坂凜は、衛宮久郎が魔術師であったことを知らず、しかもそれについて随分とご立腹な様子だ。

思考を読まずとも、明らかに交渉の余地はない。

左手に刻まれた魔術刻印が、怪しく光り出す。

『ライダー、そこを動かくな』

念話で指示を出した久郎は、こちらに顔を向けるライダーを無視して両手をポケットに入れて彼女の前に立つ。

凜のサーヴァントを見た途端、貼り付けた偽りの表情に出ずともその内心は焦りの色が見えた。何故なら彼女は……。

「動かないで！ 何を隠しているのかは知らないけどゆつくりと手を出して、中のものを出しなさい」

言い終わると凜が自分のサーヴァント、セイバーの前に立つよう指示を出す。

久郎は、セイバーの能力を聖杯によつて与えられたマスターの透視能力を使い看破すると息を呑んだ。

この程度の暗闇は、視力の強化でもつてなんら問題無く彼女のステータスを見ることが出来るのだ。

ライダーもけして弱い方ではない。寧ろ数ある英霊の中でも上位に位置するであろう。だが、このサーヴァントは知名度だけでなく、その武勇を加味すればなんら不思議なことではない。

アルトリア・ペンドラゴン、アーサー王伝説の主人公にして第四次聖杯戦争では、アインツベルン陣営のサーヴァントとして召喚された最強の剣士セイバーその人であった。

内心、焦りの色が濃くなる。衛宮久郎は、別段戦いを好むような性質ではない。一方

で、敵対者や無関係な人間に関しては冷淡な反応をする。ちよつと実験好きなきらいもあるが基本的に何らかの目的がない場合、自発的に動くことは滅多に無い。基本的に逃げる、隠れる罫を張るを主体とした戦法しか知らないのだから当然だ。

切嗣を快く思っていないセイバーが自分に対してどう思っているのか知りたいが、真正面で動きを止める「目を合わせる」以外の魔眼は迂闊に見せるものではない。

というより、セイバーの魔力探知能力がどの程度なのが分からないのが一番痛い。そう判断した久郎は、両手に月明かりだけでも煌めく透明な卵ほどの大きさの結晶物を出す。

「……………」

「リン」

取り出されたものを見て、思考が停止し釘付けになった凜をセイバーが小突く。

「はっ!! ……床に置きなさい」

思考の深海から引き上げられて覚醒した凜は冷たく、だがその視線は確実に久郎の持つ結晶に目を奪われていた。

「ほら、いぐぞで」

両手にあつたその結晶が久郎の手を離れ月明かりに照らされ空中で回転する度に煩く反射した。

凜は、急に放り投げられた結晶が壊れることを危惧してライダーと久郎から視線をはずし。

セイバーは、結晶に何か仕掛けがあるのでと警戒して凜と同じくライダーと久郎から視線をはずしてしまった。

「な!?! バ」

「!?!」

——目を隠す。

久郎が、学園内でランサー戦をやり過ぎた魔眼を輝かせ真後ろにいるライダーごとその姿を二人の視界に入ろうともまた、サーヴァント同士の感知範囲内に居ようとも認識させなくする。

認識阻害。例えば視界に入ろうともその存在を限りなくゼロに近い状態にすること。即ち、凜とセイバーは確かに視界に捕らえていようともそれを認識できない透明人間として意識しまっているのだ。当然、触れられてしまったら元に戻ってしまうし。何より、隠す時に最初から見られていると、その効果を発揮できない。つまり、何らかの手段で隠したい物を見ている相手の視点を別のところへ逸らすなり、奪うなりしなければならぬ。

こういった条件と弱点がある。

「空間、移動？ 冗談じゃないわよ。明らかに封印指定、しかも魔法クラスだなんて」  
「マスター、これは一体？」

動揺を隠せない凜とライダーを見て久郎は不適に笑う。

傍目には、結晶を放っただけで凜の視点では相手が消えてしまい。ライダーの視点では、動いてもいないのに相手が勝手に驚いている状態なのだ。こちらからの視点ではわかられているような複雑な気持ちになるのも、この能力の欠点ともいえる。逃亡等には非常に便利だが。

「——っっていう隠蔽の魔眼を持っているんだ」

ライダーに大まかな説明をし、後は勝手に向こうが出て行くのを待つだけだった。

しかし、ここで予想外の事態が起きる。

「いえ、まだここに居る。警戒を解かずに構えて」

セイバーが、不可視の剣をおそらく見えていない筈なのだが、こちらに向けて再び構えてマスターである凜に警告を促した。

「!？」

魔眼の説明を受けたライダー諸共、驚愕によって感情が大きく揺れた。

「セイバー、どういうこと？」

「はつきりとは言えません。ですが、私の直感が敵はまだここに居ると告げています」

最早それは、直感ではなく超能力の域だろうと呆れる久郎。

仕方ないと、懐を探り二枚のカード型の礼装を出す。

『静』

『浮』。

There can not interfere  
対象を限定、

Do not affect the world and rules modified  
物質に干渉する事無く法則を改変」

詠唱が終わり、取り出された二枚のカードが飛び交い互いに重なると、霧散してライダ―と久郎の周囲に纏わり付いた。

「――、――!?……………」。

「……マスター、何かをするときは私に一声掛けて下さいますと嬉しいです」

身体が急に浮かび上がり、半ば無重力状態に驚いたライダーは叫び声を上げるも、それは空気を揺らす声に成らずただ空虚な静寂のままに留まり、よく耳を澄ますと衣擦れの音や心臓の鼓動も聞こえなくなっていた。ライダーは急な身体の変化に驚き、久郎の肩にしがみつく。両目の魔眼と魔性を封印するために宝具自己封印・暗黒神殿をバイザーとして使用しており、その代償として視覚を完全に封じている。そのため普段は、嗅覚、聴覚、味覚、魔力探査を用いて外界を認識しているのだ。その中の聴覚に伝わる

情報を一部遮断され動揺したのだ。

霊体のときに幾らでもなれているかと思っていた久郎は、念話に切り替えて苦情を申し立てるライダーに向けて片手を立てながら頭を下げ謝罪の意を表す。

ランサーに破壊されたガラス扉を指差し出口に向かうことを伝え、ゆつくりとセイバーと、凜の頭の上を横切り外に出て風の赴くままに流されていく。

ホンの一、二分で百メートルほど夜の陸風に流されて、人気の無い雑木林に着陸しカードの効果を解いてライダーと共に木々の間を歩く。時折、落ちていた枯れ枝を拾う。

「マスター、これからどうするおつもりですか？」

「事故とはいえ、サーヴァントを召喚した以上生き残るために参戦するしかないだろう。それに伴って今すべき事は一つ!! ……こんなものでいいか」

胡坐をかいて、手のひらを合わせる。前には拾い集めた枝が集められており、両手を翳し枝が形を変え一枚の正方形の用紙となった。久郎は、それを拾い上げそれに書かれた文字に不備が無いか確認する。

聖杯戦争に参戦する旨の書かれた宣誓書を練成したのだ。

その宣誓書を鶴の形に折って魔力を込め始める。

「*mere crane flap in the sky*  
形骸よ、生命を宿せ」

監督役に即席の使い魔メッセンジャーを送り、冬木教会へと飛ばしたのだった。そして、

「敵が近くにいます。警戒してください」

「ああ」

ライダーが、釘剣を構えながら警告を発した。

木々の間から、女の子の笑い声が複数の箇所から反響するようにあちこち聞こえた。

よく見ると、木々の間に小鳥の形を模した糸……だろうか？ ひも状のもので構成さ

れた使い魔が複数止まっていた。

錬金術の大元であるアインツベルンの魔術特性は力の流動と転移。

魔術師にしてみればお遊びのような、声の伝導と転移を応用した魔術の一種なのだろう。

『やつぱり、お兄ちゃんだ！ お空の散歩はもうお終いな？ 今度はイリヤも連れて行ってね。勿論』

笑い声が途絶え小鳥達が一斉に同じ少女の声を送り続けるそのさまは一つの怪異や怪談の話にでも出てきそうな異様な空気を作り上げていた。



不意に、林の奥から大きな岩のような塊が飛び上がり此方へ向かって来た。

「ここで死ななかつたらの話だけどね!!」

楽しげに命のやり取りを宣戦する白い少女と野生の獣が宿す獰猛と闘争のみを備えた二メートルを大きく越える巨体が、ライダーと久郎の目の前に現れた。

それは、鉛色の身体をした巨人が肩に乗せた少女を目的の場所まで跳んできた、ただの移動……であつたのだ。

## 8 義理の共乱

「……………」

緊張を張りつめた赤と青銀の主従は、見えざる敵の奇襲に備え警戒を怠らずに月明かりの照らす薄暗い衛宮の工房である温室で、先程まで尋問の対象としていた黒と紫の主従が消えた虚空を睨む。

「……………?!」

セイバーが、いきなり稀薄となった相手の気配を警戒し振り向き様に不可視の剣を後ろに回し、相手の気配を探るもセイバーの直感にすら感じられなくなっていた。

だが、セイバーは相手にこちらを襲う意志が無いことを経験上そう予想立てていた。黒髪の少年がかつてのマスターと同じく表情にこちら側に対する興味が感じられなかったのだ。凜に攻撃されて隠していた物を出すように指示した後も反撃することなく従順に動き、こちらに被害を出すことなく逃走を選んだ。このことからセイバーは、相手にとってこちらは眼中になく。相手が積極的に手を出すことはない、不可視の風、に隠された宝剣を仕舞い警戒を解いた。

「どうやら敵は、この場から離脱した模様です」

「はああー。ランサーから逃げ遂せたと聞いた時から嫌な予感はしていたけど、あんな大物が冬木に住んでいたなんて冗談じゃないわよ」

「リン？」

手に持った宝石を懐にしまうと凜は、管理者に許可なく勝手に住み着いていた久郎に不満を垂らしながらセイバーに背を向けると。先程、久郎に投げ捨てられた結晶体が落ちていられると思われる場所へと歩き、目を皿にして薄暗く花びらが散っている工房の床を見つめる。

その様子を見たセイバーが、マスターの奇行を見て疑問に思い声を掛ける。

セイバーは知る由もないが、凜にとつて宝石が一つ有るのと無いのでは大きく戦術に差が生まれるものなのだ。当然、他の魔術師が魔術を刻んだ宝石を使う場合、拒絶反応や何らかの防衛システムトランプに引っ掛かるリスクがある。なので凜は、見つけた宝石をセイバーに拾わせ彼女の保有する対魔力スキルでもって宝石の魔術をキャンセルさせて、あわよくば自分の手札として回収するつもりなのだ。

「おー。あつたあつた。セイバー、悪いんだけど貴方の手でこの宝石を拾って貰えないかしら」

花びらが二枚ほど付いていたが、月光を反射して煌めく卵ほどの立派な結晶が床の上を転がっているのを見つけると、凜は出口付近にいるセイバーに込められた呪刻解除と

罨の可能性を考慮して結晶を拾うように頼み込む。

「リン、私に敵の兵糧や武装を奪えと？」

「え？ ……あ、そっか。セイバーの感覚だとそんな風に映るわよね」

セイバーにしてみれば、凜の行動は戦いの後に殉職した戦士の鎧を剥ぎ取る者や、主の失った剣や槍を盗み拾う盗人のように見えたのだろう。嫌悪感をあらわにしたセイバーは、頑として出入り口から動かず、両手は自然と拳を作り握り込まれていた。

凜は、セイバーの行き成りな反抗的な態度に驚くも、騎士である彼女の視点から察すると結晶の後始末をメインとした爆発物や罨の解体作業の一貫のようなものであると説明し、宝石を自分のものにするのはあくまでその媒体であった結晶体が壊れなかった場合のみだと説明をする。

「そういう事でしたか、申し訳ありません。状況が状況とはいえ我がマスターを疑うとは大変失礼しました」

「いいのよ。私も言うタイミングが悪かった分、尚更ね。まあ、基本的に魔術師ってやつは基本的に足りない部分は他から持って来て補うのが常識みたいにされちゃっているから、そういう性分だと受け止めて貰えれば良いわ」

説明を受けたセイバーは、短絡的に思考を巡らせた自分を恥じ素直にマスターに対し謝罪する。

凜はそういった彼女の真つ直ぐな感性に感服しつつも、魔術師としての常識の知識を彼女に説明を交え、ちやつかり利用できれば自分の物にすると言い切った。

「それじゃあ、お願いね」

「はい。ん？ ……んん？」

セイバーが、結晶を拾おうと凜の前にしやがみ手を伸ばすが、拾い上げた結晶は籠手を嵌めたセイバーの手から摩擦という概念を無くしたように彼女の手から零れ落ちた。今度は落とさないように、両手で注意深く掬うように拾い上げたセイバーは訝しげに疑問の声を上げる。

「どうしたの、セイバー？」

セイバーの動揺にも似た様子を見ても凜は、理論上可能である対魔力に対し過信にも捉えられる期待に満ちた声を掛ける。

「リン、非常に言い難いのですが……この結晶は、その」

「へ？ ……ちよつ!? な、な、何よこれ!？」

セイバーは、結晶を拾い上げると気まぎく両手を前に出し、銀色の籠手の上に転がる徐々に沈むように液体と化す物体を凜に見せる。

月明かりに照らさせて美しく反射するその結晶は、薄暗いガラスの工房内であった為に、宝石を見慣れている凜の審美眼はそれが何で構成されていたのかを見破ることが出

来なかったのだ。

セイバーの魔力に依って編まれた金属の特性を兼ね備えた銀色の鎧（籠手）によりもう半分ほど透明な液体と化したその結晶体の構成元素は、水素と酸素<sup>H<sub>2</sub>O</sup>。

「だ、だ……だ、ただ」

つまり、何ら変哲もない純粹（水）という意味においては、貴重な素材であることには何ら変わらないのは事実であり、凜の五大元素を余す所なく扱える魔術属性<sup>アスレジ・ワン</sup>でなら再現することも造作ない。否、ほぼ同じ物なら余程のへっぽこの才能無しでない限り、どこの流派でも基本的な基礎魔術で幾らでも作り出すことが出来る程度の……。

「だ、騙されたああああああああ!!」

ただの綺麗な水であったのだった。

夜中の雑木林、凄まじい衝撃と魔力の轟風がライダーと久郎の目の前に土煙を上げながら吹き向ける。いつの間にもやら、木々の陰に隠れていた鳥型の使い魔達は、白い少女と鉛色の巨漢主従の傍らにあくまで鳥の形を模しただけなのか、本来なら空中に忙しく羽ばたくか滑空するしかいられないところをゆったりと漂うように集まっていた。

その使い魔の主であろう白い少女は、鉛色の肌に二メートルを超えるサーヴァントを従えていた。マスターのステータスを見る透視能力を使うまでもなく理性が感じられない野生の闘争に染め上げられた双眸から予想するに狂戦士の英<sup>バーサーカー</sup>靈<sup>サーヴァント</sup>であるとわかる。

寒空の中、岩のような肌を露出させ、獣の吐息を思わせる呼吸は荒く、白い息が陰しく歪められた口から漏れ出していた。

そしてあの子とは違った粉雪のような白い髪と無邪気な赤い瞳を持つ少女がバーサーカーの肩を軽く叩き降りる旨を囁き、無骨で岩の塊にも似た両手に抱きかかえられ地面に降ろされる。

「ありがとう、バーサーカー。……こうして会うのは二度目だけど、自己紹介が未だだったよね？」

自信の表れか、それとも隠すことに意味などないと思っっているのか巨体を持った自ら

のサーヴァントのクラス名を謝礼と共に明らかにする。

彼女はライダーと久郎の方を向き、貴族のように気品溢れる動作で防寒用の紫色のコートの裾を摘みお辞儀をした。そこに慢心はあれど、厭味を感じさせない精錬として相手に不快と思わない作法が込められていた。

「私はイリヤ。イリヤスフィール・フォン・アインツベルン……魔術師なら『アインツベルン』の姓がこの聖杯戦争でどういう意味を持つか分かるよね？」

「……!？」

イリヤスフィールと名乗った少女は顔を上げ片目を開き敵のマスターである久郎を試すような口調で薄く笑っていた。

すでに泣き腫れていた目は、外の冷たい空気に触れていたお陰で引いていたが、姿の欺きを解く機会を見過ごしていたため、彼女の……家名ではなくイリヤスフィールという名を聞き驚いていたことを偶然にも隠し通せた。

当然、アインツベルンの名が聖杯戦争において疎かにされるようなものではない。むしろこの戦争に関わる者は少なからず彼らの助力が必要となる。

アインツベルン。かつて第三魔法を完成させ失伝させてしまい、その復活に妄執する錬金術師の一族。その秘儀を再び取り戻すために聖杯というシステムを作り上げ、御三家の一角。聖杯戦争終盤に降臨させるための受け皿、聖杯の器を鑄造し管理する役割を



担っている一族。

しかし、久郎にとつてイリヤの存在の方が重大であり重要であつたせいか、その家名にさほど衝撃は受けなかつた。それよりも従えたバーサーカーのステータスを見てその能力の高さに愕然とする。

自己紹介を済ませたイリヤは表面上、無表情を貫く敵のマスターに不満を持つ。

「あれ？ お兄ちゃんも、そのサーヴァントも自己紹介してくれないの？」

「……………」

その、目に見えて落ち込む少女の様子に二人は妙な罪悪感を覚えた。魔術とは基本、素材や情報の調達、家系の血脈を存続させるためにある程度の財力が必要となるため古い魔術家系ほど家柄がよく、貴族や権力者といった上流階級の人間が生き残る傾向が強い。特にアインツベルンは表向きはドイツの貴族として広大な土地を持つ、千年にわたつて純血を守りぬいた家系なのだ。

そういった手合いに限つて、伝統や仕来たりにやたらと拘る。

故に、正々堂々と戦うことになんら疑問を持たず、自らの名乗りを上げるといつた予備動作まで付け加えたり、戦いを全て決闘方式に組み立てるきらいがあるのだ。

対して久郎は、そんな魔術師を狩る魔術師殺しの養父を師に持つ伝統も歴史もない、魔術使いであり、魔法使いでしかない。イリヤスフィールには悪いが、こちらの情報を



かう。

ライダーもまた、マスターが戦線離脱したのを確認し自身の武装である釘剣では齒が立たないことを悟り遁走を選んでマスターの後を地上から追う。

バーサーカーは、林の上を移動するマスターと木々の間を縫ってマスターを追い移動するサーヴァントを見比べ、障害物の少ないマスターの方に狙いを定めた。

自分の目的は、敵の殲滅である以上たやすく達成できる方を選んだのだろう。久郎が丁度跳躍の放物線頂点に達し一瞬重力と跳力が拮抗した後の半自由落下状態に狙いを定め、ほかのサーヴァントとは一線を越える筋力で以って一度の跳躍で久郎に追いつくと、そのまま縦に一刀両断しようと斧剣を振り上げる。そしてそのまま右腕に力を込める……がしかし、彼の持つ斧剣は、久郎を襲うことなく微動だに動かない。バーサーカーの視界の端に、地上から伸びた二本の鎖が斧剣に互いに食い込むように絡みつき力を込める度に金属音が聴覚を刺激する。

自分の頭上を飛び越えたバーサーカーを見たライダーが、颯爽に釘剣を投擲し、彼の斧剣を鎖で絡め取ったのだ。

『急いで回避して下さい!!』

彼女は念話内で、叫ぶように主に警告を促しながらスキル 怪力を発動しバーサーカーの規格外手前の筋力と拮抗する。しかし、自分の得物を振るうことが叶わないと

悟ったバーサーカーは、自ら手を離し久郎の直接捕まえ握り潰そうと武器を放し振り上げた右手を伸ばす。

久郎は、振り下ろされたバーサーカーの腕の風圧そのものを足場として空気の壁を蹴り、更に大きくもう一度跳躍し目的の場所に達した。

目標を逃がしたバーサーカーは、林の木を粉碎するように着地をして狂乱に満ちた相貌を上げて空中に進む久郎を目指し無手のまま、足の筋肉を血管が浮き上がるほど隆起させ大砲の如く跳び上がった。

「マスター。危ない、逃げてください!!」

斧剣を抑えて、久郎とバーサーカーから少し遅れていたライダーが、念話を使うことも忘れて肉声で張り上げた。

『大丈夫だ、ライダー。この程度の宝具を用いない攻撃なら……』  
enchant「身体付与。『闘』、  
Power力』  
Fight』

雑木林を抜けて、自然公園となっている未遠川の河原上空で重力に引かれて降下し始めながら久郎は、ライダーに念話を繋ぐと、更に二枚、バーサーカーのような接近戦を挑むサーヴァントに対して最適な礼装カードを発動させる。

落下中の久郎にバーサーカーが自らを砲弾として迫りくる。

久郎は、体中の力を抜いてバーサーカーの突進のタイミングを見据えてもう一度迫り

くる風圧を足場とする。今度は跳躍せずに、振るわれた拳圧によって拳に直接当たることなく舞い落ちる枯れ葉のようにバーサーカーの背後を取り、彼の背中の上に乗る形になる。

久郎が足元に魔力を集中させ一気に莫大な運動エネルギーに変換させ……。

「墜ちろ!!」

「■■■■■■■■■■!!」

上空、三十メートルから突き落とされたバーサーカーは、雄叫びを上げながら流れの緩やかな未遠川に叩き付けられ盛大な水飛沫を上げた。

水面には、大きな波紋とそれを見下ろす衛宮久郎の姿だけが残されていた。

「……くっ。なにをやっているの、バーサーカー!! こうなったらお兄ちゃんじゃなくて先にサーヴァントの方を相手しなさい!!」

その様子を見ていたのは、久郎と感覚共有をしていたライダーだけでなくバーサーカーのマスターであるイリヤスフィールも一緒だった。

少女の動揺を隠すような大きな声が水面に向かい、自らのサーヴァントに喝を入れる。

人外的な戦闘機と同じスピードで移動する三人に小柄な体格である魔術師の少女がどうやって追いついたのか?

その答えは、彼女を背に乗せている巨大な鳥型の使い魔。

先程の小鳥を模した複数の使い魔を元の糸状に戻して繋げて再び編み直したのか、巨大なロック鳥を連想させる巨大な鷲ワシの形をした使い魔アガシオンが彼女を背中に乗せて飛行し、漸く追いついたのだろう。

水面の上に立つ久郎を見つめるイリヤスフィールの顔色は、頗る良くなかった。アイツベルンの財力を駆使して召喚した最強のサーヴァントが、同じサーヴァントではなくただの魔術師と思っていた人物に、かすり傷一つ負わせることなく吹き飛ばされたのだ。

自分も、並の魔術師などからすれば大概『怪物』と称されるほどの才能と実力を兼ね備えていると思っていた。否、実際に彼女を屠ることのできる者は総じて人の身から外れたモノに限られる。

即ち、自分の実父が忘れ形見として残したこの子供は、自分ですら戦うことを避けるサーヴァントに拮抗するほどの実力を持つ怪物なのだ。

「……………！」

イリヤスフィールの声が届いたのか、川の水面に空気の泡が浮かび上がったと思った瞬間、鯨のブリーチングさながらの飛び上がりを見せた。

「逃がすか！ 『Water水』!!」

久郎の礼装発動を境に川の水だけでなく、バーサーカーの周りの水飛沫までもが、彼を包み込むように飲み込み再び川の中に引き摺り込まれ始める。

空中で、掴むもののないバーサーカーは、自身の剛腕で水の拘束を殴りつけるも無意味に四散し再び集まる。それどころか、殴りつけた腕が水の中に沈んだまま引き抜けずにいたのだ。

「■■■■■■■■■■!!」

「狂いなさい、バーサー」

「ライダー」

自在に形を変える水の拘束に暴れ足掻くバーサーカーを見て、イリヤスフィールはそのままでは旗色が悪いとアインツベルンによって施された自分の刻印に魔力を走らせて、抑え付けていたバーサーカーの狂化を解放しようとするも、久郎の呼び声に応えたライダーが移動用の使い魔に飛び乗り武装である釘剣を喉元に添えられて動きを止める。

「つ、『<sup>water</sup>水』殺せ」

一瞬、イリヤスフィールを見た久郎は躊躇するも、礼装に向かって魔力を送り込みながら指示を出してバーサーカーを川の中に引き摺り込み、深海五千メートルと同じ環境を限定的に再現して水圧を掛けてバーサーカーを文字通り押し潰した。

未遠川に赤い色が混ざり始め、緩やかな流れはその色を下流へと拡散させながら川の色を真っ赤に染め上げた。

「嘘、私のバーサーカーが……」

「ライダー、イリヤスフィールを拘束しろ」

錆臭く、赤くなつた足元の川の流れを見届け、岸边に上がると上空で呆けているイリヤスフィールが自分のサーヴァントを失つた事実を受け入れずにいるのか、ライダーに武器を向けられていること対し恐怖しているのか鳥の使い魔に乗つたまま動かずにいるた。

ライダーが、イリヤスフィールを抱えて使い魔から飛び降りて河原の草むらに立たせると、手際よく鎖で手を後ろに拘束した。久郎がライダーの前に立っているイリヤスフィールの目の前に胡坐をかいて座り込んだ。

「イリヤスフィール、このまま今回の聖杯戦争から手を引いてもらえるのなら、俺も危害を加える積りはない」

久郎は、欺いていた表情を戻し出来るだけ警戒させないように声を和らげ敵意を感じさせない話し方でイリヤスフィールにマスターとしての権利を破棄するように言う。

ライダーは、なんとも対応が甘いと思いつつもイリヤスフィールの後ろに佇み鎖を持つたまま沈黙し、久郎の方針に口を出さないうた。



しかし、イリヤスフィールはそんな心遣いに気付くことなく、アインツベルンの歴代マスター最強のプライドでもって虚勢を張りながら高らかに笑い出した。

「アハハハハッ！ おつかしいわ。この私が、たかがバーサーカーが三回分殺されたぐらいで聖杯戦争から降りるとでも思ったの？」

「三回、分？」

唐突な否定宣言に久郎は理解が追いつくことが出来ずに、日本語として矛盾している部分を途切れ途切れに繰り返した。

「ふーん。お兄ちゃんは、イリヤが嘘を付いていると思っただけでしょ？ でもね」

不可解に困惑する久郎の表情を満足そうに見上げると、イリヤスフィールは魔力を刻印ではなく契約の回線に流し込み不敵に笑った。

するとバーサーカーが沈んでいた赤い未遠川の川底から気泡が上がり、緩やかな水の流れに巨大な影が映りだしたのだ。

「……………!!」

冷たく暗い水の底から、まるで地獄の窯を割って飛び出したかのように彼は、文字通り殺された後、生き返っていた。水圧により潰れ内臓が飛び出していた上半身が、あらゆる方向に折り畳まれたような分厚い筋肉を貫いて髓の覗く白い骨が飛び出して拉げている腕が、時間の逆流と同等な再生をし復活をする。

「なん、だと……………ライダー!？」

再生しながら川岸に辿り着いたバーサーカーは、マスターを拘束するライダー目掛け河原の砂利を巻き上げながらに駆ける。ライダーも、マスターの危機感を孕んだ呼び声に反応し、釘剣を手離して久郎を抱えてイリヤスフィールの背後から疾走する。

「私のサーヴァントはギリシャ最大の英雄ヘラクレス。神に課せられた十二の試練を乗り越えた不死身の英<sup>サーヴァント</sup>霊なんだから! お兄ちゃんと一回戦っただけで三度も殺されちゃったのには驚いたけど今度は絶対に負けないんだから」

抑えられていた拘束を外したイリヤスフィールは、自分のサーヴァントの肩の上に乗って上からライダーに抱えられた久郎を見下ろし、自慢げにバーサーカーの真名とその不死性の能力にまつわる逸話の説明をする。

成る程と、久郎は尋常ならないバーサーカーのステータスの高さに納得がいった。

聖杯戦争に参戦するサーヴァントの能力は、サーヴァントの肉体的な実力と、儀式を行うその地域の知名度に左右される。半神半人の神の血脈と数々の逸話を多く残す彼の英霊であるならば、幸運以外のパラメーターが全てAランク以上の数値を叩き出すのは必然だったのだろう。

同じギリシャの英霊であるメデューサも、日本ではそれなりの知名度を誇るがこれほどの大物が出てくると見劣りもする。何より、先程の話からすると命が複数少なくなるとも

十一のストックを持つている正真正銘の怪物ということなる。

唯一の救いと言え、実際には死難いだけで、決して殺せない存在ではなく。そして、一定の威力を持った攻撃によって削り取れる命も増えるという点だろう。

「いいのか、そんな重要なことを敵のマスターに漏らすなんて。正気とは思えないんだが」

「ふふつ。お兄ちゃんがそれを言うの?」

予想以上の強敵に、久郎は冷や汗を掻きながらも隣にいるライダーとの契約のパスにより彼女の動じない感情のおかげで幾分か冷静さを取り戻した。

イリヤスフィールもまた、バーサーカーの命のストックである宝具十二ゴット・ハンドの試練のおかげで先程の水魔術による圧殺に対し絶対的な耐性が付与されたが、久郎に他の手札を出されないように会話を続けようとバーサーカーに無意識に寄り添う。彼に触れる手が震えていたのは彼女と従者だけの秘密だろう。

「バーサーカーのことを話したのは、本当はいつでも殺せたのに私を見逃してくれたお礼よ。お兄ちゃんの手ヴァント……ライダーだっけ? それには興味は無いけどお兄ちゃんの予想以上の強さには、同じ神秘を扱う魔術師として純粋に感心しちゃった」  
念話で、バーサーカーにアインツベルンの敷地に建つ城に戻ると伝え、最初に久郎とライダーに出会った時と同じように彼の肩の上に乗って上空の使い魔を回収する。

「どういふつもりですか?」

ライダーが、地面に落とされた釘剣を回収しながら自分達に背を向けようとしているイリヤスフィールに問う。

「今夜は、挨拶ついでに倒せるのならって思っていた程度だったから、もう帰るね。今度は戦わない昼間に会おうね……お兄ちゃん」

イリヤスフィールは、上辺の表情だけは余裕を保ちながらも後半に、久郎とはもう出来るだけ戦いたくない意識が勝ち、人目が多い昼間に会おうと言ってしまった。

お互いが警戒し合い、危険視している所為で強敵同士「どう対応すればいいのか」と両マスターが同じことを考えていたと誰が知り得ただろうか?

「……フウー」

少女と巨漢の主従が歩き去ったのを見届けると、久郎は崩れるように腰を下ろし溜息を吐いた。

「どうしましたか。マスター?」

首に下げた魔力タンクである魔法礼装（賢者の石）を握りしめ、汚れるのも気にせず、に河原の草の上に寝転び情けなく、口から漏らすように言葉を吐き出す。

「腰が抜けただけだ」

「え？ あ、はあ。そうですか……………手を貸しましょうか？」

予想斜め下の発言を理解するのに五秒すると彼女は、釘剣を仕舞い久郎に手を差し出してきた。

そこには、目を隠しているのにも拘らず妙に慈愛に満ちた視線を送るサーヴァントがいた。

「すまないが、頼む」

久郎は、寝転がったままライダーの手を取った。

衛宮久郎は、魔術師殺しの衛宮切嗣の養子であり弟子でもある。敵を探すことよりも、敵から隠れることを学び。敵を仕留めることよりも、敵対者から逃げることを先に学んだ。切嗣の戦いをサポートする部品パーツとしての部下ではなく生粋の弟子として、獲物を狩る狩人ではなく、久郎の才能を狙う敵から逃げ切り生き残るための技術を全て叩き込まれた。

即ち、衛宮久郎本来の戦い方は、誰にもその存在を知られることなく『逃げ』と、『隠遁』に徹し。ことを行う際は相手の目を欺き、戦場を自分の狩場に作り変えるか、自分にとって勝率八割五分となる場所に誘い込む、罠トラップをメインとしておまけで、狙撃ショットアンド離脱アウェイの戦法を取るのだ。

魔術協会本部の一つである時計塔ロンドンでの留学でも久郎は、本来の姿を誰にも晒すことなく偽造パスポート作成スキルを利用し、実在しない架空の執行者や傭兵フリーランスの少人数派閥を作り上げ、彼自身もその派閥の保護下にあるとしており、封印指定を免れているのだ。今までも、死徒や封印指定対象者の戦鬪経験も直接的な肉弾戦は、極力避けており攻撃用の礼装も古今東西の武器や武術を疑似的にでも会得しておこうと半ば遊び心で作った物だったのは、本人と魔法使いのあり方を指導した並行世界を行き来する万華鏡爺だけの秘密であつた。

隣町の冬木教会の窓辺に小さな影が舞い降りた。

その影は、折り紙の鶴で作られた衛宮久郎の使い魔であつた。予め何者かを受け入れるように開けられた窓から入り込むと真つ直ぐこの教会内に居る住人を探し飛び回り始めると、聖堂内に潜む脱色したような白い髪を持った、黒いスーツを着たサーヴァントに掴まれる。

最初は紙の翼をはためかせて抵抗するが、折鶴型の使い魔は次第に大人しくなり動か



パラメータ

筋力：A

耐久：C

敏捷：A

魔力：B (A++)

幸運：B

宝具：A+

クラス別能力

対魔力：B

騎乗：A+

保有スキル

魔眼：A+

単独行動：C

怪力：B

神性：E

宝具

他者封印・鮮血神殿

：B



自己封印・暗黒神殿  
騎英の手綱 : A +

: C |

マスター : ??

クラス : ランサー

属性 : 秩序・中庸

パラメータ

筋力 : B

耐久 : C

敏捷 : A

魔力 : B

幸運 : D

宝具 : B

クラス別能力

対魔力 : C

保有スキル

戦闘続行：A

仕切り直し：C

ルーン：B

矢除けの加護：B

神性：B

宝具

刺し穿つ死棘の槍：B

突き穿つ死翔の槍：B+

マスター：遠坂凜

クラス：セイバー

属性：秩序・善

パラメータ

筋力：A

耐久：B

敏捷：B

魔力：A

幸運：A+

宝具：A++

クラス別能力

対魔力：A

騎乗：B

保有スキル

直感：A

魔力放出：A

カリスマ：B

宝具

インビジブル・エア  
風王結界：C

エックスマカカリ  
約束された勝利の剣：A++

マスター：イリヤスフィール・フォン・アインツベルン

クラス：バーサーカー

属性：混沌・狂

パラメータ

筋力：A+

耐久：A

敏捷：A

魔力：A

幸運：B

宝具：A

クラス別能力

狂化：B

保有スキル

戦闘続行：A

心眼（偽）：B

勇猛：A+

神性：A

十二の試練：  
ゴツド・ハン  
ド  
宝具  
：B

## 9 虚映の使い

バーサーカーとそのマスターであるイリヤスフィールを退けた久郎は、戦闘によつて汚れた服と疲弊した肉体と魔術回路を休ませる為に、未遠川の岸辺でもう一度横になりながらライダーに辺りを警戒して貰つて、自分は目を赤く光らせ、洋館である現衛宮邸を透視して帰宅しても安全かどうかの確認をする。

——目を凝らす。

久郎が保有する十を超える蛇の目の力の一つであり、端的に言えば千里眼と称するの  
が一番近い。自身の望んだ場所や人を見つけてることが出来、たまに幽霊や姿を隠した妖  
物を見抜く浄眼の役割も果たす。

能力の特性上、他者に干渉する程の力は無いが、死角からの攻撃や、敵の行動を知る  
ときなどの透視や遠見による性能の情報収集は頗る高い。

もつとも、今夜（……）というよりもう日付が変わっているため昨晚が正しいが、の場  
合はその高性能過ぎる目の所為で、学園でランサーを偶然見つけてしまい、目を付けら  
れることになったのだが、久郎はそのことについては後悔しても無駄なことなので考え

ないことにした。

「……遠坂は、温室地下ガーデンの工房の存在に気付いてはいなかったようだな。特に罫を張った形跡もないし、これなら使える……家に帰ろうか、ライダー」

既に誰も居なくなつたガラスの工房の床には、無理矢理抉じ開けられたような跡はなく、透視を終えた久郎は赤から元の黒い瞳の色に戻し、枯れ草と水飛沫で湿氣つた地面の上に仰向けに寝転んでいた上半身を起こし自らのサーヴァントを呼ぶ。

「一度撤退した住居に、また戻るのですか？」

久郎の隣に立っているライダーが、久郎の行動に疑問を抱き冬木市内に潜伏するのから隠密に徹するべきだと助言を出す。彼女の疑問は尤もなものである。敵のマスターに居場所を知られている以上、その場を再利用することは再び襲われることを意味する。

とはいえ、ライダー自身の本来の戦闘スタイルは生前の「形なき島」において二人の姉達を目当てに上陸し忍び込む若者達を返り討ちにするというもの……陣地作成スキルを持つ魔術師キャスターと同様『待ち伏せ』型であるのだ。

しかし、自身のステータスの低さを魔術で補うキャスターと違い、ライダーには英霊の戦闘行動を束縛するほどの魔術を収めてはいない。神代を生きた者として彼女の宝具の派生である結界系統の魔術を中心に基礎の魔術等を嗜み程度には知識はあるが、今

回の戦争には情報収集くらいにしか役立たないだろう。

それはライダー自身の戦い方が、自分の存在を敵に故意に知らしめ、女神から怪物へと姿を変えた自分を狙いに、愚かにも釣り合うことのない腕試しをしに来た唯の人間との戦い……否、強者が弱者を喰らう『蹂躪』であることで成立する戦法であることを示している。

久郎と共に、ランサー、バーサーカーと対峙し、互いの得物を交えた結果。敵のサーヴァントは自分と同等かそれ以上の英霊であることは間違いない。マスターとの感覚共有でステータスのみ判明しているセイバーも同様であり、他陣営が互いに争い疲弊しきつたところを宝具で追撃するといった。漁夫の利を狙うのなら自分にも勝機はある。しかし、現状では敵に居場所を知られていることはデメリットにしかならない。万が一、結託されて二体以上で攻められた場合ライダー一人ではマスターを守りながら捌き切れるかどうか分からない。もつとも、あの規格外なバーサーカーとの白兵戦を可能とする久郎を圧倒する英霊など、数えられる程であろうが。

当然、ライダーに自信が無いわけではない。相性の良いマスターから送られる魔力供給によって生前の全盛期とほぼ変わりのない程力が漲っているこの状況で臆することは何もない。が、しかしそれを加えても他の英霊が規格外過ぎることを考慮すると悠長に居を構えて敵に居場所を知られているのはやはり芳しくない。



慢心は身を滅ぼすことを自らの生涯を以ってして学んだ彼女の経験そのものを込められた警告の意味合いも含まれていたのだろう。それ故の助言なのだ。

だが、久郎は――。

「ああ。よりにもよって遠坂……敵のマスターが俺を敵視している以上、居場所を知られているのは痛い、あそこは俺が持つている住居の中で一番強い霊脈を持つているから、工房を構えるのならあの洋館が一番なんだよな」

ライダーの提案に対して、絶対の自信を持って答える。

ライダーを召喚する前にランサーによって結界が破壊された前例があるがアレは、久郎自身の魔力と霊脈から吸い上げた供給魔力だけで結界を発動させていたことが原因であった。

そもそもカード型の魔法礼装は起動させること自体、本来ならば膨大な魔力を必要とされる『魔法』クラスの代物である。そのため、久郎は日常的にカードの魔力供給を行い、礼装そのものに魔力を蓄えさせて命令を詠唱し備蓄した分だけの魔力を消費させる。

それだけでも、並の魔術師には生涯を掛けても到達できない奇跡を起こせるのだが、魔力不足によって効果範囲の規模が狭まっているのが現状である。

本来、その魔力不足を補うのが、人とそれに近い精神の形を持つ者達の魂を圧縮し物質界に繋ぎ止めた高エネルギー体……『賢者の石』。

衛宮久郎の「魔法」は、時計塔イギリスでの留学時に第二魔法の担い手である死徒二十七祖、第四位にしてかの宝石翁、キシユア・ゼルレツチ・シユバインオーグとの指導お茶会によつて提案された、自身の魔法を応用し組み立てた礼装による魔力供給を使用したスタイルを取っている。

無限に広がる平行世界へと繋ぐ穴を開け、そこから魔力を集めるゼル爺の『宝石剣』と、魂という魔力の根源そのものを肉体の枷から外し存在を確定し物理的干渉を行うことを可能とする久郎の『賢者の石』。魔力供給においてこの二つは、永久機関的性質を持つ。

しかし、膨大な魔力を有するそれは『素材』の件もあつて同時に異形の者達を引き寄せせる。

それ故に、各三つの魔術協会と聖堂教会から追われたこともあり、久郎は賢者の石の使用を控えて切り札としていたのだ。

即ち、今の彼の状態は、無限に銃器の弾と誘導ミサイル飛翔体燃料を得たのと等しいことなのだ。

「……マスターの命令であるのなら私はそれに従うのみです」  
「安心しろ、ライダー。慢心なんかする積りはないさ、自分の実力は誰よりも理解している」

納得はしていないが、先ほどの自分でも相手取るのに躊躇してしまっただけのバーサーカー相手に互角以上に死闘を尽くした久郎の真つ直ぐな言葉に、ライダーは再び警告をすることなく忠実にマスターの後ろに付き従い、自らの主の背中を見守る事とした。

「さてと。結構、家から離れちゃったな」

「待つてください。マスター」

遠坂が洋館に必要以上の干渉を施していないことを確認し、既に日付けを超えたであろう夜空を見上げた久郎は、洋館の方角に頭を向けると懐から鳥の絵柄の描かれた礼装を出そうとするが、釘剣を手に持ったライダーに遮られる。

「今夜は、度重なる戦闘に疲労も相当溜まっている筈。これ以上の魔術の行使は貴方の負担となるでしょう」

ですから、ライダーは釘剣の切っ先を自らの首に添えた。

「ライダー?」

その凶器を以ってして自傷を行おうとしている彼女の様子に久郎は理解が追いつかずに疑問の声を上げる。

「っ、……く」

「……!」

息の詰まったようなライダーの呻きと釘剣が彼女の肌と肉を貫いた鈍い音が同時に久郎の耳に届いた。目を開いて驚くマスターの表情にライダーは気付くことなく彼女は、自らの首に突き刺した釘剣を引き抜き動脈から深夜の寒冷と暗闇の中であろうとも判る赤く生暖かい液体を彼岸花を思わせるほどの勢いで噴き出したのだ。

飛び散った血飛沫が久郎の頬に数滴掛かる。

「おい!? 何を」

やっっているんだよ。馬鹿! と自分のサーヴァントの行き成りの奇行に、久郎は怒鳴り散らして首に掛けた賢者の石を掴みライダーの傷口の治癒を行おうとする。しかし、それは彼女から流れ出た血液の大半が久郎の水waterが液体を操るときのように空中に塊のまま蠢き、彼女の前方に集まり何かの召喚陣を形作り始めたのだ。

陣が完成し眩しい程の余剰魔力によって漏れる光から力強い蹄の音と猛禽類よりも遙かに大きな翼の羽ばたきが飛び出し久郎の目前を通り過ぎ空へと翔ける。

通り過ぎた閃光を追って空を見上げたその先には――。

「……あれは、まさか!？」

「あの仔は生前、私がかの地に追いやられ、その後も我が身が化生に堕ちたその時まで共に苦楽を過ごして来た相棒です」

荒い鼻息を鳴らし、物理的に不可能な飛行によるそれは周りの空気が神秘の奇跡により矛盾した気流を生み出していた。どこまでも白く尊く純粹なこの世の物ならざる幻想による想像上の気高い獣。

神秘の薄まった現代では、その存在の大半が世界の裏側に存在する魔界に移住し、人の目には姿を映さなくなった神話上のモノ。

天高く翔ける天馬――その名をペガサス。

本来、どれほど成長しても魔獣クラスに属する幻想種であるが、久郎の視界に納められている個体はライダーと共に神代を生きた永らえ、長く語り継がれ続けられた神秘を備えており。その大きさもさることながら、その身に宿る魔力は既に幻獣の域に達している。おそらく守りに関しては最強の幻想種と名高い竜種にも届くであろうかと思われる程の神秘を有しているのを肌で感じる。

「……………どうして迂闊に宝具を出したんだ?」

その、神々しさと自身の持つ賢者の石と同等の魔力を放つ幻獣に久郎は見とれながら

も、すぐに頭を冷やしライダーを攻めるように睨んだ。

宝具の開帳は、その規模と種類にもよるがマスターの魔力を少なからず浪費する上に、真名を明かす危険性を孕む。この場を敵の陣営に見られている可能性を考慮すると、彼女の行動は決して褒められたモノではない。しかし……。

「いいえ。この子は私の宝具ではなく、武装の一部でしかありません」

旋回し、地に降りたペガサスはライダーの傍に甘える子猫のように顔を擦り付ける。ペガサスを撫でるライダーは誇らしげに語る。

曰く、彼女の宝具は自身を背に乗せ駆ける獣の力を最大限に引き出す黄金の手綱であるとのこと。

更にライダーもやってみたことはないが、その気になれば騎乗が可能な獣であればどのような動物であろうと使用は理論上可能であるという。

ペガサスの召喚に使われる魔力も、戦闘であるならいざ知らず。ただ飛び回るだけなら消費される量も微々たるものらしい。事実、久郎も令呪から繋がる契約のラインから吸われる魔力も大した量ではなかったのは久郎自身が一番良くわかつている。

「……取り敢えず、そのペガサスが宝具じゃないのは分かった。だけど」

ライダーの説明を聞き、納得した様子を見せた久郎は自分の頬に掛かって召喚の陣を描くのに使われなくなったライダーの血を拭いた時についた血に染まった手の甲を見る。

「召喚の度に毎回、それをするのか？」

怒気を含んだその声に対し彼の表情は、何かを堪えて、今にも泣きだしそうな幼子を思わせるほど崩れそうなほど悲しげに歪みかけていた。

「いいえ。この度は、マスターの酷使した魔術回路の起動を避けるために私自身が保有する魔力を使い召喚の陣を刻むのに一定量の魔力を含む液体が好ましいので……この方法を取りました。普段のマスターから供給される魔力の量でなら自傷を行う事無くあの仔を召喚できます。……あの、マスター？」

『それ』とは、陣を形作るのに必要となる血液を流出させる自傷行為のことを指しているのだろうとライダーは肯定の意を示して言葉を紡げば紡ぐほど顔を深く俯かせる久郎の様子に罪悪感を覚えた。ペガサスから離れて恐る恐る俯いたマスターの方に近づく。「……分かったよ、ライダー。俺なんかを気遣ってくれて、ありがとう」

「恐縮です」

「でも、今度からは何をするのか俺に一言伝えてから、納得のいく説明を加えてくれ。正直心臓に悪い」

「申し訳ありません。マスター」

互いに、相手を思いやるが故に相手を傷付け合っていた。そう表現するのが適切であろう。よりにもよって衛宮久郎は、自分のサーヴァントが傷付くことを無意識に恐れて

いたのだ。

久郎は、聖杯戦争に参加するマスターとして矛盾している自らの思考に驚いていた。命を救われたとはいえ、たった数時間の関わりであったのにこころも感情移入するとは、自分がいかに魔術師として向いていないことを自覚させた。

しかし、十年ぶりに世界の在り方故にその成り立ちが異なれど同類との邂逅に打ち震えていたのだ。例え過去の存在であろうと矢張りライダーがあつた『メデューサ』と呼ばれる存在であつたことが久郎の同族意識を刺激している。

いずれ消え失せるサーヴァントを身内として見る。それは、万能の釜である聖杯を求めた歴代のマスター達から見れば失笑される感傷として捉えられることだろう。

それでも構わなかつた。家族を三度失つた久郎にとってライダーの存在は孤独に対する特效薬であり。また、劇薬であつた。

「よしつ。じゃあ、ライダー。俺は魔術を嗜む者として神代のペガサスの召喚陣に興味があるからもう一度見せてくれ。それで御相子だ。……丁度いい場所があるし、そこに描いてくれ」

ライダーに今まで見たことのない太古の召喚陣に興味が移つたように明るく振る舞う久郎であつたがその心情は非常に危ういものであつた。

家族が、仲間が目の前で傷付いてしまった。その原因が、己が敵のサーヴァントとの



激戦を繰り返したことによる魔術回路の酷使しそれを氣遣つたライダーの善意。その優しさに久郎は嘗て自身を擁護し散つて逝つた保護者達の姿を重ねて、知らず知らずの内ライダーに対する警戒を緩め寧ろ、親密に感じるようになり信頼を寄せていた。

この甘い性格は、今に始まつたことではない。魔術の師であつた切嗣養父は、久郎を自分の弟子として鍛えたがそれは、後継としてではなく。あくまで神秘に携わる裏の世界に飲み込まれないよう自衛の手段として魔術を指南したのだ。

根源に渴望し、人の身を捨てることを是とする魔術師ヒトデナシではなく、魔術を目的の手段として扱う魔術使いミンゲンゲイとして久郎を育てあげた。これにより、衛宮久郎は魔術を扱う身でありながら人の情を理解する歪な成長を遂げた。

「——マスター。書き終わりました」

「ああ……」

ライダーが釘剣で陣を描くの左程時間は掛からなかつた。時間にして五分前後といたところだろう。ペガサスの毛並や翼の羽毛を堪能する間もなく、久郎は、ライダーの足元に刻まれた幾何学模様を暗記するために心地よく柔らかい天馬の体から名残惜しそくに離れた。

——目に焼き付ける。

赤く染まった久郎の双眸に映った魔眼の視界に召喚陣の全容を映し終わること僅か二秒。

自信の体験した知識、内容、心情、状況、情報、環境、感情、情勢、全てを記憶に焼き付けて『記録』する目に焼き付ける能力。

それは、その能力の所有者を疑似的な瞬間完全記憶能力者にする記録の魔眼。

嘗て、久郎自身がもつとも愛し、そしてもつとも恐れた能力の一つ。

しかし、この魔眼のお蔭で衛宮久郎は、切嗣の魔術指導の基礎を通常年単位で習得するところを僅か数か月で学び尽くし、切嗣の人生そのものと言っても過言ではない暗殺や、銃の扱い、偽造パスポートの作り方や裏の人間同士の繋がりについても実質一年以内にすべてマスターしてしまっただ。

当然これらの習得には他にも、対象の思考や記憶を読み取る目を盗む能力や、子供の体には負担の掛かる体術には体を不死身に作り変える目を醒ます能力といった他の能力を組み合わせることで出来た裏技のようなものであった。

目に焼き付けた陣の模様がしつかり記録されたことを確認すると久郎は、手を合わせて地面に翳しライダーの釘剣によって刻まれた陣の溝を錬金術の基礎である変化の魔術で均し元の状態に戻した。

「もうよろしいのですか?」

「ああ、もう覚えたから大丈夫だ。じゃあ早速、送らせて貰おうかな。この冬木の空へ寄り道しながら、俺の家まで」

余りの素早い行動に、ライダーは疑問を浮かべるも、落ち着き払った久郎の様子を見て見栄ではなく本当に覚えたのだと察し、ライダーは先にペガサスに騎乗して久郎を前座に着かせて振り落とされないようにようしつかり抱きしめながら衛宮の洋館まで空を翔けたのだった。

「——驚いたよ。まさかあれ程の幻想種をこの、目で……見られる。とは……思わな、かつたから……」

ライダーの天馬ペガサスに乗り、空の帰路を満喫した久郎は衛宮の洋館に戻ると、先ず破壊された扉を錬金術と変化の魔術の応用で修復し、温室の工房だけでなく洋館とその敷地全体に『The Shield』『The Maze』『The Lock』『The Loop』『The Illusion』『The Erase』の漢字と英語の綴りに合わせて描かれた絵柄のカード型礼装を放ち、衛宮の洋館とその敷地を招かれざる客に対して拒まずに受け入れて決して帰さない迷宮工房……否。異常冥界と化した。

湯浴みをし、体の疲れを癒した久郎は、日課となっていた朝食の仕込みをしないまま寝室に飛び込みベッドにもぐりこむとライダーを呼びペガサスに乗せて貰ったことのお礼を言い敵のサーヴァントが近づいてこない以上霊体化しているように頼み、直ぐに眠りについたのだった。

「……今の私はマスターに守られる。サーヴァントのような有様ですな」

安らかに寝息を立てる久郎の傍らに、ライダーが霊体から実体を持つて現界し、自身の現状を見て半ば愚痴のようにその言葉を零した。

とはいえ、ライダーは衛宮久郎に不満があるわけではない。パスから流れる魔力の質も量も相性がよく一級品であり、魔術師としての戦闘の腕も相当なものであり。むしろ、上々以上に極上過ぎるといふ我が儘な願いであるのは彼女自身が一番理解していた。

詠唱も無く。ただ母親を呼ぶ、その声に応え召喚に応じたライダー。自身のマスターを初めて見たそのときから、親近感を覚えていた。触媒が見当たらなかったあの状況から察するにこの少年そのものが触媒となつて自分を呼んだことは、自ずと理解できた。

決定的であつたのは、蛇の言葉を喋ることのできるその特異な能力とセイバーとそのマスターから逃れる際に使用した魔眼、そして並の魔術師では一生涯掛けても関わらな

いであろうと思われる高度な礼装の数々であった。

神秘溢れる神代の時代ですら、ライダーの身に宿った異能は周りの社会から疎まれ、恐れられて小さな孤島に追放されて力に振り回され、それを抑えきれずに化け物と化した自分の一生の最後は無残なものであった。

そんな、一生をこの少年も送ることになるのであろうか？

この屋敷には、マスター以外の方が生活している形跡は見られない。

聖杯戦争が終わり自分が座に帰った後、彼は、この大きな屋敷で最後まで人としての幸せを知ることが出来るのか？

それとも、自身と同じくその逸脱した能力故に社会から抹殺されて、心を壊され怪物に転じ愛するものを手にかけて

る。そんな少年の未来をライダーは幻視した。

「そんなことは、させません」

余計なお節介かも知れない。もしかしたら、彼は幸せを既に掴んでいて自分はそれを知りたいだけなのかもしれない。

それで構わない、どうせ聖杯に願う願望など持ち合わせていない身。最後まで、このマスターに付き従えられるのなら………。

「……………えへへ、……さん」

良い夢を見ているのだろう。無防備に目を閉じながらも口元を釣り上げて笑みを零しながら寝言を言う。子供特有の幼さを残すその寝顔にライダーは愛着以上の感情で久郎の顎を押し上げ、自然に出てきた唾を飲み込む。

それは、血液を糧とする吸血鬼である死徒とは異なるものの嗜好品として吸血を営む吸血種としての衝動。

半ば肌蹴た寝間着から覗く首筋に見惚れ、普段は口内に隠れる犬歯がその欲する行為に適した長さまで伸びる。

「……………、一口だけ、一口だけですよマスター。……失礼し——」

「う、ん……眠い」

夜が明け、天気の良い青空が広がり太陽の光が部屋の窓から差し込み始める。

壁に掛かっている時計を見ると時刻は、七時半を過ぎていた。目覚ましを使う必要のない習慣を送っているが今日は『日曜日』、焦ることなど何もない。夢見が悪く魔されたのか寝汗がシーツに染み込み掛布団の中は暑苦しく群れていた。手を合わせ水分と布

団に付いた雑菌を分解してベッドから起き上がる。

『マスター、お目覚めになりましたか』

「おはよう。ライダー」

『一日中、寝ていたので心配しました』

「そうかー。一日中……寝て？」

ライダーの言葉に寝ぼけ眼に扉に手を付きながら応えていた久郎が開けようとする姿勢のまま固まる。油を差し損ねたブリキ人形のように振り返る。自分の机を見て、いつも置いてある魔眼殺しの眼鏡が無いことを思い出した。ランサーに襲われたガラスガードンの工房で失くしたままであったのだ。

「……………<sup>trace</sup>投影、<sup>o.n</sup>開始。それってつまり。俺は昨日一日中眠って過ごしていたってことなのか？」

代用で自らの投影魔術で間に合わせの魔眼殺しを掛けると久郎は、あくまで冷静に今の状況を確認する。

階段を下り、一階の居間にあるテレビに移される日時を確認し今が月曜日の七時四十六分であることを知って霊体化しているライダーに話しかける。

『そ、そう、なりますね』

「そっか、今日学校か。——寝過ぎたせいか眠気が収まならないな。仕方ない」

どこか歯切れの悪いライダーであったが久郎は気にすることなく寝間着のまま顔を洗わずに台所に入った。

冷蔵庫にあった自作の果汁ジュースを飲み込むと久郎は、再び自室へと戻り制服に着替えるとそのまま筆筒タンの横壁に取り付けられている等身大の鏡に右手を当てる。

「術式craft、起動on」

魔術回路を起動させ、鏡の中に魔力を送り込むと鏡に映った久郎クロウの像が独りで動き出し、そして前に突き出した『左手』を鏡から指が生え出すように久郎の『右手』を握った。久郎はその様子に驚くことなく指を絡ませると右腕を引き、鏡のクロウを取り出し……。

衛宮久郎（クロウ）が二人になった。

「じゃあ、いつものように頼むな。……後それから——」

手慣れた手つきでクロウを取り出した久郎は、多くを語らずに命令し目を赤くして互いの額を合わせる。

——目を掛ける。

自分の気持ちや体験した出来事を伝える魔眼で、久郎は使い魔やカード型礼装に命令を送るのによく使っているのだ。



「……はい、わかりました」

クロウは、受け取った内容を吟味し久郎の机の脇に置かれてある鞆を掴むと再び鏡の中に入り込み、「行ってきます」と声を掛け鏡を揺らがせ、消えて行つた。

『……………』

目の前の光景を見たライダーは霊体化したまま絶句し、もし彼女を見る者がいたらバィザーで目元を全て覆い隠していてもその顔が驚愕に染まっていると分かるほど大きな反応を見れただろう。

「ライダー、もう一眠りするから十二時になったら起こしてくれ」

パスを通じてライダーの感情が伝わってくるが久郎は制服を脱ぎ、もう一度寝間着を身に着け、頭まで布団を被り眠りについた。

朝の登校時間、今日の穂群原学園は甲乙付けがたい緊張感に苛さいなまれていた。

校門に赤いコートを着た遠坂凜は、自分のサーヴァントであるセイバーと共に一昨日

の一件で同級生衛宮久郎に詳しく話を聞こうと、いつもより一時間早く学校に付き登校してくる生徒を一人一人じっくりと目的の人物を見落とさないよう、見張っていたのだ。

しかし、相変わらず凜はきつい視線を光らせ校門を通る学園生を睨み付ける。

その視線に、登校してきた生徒たちは彼女の鋭い視線に萎縮してしまい、雑談に講じていた集団や朝の部活動の生徒など個人団体問わず全員が目を合わせないよう口を噤み早歩きで各々の昇降口を目指した。

そんな、彼らの様子を気にかけることなく遠坂凜は目的の人物がいつまで経っても現れないことに更に苛立ちを募らせる。

「……………遅い」

時刻は八時十分、予鈴が鳴り響きいつまで経っても現れない久郎を恨めし気に愚痴を零した。自分の後ろに立つセイバーに視線を送るとセイバーがかぶりを振り自分以外のサーヴァントが、この近辺に居ないことを知らせる。

「あいつ、まさかもう敗退した訳じゃないわよね？」

その言葉に、不満と追及以外の感情が知らず知らずの内に込められていたのは本人にも気付いていなかった。

同時刻、この時間帯には滅多に使用されない為、人気のない一階の男子トイレの洗面

台の鏡が怪しく水面のように揺れていた。

「えっ！ 今日、衛宮くん出席されているんですか？」

「そうよ。珍しく今日は、予鈴ギリギリに来ていたみたいだけどね」

昼休み、月曜の四時間目が二年C組担任の藤村先生であったことが幸いし、凜は早速確認するため件のマスター衛宮久郎のことを問うてみると、案の定彼は出席していたようだ。

後ろの席に座っていたセイバーが立ち上がり、先に廊下へと出る。

「そうですか。態々引き留めてすみませんでした」

「うふふふ、いいのよ。遠坂さんって質問とかあまりしてこないからね。……ああそれと」

「はい？」

「頑張つてね!!」

授業では、プリントの誤植、誤字や誤訳の指摘ばかりの凜に頼られて嬉しい藤村大河は、徐に親指を立てて凜に激励を送った。

行き成り、接点のなかった男子生徒の出席を気にする女子生徒という状況を勝手に誇

大解釈したその純粹に楽しそうな教師の様子見た凜は……。

「ええ、全力でもって行かせてもらいますので」

あくまで、完璧な優等生としての笑顔で以って答えたのだった。

同じく昼休み、二年C組の教室で穂群原学園生徒会長こと柳洞一成は、同級生と共に自分の肉つ気のない茶色い弁当に箸を突いていた。家柄というか寺の子として肉の類をおかずが入ることのない昼食に不満を漏らしているのだ。

勿論、日本では寺の関係者が肉食を断つことが義務付けられていたのは明治五年までのことであり、現在では各寺の僧尼も一般人と左程変わらない生活送ることができる。

しかし、柳洞寺の住人である彼の両親は寺の住職兼管理人を代々務めており、所謂古いタイプの日本人であり。継がれている古き習慣に趣を置いておりその中の仏教において生物の殺生を禁忌とする戒律から生まれた『菩薩戒』。即ち肉食を断つ習慣を始めた所からゆるる風習を現代に渡って守り続けているのだ。

そのため息子の一成もまた育ち盛りの学生の身でありながら近年より、注目されつつある老人が健康である秘訣のような素食……基<sup>もと</sup>精進料理を食していた。

「休みを挟んでいるとはいえ二日続けて、衛宮が弁当を忘れるとはな」

いつもなら、お互いのおかずを交換して動物性タンパク質を補給するクラスが居ないため、一成は気を紛らわせるために口を動かす。

「朝の寝坊のダメージがこんなところにまで及ぶとは、衛宮も中々抜けているところもあるんだな」

「まあ、皆勤賞を目指している衛宮には、遅刻の一つが命とりであろう……それにしても、今日は何やら教室の外が騒がしいな」

二年C組の廊下に人だかりが出来ていた。それは、この学園のミス・パーフェクト遠坂凛が昼飯片手に誰かを待つかのように壁に背を預け、両手を組み、右人差し指が忙しなく肘を叩いていたのだった。

時間も押ししてきたのか。ついに、凛は二年C組の扉付近に集まっている生徒たちに声を掛ける。

「……っ、すみません。ちよつとよろしいですか?」

そのほとんどが委縮する中、一人興が乗った後藤劾以は廊下へと踏み出す。

「これはこれは、遠坂の。拙者でよければ……して如何様な用件で御座ろうか?」

「ええ、実はここのクラスにいる衛宮くんに御用がありました」

「衛宮に、だど? ……ああ! 藤村女史の言付であれば某それがしが賜ろう」

毎回映画や、劇、漫画、アニメの気に入ったキャラクターの口調を真似る彼のアイデ

ンティティーが一瞬崩れそうになったが、あの衛宮が遠坂に気に入られる要素が無いことで踏みとどまり、彼女の言葉を冷静に分析し角を立てないように答えた。

「いいえ。私の個人的なことなので、私が衛宮くん<sup>に</sup>直接話合います。教室内に居ないようですがどちらに向かったのか心当たりはありませんか？」

『……』

その爆弾発言に後藤少年だけでなく、教室内と廊下にいた生徒全員が絶句しており沈黙が支配していた。

「あの、どうかしましたか？」

「……あ、！ ああ失礼した。この日の時間帯に教室に居らないのなら、間桐妹と共にいる筈であるので一年の教室へ向かうことを薦める」

「有難う御座いました。それでは」

二年C組のクラスメイト全員とその廊下に偶然居合わせた生徒に盛大なる誤解を与えたまま凜は、颯爽にこの場を後にした。

「ちよつと衛宮くん。よろしいですか？」

一年の教室前に付くと凜の目的の人物はすぐに見つかった。紫の髪を持つ気の弱そうな後輩と廊下で親しげに話し合っており、その悠長な態度が更に凜を苛立たせる。

「遠坂……ああ構わないぞ。じゃあ。桜、今夜の夕飯を楽しみにしているぞ」

「あつ、せんぱ」

桜が不満げに何か言い掛ける。が、凜はクロウの手を思い切り驚掴みにしながら屋上へと向かう。

「さてと、衛宮くん自分がどういふ状況なのか分かっていのかしら？」

二人が屋上に上がり、出口を塞ぐように立った凜は猫かぶりをやめ、人払いの魔術を使った後左手を構え魔力を通して刻印を輝かせる。

「状況……と申しますと？」

「？ 聖杯戦争に参加しているマスターなら霊体化させたサーヴァントを連れて歩くのが常識でしょうが」

雰囲気の変わったクロウの様子に違和感を覚えるも、凜は死にたくなければ自分のサーヴァントを出せと脅しに掛かる。

「失礼ながら申しますが、私はマスターではありません」

「!?…… そう、あくまで一般人を気取るんだ。ならここで降りなさい！」

白を切るような態度を崩さないクロウを見た凜は、指先に魔力を糧に作られた黒い呪いの塊……「ガンド」の散弾をクロウに浴びせた。

「ご無事ですか。リン」

「?!」

しかし、そのガンドは、クロウの体に命中したのにも拘らずその魔弾はノーモションで光の反射のように撃ち返されたのだ。屋上の端に隠れていたセイバーが凜の前に滑り込み、対魔力スキルを発動させ無効化する。

「やれやれ、いきなり攻撃してくるとは酷いじゃないですか。普通の攻撃が効かないとはいえ、驚きますよ」

自分のガンドを弾き返された凜は、自分がどれほどの規格外な相手をしてきたのか思いつく。無抵抗であったとはいえ、明らかに本人とは異なる口調を持った、それは衛宮久郎の姿を借りた別の存在であることはすぐに理解できた。

故に凜は尋ねる。

「アンタは一体何なの」

「おや? 無謀の割に良い感をしていますね。まあ敢えて私の身分を明かすなら……衛宮久郎のちよつと凄い使い魔ですよ?」

衛宮久郎の姿を借りた別の存在はセイバー陣営の主従から浴びせられる敵意を受け



流し、悪戯の成功した子供のような笑みを向けるのだった。

## 10 認外の摩擦

「サーヴァント、ですって?!」

目の前にいる、正体不明のナニモノの予想外な返答に凜は驚きを隠せずに顔を青くする。もし、彼女が想像している通りであるのなら衛宮久郎は、二体のサーヴァントを役していることとなるのだから。

傍らにいるセイバーも周囲にも警戒を強め、制服姿のまま風の鞘に隠された剣を顕現させマスターの壁になるよう前に立ち、不意打ちに対処できるように構える。

しかしセイバーは、目の前に立っている少年に英<sup>サーヴァント</sup>霊<sup>サーヴァント</sup>同士であるならば感じられる筈のエーテル体特有の気配が一切感じられないことが気に掛かった。スキルや宝具で以って、正体を隠しているとかの類ではなく自身の眼に映るその少年は間違いなく唯の人間にしか見えないのだ。

先夜の住居内で短い間であつたが邂逅を果たした時に見た人柄から、凜のガンドを施術者である本人に弾き返した後に、不敵に笑うこの少年が別人、もとい別存在であるのは明らか。

そうである筈なのに、見れば見るほど同一の人物を相手にしているようにしか思えな

いのだった。

凜の驚きっぷりに満足したクロウは、笑みを崩さずにすぐ言葉を付け足す。

「ああそうそう。私のは『英霊』ではなく単純に『使い魔』という意味ですのであしからず」

「……本当なの、セイバー？」

「ええ、確かに彼は我々サーヴァントとは異なる存在です」

嘘は、言っていないことはセイバー自身で判断できた。だが、肝心の正体については相変わらず不明のままであり、結論を出すのは早計と断じ警戒を続ける。

よく考えてみれば、彼には聖杯によって与えられるステータス看破の透視能力が働いていない。こちらが勝手に解釈し無意味に警戒していたところに態々敵が勘違いを訂正してくれたのだ、焦りは禁物だと気休めながらに深呼吸をする。

凜は、敵がサーヴァントでないこと知り幾分か顔に色を取り戻し、落ち着いて思考を開始する。

魔術師が、人間の思考に似せた使い魔を使役するのは別段、珍しいことではない。

ある魔術師は、自分の影武者として表社会相手に使い魔を当主と扱わせ

ある魔術師は、根源到達の研究に携えるために敢えて自分とは真逆の思考を植え付けて別視点からの意見を取り入れる反面教師として扱い

ある魔術師は、単純に自らの使い勝手のいい手足とした助手として扱き使い

ある魔術師は、人間そのものを使い魔として使役する

しかし、それを態々、自分と見分けが付かないほど完全なまでに似せる魔術師となる  
と相応に絶対数が下がる。技術的な問題もあるが何より無駄が多い。自分に似せた使  
い魔を使用する機会など早々訪れることない上に、ただ単に似せるだけなら幻術や暗示  
の使える使い魔を放つ方が効率的であるからだ。

即ち、結論から言えば衛宮久郎は最初から冬木の管理者である遠坂凛<sup>魔術師</sup>を欺くためにこ  
の使い魔を送り込んできたのだということ。

「ちなみに、遠坂さんと私は言葉こそ交わしていませんが初対面ではありませんよ？」

そんな、セイバー陣営の警戒を余所にクロウは、再び愉しげに口を開く。相手を嘲笑  
う、その口元は大きく吊り上がり笑いが込み上げているのが目に見えて分かった。

「なんですって……」

最早怒りや驚愕を通り越し唾然と凛が呟いた。

「月に二、三度？ 多いときは、十日ほど連続で私が代わりに登校して来ていましたか  
ら。……おっと、そろそろ昼休みの予鈴が鳴りますね」

その、凛に追い打ちを掛けるようにクロウは、衝撃的事実を伝えるとまるでそれまで  
のことをどうでも良い世間話であったことのように長針が大きく傾いた時計を見ると

あつさりとした口調で扉を目指し、宝具を構えるセイバーの横を通り過ぎようとする。

三年間ずっと、兄弟子である言峰綺礼が後見人として（十分とは言えないが）ある程度のサポートがあつたのにもかかわらず、無断にこの地に居付いた魔術師の存在を感知できなかった自分を咎めていた。

一体、いつ入れ替わっていた？ これから対峙するときに自分はこの得体の知れない男とその使い魔を見分けられるのか？ 他の生徒、教師、この町の住人の中に何人魔術師が紛れ込んでいるのか？

凜は、内容の重みに耐えきれず思考の海に自分の精神を深く沈ませる。

「リン、気をしっかり持って！」

「あ、……………」

外見上、頭を押さえて呆然とした凜。出口を遮るように立っている自分達の傍に近づいてくるクロウをどうするのか支持を出そうにも、焦りを隠さず見るからに狼狽していた。セイバーが、マスターの盾となるようクロウの線対称となるように足を運び、守りながら支持を仰ぐも彼女は動けなかった。

クロウが、セイバーと凜の左横を通り過ぎ、凜の後ろにある扉の前に到達した。

「リンっ!!」

「!?」

セイバーが動かないマスターの呼び名に喝を入れると、スイッチが入れ替わるように凜の瞳に光が戻った。彼女の決して自分を偽らないという強い意志が彼女の理性を叩き起こした。

「待ちなさい」

屋上と校舎内を隔てる扉に手を掛け開こうとするクロウを、唯の魔術師としてではなく冬木の管理セカンダリー者として呼び止める。彼女の声と視線は、どこまでも強く真つ直ぐにこの場を去ろうとするクロウを捉えていた。先程までの大きく揺れる頼りない精神は、彼女のサーヴァントであるセイバーからの清廉な激励によって切伏せられ、余計なことは考えずに自らの責務を果たす一当主としてその使命を全うする。

「あなたの主人は、この霊地冬木の管理を協会より任されている遠坂の許可なくこの土地に工房を構えているわ。これまでの上納金、及び引き続き正式にこの地に居付くのであるのなら、それ相応の対処を取る事となるのは当然理解しているわよね？」

扉に手を掛け押し開けようとしたその動作を取り止め、離れながら感心と呆れが混じった溜息を吐き、凜とセイバーのいる後方へ振り返ると、先程のクロウに振り回されるだけの様子とは打って変わった凜の態度に一目置いていた。

「冷静にこちらの出方を窺っているとこ悪いんですけど、魔術のことなど全く知らな

い一般人『衛宮久郎』として振る舞うように設定されている私には魔術師関連の事柄は分かりかねます。我が主の指示が出次第、日を改めて講談の席を設けましょう」

「……つまり、喋るつもりは一切無いってことね」

「私の一存では判断出来かねる状況である、とだけ言っておきます」

伝えられることは全て語ったといい終わると、再び凜たちに背を向き階段の扉を開けて降り始める。

「待ちなさい。学園のコレ、アンタたちの仕業じゃないわよね？」

その言葉に、反応したのか。クロウが歩みを止めてこちらを見る。その表情は、先程の他人をからかう事に欣悦を覚える者ではなく、いつも見慣れている衛宮久郎と同様の否、本人と言及されてしまえば納得してしまう。一般生徒、『衛宮久郎』本人と同じ顔が覗く。

「……何やつているんだよ、遠坂にセイバー。早く戻らないと次の授業に間に合わなくなるぞ？」

それは、学校中に犇めく不穏な魔術には関わっていないという意思表示か、それともセイバーと自分を惑わすための時間稼ぎなのか凜には分からなかった。

しかし、凜は彼らがこの件には直接関わってはいないであろうことは、薄々感付いていた。

ランサーから単独で逃げ果せていた時点で戦闘に關しての腕は自分以上。

その上、単身で、あれほどの高度な使い魔を使役しているのならサーヴァントを嚇けて無防備となったマスターを襲うといった戦法で事足りる。少なくとも久郎より戦闘経験が浅い凛ですらそういった確実に勝ち星を稼ぐ方法を予想立てることが出来た。

しかし、久郎はそれをしていない。

少なくとも形振り構わずに行動するようなことはしないタイプなのだろう。正体がわからないため保証はできないが、凛が邂逅した使い魔とその主が好戦的でなかった事はなによりの幸運であった。

階段を降りる足音が聞こえなくなるとセイバーが不可視の剣を仕舞い、マスター凛を見る。

「リン、あの使い魔アガシオンはどうするつもりですか？ あのまま放置しては相応の脅威となる」

「今は、可能な限り様子を見ることしか出来ないわ。手を先に出したのはこちら側であったことは事実だし、会談の機会に取り繋げられたということは、表面上話を聞く姿勢はあるということだもの。こちらから仕掛ける訳には行かないわ」

「だが、畏の可能性もある！ 敵が一人ではないことが分かっているこの状況で受身でいることは危険だ！」

その翡翠色の瞳には、怒りの感情が込められ。その声は、非難と警告が折り重なった



敵しいものだった。明らかに今までと様子が、纏う空気が変わった。

凜は、これほどまでに強く自らの意見を押し出したセイバーを見て驚嘆した。騎士王と名高い彼女はその渾名通り騎士然とした立ち振る舞いでマスターである凜を立てていた。その態度が一変し、突き立てるように凜の方針に異を唱える……明らかな否定をし出したのだ。

「どうしたのセイバー？ 確かに私達が遭遇したマスターの中で一番警戒すべきだつて、ことは分かるけどあなたのその反応は一体……」

「!? いえ、すみません。少々取り乱してしまいました。ですがリン、彼の使い魔の言葉を鵜呑みにするには些か不安が残る」

「それって、あ!？」

凜が過剰なまでに警戒をしたセイバーにその理由を問うとした時に、昼休みが残り僅かであることを告げる予鈴が響き渡る。その様子を見たセイバーは、目を閉じ過去の自身が体験したあの血と謀略に満ちた救えない昔話をするべきかを考える。

「……………リン、長い話になります。一度拠点となつている遠坂の屋敷に戻りましょう。ここでは安全が保障できない」

長い沈黙の後、再び口を開いたセイバーから出てきた言葉は、言外に安全ではないこの学園にいる数百人を見捨てるといったことも含まれていた。しかし、セイバーはそれ

をあえて言わない。召喚後のほんの二、三日で自分のマスターがどういった人物なのかは大凡把握していた。気高く悠然と構えたその立ち振る舞いから、自分がこれから話すことを知れば、壮絶に戦地へと赴き彼を糾弾する勢いで立ち向かうことだろう。

——それでは駄目だ。

もし彼が自分が知る通りのあの男の関係者だと思ったらと思うと気が気でない。自分の魔術師らしいマスターこそ、格好の標的となってしまうのだから。

セイバーは、一刻も早くこの場から立ち去ろうとマスターの手を掴み早歩きで階段を降りる。

「分かった。……今日は、取り敢えず早退することにするから、ちゃんと全部話してね？」

セイバーに手を引かれた凜は、セイバーのその何かを恐れる懸命な表情に圧されて思わず頷くも、セイバーに隠し事は認めないと釘を刺した。

彼女たちは、互いに困惑の形相のまま家路へと急いで行った。

## ——目を盗む

「なるほど、面倒なことになったな」

時計の針が午後五時を過ぎた頃、衛宮久郎は朝の倦怠を拭い去るための寝間着とは異なる、運動を阻害しないジャージに着替えられており、自室で鏡の中から上半身だけその姿を現界させている自らと同じ顔をしている制服姿の使い魔の目の前に立ち、丁度向き合う形で別の今日の出来事を余すことなく見届けていた。

赤く輝いていた瞳が、元の黒に戻ると目を閉じ。ゆらゆらと動作一つに緩急をわざとらしく加えながら四、五歩後ろ向きに後退り、そのまま久郎はベッドに倒れこむように全体重を預ける。

「すみません。人払いが施されていたとはいえ、まさか行き成り攻撃してくるとは思わず。反撃してしまいました」

壁に掛けられている鏡に映る使い魔<sup>クロウ</sup>の姿が崩れて丸い鏡を手を持つ巫女服姿の少女が現れ、久郎に深く頭を下げ謝罪をする。

The Mirror  
鏡

久郎が第三魔法を応用し創り上げたカード型礼装の中でも、高い知能を持つ使い魔で

ある。鏡を媒体としたことなら大抵のことができ、形態模写、呪い返し（神秘の反射）、鏡から鏡へと自身を映し通って空間移動を行うなど会話を始めとした様々な機能を持つ高位カードの一つである。久郎は、先日の戦闘が要因と思われる魔術回路の酷使から来る倦怠感から睡眠が必要と考え、自分の代わりに学校へと行かせていたのだ。

普段なら、普通に休みの連絡を入れるだけで事が済むのだが、聖杯戦争の最中に敵に弱みを見せるわけには行かないため大役者として、鏡 The Mirror を送ったのだが、今回はそれが仇となった。

「いや、お前に落ち度はない」

言葉に対し余裕のある口調で久郎は腹筋に力を入れて起き上がった。その言葉には偽りなく焦燥もない。鏡に映った自身の使い魔を見る目には怒りも失望もなく、衛宮久郎が自身の身内に向ける、暖かみのある目であった。

実際、記憶を辿る（盗んだ）限り彼女の行動に迂闊な点は無い。衛宮久郎として学校に登校して授業を受け、桜に今日の夕飯について話し合うといった、衛宮久郎の役を演じ切っている。

いつもと違ったのは、遠坂が聖杯戦争に参加している魔術師 魔术师 として鏡 鏡 に接触して来たということ。

ただ、いつもと同じように過ごす様にとしか支持を出していなかった、主である久郎側のミスであり。有事の際は自己防衛も許可していた中で、無闇に遠坂凜を殺害、敗退、ないし再起不能にせず後日交渉にまで話を付けたのは最善でなくとも次善程度ではあった。

しかし、分からない事があった。

ランサーに襲われて、ライダーを召喚した夜から続く遠坂凜の衛宮久郎に対する、まるで無許可に靈地に侵入した魔術師に対するような態度だ。

そこだけが気味悪く喉に引つ掛かりを持った。

許可そのものは、三年前に魔術協会内の登録上の別人に化けて時計塔で取った為、魔術師として冬木に居を構えてはいないまでも、魔術や神秘に関わる人物として防衛のための工房設立を行う範囲内で許されているはずであるからだ。

その際、『衛宮久郎は日常生活、魔術関連事項に於いて遠坂家に無闇な干渉行わない』セカンドオーダーその旨を伝えた書類と挨拶の手紙は三年前に郵送し、遠坂凜と衛宮久郎の縁はそこで蟠わたかまりなく終了していなければいけない。

無論、保険として五十数年後の聖杯戦争の時に少々自分が有利となるよう細工した、

—— 一見して贈り物としては破格な聖遺物レプリカと共に送り付けた為、その意趣返しに難癖を付けているといったことも考えられるが、策としては下の方であり余りに稚拙だ。故

に凜は本気で久郎をモグリの魔術師として認識している事となるだが……  
それでは、この状況に至るまでのある矛盾が生じていた。

「マスター、敵がこちらの出方を伺っているのなら有利となる戦場をどう整えるのか誘い出すのか。何れにせよ、それらをどう悟られずに出来るかが課題となります」

今まで霊体化していたライダーが、ベッドを間に挟み久郎の後ろに現界した。基本的に戦闘時以外は霊体化させて消費する魔力を抑えるのが通例であるのだが、切り札の一つを存分に引き出した今の久郎にとって魔力は無限に等しいため、彼が話を進めるのなら顔を合わせるべきだとライダーに言っていた。その言葉を受けたライダーは念話を通さずに現界し直接喋る。

「そうだな、問題はそこだ」

久郎はすっかり日の落ちた窓の外を見て考察を始める。彼女の言う通り、これから如何動くべきかが悩みどころであった。

実際、こちらの守りは完璧であるので後手に回ったとしても危険は薄い。

現在、招かれざる邪まな御客人に対して、それ相応の報復と処理を行う衛宮の洋館には、敵意や殺意を持つ輩を決して逃がさず、音を殺し、道を塞ぎ、力を封じ、武器も手段も奪い、怪奇によって精神を削りつくした後、最後には異界化した奥の小部屋に肉体

を縛る仕様となつてゐる。

外からこの洋館を覗く一般人や害意無き客人には一見して、いつも通りの少々古臭く大きい建物にしが見えないが、敵の魔術師とサーヴァントには普通の屋敷にしが見えないのに、周囲の空気から滲み出る魔力の量に警戒することであろう。

それも当然である。この衛宮の洋館には五十三体の精霊クラスの礼装とライダーの英<sup>サーヴァント</sup>霊、そして彼ら彼女らの主<sup>マスター</sup>であり、彼等全員の魔力供給源でもある久郎がいる限り、英霊の宝具ですら脅威とならないはずであるのだから。

対城宝具や戦略級の大魔術を外部から打ち込まれた場合は、この洋館を残して周りが更地となる仕様のため、一般人に気付かれる前に周りの地を元通りにするか、間に合わないのなら洋館も周りの破壊状況に合わせて破壊することとなる。

無論、対界宝具や抑止力にまで有効かどうかは、試すつもりもさせるともりもなく倒れる前に逃げるか妨害に徹することにしてあるため気にするだけ無駄だ。

久郎がいくら物思えど、その域に達してしまつて後は、そのような規格外に出会わないことを祈ることくらいだ。

久郎のこれからの課題は、聖杯戦争をいかに上手く乗り切るかに限られる。そのため、冬木の管理人である遠坂凜との敵対はできる限り避けたい。しかし、相手側が此方

の意を汲むという保障もないため油断は出来ない。

話が出来る相手であるのなら余計な禍根は残さない方が久郎自身、都合がいい。

しかし、魔術師を相手取る以上、万全を期して臨まなければならない。

久郎は、自室の窓の鍵を開けると冬の刺すような夜の空気が彼の頬を撫でた。右手には、一枚のカード型の礼装が中であつた。

Drop of water crystallized Moderate create snow  
「形象を固定し、連鎖生成後に投下。雪」

街明りが薄く夜空を覆う厚い雲を見た久郎は、魔力を生成しながら呪文の詠唱を始めた。その声に応えるように、余剰魔力によつて吹き溢れた風が白く小さな雪の結晶を纏い久郎の手から離れ、雨雲が覆う曇り空へと飛び立つた。

「マスター何を、っ！……誰かが来ましたので失礼します」

ライダーが、どういった仕掛けを施そうとしているのか聞こうとしたが、久郎が気付く前にこの洋館内に居る一般人の気配を、即座に霊体化して姿を隠し、  
The Mirror 鏡 も後に

続き鏡の中からすがたを消した。

そして、暫くすると久郎の部屋の扉から控えめなノックが響いた。

「先輩、夕飯の支度が出来ました。藤村先生も待つていますので早く来て下さい」

先日の日曜日、久郎が一日中睡眠に勤しんでいる間、夕食を作りに来た部活の後輩である間桐桜が今晚もこの洋館を訪れていたのだ。その日は、  
The Mirror 鏡 が久郎に代わつ



て相手していた為、彼女が久郎の日常の変化を知ることはない筈であった。今日の昼休みに、夕飯のメニューについて話し合っている時に遠坂がクロウThe Mirror（鏡）を連れて行かなければ。

心なしか、桜の呼び声はいつもより機械的でいて且つどこか棘を感じられる。

「分かった、すぐ行くよ」

投影で作られた魔眼殺しの眼鏡を掛けて、部屋を出ると普段なら扉の前に立つて待つ桜の姿が見えるのだが、今回は既に階段側の廊下奥を不愛想にこちらに背を向けて歩いていた。

下に降りてリビング行くと、いつもならソファアに寝ころびながらテレビを見て待っている自称義姉、藤村大河は珍しく今日の献立が並べられているテーブルに着いていた。

「ささ、久郎も来たし。食べよ、食べよいったただきまーす！」

見かけ上、空腹を訴えているだけのいつも通りの言葉掛けであった。しかし、その視線は見麗しい料理には向けられずに、桜と久郎を交互に向けられていた。表情は軽く、何かが起きるのを待ちきれずにほくそ笑む悪ガキのような顔をしていた。

「頂きます」

大河の隣に座っていた桜は、対照的に手を合わせて食事の挨拶以降黙って箸を進め

る。今日は鳥肉をカラッと揚げて自家製のタルタルソースに摩り下ろした人参を入れたチキン南蛮と海藻こんにやくサラダ、ジャガイモと水菜の味噌汁であった。

「……頂きます」

久郎も二人の後に続き食事を始める。どれも上品に仕上げられており、差し当たり、変わったところもない。

大河は、相変わらず久郎と桜の様子を観察し、桜は沈黙を守り続け、大皿のサラダを小鉢に盛る。

揚げ物を噛み千切る音、海藻を咀嚼し、汁物を啜る音だけが肅としてリビングに奏でていた。

暫く、三人で静かに食事をしているうちに、普段なら今日の料理の出来について尋ねてくる桜がこちらを向かずに黙ったままであることに気兼ねて、久郎は意を決して彼女に語りかける。

「なあ、桜。昼休みのこと……気にしているのか？」

「おやー？ 久郎ったら桜ちゃん和我というものがありませんから遠坂さんにまで手を出さんだ？」

いつも有り余る元気でおしゃべりをし続ける大河だが、久郎を品定めするように目を細めてソースたっぷりの鶏肉を頬張る。

「気にしていませんよ、先輩。ただ」

手なんか出していないと、反対する前に今まで食事の挨拶以降声を出さなかった桜が沈着に否定した。しかし、箸を持つ手は必要以上に力を加えられていることがわかるほどに震えており、それを落ち着かせるためか、桜が箸を置きお茶の入った湯呑を手に取り口に含んだ。

「私が、先輩にどうやって話しかければいいのか分からなくて、つい黙り込んでしまっていました」

その静かな口調は、序盤は完璧であった。しかし、彼女が言葉を繋げるたびにその表層は剥がれて行き、だんだんとその胸に押し込んでいた心緒が込められる。隣に座っていた大河は、徐々に変わっていく桜の様子を見て冷や汗を掻いていた。

「藤村先生に今日、遠坂先輩が、先輩の事について聞きに来たって聞いて、実際昼休みに先輩が連れて行かれてから休み時間が終わるまで戻ってこなかったから、もしかしたらと思うと、私っ」

大河の名前が出た時に、久郎は、目の前にいる純粋な女子高生を焚き付けた現況を冷めた目で睨む。またお前か——と。

今までの冷静を装っていた桜は打って変わって、今にも泣きだしそうな張りつめた弦のごとく差し迫った口調に変わった。

場の空気に大河は、この状況から脱することの出来る要素を探して部屋中に視線を泳がす。不意に、居心地の悪さの元凶がはつきりしたお蔭で安心して食事を続行していた久郎と視線が合うも、すぐに逸らされ、小さく何かを呟かれた。唇の動きだけであつたが大河にはなんと言われたか理解できた、「自業自得」と。

厨房を見て、ガスの火が着いたままなのではと言おうとするも、先程桜が久郎を呼びに行く際に自分で消したことを思い出して断念し、テレビの方を見て何か衝撃的なりアクシオンを取ろうとするも、見慣れて飽きたと以前ぼやいていたコマーシャルの最中であり、何かないかと家中を見渡し、この際あの黒い悪魔でもいいからこの場の気まずい状況を打破する何かを!! と、心中で咆哮する。

焦り、混乱して精神が手負いの虎と化した大河に、涙を流しそうな桜の様子を見た久郎は、二人を見兼ねて味噌汁を飲み終えお椀を置くと、そのまま行儀悪くも箸を持ちながら窓を指差し、呟いた。

「雪が降っているけど、二人とも帰りは大丈夫なのか?」

「———そうよ、いつだって。っえ? でも今日は確か」

「いつけない! 私、バイクだから積もつたら歩いて帰らなきゃならなくなっちゃう!! ちよつと、久郎! あんたは桜ちゃんを送って上げなさい!!」

顔色が変わるほど追いつめられていた桜は、予想外の久郎の声掛けに疑問の声を上げ

るも、それを遮るように大河が大声で誤魔化すように自らの提案を捲し立てながら夕飯にがつつく。

それからは流れるように、全員急いで食べて帰る準備を始める、桜が食器を片づけて流しの中にある水の張ったボウルに大きい順に食器を入れた。今日はこのまま置いておくだけでいいと久郎に言われてその好意に甘えさせて貰い桜もエプロンを畳み帰る支度を始めた。

玄関に行き着くと、既に二人は扉の外に出ていた。玄関先でジャージの上に誰かの御下がりだろうか、少しくたびれた黒いコートを着た久郎が傘を差しながらも一本別の傘を持ち、大河はヘルメットを被りバイクに跨っていた。

「お待たせしました」

「おう、食器片づけてくれてありがとな。桜」

「いえ、いつもならちゃんと洗ってから帰るところなのに」

普段の奥手ながらも明るい感じに戻った桜を見て大河が手袋を嵌めながら先程の自分の失態をなかつたことのように頷く。

「うんうん。桜ちゃん本当にいい子よね。そうだ！ 雪だけ二人で相合傘して行けばいいんじゃない」

「藤ねえ……。桜の言い分を聞いてからそういうことを言えよ。断つても了承しても両方気まずいだろ」

弟分をからかうということはまだ諦め切れていなかったのか、大河は少し前の恋愛小説では定番中の定番である大きな傘一つに男女二人が使うアレを冗談半分に提案した。

久郎は口では、否定も肯定もせず当たり障りなく大河を軽く咎め立てると、桜に準備した傘を洋館と扉の窪みに立て掛けて手を放した。

「……あ、あの、私は別に困らない、というか。むしろ大歓迎ですけど、いいんですか？」  
久郎の手を離れた傘と久郎を見比べながらも、桜はか細くしつかりと自分の気持ちを確認し、久郎が黙ったまま体を傘の中央より右手にずれてもう一人入るぐらいのスペースを作った。

「ほら、桜。空いてるぞ」

それを肯定と受け取った桜は、そのまま久郎の隣に、一つの傘の中に入っていった。

「二人共了承しちゃって、まあ。青春しているなこの野郎!! お姉ーさんは、先に帰るけど二人とも道草しないで真っ直ぐ帰るのよ。いいわね!!」

高校生カップルの甘酸っぱい空気に充てられた大河は、愛車のエンジンバイクを掛けて二人より一足先に衛宮の洋館の門を潜り帰路へと走り去った。

「……じゃあ、桜。行こうか」

「はいー」

さんざん自分たちをからかいつつも、その様子に耐え切れずに走り去った大河を見送った二人は、気を取り直して街頭や自動販売機による街の明りに煌めく雪の中を歩き始めた。

雪道、とはまだ言えないまでも、薄らと積もりつつある降雪に桜は、積もり切る前に衛宮の洋館に出たことを幸運に思っていた。

道中、久郎がこのままだと明日は積もるとか、視界が悪くなると交通事故とか怖いよな、と話しかける声も右から左へと通り過ぎて行った。自分がどう答えたのか、はつきりと思いつけずただ会話が成立し続けていたことから支離滅裂なことは言っていないことだけは分かった。

自分がどうしてこんなにも幸せな、普通の女の子としての思い出を作ることができて、そしてそれを自分の言葉で選ぶことができたことに一種の達成感を覚えた。

雪が降るほど寒い夜の中でも、彼女の心は隣から聞こえてくる息衝く白い息に暖められ、昂ぶった心臓の鼓動が耳の内側から聞こえていた。彼女はただ、願っていた。この時期だからこそ、こんな人としての一時の幸せを感じられる日々が続けばいいと。

「——あ、さく、……さくら、桜！」

ぼんやりと、降りゆく雪を見ながら遠くを見ていると、隣から自分の名を呼ぶ久郎の声が聞こえてきた。

「はい、先輩。どうかしました？」

「どうかって、そのまま進むと通り過ぎるぞ」

その言葉に、桜は我に返る。自分は今、どこに行こうとしていた？ どこを指していた？ どこへ帰ろうとしていた？ 確かこの道に進んで行けば——。

「すみません先輩。私ちよつとポーつとしてて……有難う御座いました。気を付けてお帰りください」

自分の有り得ないその行動に、胸が締め付けられるような錯覚を覚えるも、久郎を心配させまいと無理矢理笑顔を作り、お礼と別れの挨拶を済ませ、久郎の返事も聞かずに



彼と一緒に使っていた傘から小走りで抜け出し、自分の家に……自分の家に帰って行った。

桜は自分の家である間桐邸の門を潜り、邸内へと繋がる扉へ向かおうとすると、突として足を止めてしまった。

何故なら。自分の兄である間桐慎二が、館の薄明かりに照らされた扉の向こうから出てきたのだから。

「やつと帰ってきたか。桜」

その、同じ家族に向けるものとは思えない敵意と、嫉妬に塗れた視線に桜は委縮してしまう。

「つえ!! あのこと……兄さん、どうして?」

桜は目に見えて狼狽した。今日は夜遅くまで帰ってこないと言っていたのに何故今この場にいるのか分らなかつたからこそその驚きであつた。

「家の前であれだけ人の妹の名前を呼ばれば、いやでも気付くつーの。それより、アイツがいるんだろ?」

嗜虐に満ちたその笑顔だけは、桜はどうしようもなく恐しく、好きになれなかつた。

「だれの……ことですか?」

言われなくとも自分は分かっていた、散々鈍いだの鈍臭いだのと言われている自分でもこの場には自分たちの他に一人しか外部の者がいないことくらい。

慎二は、桜の後ろにある柵を越えた先にいる人影を見て声を張り上げる。

「衛宮だよ、衛宮。あいつの声が聞こえてき。オーイ、家に入れよ、衛宮！ お茶くらいご馳走させてやつてもいいぞ」

蒼白に桜の顔が血の気を失った。今の慎二は、普通の人間ではとても太刀打ちできない絶対的な力を有している。

自分のせいだと、桜は自分を責める。これから起きること、起こるだろうと思われる慎二の所業は容易に想像できる。

その様子に気付いた慎二は、屋敷の門を潜る久郎を視界の端で捉えながら小さな辞典のような古書を左手で取り出しながら、右手は桜の左肩に置いた。

「安心しなよ。こんな寒い夜に妹を送りに来た奴を痛め付けたりするつもりはないさ」

——相手の態度次第だけだな。

無防備にやってくる久郎を見る慎二はこの後、思い知る事となる。

自分と相手の実力を誤ったことを

自らの所業が成した苦い後悔を

知識と経験は別のものであることを

神秘を扱う者の生き様と覚悟。そして、どちらが狩人と獲物となっていたのかを  
そして、絶望と現実を。

## 11 氷材の錬装

暖房の効いた間桐邸の客間には、テーブルの両側と壁側を囲むように配置されている三人掛けのソファに座った三人の高校生が最近の日常についての他愛無い会話と、紅茶の香りが広がっていたが……それもついに終わりを迎えていた。

白い陶磁器に小さな青い向日葵の模様をあしらったティーカップから口を離して、受け皿へと失礼のない範囲で軽い音を立てながら置く。

「ふう」

桜が淹れたであろう紅茶を堪能した久郎は、一息付くと古惚アンティークけた大時計を見て帰宅する旨を伝えようと、受け皿ごと空のカップを同じデザインのティーポットが置かれているトレイに乗せた。

久郎の右手に座っていた桜が追加のお茶を注ごうとするも、久郎はそれを右手で制止し遠慮する。

「御馳走様。お茶もお菓子も美味かったよ」

添え付きの紙ナプキンで口元を拭うと、正面に着席していた慎二が満足そうに、やや大げさに振る舞いはじめる。

「そうかい、そりやよかった。なんならもつと良いやつも有るけど、衛宮が満腹ならしよ  
うがないよな」

残り僅かとなった紅茶に合わせて出した無花果イチヂクのビスケットの器を見て満足そうに  
頷いた。

その慎二のどこか飄々とした、明るい態度に久郎は薄気味悪いと感じていた。高校一  
年の初めて顔を合わせた時から、慎二の久郎に対する気構えは、激しい敵意と嫉妬に塗  
れており、挨拶一つに十の皮肉を織り交ぜるといった何ともかかわり合い難いものだっ  
た。しかも、挨拶を早々に諦めた久郎が無視するようになる。今度は、顔を会う度にそ  
の態度は、顕著なものとなった。そういった風に、衛宮久郎と間桐慎二は、クラスメイ  
トとして最低限の続柄はあれど、とても先程までのような雑談に花を咲かせるような間  
柄ではない。

桜の迎えについて度重ねるように非難の言葉を浴びせられると思っていた久郎は、気  
前よく振る舞う慎二に正直拍子抜けしていた。

「体も大分暖まったし、何よりさつき晩飯を食べた後だからな。気持ちだけ受け取って  
おくよ」

そう言い。久郎は最後にもう一度、自分の左手の感触に異変がないことを確認する。  
今夜、久郎が大河からの桜の迎えを了承したのは、今回の聖杯戦争に参加する間桐陣営

の者を確認するために来たのだ。

サーヴァントがサーヴァントを、霊体化や現界間わずに、個体差は大きいものの、ある程度の距離では探知できるように、マスターも至近距離であるのなら令呪の疼きから相手のマスターを感じできる。無論、久郎自身は、相手の認識を変換することで姿を偽る『目を欺く』能力を使って令呪と魔力を隠しているの、手を見られてもそこには、ところ変わらない普通の手にしか見ええず、仮に霊体化したサーヴァントがこの場にいたとしても久郎を魔術師として判断する事は出来ないため、抜かりは無い。

しかし、桜も、慎二もこれほど近くにいるのにも拘らず、久郎の令呪は何ら反応を示さずにいた。

「そろそろ、だな」

小さく慎二が呟いたその微笑を孕んだ囁きは小さく、誰に告げられたものか何についてのことは、傍から見ただけではよく分からないものであった。彼の左手で懐に隠した古書を撫でた。

「おい桜。これを片付けろ」

久郎が帰ろうと準備を始めようとする前に、悪い意味で兄らしく、慎二は桜に向かってテーブルに出されている空となった、紅茶とお菓子の一式を指差した。

「は、はい」

桜は、そんな慎二の強気な命令を聞くと、口籠りながら従順に片付けを始めた。彼女は、自分の手を見ると小さく震えているのが分かり、慌ててお盆から手を放し運ぶのを中断した。

「手伝おうか、桜？」

客間の隅に置かれていたコートを取りに戻ってきた久郎が、一人で片付けを進める桜を見て心配りか声を掛けた。

「大丈夫ですよ、先輩。全部お盆に乗りますので、私一人で十分です」

久郎に声を掛けられて、桜は焦燥する。このまま黙っていればいいのか、それとも慎二のこれからの行動に対して警戒すべきだと伝えるべきかと迷い続け、桜は、当たり障りない日常的な会話を続ける自分に……続けたがっている自分に従いやんわりと断つた。

「そうか。お茶、美味かったぞ」

「お粗末様です」

「じゃあ、俺そろそろ帰るから」

黒いコートを羽織った久郎は、桜に背を向け客間から出る廊下の扉へと歩いた。一歩一歩久郎が離れる毎に桜は、口の開閉を久り返し、躊躇する。久郎を助ければ慎二の敵となり、慎二の味方をすれば久郎が怪我ないし殺されるかもしれない。その未来予想に

桜は、心を大きく揺らし自分を自分で追い詰める。

しかし、慎二がいるこの状況では、自分は迂闊に動くわけにも行かずに、桜は扉を開けた久郎に向かって呼ばわった。

「先輩!!」

その大声に、久郎は驚き振り返った。

「……気を付けて下さいね」

桜は、そう言うだけが精一杯であった。

隣を見ると、慎二が機嫌悪く桜を睨みながら、久郎に気付かれないように静かに歯を食いしばっていた。

「平気だつて、桜は心配性だな……あ、そうだ。今度、良い茶葉が手に入ったら家でも淹れてくれるか?」

そんな、兄妹の複雑な事情を知つてか知らずか、久郎は桜が淹れてくれた紅茶の味を思い出して、桜にそう吐露する。

「私なんか淹れたものでよければ、喜んで淹れさせて頂きます」

「ハイハイ、それじゃあ桜。僕が衛宮を玄関先まで案内するから、片づけが終わつたら前は部屋に戻っている……ああ、後それから——」

妹と、久郎のやり取り取りに痺れを切らした慎二は、桜を久郎から引き離すようにお茶の



後始末を言いつけ、桜の耳元で久郎に聞こえない声量で囁くと、桜がビクツと震える。「はい、……分かり、ました。兄さん」

間桐慎二は『優秀』な人間である。言い方を変えれば努力を惜しまない、そんな少年だった。

少なくとも、中学時代の終わり頃までは、彼の行動は模範的とは異なるものであるが一人の人間として、周りの評価は高かった。文武両道で、人当たりも良く、少々自己意識が高いのが目立ったが、誰もが彼を優秀だと褒め称えた。

しかし、間桐慎二にとって、それらは当たり前の手に入れるべき資格の一部であり、成り行きに過ぎない。何故なら彼は自分が凡庸な一般大衆とは打って変わった『特別な』存在であると信じていた……。

幼少の頃、彼は間桐の歴代当主のみが入ることを許された奥の一室に、子供の興味本位で忍び込んだのだ。

入ってはいけなさと、命じられればその禁を破りたくなくなるのが子供というもの。父親の留守を狙い、祖父が地下の自室に籠っていることを確認すると慎二は、一人薄暗い書庫と倉庫が混ざった部屋の中へと進んでいった。

幸か不幸か、嚴重に鍵が掛かっているわけでもなく、簡単に入ることが出来たのだ。

窓も無く、扉から室内に入り込む廊下の明かりだけがその中を映す。古臭い古書と巻物、何に使われるのか理解できない、が普通の家に有る筈もない、曰く付きであろうと思われる仮面、陶磁器、棚の中に収納されている品々の数々。その中に、彼は、——当時の慎二の身長で最も——取りやすい位置に置かれている書巻を読み漁った。

そして、自身の家系のルーツとその使命を知る事となる。

——魔術師。

ロシアを源流に持ち、こと五百年の長きに渡る魔道の歴史を持つ名門中の名門。それが間桐。

聖杯を降臨させる儀式の一役を担うために、この日本の冬木に活動を拠点とする始まりの御三家の一角にして魔道を現代まで伝える一族。

それは、その儀式に必要不可欠とされる英<sup>サウザント</sup>霊を律する令呪システムの構築。その大本である使い魔の使役に専念する家系であった。

その血を受け継ぐ者として、自分は生まれたことを彼は知った。魔術師としての基本

的な知識として、一つの家に魔導を受け継がせるのは一子のみ。彼は、疑うことなく自分が間桐の後継であることをただ一人喜んでいた。

自分が特別な人間である。

自分は凡百な、そこらを歩く人間とは一線を越えた存在である。家の神秘を後の後継に伝えるそれをただ一人の跡取りである。

年頃の少年らしく、慎二は浮かれていた。魔術という名の神秘に魅了され、その秘儀を巧みに続ける自分の将来像に酔っていたのかもしれない。

そのときの少年慎二は、彼の中で一番幸せな記憶であったことを知る事となるなど、一片も考えもしないまま、ただ喜悦に浸る。

魔術師の家系だと知って、粗方の基礎知識を読み終えたそのすぐ後。彼は、部屋の中に散らばった書物を片付けて何食わない顔で自室へと戻った。世界で一番希望に満ちた笑顔を作りながら、眠りに付いたのだった。

それからの彼は、間桐の後継に相応しい自分となる為に表向きは、名家の息子として恥ずかしくない立派な行動を進んで励んだ。

勉強、体育、友人関係、その全てに全力を注いだ。

最初の数か月は、いつ頃から魔術を学ぶのか唯々待ち遠しかった。

数年後、努力が足りなのかとクラス内だけでなく、学年で主席になろうとやっかみに努力する。

小学校を卒業しても、未だに魔術の「ま」の字も教えられておらず、祖父も父も魔術を使ったことも見せたこともないことに疑問を持つようになる。

中学に入つて、暫くして慎二の父親が自室で倒れてそのまま呆気なく亡くなった。親がいなくなったことに喪失感が無かつたと言えれば嘘になるが、寂しいとは思えない。実の親に対して薄情であるかもしれないが、連日からアルコールに浸っている姿を見るとが多かつたため、鬱陶しい酒浸りがいなくなつて静かになつたと思う気持ちの方が強かつたのだ。

中学二年になつたある日、慎二は自分がいつまで経つても魔導の指導をしないことを相談した後。祖父、間桐臓硯まとうぞうけんと妹養子である桜に告げられた。

間桐慎二は、その時、間桐の神秘が、自分の手にすることの出来ない幻想でしかないことを思い知らされた。

館の玄関口を潜り抜けた久郎は、風も無く行きよりも多く降り積もる雪と白く染まつ

た景色を見て、白い息を吐きながら傘を差した。

「すっかり雪も積もつてるな。ありがとう間桐。また明日学校でな」

「……ああ、またな衛宮」

昔のことを思い出していた慎二には、降り積もった雪を踏む音も、真つ白に染まつた銀色の景色も見えていなかった。その目に映る、三年前にいきなり冬木の地にやつてきた久郎ヨシモト。正確には、元々この町に住んでいた住民らしいが、その経歴が慎二の癪に障るものだった。

詳しいことは、祖父から聞いていたものの、日常的に話し合うことで、たまに言葉に鎌を掛けても引つ掛かることなく凡庸な一般人として反応する。魔導に関わることのない表社会に上手く溶け込んだ異物の背中姿を、慎二は侮蔑の目で見る。

傘を差し、三、四センチほど積もった雪道に足跡を付けながら屋敷の敷地を出て、道路を歩いている久郎は街灯の明かりに照らされる雪を見ながら鼻歌を歌う。

慎二は、自宅へと帰路を進む、久郎の後を二十メートルほど距離を置きながらゆつくりと尾行する。慎二は、久郎が丁度目的の、街灯の明かりの真下を通る事となると懐に隠していた古書を丁寧テイジンに撫でる。

「間違つても殺すなよ。アーチャー……やれ」

口元を笑みで歪めながら猫撫で声で、古書に向かつて声を掛けるその姿は、見る人が居れば奇異な目で慎二を見ただろう。本は人語を語らないし、人の話を聞くこともない。しかし、

『了解した。マスター』

空気を震わすことなく返された声の主は、慎二の声に応え、その命令を実践する従者であることを知るのは、まだ間桐慎二しかいなかった。

間桐邸からおよそ千五百メートル程離れた、二十階建てのマンションの屋上に、サーヴァント 男

が一人佇んでいた。本来、そこには五十人から百人余りの住人が居住していたが、先日の連続ガス漏れ事故とされる、キャスターによる魔力の強奪行為によって、聖杯戦争の監督役である教会スタッフの工作により立ち入り禁止となつているのだ。これほど狙撃に適した場所を指名した自分のマスターの性格の悪さに、サーヴァント 男の口から苦笑が混じる。

その男サーヴァントの日本人離れたその白い髪と浅黒い肌は、在住外国人が多い冬木であろうとも目立つ出で立ちであったが、その身に着けている衣服は、一層現代社会を生きる者とは思えないものだった。

胴体を纏う黒いカーボン製のボディースーツ 鎧は明らかに日常を想定して作られたものではなく、近接格闘等を前提とした身体の駆動を十全に生かせるように調整された戦闘服であり。対して、その上に羽織るように召す、暗闇でも映える赤い外套は、その動作を阻みかねないほどの空気抵抗を生み出すかと思われる。しかし、それを指摘されたところでその男は杞憂だと無機質な返答を返すだろう。

その男の戦闘には必要不可欠な着服であるからだ。

「投影、開始」

暗闇に、男の眩くような流れる詠唱が、降る雪に吸い込まれる。途端、雪明りによって、ぼんやりとだが、身に纏う鎧と同質かと思われる巨大な和弓と、一本の剣が虚空より顕現された。

その、現代の魔術師には手に負えない神秘を宿す弓と剣は、どちらとも彼の宝具ではない空つぼの贋作。

グラデーション・エア  
投影魔術

サーヴァント特有の聖杯とマスターから供給されて繋がる魔力によつて編まれるエーテル体を基礎とした生前の全盛期の武装を再現して実体化するものとも異なるそれは、その男サーヴァントの本来の宝具から零れ落ち、生み出された小さな幻想。世界による修正力に飲まれることなく、消えずに、その武勇を立てたと思われるオリジナルと同体の

姿を現した。

無名ながらも、通常の剣とは逸脱した神秘を宿すそれは、格が低くも何処かの英雄の手によつて鍛え上げられ一つの逸話として語られた宝具の贗作なのだろう。本来、儀式に必要とされる、代わりの利かない素材や触媒の代用として行使される投影だが、男の手によつて造り出され、繰り出されたその剣と弓は、中身が空の偽物とは思えない程現実<sup>ニ</sup>に在った。

その剣を右手に男は更に、その剣の形を役割に適した物へと変化させる。

より細く、

より速く、

より正確に標的を捕えるための武器、弓に番えるための『矢』としてその容を変えた。敵に突き刺す剣尖は、返しの付いた鎌<sup>やじり</sup>に。

叩き斬る刀身は、本来、櫓や竹を素材とする篋<sup>か</sup>に。

手に取るための柄は、矢を安定に飛ばすための羽に。

剣によつて作られた矢を、黒い和弓の弦<sup>つる</sup>に構え引き絞るその姿は、正<sup>アーチャー</sup>に弓兵。三大騎士クラスの中でも強力な宝具を持つことが多い英霊のクラスであり、長距離からの狙撃を最大限に生かせるよう単独行動のスキルを与えられる英<sup>サヴァント</sup>霊だ。



長距離の標的を捕える為のスキル、鷹の目を発動させたアーチャーは、灰色の瞳を開き、街灯が灯る通りを見る。

マスターの命により、マスター候補とされる少年に向けて狙いを定め、アーチャーは矢を放つ。致命傷でなければ好きにすると良いと命じられたアーチャーの矢は、決して実力を抜いたものではなかった。

投擲、射出、を主とする武具の扱いで一番難しいのは、死なないように武器を放つことなのだから。

それ故その閃光の射出は、雪雲の覆う空を流れ星のように静かに、一瞬だけ線状に輝くと、目標の通る地点へと襲い掛かった。

間桐邸を離れ、雪が降り積もる帰路を進む久郎は、理解するすることなく、ただ衝撃に従い倒れこんだ。

積雪していたおかげか、顔面から地面へと強打したのにも拘わらず、怪我はどこもなく、肌の露出している顔や服の間に入り込んだ雪が体を冷やした。

否、一か所だけ、とても熱い。違和感が、久郎の冷静な思考を奪い、混乱へと導く。その場所を目で見えて確認しようとして立ち上がろうと体を振るも、左下半身から激痛を伴う刺激が走る。

動かすことができなかつた左足を見て、細い棒のような物が生えていることに気付いた。否、それは久郎の左足を貫いた敵の射撃。その銀色の矢に地面ごと射抜かれて動くことが出来なかつたのだ。

よく見ると、矢が突き刺さつた傷口から赤い血が、ズボンとコートに染み込み、吸い切れなかつた血の滴が雪を赤くする。

貫通しているが、運よく動脈には傷がないのか、吹き出すような出血はないことを確認して矢を抜き一先ず落ち着こうと手を伸ばし……。

「!? つ痛い」

続いて、第二射が右の脛脛を貫き両脚の動きを殺した。久郎は、身を守ることも忘れて相手の正体を探ろうと突き刺さつた矢の角度から放たれた方向を威嚇するように睨み、目を赤くする。

——目を凝らす。

「な!？」

奇襲が成功し、両脚の動きを封じたアーチャーが続いて対象の右腕を射ようと三本目を番え、標的である少年に狙いを定めた視界に少年の赤く輝いた双眸が彼を貫いた。目が合ったというのか、人間の視力で？

アーチャーは、まさかと思い即、否定した。もしあの標的の少年が予想通りの人物であるのなら、それこそ有り得ない。と、再び狙いを定め、引き絞った第三撃目の矢を放ち、念のため現界を解き、霊体化し、マンシヨンの屋上から飛び降りた。

雪明りであろうとも暗闇が広がる夜景の奥に、赤い服を着た弓を番えたサーヴァント、アーチャーを捕捉したものの、再び矢の餌食となってしまう。

「……………っっ」

完全に後手に回ってしまった。

痛みに悲鳴を上げることなく、息の詰まったような呻きを上げる。久郎は、両脚と新たに右手に突き刺さった三本の矢をそれぞれ恨めし気に睨み、間桐陣営の警戒を解いた事と、マスターであることを隠すためとはいえ、ライダーを衛宮の洋館に置いて来たことを後悔した。と同時に疑問に思った、何故止めを刺さないのか？ と疑問に思う。

第一射撃を食らった後直ぐに、自分の姿を隠蔽する「目を隠す」魔眼を開眼し損なつた時点で、衛宮久郎は手遅れであつたのだ。そのため簡単には死なない自分の身を利用して、一度、致命傷を負つてその場をやり過ごそうと、態と何もせずに倒れ込み続けていたが、いつまで経つても、決定打が来ない。

アーチャーが射つた矢は、不可解な点が多い。急所が多い胴体ではなく、手足のみ。行動を阻むだけなら脚の第一矢で済む。何らかの脅迫かと予測を立てながら、一番手に取りやすい右手を貫いた矢に手を掛けようとすると……。

「待てよ衛宮。そこを動くんじゃないよ、さもないと」

久郎が間桐邸を出てから尾行してきた慎二が古書を片手に、調子よく久郎の視界に躍り出て来た。

鈍い、何かの大きな機械やエンジンの機動音に似た振動が複数、響き渡つた。間桐の十八番、怪蟲を使役する魔術。改造し、改良され、改悪したその蟲たちは、より生物を食らい易くなるようにその姿を凶悪に、より食欲に対し従順に仕上げられた間桐の歴史

そのもの。

「そいつらの餌になるぞ」

騒がしい羽音と、唯人肉を食らうだけに特化した顎を鳴らす耳障りな音が雪夜の冬木を冒流した。

慎二に対して警戒を強め、魔力を込めようとすると、久郎の周囲を停止飛行している蟲が一斉に警戒するような音を鋭い顎から発し。久郎が、魔力を込めるのを止めると次第に静かになった。

「だから動くなって言っただろ？ 目の前の血肉の匂いで唯でさえお預けを食らっているんだ。お前が下手に暴れようとすると、こいつらも興奮して僕の制御から外れちゃうんだからさ。大人しくしてろよ」

「っ、慎二イ」

その傲慢な態度に久郎は、矢を貫かれていない左手を握り、拳を作りながら目を赤く輝かせ、怒気の籠った声で名を呼んだ。

「ブアハハハハハハハッ。良い様だなあ、衛宮あ？」

「答えろ慎二、俺を襲う理由は何だ？」

慎二は、何も出来ずに地面に礫にされながら怨み言を吐く姿が、滑稽に見えたのか愉快に笑っていた。しかし、久郎の蔑みの混じった発言に、にやけた顔を止めて倒れている久郎の足元にまで歩を進める。

「あのさあ、衛宮。お前、自分の立場分かっているのか？」

慎二は、久郎の足に突き刺さる矢に手を添え、握り込む。相手に対する絶対的な優位状況に位置する事で得た嗜虐的な思考と、久郎の氣に障る発言による癩癩の二つが混ざった彼は、そのまま矢に刺さった足の肉を抉る様に動かし続けた。苦痛に歯を食いしばる久郎の姿にいい気味だと更に大きく矢を左右に動かし続ける。

「ええっと、何だっけ？ どうして僕がお前を襲うのか、簡単なことだよ。今のお前は僕より弱いからさ」

慎二は矢を散々弄り込み動かすと、満足したのか。久郎の傷口から出た血が、雪に染み込んでいる様を見て上機嫌に語りだした。

「僕はねえ、今この冬木で行われている、ある儀式を取り締まる三つの御家の一角である間桐の代表として参加しているんだ。過去の英霊の現身を現代に呼び出し自分の使い魔として従わせ、殺し合う『聖杯戦争』さ!!」

「……聖杯、戦争？」

うつ伏せに蹲ったまま久郎は、慎二の言葉を繰り返し、その慎二の言葉の矛盾に疑問

符を乗せた。

「ああそうだよ。つと言つても、もう魔術師じやないお前なんかには関係ないことだけだよ」

慎二は、その疑問符の意味を無関係であるが故のモノと受け取り、侮蔑に久郎を見下しながら、語り続ける。すると、久郎を射止めた赤い外套を着たサーヴァント、アーチャーが慎二に付き従う様に彼の背後から現界した。

「こいつが僕のサーヴァントだ。こいつらは、マスターとなった人間からの魔力を動力源に活動するんだけどさ。それだけじゃ足りなくなつた場合、どうすると思う？」

慎二は、手に持った古書に手を添えて、ページを捲り、特定の箇所を指でなぞると、久郎の血が広がる足元と右手の周囲に、学校に潜んでいたのと同じ線虫や蛭のような蟲が体をくねらせながら、赤い雪の血を啜り出した。血液中に込められる魔力を直接集めているのだ。

「他の人間から奪う」。単純だが、確実な方法だな」

「そう言う事さ。」足りないなら他から持つて来て補う。魔術師なら誰もが思い付くことだ。にしても、魔術師でもないくせに、よくわかつたじやないか。封印指定されて魔術師として活動できない衛宮の割には、だけど」

その、慎二の不快な態度に久郎は、要らぬ諍いを避けるために、管理者である遠坂家

だけでなく間桐家にも自分の封印指定のことを内容を伏せたとはいえ伝えたのは失敗であつたと、舌打ちをした。

『封印指定』。それは、魔術師にとって最高の称号にして最悪の障やつかいじ害であり、一般人には、理不尽にも等しい自他が含まれる人災であつた。

表向きは、根源を目指し研究する魔術師がその成果に於いて、根源に到達し得る程の技量を確立させたことで、他の魔術師から研究される対象となることを指す。

しかしその実体は、次世代へと受け継がれることのない再現不可能な神秘の収集を目的とした。『管理』を盾に動く拉致と変わり無い有様。一代限りの特殊な体質や魔術を始め、異端狩り専門の聖堂教会埋葬機関に目を付けられた魔導を完全に抹消される前に資料（魔術刻印）回収し、神秘の秘匿を優先するためには、人命など二の次であつた。

保護という名の幽閉、

保存の名目による、安らかな死すら許されない標本の維持、

魔術刻印の徴収や、臓器の一部提供などは、まだマシな方で。最悪の場合、問答無用で脳髓を生きたまま取り出され、ホルマリン漬けの処理後、永遠に解析され観察される末路が待っている。

当然、多くの魔術師は、封印指定を受けた後、雲隠れを決め込み細々と逃亡生活を送るか、特定の力ある家柄に取り付き、封印指定を逃れる。



つまり、封印指定を受けた者とは、総じてその能力が、希少か、強力かのどちらかということ。慎二は、反撃を受けないことから、久郎を非戦闘向きである前者のタイプと判断し、嘲笑しながら大きな態度で振る舞い、慢心し切っていた。

「……ツフ」

赤い目の輝きを変え、慎二の思考を八割方盗み取った久郎は、慎二の浅墓さに呆れ、鼻で笑う。当然、自分が絶対的に有利であると疑わない慎二は、訝しげに久郎の矢の刺さった部分に近い位置を踏みつけると、激情に苛立つ。

「何を笑っているんだよ!!」 衛宮のくせに、衛宮のくせに、衛宮のくせに!! 大体、どうやって遠坂と慣れ合ったかは、知らないけどさ。『バケモノ』が魔術師とはいえ人間と仲良くするのはどうかと思うよ。はつきり言ってお前じや釣り合わないんだよ!」

その言葉に久郎の顔から、感情が止まった。静かに怒るのでもなく、激しく憤ることせず、確認するような口調で慎二に問う。

「おい、お前。……今なんて言った?」

「だからさあ、衛宮じや遠坂には釣り合わないんだよ。どうせ、お前の親や家族もふざけてるぐらいぶつ飛んだバケモノ」

慎二の繰り返される侮辱を聞いた久郎は左手を懐に引き寄せ、ジャージ服の中に隠し

マルティーン・レブリカ  
 ていた魔力封じで封印を施した石を握り込み、その封印の一部を解く。

赤い稲妻が走り、アーチャーの矢が脆く錆びついた楔のように崩れ始めた。

「!? マスター」

久郎の異変に気付いたアーチャーが、慎二の首根つこを掴み上げて後ろに引き下げると陰陽剣、干将・莫耶を投影し構えて慎二を守る壁となった。

「俺を、オレ達をバケモノと呼ぶなああああああああああああ」

「ヒイヒイイ。なんだよあれ!! 僕は聞いてないぞ!」

バネのように立ち上がるのと同時に、豹変した久郎の怒りの咆哮は、殺気に混じり、慎二を委縮させ。アーチャーを警戒させるのに十分な効果をもたらした。

自らの秘儀を晒すことと成ろうとも、久郎は構わず傷の治療と目の前の敵に対抗できる氷鎧兵ゴレムを複数、雪を素材に錬成する。英霊相手にも致命傷を負えるよう久郎が賢者の石から無尽蔵に溢れる魔力で強化された甲冑が月に照らされた水晶のような輝きを放ちながら、武骨な氷鎧兵ゴレム達は手に大剣、長槍、短槍、殴打杖メイスマ、拳ナックル、鏢ルバスター、戦斧ハルバート、近中距離

の武器と動かすための仮初めの命を与えられる。

To create a do it a p r i e d t o s t r e n g t h e n  
 「尖兵を先行、武器を用いて敵を駆逐しろ!!」

久郎の詠唱を皮切りにアーチャー目掛け、長槍の氷鎧兵ゴレムが駆け抜けながら、槍を振るった。しかし、数多の戦場を駆け抜けたであろうアーチャーは、弓兵らしからぬ剣士

然とした構えで以つて、両断するかと思われた槍の刃を黒の陽剣、干将を用い弾いた。そして長槍の氷鎧兵ゴイレムの後ろから続いて行進する戦斧の氷鎧兵ゴイレムが大きく跳び上がり、アーチャーの頭蓋を西瓜のように叩き割ろうと振り上げた。それを見逃すアーチャーではなく、白い陰剣、莫耶を鈍のように投擲し戦斧の氷鎧兵ゴイレムの両腕を破壊した。飛来した莫耶はそのままブーメランのように旋回しアーチャーの手に舞い戻ろうとする。しかし、持ち手を破壊された戦斧の氷鎧兵ゴイレムは振り上げられた姿勢のまま重力に従い落ちる前に壊れた腕を引き伸ばし、歪に伸びた手先で直接戦斧を絡め取るとアーチャー目掛け打ち切る。

本来遠くの標的捉える遠隔透視の類似スキルである鷹の目を持つアーチャーは、間合いの伸びた戦斧の先がマスターである慎二ごと巻き込み兼ねないと、新たな投影や左の干将での迎撃ではなく、何が起きているのか理解が追い付いていないマスターを小脇に抱えての後退を選んだ。

「……!? 何逃げているんだよ。アーチャー!! 早くもう一度、衛宮を跪かせろ!!」

僅か五メートルであったがサーヴァントの驚異的な通常の数十倍での高速移動を体験し呆けていた慎二は、移動の余波で舞い上がった地面の雪が肌を冷たく溶けた感覚と、氷鎧兵ゴイレムを困うように配置した久郎との距離が先程より遠くなつた視界を見て漸く理解し、自分のサーヴァント、アーチャーの行動を叱責する。

「驚いたな。即席のゴーレムに魔力による強化は当然ながら、敵性排除の命令だけでなく、自動再生を利用した状況に合わせた構造の形状変化まで術式を構成インストール入力しているとは」

慎二の喚き立てながらに出された命令を受け入れたのか、拒否したのかわからないが、アーチャーは慎二を地面に下し、空となっていた莫耶を投影して双剣を構えると、純粋に相手の魔術の腕に『警戒』の評価を交え、氷鎧兵ゴレムの完成度を高く格付けた。

「人でも、生物でもない物質なら、傷を付けることなく簡単に基礎構造に手を加えて間合いを変えられるからな」

久郎が、アーチャーが舞い上げた雪を頭に被って激怒していた感情が外面だけでも冷えたのか、近接戦闘型の氷鎧兵ゴレムを自分を囲い込むように配置しながら、アーチャーの肩を検見し、血に染まった外套を訝しげに眼を細める。慎二を狙った戦斧の刃先は、確実にアーチャーの肩を切り裂く程の位置に届いていたのだ。

強化の魔術を施した攻撃が通じた。このことに、久郎は疑問に持つ。対象の思考、記憶を盗み読む『目を盗む』魔眼がアーチャーに通じなかったのだ。無論、動作や感情程度の情報は閲覧できるのだが、肝心の記憶が一切見えない。隠されているわけでもなく、無いのではなく、見えない。干渉そのものを阻害する礼装を持っているのか、そう誤認させる技量を持っているのか、アーチャーの三大騎士にあるまじき最低ランクの対

魔力を突破できないことに疑問を持った。

「ご無事ですか、マスター？」

久郎が、アーチャーと睨み合って互いに相手をどう仕留めるか、警戒していると、ライダーが釘剣を構えながら久郎と氷鎧兵ゴレムの前に現界する。サーヴァントは、令呪とのレイラインからマスターの状態をある程度感知することが可能であり、危機を察知することができるのだ。おそらく時間的に、久郎がアーチャーの矢で射貫かれた時点で異変を感知し、様子を見に来たところに止めの溢れる様な赤い魔力の稲妻が地面から生え、急ぎやって来たのだろう。

ライダーに安否を聞かれ、久郎は改めて自分の恰好を見る。前方は顔以外雪塗れで黒い草臥れたコートは両脚と右手から血を浸らせていた。

「無事、とは言えないな。間桐陣営にまともなマスターがいらないと思っていたところに奇襲を受けたが、怪我はもういい。治ったから戦闘に支障はない」

「分かりました。今後は外出の際、常に同行させて貰いますが構いませんか？」

「緊急時以外は、霊体化して話し掛けるもの控えるのなら問題はない。元々半数以上のマスターに顔を見られた場合は、そうして貰うつもりだったからな」

「なんなんだよ、衛宮!! 令呪も無いお前にどうしてサーヴァントを従えられるんだよ。答えろ!!」

「答える義理もない相手の質問に、答えるつもりはない」

敵を前に、戦い後の話を進める久郎とライダーに痺れを切らした慎二が、アーチャーを押し退け、久郎の手を指さしながら激昂するも、久郎はその返事にまともに取り合うつもりはないのか、慎二を見ることがなく服についた雪を払い落としながら切り捨てた。

「ふざけるなよ。魔術師でもマスターでもない奴が、生き残れるほど聖杯戦争は甘くはないんだよ」

乱暴に古書を開いた慎二は、先程と同じように特定の箇所をなぞり、怪蟲達に指示を出し久郎目掛け喚ける。

しかし、ライダーが手にした釘剣とそれに繋がった鎖を巧みに操り、怪蟲達を一通り一掃するとそのまま慎二を仕留めに向かう。

甲高い金属がぶつかる音が、慎二の無事を意味した。アーチャーが、干将・莫耶で迎え撃つたのだ。

ライダーは、再び両手の武装を放とうと、敵対したマスターに投擲を目論むも、アーチャーの流れるような双剣の動きに邪魔される。

「退きなさい。あなたに用はありません」

「そうは、行かないな。君がその少年に従っているように、私にも彼を守る理由がある」  
戦いの合間に口を挟みながらの攻防に、ライダーは陰陽の剣を振るう赤い英霊相手に

まだ殺せていない、と焦りを出していた。

久郎との感覚共有から、相手のサーヴァントが自分をはるかに下回る脆弱な英霊であることは一目瞭然であり、出会った最初の頃は大した脅威を感じずに理性を捨てた狂戦士として召喚されている方が、まだましかと思われる程であった。

しかし、それは大きな間違いであった。赤い英霊は、筋力のランクの上では、最強と最弱の応戦であったが、戦闘においてそのようなものは、無意味なものだったのだ。

本来、アーチャーの双剣よりも小回りの利くはずの釘剣を持つライダーが、敏捷の差が命取りとなる白兵戦でアーチャーと拮抗しているのだ。

何故、ステータスが大きく下回るアーチャーがライダーとまともに打ち合えているのか。その絡繰りは、彼が手にしている陰陽剣、干将・莫耶である。この宝具は、中国の伝説に度々現れ、その逸話を後世に残しており、その中に、怪異を滅する英雄が所有する退魔刀としての伝承がある。アーチャーはこの伝説に肖あやつてサーヴァントという怪異に絶大な効果がある対怪異用宝具として投影したのだ。無論、あくまで数多くある逸話の一面をそのまま転用するのは、本来の持ち主の身でないアーチャーには適わず、精々投影の負担の割に護身用具として適している程度のものだ。

しかし、怪物メデューサを真名に持つライダーは、自己封印・暗黒神殿で魔性を一時的に封じているものの、その正体は人の世から外れた怪物に身を堕とした地母神であ

る。皮肉なことに、彼の陰陽剣と相性が最も悪いのだ。

ライダーが、慎二を狙おうとすれば、アーチャーは、ライダーの身に刃を向け、そちらに気を取らせて慎二に手出しさせず、彼女がアーチャーに戦いを挑めば、自分の身を守るために防御と回避に徹していた。

その動きは、ライダーに比べれば愚鈍で、彼女の目で追える程度のものだが、動きに驚くほど無駄が無い。最少、最短に限りなく効率的に幾多の戦場を駆け抜けて培われた戦闘技術は、その体を使用し機械のように正確にライダーを足止めしていた。

そう、逆に言ってしまうえば、アーチャーはライダーを足止める以上のことは出来ない。見た目は、如何に互角の戦いに見えようにも自力が余りに違う。延長戦になれば、どれほどの技量を収めた英霊であろうと、魔力がなければ動けなくなり、最後には消滅する。

「いいぞー！ アーチャー、そのまま衛宮のサーヴァントを殺してぶっ飛ばせ!!」

そんな、正規の魔術師<sup>マスター</sup>であるのなら分かりきったことを、慎二は考えられずにアーチャーに戦いを命じ続ける。彼にできる事と言えば、アーチャーを囚にして大人しく間桐邸に逃げ切ることなのだが。それすら判断できないのか、ライダーとアーチャーの戦いを高みの見物に一人興奮していた。

慎二の様子を見た久郎は、溜息を吐きながら後、数分で片が付くと予想立てて再び



氷鎧兵に魔力を送った。

「慎二、悪いことは言わない。今すぐ令呪を使い切るか、教会に譲渡するかしてマスターの権限を放棄しろ。出ないと、俺はお前を強制的に敗退させることになる」

二体のサーヴァントが、消化試合をしているのを見守っていた久郎は、氷鎧兵に新たな仕込みを済ませて、慎二に警告を発する。

「だから、何で、衛宮が僕に指図するんだよ!!」

久郎の強者の善意は、慎二の愚劣な反意によつて振り払われ、その返事は人を食らうための大きな、蜻蛉か蜂を基盤に改造された怪蟲の嵐であつた。

久郎は、近接の三体の氷鎧兵を素材に隙間無い球体状の障壁を張つて身を守るも、数多い怪蟲共が障壁に降り立ち、鋭い顎を喧しく鳴らしながら氷の壁に突き立てる。氷球に群がった怪蟲達の様は、先に氷壁に爪を立てる仲間を足場に、さらに一回り大きな蟲の鞠を作り、死体に群がる蠅のように覆い尽くしていた。

「ハッ。いつまで、そうして臆病な亀みたいに引き籠つているつもりだよ?」

呆気なく動きを封じた手応えの無さに相手を鼻で笑うと、怪蟲に覆われて姿が見えな

くなつた久郎に慎二は、蟲の顎が氷壁に突き立つ音を聞きながら敵を追い詰めた大將らしく嘲笑う。

「亀？ いや違うな……これは」

蟲と氷壁に阻まれた向こうから、乾いた拍手の音が一つ、響き蟲が一匹残らず、氷壁の形状を変化させて作り上げた細い針に貫かれる。蟲を貫いた氷の針は、ゆつくりと怪蟲一匹一匹に沈むように、薄くなつた氷壁の一部となり再び元の防護壁となつた。

「山嵐だろ？」

「……は？」

一瞬の間だつた。慎二は、氷壁を伝うようにずり落ちる怪蟲の死体を茫然と見ていた。現実を理解せずに、夢を見ているような無様な様子は、そう長く続かず、慎二は古書を片手に怪蟲達に命令を下すも一匹たりとも動くことはない。

「行け！ 行け！ 行けよ!! クソつ、どういふことだよ!?! なんて爺ジジイの用意した蟲共が、あんな細い針に貫かれた位で、くたばるんだよ」

「無駄だ慎二。蟲の頭部から腹部に連なる神経節を全て水と二酸化炭素に分解した」  
最低限の知性を備えた脳を奪われた蟲は、キチン質の外殻に覆われた肉塊に変わつていたのだ。こうなつてしまえば、もう使い魔として機能することは叶わない。

氷壁の素材から外れた大剣の氷鎧兵ゴーステムが、刀身をへたり込む慎二の首筋にあてる。

「衛宮に、負けた。この僕が？」

「慎二、あの二刀流のアーチャーに戦闘を止めるように指示しろ。そろそろあいつ等の方も、決着が付く」

金属音が響き火花が散る二体のサーヴァント、ライダーとアーチャーの戦いを見ると、アーチャーの肩にはライダーの釘剣が刺さり、首には鎖が巻きつけられていた。決着は目に見えて自分たちの劣勢であった。

認めたくない。聖杯戦争に脱落することを

信じたくない。今まで魔術師として終わっている久郎を自分のサーヴァントの餌としか見ていなかった奴に返り討ちにあったことなど

受け入れたくない。所詮、正規の魔術師として生きることのできない事実を

そうだ、その現実を全て壊すために。塗り替えるために、本来あるべき形に直すために自分は、代わりに聖杯戦争に参加したのだ。決してこのような敗北の煮え湯を吞まされるために、アーチャーと契約を交わしたつもりなどではない。

慎二は、氷の剣から流れる冷気と久郎の通告を無視し、古書を強く握った。

「アーチャー、『絶対に僕を助けろ』!!」

「な!？」

慎二の命令を受けたアーチャーが、ライダーとの交戦を中止し、左手に持った黒の干将で鎖を絡め取り、地面に縫い付けるように柄を足で踏み込み。肩に刺さった釘剣を引き抜き、ライダーから離れ、慎二の元へ向かい大きく跳躍した。

当然、それを許さないライダーは、干将が縫い付けている鎖の釘剣から手を離し、アーチャーの後を追った。しかし、アーチャーが虚空をなぞり出現させた投影の刀剣、七本が行く手を遮る。

慎二の元に降り立ったアーチャーは右手の莫耶で氷鎧兵を破壊すると、振りかぶったまま、久郎が張った氷壁目掛け投げ付けた。

久郎は急ぎ前方の氷壁を厚く形状変化を施し、それが、久郎の外傷を抑えることとなった。

飛来する刃を受け止めた氷壁が爆発し、無理やり壊されたことで久郎の魔術回路に負荷が掛り身じろいた。

ブローケン・ファンタズム  
壊れた幻想

それは本来、相手にぶつけて壊すことで宝具内の魔力意図的に暴走させる、一回限りの捨身技。英雄のシンボルである宝具の破壊は、その生涯を遂げた半身の破壊と同義のため、身を裂くような精神的苦痛を伴うが、アーチャーの手にした宝具は彼の投影魔術

で代用している量産品。

ミサイルように放たれた莫耶は、膨大な魔力の爆発を起こし。久郎とライダーの視界を奪う爆炎と煙幕が晴れるころには、慎二とアーチャーの姿はなかった。

---

マスター：間桐慎二？

クラス：アーチャー

属性：中立・中庸

パラメータ

筋力：E

耐久：D

敏捷：C

魔力：D

幸運：E

宝具：E〜A++

クラス別能力

対魔力：E

単独行動：C

保有スキル

千里眼：C

魔術：C—

心眼（真）：B

宝具

アンリミテッドブレイドワークス  
無限の剣製

## 12 失考の対談

「……………」

下校の雑踏の中。衛宮久郎は、学校の自分の靴箱に入っていた外履きの上に置かれた薄桃色の便箋に目を奪われ、二十秒ほど動かずに上靴を脱ぎ掛けた右足の爪先を立てて踵に手を掛けようとする姿勢のまま固まっていた。

昨晚、慎二を取り逃がしたその後、久郎は彼らの追撃を行わずにライダーと共に衛宮の洋館へと戻り、血を吸ったジャージとコートを引き剥がして洗濯機でも落とせない汚れと見て錬金術を使い血痕を分解してアーチャーの矢が突き刺さって、破れた個所を再構築し修繕し終わると、戦闘で雪に塗れた為に冷えた体を温めるためにそのまま沐浴した。風呂から上がり、寝室でライダーに朝まで屋敷の敷地内で見張りを頼み、これからの自分の行動を考えながら意識を落とし眠りに入った。

朝、起きると昨夜の戦闘による昴ぶりがまだ残っていたのか、まだ夜空が白む前の四時過ぎに目が覚めていた。

朝食を作りながら、学校で慎二と詳しくお互いの情勢を把握して、あわよくばアーチャーを自害させるなり契約を切らせるように説得を試みようと思ったのだが、いつも

朝食の手伝いに来る、慎二の妹である桜が、家の事情で今日から休むということを担当の藤村から聞き、学校に行くと案の定間桐兄妹は二人とも欠席していた為、上辺だけの日常をそのまま放課後まで過ごしたのだった。

当然、セイバーのマスターである、遠坂凜に自分が聖杯戦争に参加しているマスターであることが知られているため、下手に彼女らの自尊心を刺激しないようにライダーを霊体化させて護衛を任せていたのだが、廊下で出くわしたセイバーがこちらを実在しないものを見つけたような驚き顔で霊体化させているライダーとマスターである久郎を見比べるように交互に見つめ溜息を吐かれたのが気に掛かったが、こちらを害する意思を感じられなかったためそのまま通り過ぎて移動先の教室へと向かって行った。

セイバーは、久郎が懐に五十三枚の礼装達カードを忍ばせて、いつでも魔術回路を開ける状態にしていたその重装備に呆れられたのか、凜に呼ばれるとその声に大人しく付いて行った。

学校内も特に変わった様子もなく。また、学校に仕込まれた間桐の使い魔である蛭のような線虫も、昨日慎二が戦ったのが原因か先日より大人しく建物の隙間に身を潜めて活動を停止していた。

そうして、久郎は慎二の真意を直接確認するため間桐邸に訪問しようと靴を履き変え



て手を伸ばした先に届いた紙の乾いた感触が指先を通り抜けてその実態を目で捉えたのだ。

明らかに、女性が好んで使うデザインの用紙とその置かれている場所に何か特別な意図を連想させられる。

下駄箱に入れられた可愛らしい便箋に充てたそれは、学園を舞台とした物語では定番のお約束。  
シチュエーション  
ラブレター

『恋文ですか？ マスター』

「!? ライダー……人の目がある処での念話は、控えてくれよ。というより、なんでこれが恋文だつてわかるんだよ」  
ラブレター

『聖杯に齎された現代知識の中に取りましたので……つい。ですが、変わってますね。現代ではそうして意中の方に告白なさるのですか……私の時代とはやはり違います』

固まった久郎に痺れを切らしたライダーが、霊体化したまま興味深くマスターとの感覚共有から伝わるその便箋の愛らしいデザインを見てそう呟いた。

バイザーで両目の石化の魔眼を覆った彼女は、嗅覚や魔力探知といった空間把握でそこにある何かの形までしか解らず、模様や文字といった視覚情報が伝わらない。もし、

彼女が不用意にその魔眼を開けば、視界に映る全てのものをたちどころに石化させてしまふ。そのため、久郎から伝わるその情報から状況から答えを割り出したのだが、凶星の様だった。ちなみに、ギリシャ神話の神々間の求愛では、人間以上にドラマチックでサスペンシな、昼ドラが展開される。人妻だろうが、まだ生まれてなからうが、関係なし。お前に運命を感じた。顔が好みだ。この女が生む子供を愛したい。等々浮気も家族間の殺し愛が巡っていた。

人間の方でも、求婚の条件にある程度の武勲を立てたり親同士の都合での婚姻もあり、自然恋愛で家庭を築き上げるといった過程で幸福となったという話は聞いたことがなかった。

自分とは違い、完全な女神である姉二人への求婚と共にライダーに襲い掛かってくる若者たちの中にも武勲を立てようと努力した末路を思うと切なくなるのだろう。ライダーは平和な日本の告白事情をしみじみと眺めていた。

「聖杯って、一体何を基準に知識を配っている、ん……だ？」

久郎は、聖杯の現代知識を英霊に与える基準に聊か疑問と虚脱感を覚えながら件の便箋を丁寧に開けて、中に二つ折りにされた手紙本文の内容に久郎は固まってしまう。

『マスター？』

久郎の様子がおかしいことに気付いたライダーが声を掛けるも彼は動かない。

手紙の内容は至つてシンプルに、今夜の午後六時に新都の指定された飲食店レストランで、久郎と詳しく会談を申し立てるといふものだった。丁寧は直筆で執筆された、その手紙の差出人は遠坂凛。

厭に丁寧な字で書かれた招待状とも取れるその文体には、書き手側からの滲み出る屈辱と、怒りの思いが筆圧の濃さから当人の心情を表している。ご丁寧に、文末の方には、拒むような意思や行動をした場合の報復を連想する追筆が添えられて、今新都に一つしかない、全国に多数のチェーン店を持つレストランの期間切れのクーポン券が二枚入っていた。

サーヴァントを連れて、二人で来い。

そう言外に、言われているような錯覚を感じた久郎は、黙つたまま手紙を畳み直して便箋に入れ直すと、自分の鞆に仕舞い込んでいつも通りに外靴へ履き替えて校舎を出た。

何処か、夢に裏切られて現実を思い知らされた少年は、気分転換を望むように、普段より覇気の無い力の抜けた足取りで、いつもと違う道を歩いて行く。その背中を興味深げに見守るように見ていた三つの人影があつたことに気付かないまま……。

「読んでたよな?」

「読んでいたね」

「読んでいたな」

「これってあの遠坂さんが、衛宮くんと付き合っているってことでもいいのかな？」

「そりやそうだろ。衛宮が取り出した二枚のペアチケットみたいなやつ。あたしや、あれは映画のチケットと見た!!」

「しかし、遠坂嬢が衛宮と付き合っていたという話は、てんで聞いていないが」

「何言っているんだよ、氷室<sup>ひむろ</sup>つち。恋人でもない男女が、ああして手紙を下駄箱に置くようなことをするか？」

「……罰ゲームとか、かな？」

「それこそありえないな。遠坂嬢は、人を使って高みの見物をする側であって、自分が道化となることを良しとはしない。しかし、だからと言って二人が逢引きをする仲だとは言えないが」

「なんにせよ。これは面白くなってきたぜ!! みんなに知らせてやったら明日遠坂のやつ、どんな顔をするんだろうな!」

「蒔<sup>まき</sup>ちゃん、それはちよつと遠坂さんに迷惑じや……」

「諦<sup>ゆき</sup>める由紀香。こやつは一度痛い目に合わなければ決して止まりはしない狂獣だ」

「冬木の黒豹と呼べこの野郎! いつも飄々としているミス・パーフェクトの意外な一

面を見ていたいと思はないのか由紀っち!!」

「え。そこ私に振るの!? ……えつと、見てはみたいけど」

「汝まで蒔まきの字に流されてどうする」

—— 一般人に紛れ、魔道を歩む運命を負った二人は知らない。一枚の便りが、明日の学園に噂という大嵐を呼び寄せていたことを。

『……………』

ラフレター

恋文と勘違いし、意気揚々と便箋を開き手紙の内容を読んで、現実に打ちのめされた久郎は、霊体化しているライダーと共に自分の家である衛宮の洋館よりやや外れている道を歩き続けていた。

見慣れていない道の残雪が映える風景は、新しい刺激となり、先ほどまでの勘違いも甚だしい記憶を塗り潰すのに、都合がよかった。久郎は、切嗣に拾われた後の二年間と、ロンドン時計塔から戻ってきた後の三年の延べ五年間、冬木市に居住を構えており、土地の地形

から街の道路図まで隅々知っているが、全ての景色を知っているわけではない。理由は久郎が、『』や根源を目指さない魔術使いとしては珍しく、魔術師らしい生活を送っているためだ。

自分の趣味の延長である部活動に腐心したり、工房の敷地内にある我が家に、交流があるとはいえ教師や後輩を受け入れるなどの、魔術師らしからぬ社交的行動が目立つも、神秘の秘匿を殉じて自らの魔術の腕を磨く生活リズムは、遠坂凜と同様に魔導を極めるための者達と同類の匂いを感じさせる。各魔術協会に目を付けられないようにするため大つぴらに魔法使いとして活動することはないが、礼装を使って偽名と『目を欺く』擬態の魔眼で、全く別の戸籍名と姿をして、執行者として複数の仕事を行うことも度々あった。

それでも、久郎は表社会では、無理をしない範囲で普通のニンゲンらしく振舞うことを心掛けている。

根源を目指し研究することはなくとも、魔術を極めることで将来自分の子孫や後継に、優れた魔術刻印を送ることが可能となることから、魔術の修練を怠ることはしない。そのため、久郎は自分の生活している街で地の利が有りながらも、実際にその道を通ることは今日が初めてであった。

『マスター、先程の様子からしてその文は、どこかの陣営からの通達書の類だったので

しようか?』

久郎が落ち着きを取り戻し、機嫌良く軽い足取りで歩き続けて、目に付いた誰もいない公園に入り、昨日の夕飯前Snowに雪の礼装を用いて、降らせた雪が昼間の日光によつて溶かされたのか、積もっていないベンチに腰を掛けて休みながら空を流れる雲を見ていると、手紙の中身が気になったライダーが念話を通じて話しかけてきた。

「ああ、今夜はセイバー陣営……というより、霊地冬木の管理者である遠坂とそこに居を構える魔術師として会合するらしい」

物騒な事件、事故が立て続けに起きている所為か、本来なら親子連れや雪遊びに勤しむ子供たちの姿が見える筈なのだが、この公園には、久郎しかいなかった。そのため、久郎は周りを気にすることなく肉声で霊体化しているライダーに今後の予定を語り掛けた。

『前々から、気にはなっていたのですが。マスターはどうして』

一通り、流れを聞いたライダーは、久郎のその実力に比べて大人し過ぎる行動に疑問を持ち、理由について聞こうとしたが思いもよらぬ乱入者によつて、ライダーの質問は遮られた。

「だーれだ?」

ベンチの背凭れに寄りかかっている久郎の背後から近づいてきた、小さな淑女の手に

よって久郎の視界が覆い隠された。久郎は、思考を読むために目を赤く輝かせずともその声に心当たりがあった。

「……イリヤスフィール？」

「正解せいか。この間の夜以来だね、お兄ちゃん」

イリヤスフィール・フォン・アイツベルン。先日、巨大な威圧感を持つサーヴァントを従えて現れた雪の妖精のような少女が、一人単独で魔術回路を開かずに無邪気に笑顔を見せながら、久郎の前に躍り出た。

「バーサーカーのマスター。自らのサーヴァントも従えずにどういふつもりですか？」

風下から近づかれて気付かなかったライダーが、久郎とイリヤスフィールの間に現界して警戒するように釘剣を手に持ち、鎖を冷たく鳴らす。

「あら、まだお日様が出ている内は戦ってはいけないものよ。ライダー？ それに、今の私はアインツベルンの魔術師マスタではなく、お兄ちゃんの妹として会いに来たの。心配しなくても、今バーサーカーは私の城で休ませているし。令呪で呼び出そうとしたら切るなり焼くなりすれば良いわ」

サーヴァントを目の前にイリヤスフィールは全く臆することなく、魔術師の基本である神秘の秘匿から生まれた聖杯戦争は、基本日没後に行われるというルールを引っ張り出して軽く受け流して、自分にはそもそも戦いの意思はないことを伝える。



「妹……ですか？」

ライダーはライダーで、妹という単語に反応し、たじろぎながら、バイザーに隠れた美貌を久郎に向けて確認を取った。

「ライダー、警戒を解けとは言わないが、今は霊体化をしてくれ。俺も、イリヤスフィールとは一度ゆっくり話し合いたいと思っていた」

イリヤスフィールの言葉を受け、一瞬だけ目を赤くし、その真意を探ると久郎はすぐにライダーに下がるよう命令し、話し合えるようにベンチの脇へとずれて、イリヤスフィールの座る場所を開けた。

「お隣、失礼しますね」

どこか演技じみた、しかし使い慣れた口調で謝礼を言い渡しながらイリヤスフィールは久郎の隣へと腰かける。

「イリヤスフィール、それで……どこから話そうか？」

男として、淑女レディをエスコートするのが本来の礼儀なのだが、彼らの場合、養子とその養父の実子の間柄であるため、そのように付き添い合う佇まいには未だ成れなかった。

「そうね……じゃあ、先ずはお兄ちゃんの名前から聞こうかな」

意外な返答に、久郎は疑問と驚きの表情をイリヤスフィールに向けると、それを見たイリヤスフィールは、首を傾げながら久郎からの答えを待つ。

「どうしたの?」

「意外だな」

「あら、どうしてそう思うの?」

「外部との接触を避けているとはいえ、『アインツベルン』が婿養子として迎え入れた『衛宮』の動向を調べないとは思わなかったからな」

「ふふつ、可愛いお兄ちゃん。可笑しなことを言うのね……その反応からして、貴方の養父が……キリツグが私<sup>アインツベルン</sup>達を裏切ったことは知っているようだから言うけど、キリツグの事は娘である私の方が知ることが多いと思うわ」

「だったら尚のこと、その養子についても知っているだろう?　なんでわざわざ名前なんか聞こうとしているんだ?」

互いに対面し話し合っていた久郎が疑問をぶつけた。それは、効率を求める魔術使いとしての考え方が染みついた久郎だからこそ、気に掛かった。イリヤスフィールはわざと久郎と、通学路に鉢合わせるように下校の帰路を調べ上げられるほどの情報収集が可能な権力を駆使しながら何故、個人の名前程度の情報を集められないのか?　と、

「勿論、私はお兄ちゃんの事を知っているわ。お兄ちゃんがキリツグの養子だつてことも、あの封印指定の人形師と名高い『赤』とも関わりがあることも、その二人と同じように封印指定を一度受けたことも知っているわ。全部、使用人を通じて現当主である、

お爺様が私に教えてきたことよ。でもね、お兄ちゃんの名前ぐらいは、私が直接貴方の口から聞くように思っていたの。

キリツグが、私を見捨ててまで育てようとした子供自身の口からね。

だから教えて欲しいな、お兄ちゃんの名前」

イリヤスフィールは、幼げな表情を消して真つ直ぐに久郎の目を見た後、唄うように語り出した。それは、衛宮切嗣の娘であるイリヤスフィールに残された、ただ一人の縁者との対話を望み歪んだ不器用なまでの渴望の現れだった。

「っ、……俺はクロウ、衛宮久郎だ」

久郎は、自己紹介などより、切嗣が捨てたという部分の撤回をイリヤスフィールに言いたかったが、それが逆効果になり兼ねないことは分かっていた。何故なら久郎が、先日のバーサーカーとの合戦時に一度イリヤスフィールの精神状態を盗み見て分かったことだが、イリヤスフィールの精神は外見年齢に影響されているかのように不安定なまま、歪な成長を遂げていた。二次性徴を迎える前の十歳前後の外見と、アインツベルンの女としての『教育』と『調整』が、従順な子供のような感情とホムンクルスとしての使命を果たそうとする人形としての義務感を混じり合わせ、世間の常識から大きく外れた温室育ちの魔術師を象っていた。

しいて言うならイリヤスフィールの精神は、バランスが完全に崩れていた。純粹なま

でに、自アインツベルン分のために生き、忠実自分に一族のために死ぬ。それ以外の事は、自身にとって有害か有益かを自分の物差しのみで線引きする。他者の意見や常識など度外視し、イリヤスフィールはイリヤスフィールを満たすためだけに生きていた。

しかしそれは、母親を失い帰らずの父親を待つ、幼きイリヤスフィールにとって自分の心を守る上で致し方ないことだった。

それ故に、久郎は何も言わなかった。切嗣がイリヤスフィールを愛していたことも、切嗣がずっと望んでいた抱きしめたかったのは、養子である久郎ではなく、最愛の愛妻に守ると誓った愛し子であるイリヤスフィールであったことを。

しかし、久郎は間一髪の所でその訴えを飲み込んだ。

今は未だ伝えるべきではない。久郎は、自分との約束を破った裏切り者として憎みつつも深く父親キリツグを愛しているイリヤスフィールに暖かい言葉を投げ掛けても、父親を奪った者の言葉では、イリヤスフィールには同情として処理され激情を振り回すであろうことを察し。十年前のあの日に与えられた名前のみ伝えた。

「クロウ、エミヤクロウ。西洋風に氏名を呼ぶのなら、クロウ・エミヤつてなるのね……不思議な響き」

「久郎でも衛宮でも、言い易い方で呼べばいい」

「それじゃあ……エミヤだとキリツグと一緒にだから、お兄ちゃんの事はこれからクロ

ウって呼ぶわね」

「ああ、分かったよ。イリヤスフィール」

久郎が、何か聞きたいことはと聞こうとするとイリヤスフィールは頬を膨らませて、人差し指を徐おもむろに久郎の口元を指して話そうとするのを止めた。

「待って、いつまでもイリヤスフィールって呼ぶのは無し。クロウは、私のお兄ちゃんなんだからイリヤって呼んで」

「……分かったよ。『イリヤ』何か聞きたいことはあるか？」

不意を突かれたように久郎は、魔眼殺しの奥にある双眸の視線をすぐに柔らかい、どこか懐かし気に変えながら、イリヤの要望に応えようと、イリヤの冷たく空っぽな心を兄として、彼女を誰かと重ねないように細心の注意を払いながら、他愛ない受け答えを続けて、家族として愛情を少しづつ注いでいった。

「——知らなかったわ、日本のニンジャって魔術を使わない、最新の科学を取り込

んで活動する、権力者の間Zwischen 諜spionだったのね」

「そうだぞイリヤ。さっきの手を相手の目に当ててだーれだ？ ってやつも、基本的に親しい間柄での挨拶じゃなくて一種のジョークみたいなものだからな」

何時の間にか、久郎とイリヤは、楽しそうに本当の兄妹のように語り合っていた。と言つても、イリヤが質問し久郎がその質問疑問に答えるといった、流れ作業のようなものではあるが、イリヤは言葉巧みに自分の体験したことを交えて答えてくる久郎の話を聞きながら笑っていた。

アインツベルンの八代目アハト当主翁の知識は、中国をはじめとするアジア各国の地域とアニメや漫画の世界観がごちゃ混ぜになっており。その中に、部分的に正しい知識も混ざっていたため、説明には時間を予想以上に費やした。

「マスター、そろそろ時間です」

ライダーが、ベンチに腰掛ける二人の前に現界して遠坂との約束の時間と、日没が迫ってきたことを告げた。

彼女もまた、イリヤと久郎との間に芽生えた親密さを感じており、できればこの二人の空間を壊したくなかった。だからせめてものの、心遣いの心算か、二人の仲が険悪にならぬようにと手に生前から親しんでいた武装である、釘剣を持たずに現れたのだ。

「久郎は、これからどこか魔術師を狩りに行くの?」

そう言うといリヤは、久郎とライダーに向かつて楽しんで身を乗り出してきた。

イリヤは知らないことだが、久郎は『目を盗む』魔眼で予め相手の心情を読み取ることでその人物が望んでいる境界線で話し合うことで好印象を与え、徐々にその線の枠を縮めるように適切な対応を行うことが出来るのだ。

その結果、たった数時間受け答えるだけの会話で、久郎はイリヤにとつて養い親であるアハト翁より、親しみやすく新しい親類としてその感情を向けられていた。

しかし、聖杯の器として機能することのみを追求され続けたイリヤにとつてそれは不要な物である筈だった。

人間である魔術師ちちおやと聖杯の器となる人造人間ははおやとの間の子として誕生したイリヤは、人間としての欲求とホムンクルスとしての使命との矛盾に気付いていない。もしかしたら、聖杯を完成させるといふことの意味をイリヤは自分も知らないうちに感じていたのだろう。

友人などの存在を知らない彼女にとつて、一族以外の名を知る者の分別は至つてシンプルで、敵である外の人間かイリヤのために尽くす従者サブジナントの二択しかなかった。土地の龍脈を使用した魔術の結果に閉ざされた古城の中で、今回の聖杯戦争の器として育てられていた所為でイリヤは、嘗ての両親の様に親しみ易く話し合える久郎に対して、アイ

ンツベルンの魔術師でも一族としてではなく、一般の人間らしいく、否。家族として関わり合おうしていることに気付いていなかった。

「ああ、遠坂にちよつと確認しなきゃいけないことが出来て。今日新都のレストランで待ち合わせしているんだ」

「トオサカって、リンのこと?」

「ああ、イリヤと同じ御三家の一角を担う遠坂の現頭首だな」

知っている名にイリヤは、訝しげに眉を寄せた。イリヤにとつて遠坂凜は、聖杯戦争に参戦する敵のマスターの一人でしかなく、久方振りの楽しい時間を中断される理由となるのに分不相応な邪魔者でしかなかった。

「ふーん。クロウは、こんな素敵なレディを置いて行って他の女と食事をしようってわけね?」

厭に、艶めかしく現状を言葉に表し、目が笑っていない笑顔を久郎に浴びせながら、イリヤは久郎の両頬をグシャグシャに抓った。

「ヒリヤ、ほひつけて」(イリヤ、落ち着けて)

「嫌よ、そんな約束無視して、もつと私と一緒に楽しく語り合いませんか?」

「そうは言っても。冬木の管理<sup>セカンドオーナー</sup>者である遠坂と、そこに住まう魔術師、衛宮として文面上だけで正式な形で呼び出されているからなあ」



頬から手を離し、制服の上に羽織った黒いコートの裾を掴み、話の続きを強請るイリヤを見ながら、久郎は聞き分けなく我儘を言う子供を宥める様に、それなりの理由があるのだと右手をイリヤの頭に置いた。

「!? ……じゃあ、リンと会うのは許すから。私も一緒に行っても良いでしょ」

嘗て父に同じように触れられたことを思い出し、イリヤは一瞬固まった。確か、この仕草は切嗣がずるをしてその報復にもう口を利かない等と言って、困らせた時にいつもやられていた……。

その不意を打たれた、行動にイリヤはいつも父を許していたように久郎が遠坂凜と会うことを許したが、久郎も予想外の条件を付け足した。

「それは、……あれ? 別に……問題ない、よな?」

先の手紙に書かれていたのは、指定の場所に衛宮の魔術師と遠坂が会合を行うというものであり、久郎一人来るようには、確かに指名されていなかった。イリヤは、衛宮切嗣の娘であり、こじ付けに等しいが一応この会合に出席する資格を持っていた。

「やった! じゃあ、私の車に乗って一緒に行きましょう」

久郎のはつきりした答えを待たずに、イリヤは、立ち上がって公園の外へと久郎の手を引きながら駆け出した。

「イリヤ、まさかそれに一人で乗ってきたのか?」

それは、公園から出て僅か数分の空き地に停車されていた。

一度凍つてまた溶けだした雪が残る草地の上に黒光りした、ドイツ製のベンツの運転席に乗り込んだイリヤを見た久郎は、思わずそう溢してしまった。

場違いな高級感を醸し出すナンバー付きの高級車であったが、ブランドものであると思われる紫のコートを着た少女が、キーを回して早く乗るようにクラクションの鳴らす姿はそれ以上に異様な空間を作り上げていた。中が見えないようにマジックウインドウに張り替えられているところから、外見上、十歳前後の少女が一般道路を運転するのは都合が悪いことは分かっているようだが、普通なら、アインツベルンほどの貴族としての顔を持つ資産家なら運転手を雇うのが常である。

「勿論よ。夜はバーサーカーに運んで貰うからいいけど、昼間にサーヴァントを現界させるわけにはいかないからこれに乗ってきたの」

コートとお揃いのデザインの帽子を脱ぎながら、イリヤは恐る恐る乗る久郎を見て小さく笑うとハンドルの横にある小物入れを引き出し、一枚の紙を久郎に突き出すように見せつけた。

「心配しなくても、ちゃんと免許は取つてあるし、お城の庭で散々練習していたから運転の腕は保障するわよ」

その免許証には、確かにイリヤスフィール・フォン・アインツベルン、十八歳と書かれていた。

「リン、お替りを頂いて来ますが宜しいでしょうか？」

「ええ、セイバー。ここは食べ放題だから、怪しまれない程度によそつて来てね」

久郎がイリヤの絶妙なドライブテクニクを満喫している頃、会合の場として選ばれた新都の新しいレストランにセイバーとマスターである凜は、一足先に店を訪れてサラダバーとドリンクバーのみ注文し、久郎が来店するのを待ち侘びていた。

店内は、柔らかなオレンジ色の明かりが照らしており、凜とセイバーは入店時に待ち合わせがあることを伝えて、店の出入り口の見える窓側の団体用の席をとった。夕飯時の所為か、家族連れや団体の一般客が入り雑踏が心地よく響いていた。

楽しみに料理を自分の皿に盛るセイバーの姿を見た凜は、苦笑を漏らしながらここ最近の遠坂家のエンゲル係数に危機感を覚えていた。霊体化が出来ないセイバーは、常に現界して凜の護衛をしているため予想以上に凜の魔力を消費した。それを補うという

名目の下、凜と共に食事による供給をしていたのだが、久し振りに他人に料理を作るといふ滅多にないイベントに凜は、得意の中華料理を振る舞ったのが不幸の始まりだった。その時の夕飯時はただ二人で料理が美味しいと他愛ない会話であったのだが、その次の朝、朝食を食べ終わったセイバーの様子に気付き、凜が何かあったのかと聞いたのが彼女の失敗だった。

『食事の量が昨晚に比べて少々……いえ何でもありません』

その答えだけで、凜は理解した。まだ足りないのか、と。

その後、セイバーに何故、食に拘り出したのか聞くと。現代でも、世界レベルで認められているイギリスのトンデモ料理事情は、千五百年前も同様であったと聞かされたのだ。

セイバー曰く味も、調理も『雑なもの』だったらしい。

当時の食に関して語り出したセイバーの清廉とした翡翠色の瞳が、その時だけ絶望に染まって光が失われていった様を見た凜は、慌てて台所に置かれたクツキーをセイバーの口に放り込み正気に戻して、自炊した料理を振る舞った。

その眩きの中に、前回の聖杯戦争に召喚された時のことがあり、食事が終わった後、凜が改めてセイバーに問い掛けると、セイバーが自身のマスターであった衛宮切嗣のことを語り出した。

その過程で、現マスターの中で凜が一番警戒している謎の同級生、衛宮久郎の使い魔とのやり取りの記憶が浮かび上がった。

凜は、十年前の聖杯戦争で戦死した父親の跡を継ぎ、冬木の管理者として学校にあんな神秘の塊を身代りに使う不法者を取り締まろうと、今回の会合を自分から提案したのだ。

直接渡すのも、億劫なため絶対目に届くであろう靴箱に入れた手紙を思いながら、凜はセイバーから視線を外し暗くなつた外を見ると如何にも高そうなベンツが猛スピードでタイヤの悲鳴を上げながら、このレストランの駐車場に停車するのを、あの車でいくつ宝石が買えるか考えながらストローを差したアイステイーを飲む。

そして、凜はベンツから崩れる様に出てきた久郎とその後について降車した白い髪を流した少女を見て、派手に咳き込んだ。その少女は、久郎を取り逃がしたその次の日に、いきなり戦闘を仕掛けた巨漢のサーヴァントを従えたアインツベルンのマスター……。コンクリートの地面にくつきりとブレーキ痕を残したベンツのドアを閉めた少女は、四つん這いに深呼吸を繰り返す久郎の頭を撫でながら、二言、三言語りかけると久郎の手を引きながらレストランの入り口へと歩き出した。

「いらつしやいませ。二名様でしようか？」

「待ち合わせなんですけど、先にお手洗いの方を借りられませんか？」

「かしこまりました。こちらです」

二人が、店内に入ると店員が対応し、久郎が店員に要件を言つて先ほど地べたを触つていたことを気に掛けたのだろう化粧室に入り、早々に出て、再び少女と二人店内を見渡して凜を見付けると、店員の案内を丁寧<sup>テウ</sup>に断りを入れて、凜とセイバーの席にやつて来て、深くお辞儀をして儀礼を交えた挨拶を始める。

「魔術師、としては初めまして。衛宮家六代目当主、衛宮久郎。此度の遠坂家現頭首の会合の召喚に馳せ参じた」

「これはご丁寧<sup>セカンドオーナー</sup>にどうも、衛宮くん。冬木の管理<sup>セカンドオーナー</sup>者こと遠坂家六代目頭首、遠坂凜。今回、こちら側の都合で呼び寄せに応じて貰ったことを感謝します」

乗り物酔いのそれとは違う、顔色の悪さに凜は若干顔を引き攣らせながら、形の上で挨拶を返した。

「で、そっちの小さいのを連れてくるってことは、この会合は無効とでも言いたいのかしら」

礼儀の挨拶終え、猫かぶりを捨てた凜は白い髪の少女を睨み付けると、左手をポケットに忍ばせ中の寶石を握る。

「相変わらず。品がない挨拶ね、リン。貴女が私達を呼んだのでしょうか？」

「?」

言われていることの真意が理解できない凜は、首をかしげながら、自分の向かいに座った久郎にどういふことかと視線を送ると、苦笑で返される。

「改めて、先代の衛宮家五代目当主、衛宮切嗣が実子。イリヤスフィール・フォン・アイントベルン。……つまりそういうことよ。久し振りね、セイバー」

爆弾発言をしたイリヤに、凜は、何時の間にか食事をやめて驚愕した表情のまま固まっているセイバーが箸をテーブルに落とした音を聞き、形振り構わずに頭を抱えなくなった。

## 13 疑念の解消

「イ、イリヤスフィール」

「その様子だと、覚えてくれているみたいね」

「イリヤ」

そこら辺にしておけ。久郎は、匙を落としたまま血の気を引かせたセイバーを冷やかに見つめるイリヤを嗜める。

「むー、分かっているわよ。今更過ぎたことを責めるような、はしたない真似はしないし。約束通り、この対談が終わるまでは、バーサーカーを喚けることもしないわ」

セイバーに対して棘のある自己紹介を終えたイリヤは、すぐに自分の席に座り写真の付いた献立表メニューを手にとって注文する料理を選び始めた。

何故、イリヤが潔く身を引いたのか。その理由は、このレストランに来るまでの緊張感溢れるドライブの間に、イリヤは、久郎と話し合い。霊地の管理者とその地に居を構える当主との会合に、同席するのなら遠坂と衛宮が会合の終了を宣言するまで、聖杯戦争に準ずる戦闘行為の禁止を条件に参加することを承諾したからだ。

無論イリヤは、最初聖杯戦争間のマスター同士の同盟か何らかの取引が主体かと思っ



ていたのだが、土地の利用に関しての確認をしに行くだけだということを聞き。久郎が暢気に凜の招集に応えて会合に行くこと自体、理解が出来なかつた。聖杯戦争が始まつた以上、どういつた理由であれ目の前の敵を倒せばどうとでもなると、そう思つていたので。

激しく加速と急カーブを繰り返す運転のさ中、久郎はイリヤに自分がランサーに襲われて半ば強制的に聖杯戦争に参加していることを伝え、自分の目的は勝ち残る事ではなく、生き残ることであつて今回の会合に参加するのは聖杯戦争が終了した後も参加する前と同じ生活をする為に必要な事だということを説明した。

イリヤの様に世間体を気にしない程の名門となると、魔術師が住居を構えるためには土地の利用する際の管理者とのいざこざを気にせず権力で黙らせそれでも叶わないのなら戦力で打つて出てしまふ。

それで、冬木の管理が出来るのであれば問題は無いのだが、魔術師が保有する魔術回路の本数はその地の霊脈との相性に左右される場合があり、魔術師の血脈がその土地の地脈に馴染まなければその末路は遅かれ早かれ悲惨なものと成る。

各々の霊地を魔術協会より管理を賜つた魔術師というのは一族総出で、それ相応の責任と義務を負つてその土地を外來の魔術師から守る役目を負う。

久郎は、そういった魔術師同士の小難しい柵しがらみに巻き込まれる積りは一切なく、平和な

学生生活と変装し魔術協会の執行者として稼ぐ、今の二重生活を出来るだけ楽しみたい  
と思っっているのだ。

「悪かったなセイバー。遠坂の召喚状を確認した後には、イリヤと色々話し合っつてやっつと、  
会合の間は何もしないって取り付けられたんだ」

ああ、後。俺もライダーを仕向けたりはしないぞ。そう付け加えられた言葉が、自分  
に向けられていることに最初、セイバーは気付けなかった

「……………!? あ、……………いえ。前回、<sup>マスター</sup>キリツグから騎士としてアイリスフィールの護衛を  
任され、守り通すと誓い、それを果たせずに私が敗退したの事実です。昨夜の戦いでは  
お互いに大した負傷も無かったことですし、この場で掘り返すようなことでもない」

久郎に気を遣われたセイバーは、彼が嘗て一度も肩を並べることも、お互いの背中を  
預けることもしないまま、すれ違った考えを持ったまま契約した衛宮切嗣の後継である  
ことに驚きを隠せなかった。

第四次聖杯戦争時のマスターとサーヴァントであった、セイバーと衛宮切嗣の関係は

アイリスフィール曰く、己の理想と現実のジレンマ故に、人々に戦いという名の悲劇に神聖性を生み出す『英霊』の存在そのものに嫌悪する夫と誇りを持つて人である前に騎士として戦い、剣を握るセイバーとの相性は想像以上に壊滅的なものだった。

また、セイバーの己の技量から『勝利の可能性を紡ぎ出す考え』と、切嗣の敵に『負けないように可能性を潰す考え方』の二つの意見が、両者の関係をより険悪なものとしていた。

その決定打が、誇り高い騎士であったランサーとの一騎打ちをしていたセイバーの戦闘に、切嗣が介入し、彼らの騎士道を度外視した卑劣でありながらも、確実に効率的な手段を用いて脱落させたことだった。

セイバーは、敵に呪詛怨念を掛けながら悪霊と化したランサーが消滅するのを目の当たりにし、切嗣の策に倣まり虫の息で殺してくれと懇願するランサーのマスターを自身の宝剣で以て止めを刺した後、齒を食いしぼり、切嗣に吐き出すように改めて問う。

『これほどまで血生臭い手段を用いてまで聖杯に縋る貴様の願いはなんだ?!』

アイリスフィールは言った。彼は人類全てを救うために聖杯を求めている。

セイバーとして、生前は一國を治める王として冷酷な選択を迫られたことはあった。綺麗事だけで問題を片づけることが不可能だということも分かっていた。

だが、その時の切嗣の戦局は、人の営みから外れた行き過ぎた冷徹な修羅そのもので

あるとしか思えない。

『悪行で以て成される善行など、在りはしない』

本来、万軍の代行として呼ばれた英<sup>サレフアト</sup>霊である自分に何故、戦いを任せてくれないのか。

騎士として決着を付けることを望んでいた、ランサーとの戦いに横槍を入れたことを含め咎めながらセイバーは切嗣を問い詰め続ける。

それでもなおセイバーを無視して、切嗣は彼女の言葉に答えることは無く。二人の関係はより深く溝を広げ、分厚い壁をその間に築き上げる。

ただの道<sup>サレフアト</sup>具<sup>マスタ</sup>と使い手の関係となった二人。

切嗣は、彼女の顔を見ずに呆れたように啞えていた煙草を口から離して紫煙を吐き、セイバーにしっかりと説明をするべきだと諭すアイリスフィールにのみ、その意識を向け、彼自身の披歴と血と硝煙に塗れた体験を交えて騎士王の考えを真っ向から嘲笑った。

人々の醜く争い合う戦場を見て来た切嗣の言い分は、その争いを正当化する『英雄』の存在が敗北した者の苦悩や絶望を掻き消しているという。戦いそのものに激しい憎しみを感じているといったもの。

『人間の本質は石器時代から一歩も前に進んじやいない』

そうセイバーに視線を合わせようとも、直接語りかけることもせず、殴り捨てるように言い放った。

騎士では世界を救えない。最小限の犠牲でもって、己の手を汚して、その先に救いがあるのならこの世の全ての悪を背負うことになるうとも構わない。切嗣は、御すべきサーヴァントと令呪を通した契約の経路パスの繋がりに以外の関係を決別し、結局セイバーに語りかけたのは、三度限りの令呪を用いた命令だけだった。

その冷徹下劣危険外道の爆弾悪漢魔術師殺しの養子である久郎が自分の名を呼び、朗らかに笑いかけながら謝罪する姿に、セイバーは感動を覚えた。学園内で霊体化させているライダーを連れていたところから、サーヴァントとのコミュニケーションをある程度行う人物であることは、分かっていた。だがしかし、こうも一般的な良識ある人柄であることを知ると非常に遣る瀬無くなった。

マスターと同じ、黒曜石のような目を自分の翡翠色の目に向けて、話しかけてくれた。それだけで、セイバーの保有するスキルの直感が久郎は信頼に値する人物であると告げた。

セイバーはこの会合を始める前に、マスターである凜に絶対に気を抜かずに、いつ背中を刺されるか分からない相手と話し合うぐらいの気持ちで参加するように伝えたことを後悔してしまう。

思えば、親が罪人だからと言って、その子供が親と同じように罪を犯す道理などなく、同じように、聖人の子供だからとて、善行を行うと裏付けることなど出来ない。そんなことは、故郷を掛けて身内同士で争うこととなつた生前の息子から思い知らされたというのに、なんと浅墓な思い込みだったのか。

セイバーは、メニュー表を覗き込むイリヤに注文が確定したかどうかを聞く姿を見て、嘗て、アインツベルンの森で娘と戯れていた自分のマスターの微笑ましい父親姿を幻視した。

「サラダバーと、季節の根菜グロッセを添えたラム肉のソテーをミディアムレアで一つ。……遠坂は、何か追加で注文するものはあるか？」

「いいえ、衛宮くん。私達はこの店に来てすぐに注文は済ませているから平気よ。……それより、料理が来るまでちよつとお互いのことについて、キチンと確認を済ませませよう」

セイバーにイリヤの苦言について謝罪を済ませた久郎は、店員を呼び止めて、イリヤと自分の注文を済ませた。

久郎を見る凜は、予想以上に好ましくない状況に冷や汗を垂らした。先程、自分のサーヴァントに謝罪した久郎を見た凜は、悪意の感じられないその所作故に厄介な相手だと考えを改める。実質、セイバーが彼の謝罪を受け入れてしまった時点で、この会合が霊地の管理者とその利用者の関係でなく、本来気兼ねるべき外来エミヤの方に、大きく傾いた状態で始まったということなのだから。

バーサーカーとライダー、この二体を敵に回したら、セイバー一人では勝負にならない。バーサーカーの正体は、イリヤが自信満々に名乗り上げたお陰でその真名は判明していた。ギリシャ神話の大英雄、半神ヘラクレス、その最後は自身の得物でもある、弓矢に塗るヒュドラの毒によるもの。

そして、その弱点を突く方法は大きく分けて二つ、自分でヒュドラの毒そのものを使うか、ヘラクレスの武装を逆に利用するかの方法が上げられる。

しかし、これらの方法は事実上不可能に近い。神代の時代ならいざしらず、ヒュドラほどの竜種ないし幻想種の殆んどは、自分の存在を確立させるために世界の裏側に当たる魔界にその住処を移しているため、自然とその種から採取される素材も、希少な物となる。

二つ目の方法も、肝心のヘラクレスが弓矢の使えない理性の飛んだ狂戦士バーサーカーのクラスで召喚されたため不可。

敵しい状況であつた。収獲といえ、久郎の呼び出したセイバーと同等なステータスを持つサーヴァントのクラスがライダーということが判明したぐらいで、肝心の真名は判らず仕舞い。

「? いや、俺はただ遠坂が何に對してそこまで警戒しているのかが分からないんだが」そんな、薄氷の上に立たされているように神経を張っている凜のことなど露知らず、久郎は先日より連続して攻撃的な姿勢を崩さないセイバー陣營に対する疑問をぶつめた。

「この状況からどうしてそう、いけしやあしやあと惚けられるのかしら。単純に、マスターとサーヴァントの二組を相手取かもしれない、こつちの身にも成りなさいっての！」

小さな声であつたが、凜の怒りのボルテージが上昇しているということが伝わり、久郎は苦笑いをしながら来店時に置かれたお冷のグラスを口に傾ける。

と、久郎の隣の席に座る、メニュー表の他の料理の写真を見ていたイリヤが、開いたメニュー表で笑っている口元を覆い隠して凜を流し目に見た後、小馬鹿にするように目を細める。



「リンだって同じようなものじゃない。セイバーをずうつと現界させて、対談の席に座らせているんだから」

「それは—」

反論か何か言いかける凜を制して、イリヤは続ける。

「物理保護のお守りアミユレットを髪留めにまで仕込むなんて、まるで怯えた子ぎつねみたいじゃない—」

「……悪かったはわね。貴方達の父親である、かの悪名高き魔術師殺しの話は、實際目の当たりにしている確セかな証言者イバーから聞いている以上、その脅威を推し量ってみれば、養い子を相手取るにしても、これぐらいしてこないと安心できないっての!!」

本人を前にして言うことじゃない。久郎は、イリヤに遊ばれている同級生の赤裸々な発言に若干心を傷めるも、当時のセイバーの心情を察して仕方のないことだと、諦める。偶然とはいえ、父親の矛盾した行動と理想の板挟みを知ってしまった者の一人として、ここは黙っているのが吉だと反論も否定もしないでおく。

この会合が終わったら、凜が魔術協会に久郎のことを報告する前に事情を話すか何らかの口止めをする必要があることを含めたため息を漏らした。

「安心しろよ、遠坂。俺は確かに父キリツグさんから魔術師殺しのイロハを叩き込まれたけど、理由もなしに誰彼構わずに襲う訳じゃないからな」

「全然安心出来ないフオローをありがとう衛宮くん。それって理由があれば、誰でも殺すっていう風に聞こえるんだけど？」

「そりゃ、まあ。……俺だつて自己防衛ぐらいは認めて欲しいからな。後々で話が違うと言われたら此方も困るし」

そして、久郎に名を呼ばれ余韻に浸っていたセイバーが、このままでは互いに蟠わだかまりが起きて話が進まないことを見越して、一つの提案を出す。

「……リン。なんでしたら、あなたの方のみで対談するためにイリヤスフィールと我々サーヴァントを別の席へと外せば宜しいのではないですか？」

「あら、いいわね。この対談はそもそも、あくまでリンとクロウが話し合うためのものだし、過去に因縁のある私たちが一緒だと、両者が意識せずとも牽制になっちゃうもの。霊体化しているサーヴァントも外せば、二人も円滑に話し合えるから、そうすべきね。

じゃあクロウ、少し席を外すけど出来るだけ早くお話しを済ませてね。付いてきなさい、バーサーカー」

イリヤは、久郎が自分を置いて行って、凜と二人きりなる状況が面白くないのが気に入らなかつたため、こうして同じ場所で二人の対談が終わるのを待つ分には不満はないようだ。

といつても、久郎もこういつた話は出来るだけ早めに済ませて、普通に食事を楽しみ

たいと考えていたのでセイバーの提案は渡りに船であった。

「はいはい、話の進み具合に依るけど、俺も出来るだけ急ぐから大人しくしてくれよ。ライダーも今は、遠坂よりも外への警戒をしてくれ」

義兄妹二人が話を進める傍らで、遠坂の屋敷での『衛宮』の名に対し嫌悪にも似た警戒をしていたセイバーの代わり様に凜が慌てる。

「ちよつと、セイバー!？」

「リン、これは私の直感なのですが、衛宮久郎<sup>か</sup>は、嘗てのマスターのように形振り構わずに姦計を張り巡らすことはしません。こちらが誠意を持つて接すれば、あちらもそれ相応に応えてくれる。気を抜かないように厳命した私が言うのは荒唐だが、少し肩の力を抜いて、冷静に対応すれば彼が事を荒立てることはないでしょう」

そう言い。店員に分かれて席を取ると告げて、セイバーはイリヤと霊体化しているライダー、バーサーカーを連れて少し離れた二人掛けのテーブルへ移動する。

セイバーが、何かあればすぐさま駆けつけられる場所を選んで座ったところから完全に警戒は解いた訳ではないようだ。しかし、彼女の難敵に向ける厳しい視線が、見違えるほど柔らかく久方振りの親類に出会ったかのような朗らかさが垣間見えるのが気に掛かった。

そんなセイバーの変わりように、凜は自分と同じようにその変わりように驚いている

久郎に矛先を向ける。

「衛宮くん、貴方……セイバーに何をしたの?」

そう聞いた後、凜は自分の愚問に意味が無いことに気付く。セイバーの保有する対魔力スキルはランクにして最高のAクラス。暗示による意識操作。より高度な大儀式、儀礼呪法どころか、物理的攻撃以外の魔術による一切の影響を受けないといっても過言ではない。絶対命令権の令呪の一面すら対抗しうるセイバーの対魔力の前に、現代の魔術師では逆立ちしても彼女の精神に干渉することは適わないのだから。

「え? イリヤのキツイ言葉を掛けて来たことについて、代わりに謝ったくらいだけど……」

案の定、久郎も彼女の態度の軟化に驚きを隠せず、特に何もしていないことを凜に伝える。互いに、聖杯戦争のマスターとして、サーヴァントの力量を見極める透視能力を聖杯より賜っているため、三騎士の中でも、取り分け高いセイバーの対魔力<sup>マスター</sup>スキルを見る限り、現代の魔術師が行使する魔術では、令呪でも用いない限り、彼女の意志を捻じ曲げることは叶わないことは分かっている。

「ごめんなさい、今のは忘れて頂戴」

凜は、自分が思った以上に久郎に対し緊張していることを認め、失言を取り消すよう頼み。今回の本題へと趣旨を進めることにする。

「まあ。私も今回の会合にアンタたちがやってくるとは、思わなかったし……。他のマスターを連れて来たのは予想外だったけど、其れなりの礼節を持って挨拶をしてくれたことは事実だから、そっちが妙なことをしなければ、私も何もしないからそのつもりで居なさいよ」

「あ、あああ。分かった、それじゃあ早速。今回、俺を会合という形で正式に呼びつけたのは土地の利用についての確認と言った所か？」

久郎は簡易的な認識阻害の結果を張りながら猫被りを捨てて、辛辣に睨む凜に少々粟立てながら対談へと取り掛かるように促す。

「そうねえ、衛宮くん。まずは、この霊地冬木の管理人である遠坂に何の連絡も無しに三年間も、のうのうと工房を構えていたことについてオハナシしましょうか」

「あ、それについてなんだけどさ」

最初のライダーを召喚した時と使い魔Mirrorに向かって言い放った言葉の違和感を思い出させるその物言いに異議を唱えようとするも、凜はそれを許さずに、はつきりと言いつ切った。

「あ？ しらばつくれようとしても無駄よ」

更に続けて、凜は久郎に追い打ちを掛ける。

「これまで未払いの上納金と、許可無しで入居したこと、滞在についての罰金ペナルティはきっちり

支払って貰うんだから。そもそもこの靈地冬木は聖杯戦争の——」

金に憑りついた亡者が金品を置いて裸足で逃げ出して行くような劍幕に晒されながらも久郎は、凜が落ち着くまで余計な口を挟まずに沈黙を通し、適当な相槌を打ちながら頃合いを見計らい続けた。

その説明の長さに改めて思うのが、今代の遠坂は時計塔内で見かける他家の魔術師の御曹司達とは異なる、人間臭さであつた。本来、魔術師というのはその同属に対し積極的に関わることは避けるものだ。

頭首となれば、ある程度一般社会に表向きの顔として一通りの処世術を身に付けるが、今の彼女の言葉には、裏がなく、ただ親切に説明をしていたのだ。嘘偽りなく、正しい話の内容を聞く久郎は相手を魔術師と知って、善意を向けてくる凜の口を挟むのは不躰である。

凜の懇切丁寧な魔術師としての礼節や管理者への挨拶義務などの説明が一区切りつくまで喋らせておくことにした。

「——だから衛宮くんは、魔術師として居続けるためには何を措いても遠セカンド・オーダー坂の許可が重要視されるわけ。分かった？」

「ああ、遠坂。勿論其処ら辺はきちんと理解しているし、何より『衛宮久郎』はこの冬木

の地で工房を構える許可を遠坂を通さずに既に得ている」

「どういうこと？ 魔術師がこの冬木に居着くためには、魔術協会から地脈の管理を一人任せられた遠坂の許可が必須なのよ。そんなの」

有り得ない。と続けようとした凜に、久郎はイリヤの運転に寿命を削られながらもバーサーカーを迎えにアインツベルンの森で減速した車内の中で賢者の石を使って急遽作り上げた、三年前に作成した居住許可書類と遠坂家頭首に宛てた手紙の複製を出す。

「だから、その霊地の管理を任せる魔術協会で直接許可を取って仕舞えば問題ないってことだろ？」

「……見させて貰うわ」

凜は、慎重に用紙と羊皮紙を受け取り、調べ始める。

一応、久郎の言い分には筋が通っていた。土地セカンド・オーナーの管理者と言えば聞こえはいいが、『セカンド・オーナー』とは、その名の通り魔術協会という大組織に組み込まれた中間管理職に過ぎないのだ。寧ろ、その土地セカンド・オーナーの管理者を通さずに直接協会に居住の申請を出すのならそちらの方が幾らか手間が省けるくらいだろう。

「確かに、遠坂家が所属する。ロンドンを中心とした魔術協会時計塔の契約書で間違いないわね」

「そうだろうな」

偽物ではない。

少なくとも、凧の目には差し出された羊皮紙が確かに冬木への居住を認証したモノだった。

それもそのはず、物理的にそれらはオリジナルと寸分変わらず全く同じものなのだから当然である。

久郎にしてみれば、当時書き残したモノと全く同じ羊皮紙を複製したものでも十分であつた。要は、凧にそれが本物であると認めさせればいいのだから。

しかし、二人共だからこそ、納得が行かなかつた。

凧は、この手の書類の類は過去のを含めて自分の目で一枚残らず確認し、遠坂邸の中にある工房内で先代が封印を施されたもの以外は一通り見ている。手紙の類も後見人である、兄弟子に当たる冬木教会の神父に小学生の間までは任せていたが、中学に上がる頃には、全て自分が処理していた。三年間も同様だ。

久郎は、納得してない凧の様子に煩わしさを覚える。この用紙と契約書と共に送った粗品を所持している可能性がある凧が、この手紙を見ていない筈がない。遠坂邸に送り付けたそれらを見ていないことと、今の状況が一致しない。

「なあ、遠坂」



「何よ」

難しい顔をしたまま呻り続ける凛に、久郎が思い切ってその矛盾を解消すべくその根本を突いた。

「何を触媒に、セイバーを召喚したんだ？」

「今、この場とその触媒がどういった関係性があるのよ」

「その手紙に書かれている、同封したある英雄に所縁のある聖遺物の『レプリカ』に心当たりがある。……って言ったらどうする」

疑問符の浮かばないその言葉に、凛は焦燥した。セイバーが言っていた。あの鞘は、自分の聖剣を収めるための宝具と瓜二つであったと。

触媒について、模造品レプリカを用いた場合、聖杯のシステム上、そのレプリカの製作者に所縁のある英霊が呼ばれるのが通例である。最も召喚される可能性が高いのは、そのレプリカの製作者が異色のキャスターとして呼ばれる場合。その次に高いのが、実際は存在しない英雄譚のモデルとなった人物が召喚される場合だ。

前者は、通常の聖遺物と同様に正規のサーヴァント召喚に該当される。後者の場合は、実在しない以上その英雄に関する内容や類似したものを代替として、無理矢理召喚する方法だ。この方法を使えば狙った英雄に近い人物が選ばれる可能性はあるが、非正規である以上何らかの異常イレギュラーを孕むリスクを負う。

いずれにしても、通常の模造品<sup>レプリカ</sup>では、人々の信仰を糧に語り続けられる本物の英霊は召喚できないというのが本来導き出される答えなのだ。

今回のように、偽物<sup>レプリカ</sup>で本物のサーヴァント<sup>オリジナル</sup>を呼び出せたという事態が異常であり、幸運であった。触媒である聖遺物が模造品<sup>レプリカ</sup>という事実と久郎の手紙に書かれた遠坂に送られているという粗品。

即ち。

普通なら、円卓の欠片などといった本物の聖遺物で召喚したと捉えるべき答えを。久郎は一発で、凜の使用した聖遺物である聖剣の鞘、全て<sup>ア</sup>遠き理想郷<sup>ロ</sup>が模造品<sup>レプリカ</sup>であることを見切った。

それ自体、有り得ないことだ。

衛宮久郎が送ってきたその品が、セイバーを呼ぶのに使用した全て<sup>ア</sup>遠き理想郷<sup>ロ</sup>が贋作であること知っていないければ。という例外があるが……凜は、自分の反応を見て納得した久郎の安堵の表情に対し感嘆する。

「じゃあ、あの全て<sup>ア</sup>遠き理想郷<sup>ロ</sup>は、あなたが送ってきた物ってことなの!？」

「その反応からして、物品だけは遠坂邸に届いていたみたいだな。問題は、俺が冬木に住むのに何ら問題がないことの証である契約書がないことだな」

「ちよつと待つて。衛宮くんは五年前に、魔術師の巣窟と名高い時計塔に留学して。たつた二年でそこを離れて、わざわざ日本に帰つてきたつてこと？　よく無事に潜り込めたというか、帰つてこれたというか」

当時中学生の久郎が、日本を離れイギリスにどうやって時計塔に入り込んだのか気になつた凜は、確認を含めて再度確認をする。

「俺の主治医がその卒業生で、紹介状を書いてくれたんだ。もちろん、入国時はパスポートも顔も偽造と変装を合わせて、序でにそのまま入学していたからこの顔を知っている人は、数えるほどしかないぞ」

その徹底ぶりに、凜は舌を巻いて話の続きを聞く。

「本当は、成人するまでヨーロッパを中心にいる予定だったんだけど、大ポカやらかして封印指定を受けられかけて、当時名が売れてきた武闘派の執行者派閥に身を寄せて免れたんだ。で、三年前に予定を大幅に短縮して冬木に戻つてきたつて訳だな」

久郎の語るその執行者を中心に構成された武闘派閥とは、どちらかといえば、久郎が自分のために作つたようなものと表すのが正しい。

誰一人として、本当の人間のいない、衛宮久郎が自分の魔法を用いて作成した。アイツベルンとは別方式の人造人間ホムンクルスだけで構成された組織であつた。

人の手によって生出された不安定な魔術回路の人形とは異なる、真正正銘の人型。生

命としての寿命を持たず、肉体的な死を迎えても即座に再生するその体は、ホテイ死徒とは異なる不死性を持つ。

完全な肉体であるが故に、その身には固定化された一点特化使用が常の魔術回路しか宿らず、精神が芽生えた時点で発現したその個体特有の起源属性しか魔術を扱うことができないが、製造後即時に一流の魔術師が生涯をかけて辿り着く技量を持ち合わせている。

物質化した魂が生み出す魔力を核にその存在を確立させた、人造の神秘と言えはいいのだろう。

当然、組織すら自作するとは考えられない凜は、漠然と危険な橋を渡っている程度の認識で、聞き流した。

「……………色々と突っ込みたいけど、話が拗れそうだから取り敢えず詳しく聞かないで、続きを進めるわよ。衛宮くんは、その時に間違いなく私の家に……………この二枚と同じ遠坂の屋敷に許可証と口添えのある手紙をあの手紙と同じ便に乗せて冬木の地に帰ってきた。ここまではいいわね？」

「ああ。当然、時計塔では顔を出せなかったから、手続きやらは俺の所属している派閥の連中に頼んで、直接日本に戻った後、新しい家が見つかるまで暫くは、紹介状を書いてくれた主治医のところまで厄介になっていたけどな」

「その派閥、どれくらい信用できる？」

「俺が死ぬと命じれば本当に死ぬくらいは信用できる奴らだったな。……互いに信頼し合ってるって意味だから変な誤解をするなよ」

より正確には、久郎の命令には基本的に逆らうことはない。という一方通行な使い魔とその主と同等の絶対的格差がある関係であるため、信頼も裏切りの可能性すらあり得ないだろう。

「そう。となると、配達で何らかのトラブルがあつたか。その手紙が遠坂邸のどこかで埃を被っているってことになるわね」

言い切つた久郎に凜は、ますます頭を痛める。久郎が触媒に全て遠き理想郷の偽物を使用したことを見切つた時点で、凜に送つた事実は本当であることがわかり、肝心の書類も魔術協会に問い合わせればすぐにわかることだ。この場を乗り切る咄嗟の嘘にしては出来過ぎている上に、彼にはそもそも嘘を吐く理由が無い。

完全に、こちら側の落ち度となっている。しかし凜は、自分の管理能力を疑っているつもりはなく、件の書類が届いた覚えもない。全て遠き理想郷が入っていた木箱も、解析を始めた時には緩衝剤以外何も入っていないことは確認済みのため尚のこと分らない。

「なあ、遠坂」

「なに？」

「平日に荷物が届いた場合、その荷物は配達業者が荷物を預かるのか？」

「馬鹿なこと言わないで、普通の一般家庭ならともかく。私の家は地主としても魔術師としても、それなりのものを扱うのよ。魔術に使う曰く付きの宝石や、時計塔から送られてくる父さんが遺産代わりに残してくれた魔術理論の特許収入、不動産から届く書類、他人の目にはできるだけ晒さないようにしなきゃいけないものがごまんどあるから、私が学校に行っている間の荷物は保護者代理人の兄弟子に……」

はたと。凜の動きが止まり、学園中の男子生徒を虜にしたその整った面貌を一瞬にして夜叉のように怒りを表して眼光は、認識阻害の結界を越えて視野内の一般人に悪寒を感じさせた。

時間にして三秒もなかった激怒であったが、凜はすぐに取り繕うと、聖母のような完璧な笑みを向けてその口から

「あの似非神父……コロス」

と、顔と眩いた言葉が全く以って合っていない死刑宣告を吐いた。

## 14 経路の破戒

「つたく、こゝも外れが続くとなあ……」

久郎達が会合で互いの状況について確認が終わったのと同時刻。遠坂邸に程近い、付近の森に聳え立つ築七十年を迎える西洋式の屋敷に自身の保有スキルであるルーン魔術を使用した結界を貼り構えているランサーが一人、古い館の屋根の上で肘を膝に乗せて頬杖を突きながら不機嫌に、昨晩戦ったサーヴァントに対して愚痴を零していた。

其処は嘗て、第三次聖杯戦争に外来のマスターとして参戦した魔術師の拠点。遠坂と同じ源流を持つ第二魔法の使い手である寶石命の系譜であるフィンランドの双子姉妹の魔術師が建てた別名、エーデルフェルトの双子館。聖杯の降臨に相応しい霊格の高い遠坂と冬木教会のそれぞれの地に聳え立つ片割れの一つである。

当時、双子の姉妹は共に日本の地へ根源への足掛かりとなる聖杯を求め推参した。互いに、同じ聖遺物を触媒に、それぞれ異なる側面を持つ英霊を座別クラスに呼び出し、それぞれサーヴァントを従えて本家の風格たる『戦場を華麗に駆けるハイエナ』の如く冬木の地で奮闘する予定であった。

しかし、終盤に差し掛かる前に敗退することとなる。彼女らは互いにも、敵としてそ

の家訓を当て嵌めていたのだ。

元々、当主の椅子を賭けて長年争い続けていたためか彼女らの連携は、戦いの序盤から互いの仲が悪いという理由で別々の土地に同じ別荘を建てて、最初から無いものとなっていたのだから無いものも同然。

結果、第三次でエーデルフェルトの双子は、戦況が進むに連れて互いに姉妹を如何に出し抜き勝利を掴み取るとこに腐心し、漁夫の利を狙った御三家の遠坂に出し抜かれ、姉妹は呆気無く聖杯戦争から脱落して片割れが死亡。残された双子館の処遇を生き残りは、一族の汚点の象徴であるそれに対して所有権を主張する筈もなく、帰国早々に魔術協会と聖堂教会に譲渡し、以来日本嫌いとなつたエーデルフェルト一門は子孫代々に日本の土を踏むことを許さなかつたそうな……

ランサー達がいるこの館は、魔術協会が所有している側の片割れであり。遠坂の敷地には劣るものの拠点としては十分な地脈が通っており、ランサーはここで召喚されたのだ。

彼は、クランの猛犬の異名を持つアルスターの光の御子、太陽神を父に持つ半神の大英雄クー・フリーン。その身は、嘗て疫病に侵された祖国へと侵略しに来た敵軍を相手に三日三晩休むことなく戦いに投じてなお勝利するほどの逸話を持ち。魔女にして影の国を治める王女であるスカアハより課せられた修行の果てに手にした神槍の一端



を担う必殺の槍ゲイ・ホルグと原初のルーン魔術の技能は、槍兵ランサーのみならず魔術師キャスターとしての一面を備えている程のものだ。

前半の伝承通り彼は、戦いに生きる戦士然とした当時の騎士道に通じる戦闘中毒者であり、戦う理由があれば知らぬ存ぜぬであったとはいえ、我が子を手にかけても死闘に身を投げることを厭わない。もし仮に槍兵ランサーのクラスに空きがなければ、戦闘に不向きな魔術師キャスターのクラスを蹴って、狂戦士バイサイカーのクラスに身を墮としてでも戦いを選ぶことだろう。

聖杯の呼び掛けに応えたランサーを待つていたのは、彼と同様に英雄としての資質を持つ二十代前半の女の魔術師マスタであった。気さくな彼の性格とは異なる愚直なまでの真つ直ぐな性分は、方向が正反対であるが故に互いの思考が生む死角を埋めるような良い相性を作り出しており、彼は召喚に応え彼女と契約を結んだことを大いに喜んだ。

そんなランサーの機嫌を損ねている原因は、自分以外のサーヴァントの半数が彼の望む死を賭した戦いを望む彼の参戦理由と大きく外れたモノであったからだ。

勿論、残りの半数はランサーの戦意を滾らせる豪傑揃いの英霊であり、力比べに様子見として刃を交えたその力量は申し分ない。

最初に、見えない剣を構えて真つ直ぐな太刀筋を向けてきた女騎士セイバー。

目撃者を消そうとした時に、召喚者である主人を守るために奮闘するライダー。

敷地の森の中を偵察していたとき居合わせ、偶然戦うこととなったバーサーカー。

「またあいつ等と、戦<sup>や</sup>り合いてえな」

この三人は全員、ランサーとの死闘に値する実力と誇りを兼ね備えていたサーヴァントであった。

対して、彼らと戦った後に出会った残り三騎のサーヴァントは、なまじに格こそ英雄と呼ばれるのに相応しい実力を持つているだけに口惜しい。なぜなら彼らの戦い方は彼の意向とは反するモノであり、それぞれの座<sup>クラス</sup>を兼ね備えて召喚されたが故に、一定の戦術の相違は妥協し、その特性を生かしたものであったならランサーはここまで気落ちはしなかつただろう。

柳洞寺の地脈を生かした都心の方面に魂食いの魔術を用いて神殿クラス工房を構えるキヤスター。

陣地作成スキルを十全に振る舞い、予め設定した固定砲台魔方阵の弾幕を張ってランサーを追い払った。本人は神殿の奥から出ることなく遠見と幻影を応用した影と骨で構成された使い魔を戦場に送り出すという戦法を取っており、典型的な魔術師の英霊としての猛威を奮っていたが、こういった輩はランサーの願い（戦い）とは趣が異なる。

寺の入り口で足止めを食らったため、奥に入ることは出来なかったがもし、あの魔力砲を潜り抜けた場合更に上げつない程の罨<sup>や</sup>が待ち構えていることだろう。同格の魔術

技能を持つランサーが勝利を狙うとなるとその先はキャスターとの魔術戦が待ち受けていることなど容易に予想できた。

互いに化かし合い、相手の戦略を何十手先まで先読みするそれは力と力がぶつかり合う単純なものでなく、より卑劣に冷酷に相手の裏をかく、壮大な頭脳戦……。しかし、そういつた手合いはランサーが望む戦いとは趣向から大きく外れていたため気乗りせず、また彼のマスターもキャスターを倒すのは、他陣営との消耗後に叩くという方針を決めて放置することとなり保留とした。

だが思えばキャスターの陣営はクラス属性を生かして戦いに真面目に投げようとしている分、幾らかマシであったとランサーは深くため息を吐く。

残りの二騎の内、同じ三大騎士の一角を担う弓兵<sup>アーチャー</sup>。アーチャー自身の性格もランサーの鼻につく厭味つたらしいものだったが、こちらはサーヴァント個人というよりマスターを含めた陣営からしてランサーとは肌が合わないものであった。

特にアーチャーの契約主である間桐の御曹司は、ランサーの期待を大きく裏切らせた。戦う覚悟も魔術師としての心得もなっていない、唯の素人同然の魔術回路も持たない知識だけ併せ持つ人間であったのだ。遭遇した時に自らサーヴァントのクラス名を高らかに声を上げながら攻めてきた時は、潔い相手と思ったが少しでもアーチャーが不

利な戦局に陥ると掌を返すように痲癩を起してアーチャーを罵り、更に『偽臣の書』を通じてサーヴァントの魔力を搾取し我が物顔で使い魔である怪蟲をただ突っ込ませるよう命令するだけの魔術を行使する姿はランサーを更に苛立たせた。

アレではまともな魔術回路を持ち合わせていたとしても、戦うサーヴァントの足を引つ張り令呪を無駄に消費するのが落ちであると、ランサーはアーチャーに対し同情する。

闘いそのものは、無粋なマスターの横槍が入りつつもランサーを喜ばせた。アーチャーは弓兵ながらも二刀の剣を構え、七騎中最速と名高いサーヴァントであるランサー相手に白兵戦を持ちかけて打ち合い果たす。幾許か劣る筋力を補う技量は、ランサーが舌を巻く程であった。その剣技は一流の剣士には至らずとも間合いで劣るアーチャーが三十手以上粘る剣の舞は、ランサーの闘志に火を付ける。しかし、アーチャーが振るう剣には英雄としての誇り、ノウフル・ファンタズム 貴い幻想が一切感じられないものであった。だからと言って怨霊の類なのかと問われればランサーは断じて否と答えるだろう。しかし、一流に至らないが故に愚直なまでの努力によって辿り着いた筈の剣技は、闘士としての矜持も、その努力に対する倦厭たるものもない。

自分を卑下に扱っているその振子曲がった性格が滲み出していた。

何より解せないのが、魔術師でもないただの人間に抗う事無く飄々とした顔で従って

いる点である。

戦法の幼いマスターに的確な助言を与えるサーヴァントに対し一切耳を貸さないマスター。裏切らないのか裏切れないのか、何らかのルール違反スレスレの方法で契約したであろうマスターに従いに戦う姿は歪ながらもアーチャーの意向をまるつきり無視している訳でもない様子で、余計にランサー陣営を混乱させる。

とにかく、主従共にランサー陣営は自滅を待つことにした程酷い有様だったことには変わりなかった。

極め付けは、先日ランサーと彼のマスターを狙った現代の武器としてメジャーな銃を使って狙撃を行ったサーヴァントの存在である。

魔力も込められていなかったその銃弾はランサーが生前より自身の保有するスキル、矢避けの加護によって標的であったランサーの脳天より大きく外れ近くの地面にのみ入り込む様に着弾した。

仮に当たったとしても、エーテル体であるサーヴァントの霊核には致命傷を与えない純粋な物理攻撃にランサーは、誘われているのかと狙撃場所であるかと思われるビルの屋上を目指してマスターの前に弾除け代わりに立ちつつ反撃に向かう。

その場所にいたサーヴァントは、驚くことに目元を赤い包帯で包み隠し黒いコートを

羽織った白髪の男であった。目を隠した顔から覗く肌には張りがあり、老獪な皺は無く。狙撃銃を持つ手にも鍛えたが故の無骨さはあれど老いは感じられない。

彼は、マスターとともに臨戦態勢を構えているランサーを見た後、足元に転がっていたスプレー缶のようなもの打ち抜いた。瞬間膨大な音響と煙にランサー主従は目と耳をやられる。狙い撃ちにされるとマスターを抱えて物陰へと身を隠して身を守るように覆い被さりながら相手のサーヴァントの気配を手繰ろうとすると幽霊のように忽然と消え失せてしまった。

現界を解いて霊体化したわけでもなく、煙や霞のようにランサーたちの前から居なくなつたのだ。

サーヴァント特有の気配を手繰ることも、ランサーのルーン魔術の探索にも引つ掛かれないため、深追いを諦めたランサーの機嫌は更に悪くなつた。一体何をしたかつたのか逃げるくらいなら討ち取り召したかつたと、正体不明のサーヴァントの去つた跡を詰るランサーに彼のマスターは、残つたクラスと銃器を使つた初撃を最後に雲隠れを決め込んだところから、本来ハサン・サツバーハが呼ばれる筈のアサシンのクラスに近代の英雄が呼ばれたのではないかと予想し、一先ず放置していた拠点に戻り結界を張つて工房の設立に向く土地に使い魔を放つてアサシンのマスターの方を見つけようとするも、成果は薄くアサシンらしいサーヴァントの正体も分からないままであつた。

「ランサー、出て来て下さい。不味いことになりました」

時折風に流される千切れ雲が浮かぶ星空を見ながら屋根を椅子代わりになっているランサーに屋敷の中から若い女性の呼び声が響く。ランサーは一瞬だけ霊体化し屋根をすり抜けて古めかしい様式の館内を見渡して令呪より繋がる経路を伝って自身のマスタアの元へ向かう。

「何かあったかバゼット?」

壁を通り抜けた先に、結界の起点である館の中心に胡坐を掻いた男性用のスーツを着る短い小豆色あずきの髪を持つ麗人がいた。

魔術協会より派遣された封印指定執行者にして、神代より様々な神々に仕え、その宝具シンボルを血を通して現代より伝えてきた古いルーンの大家であるフラガの入門を背負う伝承保菌者ゴッスホルダー、バゼット・フラガ・マクレミツだ。彼女の周りには、コンビニの弁当や缶詰の空き缶がランサーの刻んだルーンを阻害しない程度に散乱されているところから、どうやら家庭的スキルは皆無のようだ。

ランサーはそんな有様に見慣れたのか気にする様子もなく、バゼットの傍らに現界す

る。

「都合の悪い情報と、芳しくない情報。どちらから聞きたいですか？」

使い魔との感覚共有を止めて自分のサーヴァントを見つめるバゼットの表情は硬く、どちらも重要な事柄のようだとランサーはどちらを先にと、深く考えずに取り敢えず情報を求める。

「じゃあ、都合の悪いっつー方を先に頼むわ」

「分かりました。先ず教会の方へ先日までに召喚されたサーヴァントの情報公開を要請した使い魔が拒否の返事を添えて返されてきました」

「監督役の……言峰？　だっけか、あいつはなんて言っているんだ？」

バゼットに召喚されて数時間経たない内に顔合わせと登録に立ち会った背の高い大柄な神父を思い出しながらランサーは床のルーンの刻印をなぞる。

「一つの陣営にのみ他陣営の情報を提示することは適用されないと」

まあ、当然だなとランサーは肩を竦める。魔術師同士の戦いに何ら柵しがらみのない聖堂教会より派遣された監督役は、聖杯戦争の行く末を見守るために戦況がある程度見定められるように、七騎のサーヴァントが召喚されているのかを知るための霊器盤という礼装を教会内に所蔵しており、聖杯戦争の開戦と閉戦を知る権利を持っているらしい。

聖杯戦争を見届けるための監督役は、魔術師同士の繋がりを持たない敵対組織である



聖堂教会の者を選定することによって余計な諍いを避けている。

そのためいくら過去の仕事での顔見知りとはいえ、別組織としてそれぞれの役柄を与えられて大儀式に参加している以上、それを無視して一つの陣営のみ優遇したことが明るみになれば他陣営からの苦情と禍根が残りかねない。それ故の撥ね付けであろう。

「それで、もう一つは？」

「……円蔵山に神殿を築いているキャスター陣営に送達させた使<sup>メッセンジャー</sup>魔が問答無用で破壊されました」

言い難そうに言い淀んだそれを聞いたランサーは驚きよりも疑問が浮かび上がった。使い魔越しに今回の聖杯戦争に参加している魔術師<sup>マスター</sup>をほぼ捕捉したバゼットの見立てでは、キャスターのマスターは、彼女と同じく協会より派遣された筈の新興の魔術師ではないかと予想していたのだ。

しかし、使い魔の発する信号弾に何ら反応を示さずに神殿に近付こうとした途端、魔力弾の嵐に使い魔は塵となった。

無論前々から親しい間柄だという訳でもなく、同じ僻地で仕事を行う者同士で軽く顔合わせをした過程で、その魔術師が扱う系統故か自己意識が高く他人の意見を軽視する傾向があれど、要点は掻い摘む程の心意気はあった。

こちらの集めた情報を載せて送り付けた使い魔を確かめもせず、悉く破壊するよう

な無駄な警戒をするような慎重さとは無縁の楽観主義であつたと思つていたのだが様子はどうもおかしい。

聖杯戦争に参加するマスター同士という点では形の上では敵対するものの、この二人の役目は万能の願望機である聖杯そのものの回収である筈だ。

手柄を独り占めする算段であるなら、まあ使い魔を破壊する道理は分からない訳でもない。しかし、いづれランサー陣営を排除するのなら一度手を組む振りをして残り二体となつた瞬間に騙し討ちを仕掛ける方が効率的である。

バゼットは、キャスター陣営がそれを実行しない理由が分からない……

兎に角、交渉を行えないのは冬木に地の利が薄いバゼットにとつて芳しくない。詮索手段の尽きたランサー陣営がアサシンらしきサーヴァントの正体を知るにはキャスターの助力が必須だと考えていたのだ。

キャスター程の魔術師の英霊であるのなら槍兵ランサーとして召喚されたクー・フリーン以上の魔術で他陣営の捕捉を行える可能性に賭けていた分、戦局の停滞はバゼットを苛立たせていた。

マスター殺しと名高いアサシンについて何もわかつていないランサー陣営は、その正体とマスターの居所についての取っ掛かりが欲しいのだ。

「仕方ねえな。俺たちがアサシンと遭遇してその実力をマスターの目である程度測れた

だけでもめつけもんだ」

思考がどんどん沈む中、ランサーの陽気な声にバゼットは気を取り直して立ち上がる。とスーツを整えて仰々しく硬化のルーンが刻まれたグローブを嵌める。

「前向きに考えるのは構いません。しかし過信は禁物です」

「おっ！ 今日外に出るのか？」

部屋の壁に立て掛けられた金属質なポール型に肩紐の付いたバゼットの切り札である礼装を入れてある収納具持つマスターにランサーは嬉々として歩み寄る。

「あなたのお気に入りであるステータスが規格外であるサーヴァントを保有する遠坂とアインツベルン、それに衛宮に尾けた別の使い魔が合流して市街地の大衆食堂に三組の陣営が集まっている。これももし同盟ないし、手を組むということになった場合私たちだけでは少々心許無い。協会から派遣されたもう一人の助力が得られない以上、他の陣営と協力してアサシンを排除する他有りません」

そう、バゼットが焦っていたのは彼らが聖杯戦争の序盤から徒党を組むような動きが見られたからなのだ。屋敷の外を目指すマスターをランサーは霊体化し付き従う。

『当ては有るのかい。マスター？』

「無いという訳ではありませんが、有ると言い切るには複雑な縁だと表すのが妥当でしょう」

双子館を出たバゼットは、屋敷の庭を通り過ぎ鬱蒼とした森に掛けられている結界の一部を解きながら慎重に抜けて敷地の外を指す。

『それってどういう関係を持つて……危ねえ!!』

物理、方向誤認、人払いと次々に潜り、視覚を惑わす結界を抜けたその時ランサーが頭上に現界して自らの宝具であり武装でもある愛槍を構えて森を遠く越えた丘から放たれた武具の空気を裂く風切り音を叩き落としマスターを守る。顔横を通り過ぎた飛来物は、湿気っていた森の土を吹き飛ばし砂利の雨を巻き起こした。

標的を仕留め損ねて森の地面を抉った飛来物は、矢の形をした強剛な刀剣の数々。間違ひなくアーチャーの仕業であろう。

「無事かいマスター!」

「問題ありませんがここは場所が悪い。一旦、拠点へ……っ!」

屋敷へと向かおうとしたバゼットは、歩みを止めてしまう。なんら脈絡なく放たれた筈のアーチャーの矢は双子館へ戻る道を刃の付いた鉄の柵で覆い付くし退路を塞いだのだ。

戻ろうとするのを躊躇した彼女をアーチャーは逃がさない。

第二撃、第三波、第四射、第五弾、第六砲、第七発。次々と鉄で出来た矢がバゼット目掛け射出を続ける。矢避けの加護を持つランサーではなく容易く照準通りに狙うこ

とのできるマスターを狙うアーチャーにランサー陣営は、一度引き離された。

バゼットは肩に掛けていた礼装を荷物だと言わんばかりに地べたに放ると木々の間を縫うように飛び込み、懐より取り出した小石を手に持ち、結界に使用されたルーンと見比べる。

数個取り出した石を右手に握りしめ、残りをまた懐に仕舞うとバゼットは目的の地脈に沿って強引にルーンが刻印された石を殴り込める。その数、大きさに反した着弾音から察するに三つ。

それぞれ『*Erosion*』『*巨人*』『*世襲*』『*供物*』のルーンを刻んだ石が地面の中に埋め込まれた。  
「呑み込め!!」

彼女の詠唱と共に三つのルーン石が連鎖反応を起こし激しい発光と爆撃を森の中に生み出しアーチャーの視界を阻んだ。

それは、原初のルーンを使用したランサーの魔術に現代より語り継がれるルーンの大家フラガの魔術が無理矢理組み込まれ意図的の起こした魔術の失敗フィードバック。元より、戦闘に使う『強化』『硬化』等のルーン以外は人並み程度にしか使用できないバゼットにとつてそれ以外のルーンは、気休め程度のものだったが結界の術式を担当していたランサーのお陰で予想以上の爆発を起こせた。

神代クラスの魔術に上乘せすることは出来なくとも暴走は容易いもの。

咄嗟の思い付きであつたが、アーチャーの矢による攻撃が止んだところから目的は達成した。バゼットは、契約の経路を通じた念話でランサーに指示を出す。

『ランサー、予定を変更します。直ちにアーチャーの排除に向かつてください。矢の放たれた方向から位置は特定できませんでしたよね？ 私は一度この場を遣り過ごすので後程合流しましょう』

茂みの奥に息を潜めたマスターの指示を聞いたランサーは、最短距離を突つ切るために霊体化をしてアーチャーが立つ丘を屈指しながら思い切つた自身のマスターの行動力とこの暗闇の中自分たち目掛けて射撃を放つアーチャーの評価を改める。

「やれやれ。俺も大概だが、マスターもお前さんも相当無茶をしゃがるな」

森を覆う爆煙を払うために矢を番えたアーチャーが放とうとする矢道上にランサーは現界した。その距離およそ十七m、ランサーは意地悪く挑発するように笑いながらアーチャーのマスターを探す。

「私のマスターを探しているのなら無駄なことだ。この場にはいない」

黒い大きな和弓を持ったアーチャーは、右手に持った剣を霧散させて左右に気配を手續るランサーに無駄なことだと左へと歩き始める。

「ようやくあの坊主と手を切ったってことか？」

「いや違うな」

アーチャーは不意に止まると、ランサーの質問に受け答え続ける。

「今回は、流石に巻き込みかねないのでね。悪いがランサー、君はここで倒させて貰う」  
「漸く弓兵らしく戦うかと思つたら今度は戯言か」

ランサーは静かに、そして落胆と口惜しさを交えると魔槍を構えて怒りに豹変した顔をアーチャーに向け眼光を刺す。

「ほざくなよアーチャー！ この場で果てるのは貴様だ!!」

その怒りを受け流すようにアーチャーは笑う。

しかし、それはランサーに向けたモノではなくここで消えるであろう自分に対してのものだった。アーチャーの保有する魔力は限界に近く、慎二が時折人を襲つて集めてくる血液では到底間に合わない。

だがアーチャーの鋼色の瞳には後悔も未練もなくただ満足に埋められた穏やかな眼差しであつた、ある意味、彼の願いは叶っていたのだから。

アーチャーが聖杯戦争の召喚に応じた目的は、とある人物の抹殺であつたのだがこの世界は違つた。

彼が知り得るその場所には、他の誰かが居て。彼が知る賑やかな屋敷は、驚くほどに

何もなく小奇麗に掃除が行き届いていてまるで誰かを待っているかのよう、時が止まっているかのよう、何もなかった。

アーチャーの知る過去と大きく異なるこの時間軸では英雄■■■が生まれることなど有り得ないことが分かり、それだけでも彼にとつては僥倖であつた。一種の安心もあつたし寂しさもあつた。

故に現界し続ける理由もなく、仮初めのマスターである慎二の意識を落とした後、間桐の屋敷に無事に送り付けて死に場所を霊体化したまま彷徨っていると偶々近くにいるランサー陣営を襲つたのだ。理由なんぞ特にはない、極論だが今彼と戦う必要もなく自身の生み出す剣を突き刺し自害するのも吝かではない。ただ、このまま戦いもせず消えてしまえば慎二は納得しないだろう。出来るだけ派手に相手に印象付け、それを語らずには要られなくなる程の見せ場を出し惜しみなく戦つて生き残つたという称号に納得すれば御の字だとそう考えていた。

ランサーの後ろに民家の類がないことを確認したアーチャーは目を閉じ、残り少ない魔力を練つてこの場相応しい一本の剣を生み出す。

「*I am the bone or my sword*  
体は剣で出来ている」

生涯を通して綴られた詠唱は、なんら問題なく流れるように語り呟かれた。

「!? どういうことだアーチャー。何故貴様がその剣を持つている!!」



吠えるランサーの視線の先には、アーチャーが生み出した魔剣がその形をより刺突に特化したモノに形を変えその手に握られる。

その手に持つは、ケルトの逸話に語り継がれるアルスターの赤枝騎士団に縁有る、無限に伸びる刀身に依って三つの山を切り裂き。かの騎士王が持つ選定剣カリバーンの原型とも言われる稲妻の魔剣カラドボルグ。

ランサー、クー・フリーンに剣の道を教えた師にして戦場をかけた盟友が所有する剣を持つていることに彼は怒り、同時に驚いていた。

アーチャーは答えずに、不敵に笑うと魔剣の柄を弦に当てて大きく引く。その刀身は、対象をより切り裂き易くするために捻じれ、原型を変えることで一つの兵器として完成する。

「偽カラドボル螺旋剣……………」

その剣が放たれたとき、ランサーは自分の死を覚悟しただろう。その矢が真名を開放するとき、アーチャーは自分の体が消えるであろうことを理解しただろう。

しかし、彼らは誰一人として血を流さずに消えもしなかった

小さな衝撃が三つ、アーチャーの身体に撃ち込まれ、狙ったかのように人体の急所をすべて突いたその狙撃は完璧であった。

左側頭部に一つ、

心臓付近肺に一つ、

肝臓付近鳩尾に一つ、

殺傷能力のないそれを言い表すのなら。感覚としては、見えない拳に殴られたようなものだった。思わぬ衝撃にアーチャーはバランスを崩し倒れる時、一瞬にして切り落とされた経路ラインに懐かしさを覚える痛覚に弓矢を落とす。

ランサーは、何が起きたのか一瞬理解出来ずに槍を持った己の身体と倒れ伏すアーチャーの傍に落ちている剣を見て漸く自分が助かったことを理解し膝を付く。ランサーの知るカラドボルグに比べて多少形の歪められたその剣は、生前共に戦った師にして戦友であるフェルグスの剣。ランサーは、ある戦の中でゲツシュを契わしたことでこの剣を振るうアルスターの剣士に一度負けることを義務付けられているため際どいところであつたのだ。

「……………どういふことだ。それは」

その流血のない独特の痛みにアーチャーは身に覚えがあつた。それも氣掛かりであつたが、彼が呟くその疑問は撃たれた後に頭に直接送り届けられた念話に内容に対してのものである。

その声の聞こえた先に手を伸ばすアーチャーであつたが、魔力の枯渇によつて武装の一つである赤い聖骸布の消失に悪態を吐く。

本来、マスターとの魔力供給がなくともある程度現世に留まることが出来る単独行動スキルを持つ弓兵<sup>アーチャー</sup>だが、元々の魔力が残り少ない状況で乏しいながらも辛うじて繋がっていた前のマスターのラインも完全に切られているため、急ぎ霊体化し別のマスターとの契約を結ぼうと、ランサーを置いて見晴らしの良い高い場所を目指す。

残されたランサーは、マスターにアサシンが付近を狙っていることを伝えて慎重に屋敷に戻るように伝えるとアーチャーの動揺に疑問を抱きながらも、霊体化してルーン魔術の結界が緩んだエーデルフェルトの双子館へと急ぎ戻つて行つた。

霊体化したままアーチャーは新都を一望にできる高層ビル屋上に立ち再契約の望めるマスター候補を探す。

キャスター程でなくとも、千里眼のスキルを持つアーチャーにとって、これ程見晴らしが良ければ神秘の塊にして異物であるサーヴァントを捕捉するのは容易い。間桐の屋敷に戻らずに別のマスターを選ぶのは、先ほど狙撃手に告げられた目的の達成に関する……否、寧ろ核心を突く内容であったからだ。

彼、ないし彼女の目的を知るため、新たに確認することの増えたアーチャーは狙撃された時に呟かれた悪魔の囁きを繰り返す。それは、アーチャーにとって何よりも魅力的な情報であり、許容できない事柄であった。

その声は、抑揚の富んだ笑いを堪えて口元を歪ませているような詰まった声で契約のラインが切れたアーチャーの脳内に囁いた。

『英雄エミヤの抹消を果たしたくないか？』  
エミヤ・シロウ  
 正義の味方』

---

マスター：魔術協会所属の魔術師？

クラス：キャスター

属性：中立・悪

パラメータ

筋力：E

耐久：D

敏捷：C

魔力：A+

幸運：B

宝具：C

クラス別能力

陣地作成：A

道具作成：A

保有スキル

高速神言：A

宝具

破戒ルすルべきプ全てのレ符イ：C

アルゴンコイン  
金羊の皮：使用不可

マスター：??

クラス：アサシン

属性：混沌・善

パラメータ

筋力：D

耐久：D

敏捷：A

魔力：B (A++)

幸運：E

宝具：E(?)

クラス別能力

気配遮断：D

保有スキル

■ ■ : E  
          : E  
          : E  
          : X

魔術 : A + +

単独行動 : C

宝具

■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■  
          : E  
          : X

## 15 温求の無意識

イリヤスフィール・フォン・アインツベルンにとって、聖杯戦争は左程重要な意味を成さない、両親が返って来ないことが分かっているから毎日のように続けられた聖杯の器としての調整や魔術の鍛錬と何も変わらない退屈なものである筈だった。

### 第三魔法の再現。

一族の悲願成就。

### 聖杯の器の完成。

様々な言い方が上げられるが、当主である『アハトのお爺様』ことユーブスタクハイト・フォン・アインツベルンによって制作された自分の最初で最後の仕事であった。

十年前、第四次聖杯戦争に参戦した両親。父、衛宮切嗣キリツグと母であるアイリスフィール・フォン・アインツベルンが二人で共にこなす二週間程の仕事であると言われたあの日のことをイリヤは忘れることなく今も、自分の中にいる母とよく似た別の何かと共に夢を見る。

フユキの地に向かう前夜、母と共に語り合ったアインツベルンのホームンクルスとして



作られたモノの運命と言われた。母子二人で、まだ五つと年を数えた頃と同じように寝台の中、互いの体温を確かめるように頬を撫で、強く抱き締める。

アイリは、イリヤに最後の別れと、永遠の邂逅を約束した。矛盾しているそれをまだ八歳を超えたばかりであるのにも拘らず理解していた。

彼女達ホムンクルスの雛型となつた冬の聖女、ユステイーツア・リズライヒ・フォン・アインツベルン。二百年前に大聖杯の炉心としてその身を捧げた最初の聖杯の担い手。

その魂は既に聖杯として捧げた肉体と共に完全に昇華されているため人格に当たる機能は既に無くなつてゐるもの、大聖杯を通じて繋がり、代々のホムンクルス達を通じて今もお続けている。

そのため、イリヤは年齢相応の情緒を備えつつ、膨大な量の記憶と知識を感覚として引き継いでいるため母との別れは、苦にならなかつた。

聖杯戦争の開戦は、小聖杯の器を守る人の殻として製造された母、アイリスフィールの寿命が迫つてきていることを表す。聖杯降臨の時まで、その身を戦火の中で守り続ける自己防衛機能の一つとして使命を全うすることは、アイリスフィールの肉体的な死を意味し、大聖杯への帰還、次代の聖杯の担い手の一部になることを両親は受け入れていた。

聖杯をアインツベルンに献上し、長年の理想を叶えて帰つてくると約束した父<sup>キリツク</sup>。一族

の財力を駆使して引き当てた、最強の英霊セイバーを率いて聖杯戦争に勝利する。そう言い残したあの男ウラギリモリ。

イリヤは毎日、両親に与えられた子供部屋の窓から父親の帰りを今か今かと待ち構えていた。

約束の二週間が過ぎたある日、城の結界を越えた木々の間に見えた車の影に、イリヤは胸を躍らせて無事に帰ってきた切嗣の帰宅を嬉しく思い、城の階段を駆け降りる。

「おかえりなさい、キリッ?! ……」

ツグ。と、イリヤは扉を勢い良く開けて、挨拶を交わして聖杯アイリスファイナルを手に行っているであろう父に飛び付こうとした。

しかし、扉の向こうは、真つ白な雪に埋もれ、木枯らしが吹く銀世界。

そこに立っている筈のキリツグの姿は、自分の帰りを待ってくれた娘の御出迎えに、だらしなく笑いながら抱き寄せようとする父の姿は、影も形も無かった。

冷たい風と雪が城の中に入り込みイリヤの髪を撫で、彼女の後ろに佇むユーブスタクハイトを嘲笑うように吹き込む。

そして、呆然と外を眺めるイリヤの後ろからどす黒い闇を纏った細身の人影が現れ、

イリヤに寄り掛かるように後ろから抱きついた。

「お母様？」

それは母の声で、とても楽しそうにも憎しみを抱いているようにも聞こえる口調で語り出した。

『切嗣が、聖杯を破壊した。最も愛し、お前を幸せにすると誓った彼を信じて聖杯となつた妻を殺して、妻子を道具のように捨てて、裏切った』

「何を……言っているの？ お母様はちゃんと聖杯になつてキリツグを守るんだって」  
当然、イリヤは父がそんな非道を自分たちに行う筈がないと否定する。

必死に否定するイリヤの姿を見たそれは、足元から広がる燃えるような闇を使い視界を覆った。

すると、イリヤの頭の中に自分と両親の三人がいる部屋が見えた。窓の外は常闇のように黒く、何もない所だった。

イリヤは、それが聖杯となった母の記憶であることを理解した。

聖杯を目の前にして後は、願いを望むだけの状況であることを理解してしまった。

聖杯が叶える切嗣の願いが作った仮想の世界。

三人だけの幸せな世界。笑っている母と自分とそれに戸惑っている父の、もう訪れる

ことのない一家三人の幸せな空間。

アイリの姿を模したソレは自分を使って、聖杯にこの思いを願えば叶うと言った。争いのない平和が約束された理想郷。イリヤも母と切嗣がまたこの部屋で語り合つて、三人で暮せるのが一番の幸せであった。

外の世界がなくなつても、三人だけの幸せな城の一部屋の中で切嗣は、三人で暮らそうと、幸せな世界で生きようと、優しく笑つた。

そして彼はイリヤに銃口を向けて頭を吹き飛ばし、何故イリヤ撃ち殺したと掴み掛かるアイリの首を絞めた。

娘を殺されたアイリの感情を取り込んだソレは憎たらしく切嗣を見て再び何故と呟く。

『何故、私を受け入れない？ どうしてっ……』

『聖杯あれが叶えた世界では、救う命よりも犠牲にする命の方が大きい』

そう言い放つた、父の声はイリヤが一度も聞いたことのない冷たい刃物のような恐ろしいものであった。

大聖杯から流れるその瞬間の記録が、真実であることを理解してもイリヤはそれを嘘だと断じたのは一種の自己防衛であった。彼女の半身が、心を持たない人形ホムクルスであった

としても、人間の血が通った感情が精神を<sup>たましい</sup>引き裂く。

「嘘よ!!… こんなの絶対嘘よ!!」

聖杯との繋がりを切り、現実に戻ったイリヤは溺れるように恐怖し、叫んだ。父が自分を撃ち殺して、母にも手を掛けるその瞬間を否定した。

「……………キリツグは? キリツグは、どこにいるの?」

帰ってくる約束した、八年間見慣れた父の姿を探すイリヤを、アインツベルン八代目当主であるユーブスタクハイトは絶望と野心を宿した瞳に移すも、見つからない親を探すイリヤを置いて次の聖杯に向けての準備を始めるため、古城の奥にある工房へと去って行った。

<sup>キリツグ</sup>父が帰ってこなかった、その日からイリヤは衛宮切嗣とアイリスフィールの娘としての生活を失うこととなる。

両親の意向から今まで人間として育てられて来たイリヤを待ち受けていたのはホームクルスとしての機能管理の日々であった。

暖かい自分の部屋がなくなり、ボロ衣を纏いながらイリヤはキリツグの帰りを待った  
 【あの男は私達を受け入れずに、裏切った。あなたを救うと約束を果たさずにワタシを  
 己の手で壊したのよ。呪いなさい、呪いなさい。あの裏切り者を決して許しては為らな  
 いわ】

イリヤの背後に粘りつく怨嗟の聲が母の姿をして時折現れ始める。

一人孤独に耐えている時に耐え切れずに聖杯との繋がりを強く持とうとすると溢れ  
 る泥水のように出てくる母の姿を模した十二カ。

イリヤはその声に抗い、ただ父の迎えを待ち続けてその声を出るだけ無視すること  
 にした。キリツグを呪いたくなかった。それ以上に、夫を呪えと強要するような母の姿  
 をしたソレを見たくなかった。聖杯との繋がりを絶ち、魔術回路と魔術刻印の発動を止  
 めると冷たい現実に戻る。カーペットすらない石作りの部屋にイリヤは一人父の帰  
 りを信じて泣き続けたがそれも長くなかった。

暖かい食事も母と寝たベッドも父に与えられた人形も全て、アハト翁に取り上げられ  
 た。

まるでイリヤから人間の温もりを遠ざけるようにアハト翁は何ら感慨無く、成果を生  
 まない初期の人形と同じように扱った。

両親が城に居た今までは、人間とホムンクルスとの間の子であるが故に、イリヤの処遇は複雑であつた。

用心深いアハト翁は、次の聖杯の担い手候補としてアイリスフィールと切嗣に子を成させた。第三魔法の復活のみに執念を燃やすアハト翁にとつて彼女たちは目的を達成させるための礎であり、捨て駒でしかない。

それを回避するために、アイリは聖杯となつて夫の願いを、キリツグの理想の礎となることを覚悟した。

第四次聖杯戦争で無事彼が勝利すれば、イリヤは晴れてアインツベルンの人形ホムンクルスの宿命から逃れ、切嗣の子供として自由の身となる。そう信じて、自身の人間としての機能を飲み込み、形を成した聖杯を託したのだ。

娘と夫の幸せという火を灯すために薪となることを選んだアイリに、心残りはあるけど後悔はない。

五度目の聖杯戦争を回避するため、イリヤに優しい世界を送るためにアイリは聖杯となつた。

それを切嗣は踏み躪り、壊した。自分を守ってくれる両親は、もういない。一人で生きて行くしかない。

生きて、行かなければならない。

大丈夫、大丈夫。と自己暗示をかけながら、イリヤは一人で冷たい日々を乗り越える。『あの男が死んだそうよ。身勝手に生きて、惨めに死んだ。裏切り者に相応しい死に様だったそうよ』

第四次聖杯戦争が終わってから二年後、切嗣を呪えとのたまう黒い母の姿をした異形の聖杯が、切嗣の訃報を伝えた。

「そんなのどうだっていい。わたしには、もう関係無いことだもの……」

イリヤは、今更自分を捨てた男のことなどと無関心を装うも、本当にいなくなつてしまった父の死に心のどこかがぼつかりと抜け落ちていた。アインツベルンの森を出る時に抱き締めて来た温もりも思い出せないのに、イリヤは父の死を悼むことが出来ていた。

それが彼女にとって、救いであつたのかは彼女にも分からない。

遂に一度も迎えに来なかつた。もう、迎えに来るといふ幻想を抱かずに済むというのに、イリヤの心に孤独という毒が入り込み、記憶に残っている優しい両親を失つた悲しみがイリヤの涙を凍らせ始める。

『関係無い』ことなど無いわ。だってまだ、養子こどもがいるもの』



「コドモ？ 私の兄弟がいるの？」

イリヤの返事に、ソレは子供がいることを教え、近いうちに聖杯戦争の中で殺し合わせることを仄めかす。

『ええ、そうよ。そして貴方たちは、互いに殺し合う運命にある。大聖杯の火は、まだ消えていない。もうすぐよ、もうすぐ殺し合える！ 楽しみねえ、イリヤスフィール』

その言葉がイリヤの耳に入ることにはなかつた。

父を待つこと二年。口では孤独に慣れていると自分に言い聞かせるも、必ず迎えに来ると言っていた父の言葉に期待し希望を捨てきれなかつた最中の突然の訃報。しかし、そこに自分と同じ境遇を持つ兄弟がいることを知り、彼に自分の全てを重ね、そして押し付ける。

「わたしと同じ。キリツグに置いて行かれた、わたしの弟……フフツツ」

孤独を覚悟した中での一本の縁えにし。日本に残った父が残した義理の兄弟に対し、イリヤは、自分から父親を奪った子供としてではなく、自分と同じように孤独を共有する家族として、いつか会う日を待ち遠しく思うようになっていたことにイリヤはまだ気が付いていなかった。

そして、イリヤの代から聖杯の器としての調整は、過去に見ない苛烈なものであった。

アイリスフィールは聖杯の降臨まで守る自己防衛機能を兼ね備えた殻として製造され、完成した状態でこの世に作られた。その娘であるイリヤスフィールは、更なる聖杯の器としての完成度を高めるために、受精卵の着床が確認された瞬間から魔術的調整が施されていた。イリヤは、千年続いたアインツベルンの技術の結晶である母の血と五代に亘って魔導の血を受け継いだ父の精から、ホムンクルスとしての技能と人間としての限界を超える力の両方を備えていた。

出産時の段階で既に体内のおよそ七割が、魔術回路で構成されたその体は、ホモサピエンス人形を超越した精霊に近い作り<sup>ホムンクルス</sup>に改造され、外的措置を施して新たに魔術回路の移植すら可能と化していたのだ。

毎日、毎日、アインツベルンの工房で体を切り裂き、切開した箇所から直接魔術回路を移植する調整は文字通り、血が滲むどころの話ではなかった。

アインツベルンの悲願なんてどうだっていい。失敗しようが成功しようが興味なんて無い。これは自由を得るための投資。

たった一人の義兄弟<sup>かぞく</sup>にして、父<sup>キリツツ</sup>を奪った他人。自分が会うのに相応しい人間かどうか見極め、気に入ったら自分の奴隷<sup>サーヴァント</sup>にしてもいいし、聖杯戦争が終わったら聖杯<sup>じぶん</sup>をあげてもいいとさえ思った。

どちらとも着かない結論であったがイリヤは気にしない。どうせ最後は聖杯となる身、成るように生るモノだと勝手気儘に自分の考えを自分なりに、まとめ終える。

そうして、自分の従えるサーヴァントが決まって一悶着あったものの無事契約を済ませた後になって、手加減が出来るか分からなくなっていた。規格外のステータスを誇る大英雄ヘラクレスの前では、大半の英霊は見劣りしてしまう。

冬木へと赴き、出逢い頭に戦いを仕掛けて、あつという間に死なせてしまうのはどうかと思つたが、殺し殺されるのが聖杯戦争であり、魔術師の日常である。

死ねばそれまでの存在だっただけのこと、本当に戦いたくなくなったら、魔術師が活動を控える昼間に会いに行けばいい。

そう思っていた。しかし現実とは違った。自分以上の、正真正銘の化け物が冬木の地に潜んでいることを知った。

イリヤは、アインツベルンが千年掛けて漸く辿り着いた最高傑作の聖杯の担い手であった。魔術師として規格外な魔術回路の量は、保有する魔力の多さに直結し、そして前回の聖杯の器であった母<sup>アイリス・ツヴァイル</sup>は魔術技能の長けたホムンクルスとして設計され、その胚から生み出されたイリヤスフィールというホムンクルスは、母体以上の性能を誇り、他の六組<sup>マスター</sup>とは別格であると信じられていた。

義兄弟である衛宮久郎のサーヴァント、七騎目ライダーの召喚を確認したイリヤは早速挨拶も兼ねて戦いを、自身の最強のバーサーカーを喚け、そして英霊と互角に渡り合う魔術師の姿を……。

神秘と神秘のぶつかり合いが母譲りのルビアーの瞳に映し込まれた。

幻術などを用いず、純粋な魔術の技量とサーヴァントとの連携で見事に自分の最強のサーヴァントであるバーサーカーを打ちのめし尚且つ、イリヤに降伏を勧める余裕すら見せた。

もし、他のマスターが同じ状況に立っていたら間違いなくイリヤを殺し、死体に残る令呪を剥ぎ取るだろう。そして、衛宮久郎が本格的な魔術師であったのならイリヤを殺していた、正確には、殺すことが出来た。

しかし現状はそのどちらでもなく、彼はイリヤに降伏を望み、魔術師としては在りえない情を見せ、バーサーカーの宝具の再生の機会を与えた。

なんて甘い考え方をしているのだろうか、イリヤは魔術師として在りえない欠陥とも取れる久郎の行動を諷りかねていた。と同時に、義兄弟として非常に好ましくすら感じられた。

久郎自身からは大した量の魔力を有していないことから、何処から魔力を補給するよ  
うに細工していることを見破ったイリヤだが、それを差し引いても久郎が適うことの出  
来ない強者の存在であることを知る。

それは最強のホムンクルスであり、一般的な魔術師の持ち得る技量を凌駕したイリヤ  
だからからこそ、その実力の違いを見抜けたのだ。神秘の使い手として化け物級<sup>クラス</sup>である  
イリヤですら恐れ慄く桁違いの技量。否、サーヴァントの殺害を可能としたその神秘は  
現代の魔術とは一線を越える、さらに上の段階にあるもの……。

全サーヴァントの中で歴代最高クラスのパラメーターを持つバーサーカーと殆ど  
一対一<sup>サシ</sup>で人の身でもって戦いに投じ、宝具でもある十一有る命のストックを三つ殺<sup>そ</sup>い  
だ、あの御業は果たしてどういった絡繰りであったのかは、イリヤには分からなかった。

正に、バーサーカーに劣るとはいえ高位に当たる英霊であろうライダーを率いる衛宮  
久郎の陣営と戦うことはサーヴァント二体分以上の戦力と戦うことに等しいことがわ  
かる。

単独で、バトルロワイヤルが前提となる聖杯戦争に於いて反則的な戦力を有している  
のだ。

それは、逆に言えばイリヤ以外の魔術師にも倒されることのない……即ち、聖杯を手

にする優勝候補であるということを意味する。

サーヴァント

神秘同士の戦いとなつてしまえば勝ち目がないことを察したイリヤは、早々に久郎との敵対を諦めて少々番狂わせになつたが、自己紹介の返事も兼ねて昼間に会いに行くことにし、そして非常に有意義な時間をまるで本当の兄妹のように過ごした。

まず最初は、その容姿に驚いた。予め二度会つたとはいえ、どちらも日が落ちた暗闇の中で、ゆつくりとその姿を眺めることが出来なかつたからだ。写真で知つていた上で、前夜に戦い合つたマスターである義兄弟の髪と目の色は驚くほど、父親であつた切嗣と同じ漆黒であつた。

その色は、白に埋め尽くされたアインツベルンの城内で唯一の異色であつた切嗣と同じ色をしていたので。

昼間はマスターとしてではなく、久郎の妹として会いに来たと告げた時、彼の表情がとても複雑そうに歪みつつ、とても照れ臭そうに笑つていたのをイリヤは見た。その動作一つ一つに、嘗て森の中で肩車をして貰つたり、胡桃探しをした切嗣の影がチラつく。その記憶は、イリヤの心に追懐と蟠りのような怒りを彷彿させてしまう。

そんな激情を追い払うようにイリヤは、手始めに久郎から様々なことを質問した。

久郎の生活、楽しかつたこと、日本のこと、時計塔のこと、久郎がお世話になつた魔

術師たちの話、聞けば聞くほど、その場にいなかったことを悔やむほど楽しい話だった。どこことなく、切嗣と関係のある話をはぐらかしてくれる気遣いも、こそばゆくはあったが悪い気はしなかった。

名を聞き、互いに呼び合い、久郎は、イリヤの質問に全て完璧なまでに答えてくれた。しかし時間とは残酷なもの、苦しい時ほど長く、楽しい時ほど短く過ぎてしまう。

久郎が他の女のマスターに呼ばれて、会合を行うと言われた時、自分でも分かるほど激しい嫉妬が生まれていた。気が付けばイリヤは、久郎を自分の車に乗せて、凜とセイバーの待つ庶民が通う大衆食堂へ向かおうとする。食べたい料理があるなら自分の家で料理人を雇えばいいのにと、文句を言うイリヤを見ながら久郎は苦笑いを浮かべた。運転中にイリヤは、先ほどの話の途中であると前置きし、久郎の聖杯に託す願望を聞いてきた。

どうしてそんなことを？ と聞き返されたイリヤはただの好奇心であると返した。そして久郎が何故聖杯戦争に参加することになったのか聞き、その内容に驚く。

久郎曰く、

聖杯になど興味は無い。

自分は巻き込まれただけだ。

今までの生活を続けたい。

といった、取るに足らないものであった。否、取るに足らないどころの話ではなかった。聖杯にマスターとして選定された魔術師は、サーヴァントと同様に聖杯を使って叶える願望を持っている者に限られる筈なのだから彼が、衛宮久郎がマスターに選ばれるのはありえない。

考えられるとするなら、ランサーに襲われ其の身に危機が迫り、その『状況』から脱却したいという願望から聖杯がサーヴァントの召喚を行ったという仮説。

前例が無い訳では無いが、聖杯に選ばれるマスターの人数が揃わない場合は大聖杯が冬木の地に存在する魔術回路を持つ人間を選定を行う。それに当て嵌めれば成程、これほど資質の高い魔術師はそう居ない。

聖杯を手にするために参戦したイリヤにしてみれば、聖杯を手にするのできるマスターに据えたことでマスター同士という間柄から話し合うことの出来る機会を与えてくれた聖杯に感謝すればいいのか、御三家を含めた六組を全て葬り兼ねない強敵を作り出したことを恨めばいいのか……。

当の本人が、攻撃的な性格でなかったのが救いであつたと、イリヤは車内で安堵した。

互いに敵同士という中、同じ男を（養）親に持つという理由で遠坂凛が開いた会合に参加したイリヤであつたが、凛と住居について話すことなどない。しかし、セイバーと



は母についての因縁が残っていたため二、三からかった後に食事に集中することとなった。

再会し対面したセイバーは最初、切嗣の実子として自己紹介をしたイリヤを見て血の気が引いていた顔をしていたが、久郎の懇篤とした対応によつて冷静さを取り戻し、見ている気持ちが良くなる食べっぷりで食事を再開した。

イリヤは、そんな彼女が幸せそうに食事を楽しむを見ながら、日本の大衆食堂に出されるワインと肉を味わう。

お付きのメイドが作る料理と比べて素朴な質であったが、特に文句を言うことはない。何故なら、それ以上に気に食わないことが目の前で展開され沸々とイリヤの精神に嫉妬の炎を燻らせていたのだから。

イリヤの左手に揺れるワインは、その充てつけの様なものだ。

注文の際、店の従業員に未成年の飲酒禁止などについて注意されたが、即時に暗示の魔術を使って強引に注文を済ませ、最初の一杯は胃に流し込む勢いで飲み込んだ。

リライト

赤い葡萄酒特有の辛味が舌先から喉を焼いて、後から残り香のような果実の香りが鼻腔に行き渡る。

酒の色と香りの楽しむ前に飲み干すのはマナー違反ではあるが、ここにはいつも食事儀礼に煩いお付のメイドはいない。

二杯目のワインをゴブレットに注ぎ、今度は普通にワインの華である色彩と芳香をゆつくりと舐めるように味わう。流石に品が無いと思つたイリヤだが、特に気にする様子も無くただ離れた席の向こうにいる久郎と凜が二人きりで話し合っていること自体に苛立ちを感じ、面白くない状況に焦燥する自分の感情に振り回されていた。

イリヤにとって形だけでは凜と久郎の二人きりでの会合を提案したものの、実際に義兄と離されて義理とはいえ、兄妹同士で親交を深め合おうとしていた時に横槍を入れた凜にその機会を譲った。イリヤが久郎の義妹として接触する前に先約していた事柄に優先性があることは、確かに認めた。

だが、やっぱりに食わないと、小さく白い手に掴まれたゴブレットの取っ手に力が入る。

好意的に見て貰おうとするために大人の余裕を持つ姉として振る舞つたのがここまですぐ高く付くとは予想外だったのだろう。どうやらイリヤは、自分が思う以上に嫉妬深い

精神を持つていようだ。

気を散らすようにワインの香りを楽しみながら、料理を美味しそうに食べるセイバーに、草を頬張り続ける野兎の姿を幻視し気を紛らわせる。

過去の因縁がなければ、セイバーの容姿、延いては純粹に食事をする姿は可愛らしいものだった。

「あの似非神父……コロス」

そうやって、いつ終わるとも知れない会合を待ち続けていると、凜の私怨の籠った声が結界の中に響きイリヤは聞き耳を立てた。顔を上げると会合に区切りが付いたのか、漸く久郎がセイバーとイリヤを元の席に呼び戻し始めた。

「完全に私達の……いえ、私の失態ね」

兄弟子の不快極まりない悪戯に振り回された自分の情けない姿に、凜はセイバーと共に気晴らしでいつもよりかなり多めに暴食の限りを尽くした料理のカロリー量に頭を押さえていた。一見して、自分の恥ずかしい失敗に悔むその年相応の表情すら、凜とい

う名そのものを損なわないう程に合っていた。

「まあまあ、そう落ち込むなよ遠坂、それぐらゐのミスは誰にだつてあるさ」

魔術師としては、凜のほうが多く鍛錬を行つていたので先達となるが久郎は年長者として凜の失態を責めることなく慰める。

「ごめんなさいね、衛宮くん。まさか、あの似非神父が一枚噛んでいるとは思わなくつて……ああ!! アイツの笑つている顔を思い出したら余計腹が立つてきた」

「……えつと、さつきから氣になつていたんだが、遠坂の兄弟子つて神父もやつているのか?」

先程から繰り返し、自分の兄弟子を似非神父と呼ぶ凜の様子が氣になつた久郎はその言いように違和感を覺えたが、見た目以上に拳を強く握りしめている凜を刺激しないように、柔らかく訊ねる。

「そうよ。真正正銘、教会に正式な籍を置いている似非神父よ。しかもあの聖堂教会の所屬でね」

案の定、最悪の答えに久郎は苦虫を噛み潰したような氣分になる。

「!? 随分と珍しい人だな。遠坂の兄弟子つてことは、その人、魔術師でもあるつてことだろ? 教会の異端審問が掛からないつてことは、結構高い地位の人なのか、それとも」

本来、表社会の秩序を異端、異形の神秘から守る聖堂教会は、根源を目指すために異

端である魔術を用いる魔術師を敵視するもの。表向きには、休戦協定を結んでいる魔術協会と聖堂教会ではあるが小競り合いは日夜問わず耐えることはないことを、久郎は知っていたからこそ驚きを隠せなかった。

「さあ？ 綺礼……その兄弟子の名前ね。詳しい事情はよく知らないけど、聖杯戦争の監督役を代々務める言峰家の一員、というか一人息子らしいけど、異端の魔術師を狩る代行者をやっていたみたい。でも前回の第四次聖杯戦争のマスターに選ばれて、先々代前の頭首から付き合いのある遠坂家に弟子入りして来たって話は聞いたことはあるわ」  
そんな久郎の焦りなど露知らずに凜は魔術協会に居住の許可を得ているとはいえ、部外の魔術師である久郎に兄弟子の情報を明け渡した。

久郎は、あっさりと詳細を語りだしたことに驚いたが、その話の内容に今まさに関わっている聖杯戦争に於いて重要な事柄が出されたことに気付く。

「ってことは、前回聖杯戦争を生き残ったマスターの一人だった。ってことか？」

「そういうこと。まあ、戦いが泥沼化する前にサーヴァントを失い。本来の役目である監督役として第四次聖杯戦争を見届けたらしいわ」

「……そうだったんだ」

「今回の監督役も綺礼が担当してくれるから、戦後の事後処理は教会側が主に負担してくれるってわけ」

当然、マスターが故意に神秘の秘匿を曝すような真似をすれば、何らかのペナルティを課す権利を有しているのが監督役という存在だ。話しを聞く限りでは、その言峰という人物に人格的な問題がないように見える。

「……へえ、それで遠坂の後見人も引き受けてくれるなんて、面倒見のいい人じゃないか」

いい人、その言葉にどんな意味が込められたのか凜は久郎に悪気が無いことは理解している。一見して、凜の語った言峰綺礼は、自分の所属から外れた禁忌とする術を学ばなければならぬ環境に追い込まれて、参戦後に即敗退して戦後も、師の息女の世話を任された苦勞人に聞こえなくもない。

何も知らない部外者が聞けばそう捉えられても仕方のないことなのだ。しかし、理解することと納得することは別問題、凜は長年の屈辱と気恥ずかしさに埋もれる記憶を彷彿させ、本心を吐露する。

「ええ、そうね。本当に面倒見だけは、本当によくやってくれているわ。貰った方が恥ずかしくなるようなド派手な洋服を送ってきたり、味覚が亡くなるような激辛麻婆を誕生日に私の名義で！ 出前を勝手に取るぐらいね！」

怒りに震えるその剣幕に、久郎は先ほどあつまり兄弟子の情報を話した凜の事情を察した。

「もしかして、結構仲が悪かったりするの？」

「向こうは完全に自分が楽しむために色々やらかしているだけで、敵意はないのよ。ただ純粋な嫌がらせと言う悪意を煮詰めたモノを摺り込んで来ているだけで、人が嫌いだから人が嫌がることをするんじゃないかと、嫌がる人の姿を見たくて、わざと人の神経に触れることをするの!! だから私が、一方的に嫌っているって感じに見えるけど実際は――」

「お、おう。大体把握した。ところで遠坂、これからどうするつもりなんだ？」

如何に、言峰という神父が人間として受け入れずらい人格をしているのかを吐き続ける凜に久郎は適当なところで遮り、今後の方針を聞く。

「どうして？」

まだ文句が言い足りないのか、不満げの籠った返事で久郎の質問の意図を聞き返す。

「このまま明日学校に行つても、互いの存在を気にしてしようがなくなるだろ？ だから互いに協定を組むくらいのこととはした方がいいと思つたんだ」

これから、本格的にマスターとして戦い合うとなると、日常においても気を落ち着けることが出来なくことを危惧し、久郎は凜に必要な以上の警戒を解いて貰う為、自分も無駄な気を張る手間を省く為提案する。

「そうね。私も四六時中、中途半端に貴方達を警戒するもの馬鹿らしいし、いつその事こ

ここで白黒を明確にさせた方がいいのかもね……衛宮くん」

久郎の協定を持ちかけた話は凜にとつて、これ程まででない機会であつた。セイバーと同等のライダーとバーサーカーの二体同時に敵に回す最悪の展開を回避でき、上手くいけば、寶石を一度も使うことなく残りの四つの陣営を倒せるのだ。ここで下手を打つ訳には行かない。

「私と手を組まない?」

気づいた時には、凜はそう答えていた。すると久郎の隣に座る、雪の妖精が怪しく赤い瞳を光らせて久郎の手を掴み自分の傍に寄せて腕を絡ませた。



# 16 欺瞞の正体

「駄目よ、リン。お兄ちゃんは私と一緒に戦うんだから」

久郎を誘う凜の提案に反応するように、腕を絡ませたイリヤは有無を言わず冷たくあしらうと、明らかに不機嫌を露わに凜を睨み付ける。

「ちよつと、イリヤスフィール！ アンタ何勝手にこつちの話に入り込んで来るのよ!!」  
今まで沈黙を貫いていたバーサーカー陣営がいきなり会話に入り込んで来たことに、凜は驚くよりも先に自分の提案を遮られたことに激昂する。命を張って聖杯戦争に参戦してきた彼女だが、明らかな戦力不足による不利を打開する機会を握り潰され掛けているのだ、気合で負けじとイリヤの封殺を試みをするうちに声を荒げるのも致し方ない。

「別にいいでしょう？ リンより先に私が最初にお兄ちゃんと会っていたんだもの、突然沸いてきたような泥棒猫に横取りされたら堪えないじゃない」

そう凜に凄まれようともイリヤは、構う事無く今までの義兄との時間を奪われた分の鬱憤を熨斗と一緒に返す。

先ほどの言峰神父による悪事であろうと目算できてしまったストレスと、ライダー、

バーサーカーの二陣営を相手取る可能性のプレッシャーが重なって、神経質となつてい  
る凜がイリヤに喧嘩を売られてそのまま引き下がる筈もなく、怯まずにイリヤに投げ掛  
けられた発言の内容に嘯みついた。

「行き成りやつてきたのはアンタもそう変わらないでしょうが!! ていうか誰が泥棒猫  
だ!」

「何よ。事実じゃない!! どうせ表向きには猫を被つて、最初の時に使つていた似合わ  
ない、あの不気味な丁寧口調で何人もの男をその毒牙の餌食にしているんでしょ?」  
「うっさいわね! 毒牙とか言うな。向こうが勝手に寄ってくるだけで、私は世間一般  
の高校生として、そして魔術師兼、遠坂家頭首として振舞っているだけよ!!」

女は三人寄れば姦しいとは言うが、実際にはセイバーを置いて女のマスター二人の劣  
悪な口戦が繰り広げられていた。売り言葉とその倍以上に返ってくる面白い言葉。言葉  
のキャッチボールにしては聊か物騒な言葉のラリーが往復する度に二人の口調が荒れ  
て行き、険悪なものとなつて行く。立ち上がった二人は啞然となつた久郎と御代わりし  
続けるセイバーを余所に、言い合う毎に詰め将棋のように顔を前へと突出し、一步も引  
かず相手を睨みながら威嚇し合う。正に一触即発、怒鳴り合う凜とイリヤの魔力が可燃  
性のガスのように充満し細やかな火花で爆発しそうな様子だ。

例え、取っ組み合いの喧嘩に成ろうとも施術者である凜と久郎の二人が解かない限

り、結界の効果は持続するが、サーヴァント同士を戦わせたり、魔術の打ち合いをして、物理的な被害を出すようなことをすれば、今張っている結界では誤魔化し切れなくなる。

久郎は激情に駆られて無意識のうちに魔力を高める二人を諫めようとする。

「お、落ち着けよ二人とも。いくら認識阻害の結界が張られているからつて大騒ぎをすれば誤魔化しきれ」

「お兄ちゃん（衛宮くん）は黙ってて!!」

凜とイリヤは睨み合ったまま視線を逸らすことなく説得に入ってきた久郎に怒鳴り逆に彼の口を噤ませた。

ギスギスとした女同士の言い争いに、仲介の油を差そうとした久郎であったが、返って二人の闘争心を加熱、炎上させてしまったようだ。

ようやく土地利用と工房設置についての誤解が解けたさつきまでの、空気が全く変わってしまったことに久郎は頭を痛めた。

何故、二人とも敵同士とはいえ此処まで互いに嫌悪感を隠さずに赤裸々と暴言を吐き合うのか。久郎は、何とかして二人の頭を冷やす気の利いた言葉をひねり出そうと深呼吸をすると本当に空気の匂いが変わっていることに気が付いた。

それは主に、自分の真横で腕を絡めて相席している凜を小五月蠅い害虫のように追い

払おうとしている義妹のイリヤスファイールから漂う果実とアルコールの匂いである。

そして久郎は、会合をスムーズに進めるためにと、因縁の無いように席を外して貰ったイリヤとセイバーが座っていたテーブルを改めて見る。すると、セイバーが積み上げた皿の山の谷間にワインのボトルが少なくとも二本空となつて転がされているのを見つけた。

「……」

あまりといえばあまりの原因に言葉を失う。まさかと思い、再度自分たちが座っているテーブルにも一本別の銘柄ではあったがワインのボトルが置かれており、少なくともイリヤは三本のワインを開けたということが判明した。

今まで大人しく見守るだけであつたイリヤが急に凜に対して好戦的に……基、嫌悪の言葉を投げ掛け始めたのがやつとわかつた。

わかつたが、これは頂けない。

「……イリヤ」

状況を察した久郎の厭きた呼び声にイリヤは、やけに血色の良い顔を向ける。

「何よ、まだリンとの話が付いていないのよ!？」

思えば彼女の頬は、凜との怒鳴り合いを行う前から既に血の巡りが通常以上に行き渡つており、食事前の人形のような白い肌は紅く染まつていた。

自らの失態を突かれて激昂している凜の気恥ずかしさからくる赤面とは異なる、ある物質の摂取によって人体がその解毒を行う際に発生する酵素によつて六段階に症状が分かれる……酒酔い状態に陥っていた。

呂律は未だはつきりしているが、先程確認したワインボトルの残骸から察するに何時<sup>いつ</sup>理性が飛ぶかわからない状況で、セイバー陣営との聖杯戦争の施策がご破算になるのは久郎も望んではいない。

久郎との敵対を恐れている凜の様子から、イリヤと久郎は正確にはまだ同盟も何もない義兄弟関係ではないことを凜は知らないし、想像もできないのだろう。

互いに殺し合う関係にある筈のマスター同士がサーヴァントを互いに霊体化させて、同じ車に乗つてやつて来たことと、久郎と戦うのは自分だと言い張つたイリヤの発言から、ライダーとバーサーカーの二陣営が手を組んでいると、憶測を立てるは自然な流れであろう。

案の定、凜は久郎達との二対一のような不利な戦況となるのを避けようと、必死になりアルコールで舌が緩んでいるイリヤから情報を抜き出そうとせず、協定の内容を進めようと躍起になっている。

「いいこと、イリヤスフィール。私は今、正式に会合へと招待した衛宮くんと話しているの！ 余計な口出しは止めて頂戴!!」

「招待？ ハッ。脅迫の間違いでしょう？ 前マスターの情報を与め調べなかった自分の迂闊さを悔いなさい。私はキリツグの実子で、お兄ちゃんは養子。互いに家督を争わない関係で且つ、家族としての繋がりを持っているんだから互いに聖杯を求めて競い合いい、協力するのも、どちらを選ぼうとならんら不自然は無いでしよう」

冷やかに笑うイリヤ。明らかに凜の神経を逆なでるような言葉を選びながら後先考えずに口にするのは淑女として不適切な言動であるがそれに気づく様子はない。

久郎自身、このまま話が進まずに酔っ払ったイリヤの発言で突拍子のない方向に行くことを危惧し、魔眼殺しの眼鏡を静かに外す。

そのまま立ち上がった久郎は、イリヤと目線を合わせるように前屈みとなり、両手で血色良く赤く染まっているイリヤの両頬を両手で優しく包み込み且つ、顔が動かないようにしっかりと固定した。

突然の行動に、イリヤは鼻先がぶつかりそうな程に近い距離に慌てることとなる。

「ち、ちよつとお兄ちゃん」

「いいから、俺の目を見る」

そしてゆつくりと丁度セイバーと凜には、久郎の顔が——否、赤く染まる瞳が見えない位置にまで半回転するように足を運ぶと、魔眼をイリヤだけに見せた。

——目を合わせる

石化の下位に当たる停止の魔眼がイリヤの意識と体の全てを硬直させ動きを封じる。通常の魔術師が保有する量を大きく上回る魔力を有しているイリヤであれば簡単に抵抗<sup>レジスト</sup>してしまう程度に調整されたの眼力であったが、酒に酔って魔術師としては聊か感情的になっていいることもあり、何より自分と同じ赤色に輝いた久郎の瞳に魅せられ何の抵抗もせずに魔眼の力を受け入れていた。

義妹が抵抗することなく、あつさりと魔眼を受け入れた状況に危機感が足りないと思う反面、久郎がサーヴァントを嚇けたりしない信頼している。そんなイリヤの心情の変化に久郎は軽く笑みを見せた。

しかし直ぐにその笑みを振り払うと、そのままイリヤの硬直が解ける前に誘眠暗示を掛けて、崩れるように意識を失うイリヤを抱き寄せて、椅子に座らせた。

「……全く、日本じゃ飲酒は二十歳からだっていうのに……遠坂は、気化したアルコールに中てられたただだからそこまで酔っていないよな？ 取りあえず、これでも飲んで落ち着け」

久郎の魔眼が発する魔力に反応したセイバーを無視して久郎は赤く染まった目を元の黒に戻すと、背もたれに寄り掛かせたイリヤが熟睡しているかを確認して、軽く愚痴をこぼした久郎は凜に溶けかけた氷の入ったグラスを押し付けて、再び魔眼殺しを掛

け直す。

「あ、ありがとう……って、え？　もしかしてこれってお酒!?　……というか衛宮くん、その子に一体何をしたの？」

「葡萄酒ワインに酔っていて油断した所に簡単な暗示を掛けて眠らせたただけだ。一時間もしないうちに目を覚ます」

「そ、そう」

状況がいまいちの見込めていない凛に久郎は目の能力については一切触れずに、最後に掛けた暗示のことだけ告げた。続いて疑わしくこちらの様子を窺うセイバーの視線にまでも曖昧な笑顔を向けて謝罪する。

「立て続けに、余計な警戒をさせて悪いなセイバー、ここへ運転して来たのはイリヤだったから帰りのために飲酒はしないとばかり思っていてさ」

「いえ、イリヤスフィールが酒瓶を注文しているのをただ静観していた私にも責はあります」

魔力の反応について納得したセイバーは再び山盛りとなった皿の料理に匙を突き刺し食事を再開する。

そうして、一息つけた久郎は落ち着きを取り戻した凛に先ほどの答えを紡ぎだす。



「さて遠坂、互に手を組むことについてだが、俺は——」

微睡みの中、高級感溢れる柔らかい座席から伝わる車のエンジン音と急カーブに差し掛かった際に生じる遠心力によつて添えつけられたシートベルトの締め付けが、イリヤの寝息を阻害し肺を圧迫した。

「あつ、起きたかイリヤ」

すぐ横から、イリヤが起きたことに気付いた声が、籠った洞窟から出したように頭の中に響く。

どうやら自分はいつの間にやら眠っていたのだろう。助手席から、目を擦りながら右手の運転席を見る。

「ん、んん……。リズ？」

まだ完全に覚醒していないイリヤの視界はぼやけ、思考も纏まらない。ただ茫然と目を開けるとその先には、白い頭をした人影が映っていた。

寝惚けながら回らない頭で導き出した目の前の人物を予想する。

アインツベルン<sup>ド</sup>の城から同行してきた御付きメイドの二人の内、教育と身の回りの世話役を任された『セラ』だとしたらこんな悠長な声を出さずに、勝手に行動したことについて糾弾してきて長い説教が始まる筈だ。

よつて、もう一人の護衛役と遊び相手を務めている髪が短い方のメイドの『リーゼリット』を呼んだのだが……。

「よく眠つていたな、お姫様」

しかし、その声は女性型の人形<sup>ホムンクルス</sup>から発せられるモノより低い若い男の声であつた。

一瞬、身形のいい黒スーツを着こなした男が誰なのか見当も付かなかつたイリヤだが、その男が身に纏っている雰囲気と見覚えのある眼鏡とその奥にある横顔の顔立ちから、すぐにその人物の正体を見抜いた。

「えっ……お兄ちゃん!? どうしたの、その恰好。それにこの車は?」

それは、意識を失う前とは対照的なまでに激変した容姿であつた。肌と髪は雪が染め抜きをしたように白く、瞳の色は、紅玉<sup>ルビー</sup>のように赤くなり、まるで自分たちと同じホムンクルスの色合いを無理矢理付け替えて、一般的な服装とは言えない上流階級を思わせるイリヤの服装と釣り合うようにスーツを着こなしていた。

「まあ落ち着けてイリヤ。軽い幻惑の一種さ」

そう言うが早い、水に溶ける砂糖のように久郎の容姿が、アインツベルン製のホム

ンクルス特有の配色から日本人らしい色合いに戻り、スーツも昼間の帰宅途中であった放課後から最初に着ていた薄茶色の学生服に戻っていた。

「へえ、これだけ近くににいるのに術の痕跡も礼装の魔力も感じられないってことは、お兄ちゃんも私と同じ魔眼ノッブルカラー所持者？」

簡単な魅了や暗示程度ではあるが、イリヤもまた一流の魔術師として魔眼を保有している。そのお蔭で、久郎の解いた幻惑が一般的な魔術回路を通して魔術刻印によって構築される術式と異なることが分かったのだろう。

「毛色がちよつと違うが概ねそんな感じだな。因みにイリヤ専用に丈が調整されたこの車は、俺が既定の形に魔術で錬成したものだ。アインツベルの森に着き次第、後で直してやるよ」

通常では一度、魔眼によるものと知られている場合の有無によって対象に掛かるその効能が変化するのだが、久郎の能力（目を欺く）によって発現する魔眼は通常のものとは大きく異なるため、適当にはぐらかして車についての説明を被せて多くは語らずに車の説明に移った。

「いいわよ別に、車ならまだいっぱい持っているし。車はお兄ちゃんに上げるね」

イリヤは、魔眼についての追及を行わずに、運転席に残ったセル状のマス目を見て一蹴すると、大きく伸びをしながら普段以上に硬くなった体を解し始めて、まるで邪魔な

置物を手渡すような調子で車を譲ると言い出した。

「この機種<sup>マシーン</sup>、出すとここに出せば、二千万は下らない年代物だけどいいの？」

寝癖の後始末に取り掛かったイリヤに貰える物は貰うが本当に構わないのかと、久郎は念を押すようにイリヤに確認を取る。

「構わないわ、森の中にある駐車倉庫の中で一番手前にあつて出し易かつたから選んだだけのものだし、『お気に入りに入り』のと違って出来ることが少なかつたから本当に移動用のもの」

それより、と続いてイリヤは寝癖を整え終わったのか両手を膝に背筋を伸ばして体を解し、運転を続ける久郎を見る。

「どうして私<sup>ホシクルス</sup>達みたいな色合いと正装姿<sup>スーツ</sup>をしているの？」

いつの間にもやら久郎の姿は、穂群原学園の制服から黒い正装<sup>スーツ</sup>と日本人らしい色彩を抜いた白髪に赤目の容姿に戻っていた。

イリヤとしては、まるで本当の兄弟のような錯覚とアハト翁が鑄造する従者たちのようでありながら表情を宿す顔に違和感を覚える微妙な気持ちとなるので今まで通りの切嗣と同じ黒い髪目であつて欲しかったのだ。

「ああそれは……おっと」

説明をしようとした久郎だが、前方に停車を求める赤い誘導棒の明かりに会話を中断

して車を減速させてエンジンは切らずに運転席側の窓を開き、防寒用のベストを羽織った警察官が腰を低くしながら覗いてきた。白い髪をした久郎とイリヤに驚きながらも日本語で大丈夫なのかと話し掛けて一、二分ほど免許証を取り出した久郎と遣り取りを始めてしばらくした後、軽く会釈をしながら通るように誘導棒を振った。

「何あれ？」

「ただの検問さ」

白髪紅眼の姿から黒く戻してアクセルを踏んだ久郎は、アインツベルンの森を目指し新都を抜けて郊外へと走らせながら警察との遣り取りを語る。

「聖杯戦争絡みの不可解な事件や事故が立て続けにあつたんだ、警察も治安の悪化を危惧して深夜には職務質問や検問に力を入れ始める……もつとも、今回の場合イリヤが行きに見せたカーチエイスの影響だろうな」

急遽イリヤと血縁関係者であると誤認するような擬態の能力。目を欺く力については触れずに軽くため息を吐く。

久郎は日本の道路交通法は地域ごとの差は大したことはないものの、取り締まりが厳しいと愚痴を零すが、イリヤの母親譲りの速度<sup>スピード</sup>狂<sup>ジャンキー</sup>について咎める様子はない。むしろ、今度は警察が機能していない国で走ればいいとジョークを混ぜ込む程であり迷惑であつたというような気持ちは一切感じられない。寿命は縮まったが。

「ふーん……。そういえば、リンとの話し合いは結局どうなったの？」

本人が気にしていない様子であることを確認したイリヤは、自分の意識が無くなる前の協定について聞きたくなった。

「別に大した内容じゃないさ」

「で、さっきの返事だが、俺は遠坂とは組めない」

「まあ、予想はしていたけど、随分とはつきり断るわね」

「遠坂には悪いが、俺は元々ランサーに襲われて半ば事故のような状態でライダーを召喚した。だから、俺は聖杯には執着が薄い。言ってしまうえば、積極的に誰かと戦う気が無いんだ」

凜に同盟を持ち掛けられた久郎は、いつそ清々しい程に断りを入れる。久郎自身、イリヤとはまだ具体的な同盟を結んだわけではないものの、今回の聖杯の器候補の可能性が一番高いイリヤを身の内に引き入れる予定であったためライダーとバーサーカー両陣営を協力関係のあるものとしてセイバー陣営と話を進め始めた。そして久郎は、イリヤに話したように自分の聖杯戦争に対する意気込み度合いの低さを伝え終えた。

この時点で、凜の視点で此の間会ったランサーが話していた魔術師が衛宮久郎本人であったことが判明した。元々サーヴァントとの戦闘痕が残っていた衛宮の洋館と、その中に大胆にしかし巧妙に隠された魔術師の工房にいた久郎とライダーを確認した時点で状況証拠は整っていたので、これは予測が確定になっただけに過ぎない。それより戴けないのは後半の聖杯戦争に関わる積りがない、正確には誰とも戦うつもりがないという発言の方だ。

「それは、その子にも話してあるの？」

久郎の隣で静かに寝息を立てている白い小悪魔……イリヤを警戒するように見る凜。視線こそイリヤに向いているが彼女の言葉には、久郎が都合の良いようにイリヤを騙しているのではという疑念が込められていた。

「無論だ。このレストランに来るまでの間、ずっと車の中で死に掛けていたわけじゃない……多少驚かれはしたが、無抵抗に殺されるつもりがなく、敵が俺を攻撃して来たのならそれ相応の措置と処理を執らせて貰う旨を伝えた後には納得して貰った」

「可笑しな話ね。そうまでして戦いたくないのならそれこそ冬木教会に保護を求めればいいじゃない」

「それこそ無理な相談だ。代行者——しかも聖堂教会所属の監督役が務めている時点でその選択肢は消えている」

「?」

意味が分からない。そう言いたそうな凜。

その態度で、久郎は納得するように頷く。凜が久郎の言葉の意味が分からないこと  
で、凜と魔術協会との繋がり<sup>バ</sup>具合が左程<sup>ブ</sup>深くないことが窺えたのだった。

「ああ、そうか。遠坂は俺が時計塔に留学したことは知っているけど、俺が時計塔から日  
本に帰ってきた理由は知らなかったな」

「何よ、随分と勿体ぶるじゃない。確かに中学生三年の秋だなんて中途半端な時期に帰  
国してきたとは思ったけど、イギリスと日本では、ましてや魔術に所縁ある人の集う学  
び舎が、一般のものと同じカリキュラムを取っているとは流石に思っではないけど」  
「いや、そんな留学が絡まるような複雑なものじゃなくて話自体は簡単なものさ。さっ  
き封印指定され掛けたって話がさ、いつ浮上するのかわからないってだけさ」

「ああ、さっき言ってた封印指定の話ね——」

そのあまりに軽い言い様に、思わず凜はそのまま話を流そうとしてしまい掛けた。

「……って、ちよつと。衛宮くん本気!?!」

「マジマジ。今所属している武闘派組織も所詮、頭脳に当たる上層部あつての実働部隊  
である執行者の集まりであつて権力抗争<sup>バ</sup>次第<sup>ム</sup>で権威も権力も吹き飛んじまう規模だ」

少なくとも魔術協会本部のあるイギリスに在住し続けるのは危険だと思つて、魔術関



連を含めて裏の事情にソコソコ繋がりが有りながらも独立性に富んだ組織が複数存在する日本は、久郎にとつて都合がよかつたのだろう……。何より、実質的に彼の主治医であり、時計塔の紹介状を書いて貰つた第二の師からも、少しでも住み慣れた土地に住んでいた方が自衛し易いだろうと名高い人形師である『赤』の助言も彼が冬木に身を潜める後押しとなつた。

「?」でもそれと、聖堂教会が派遣してきた監督役とどう関係するといふの?」

魔術協会が久郎を捕まえに封印執行を行うといふのはまだ分かるが、あくまで久郎の言ひ分は監督役を務めているのが聖堂協会所属の代行者であるといふことであつた筈だ。

「だからさ、遠坂」

困り氣に頬を掻きながら久郎は笑いながら言つた。

「俺が封印指定される切つ掛けになつた事件……基、実験がさ、聖堂教会の教義に触れるどころか土足で踏みつけるぐらいの禁忌物らしくて……冗談抜きで状況次第で下手すれば両教会（協会）の上辺の休戦協定すら反故する可能性すらあるんだ」

「……ちよつと待つて、つまり衛宮くんがこの冬木にいることが教会側に知れたら、聖堂教会と魔術協会の二つがぶつかり合うつてこと? 管理者である遠坂<sup>わたし</sup>を差し置いてそんないつと」

ありえない、と続く凜の言葉を久郎が遮る。

「あー、違う違う。正確には魔術協会と聖堂教会が手を組んで共同に共戦して俺を狩りに来るって話」

ある意味、両組織での争いを避けるということでは『休戦協定の反故』は守られている。しかし久郎が言った『休戦協定の反故』とは、一人の魔術師の研究成果を巡って二つの勢力がぶつかり合うという意味ではなく、一人の魔術師のために敵対し合っていた二大組織が手を取り『共戦協定の成立』させるということを表していた。

「……………どういうこと？ 衛宮くんあなたさつき、執行者の派閥に入ったことで封印指定を逃れているって言っていたわよね。そこまで重視……………いえ、危険視されるほどの使い手だとすると、ただ名が売れ始めた組織に保護された程度で見逃される筈がないわ」  
話が噛み合わない、内容の齟齬に凜は慎重に言葉を選ぶ。

自分を捕まえるために裏組織の二大勢力が互いの利益と教義を捨ててまで捕獲しようと動くと言語するクラスメイトに凜は会合時に懐いていた暗殺や襲撃などを考慮した警戒とは別種の危機感を持った。個人単位で引き起こす事件などは比べ物にならない、言ってみれば国や軍といった戦力と同等の力を持つ組織を巻き込みかねない戦争に達する事変を連想したのであった。

久郎の様子から、言葉通りの冗談抜きでの虚勢や妄言の可能性は疑っていないし、先

程までの遣り取りから久郎が嘘を吐くならもつと意味のある内容にするだろう。しかし、七人の魔術師同士の殺し合いから一個人を捕まえるだけに動くには明らか過ぎる。過剰戦力に現実味が感じられないのも事実なのだ。

「保護？ 何を言っているんだ遠坂」

久郎の話に付いて行けなくなり掛けている凛に久郎は、彼女が間違った方向に封印指定の話を解していることを察し、その点を正そうと指摘する。

「組織に入って身を寄せたついでに、俺は奴らの仲間になつたわけじゃない……。今だって互いの顔も合わせず、せいぜい連絡を取り合つて互いに情報交換をして互いの生存を確認しているぐらいにしか関わらないぞ」

「……!? まさか衛宮くん、あなた」

顔も見せていない。その強調された言葉に、久郎の過去の行動に潜む違和感を覚えた凛は一つの可能性に辿り着いた。

「ああそうだ、遠坂。俺は……時計塔に登録した時の名前の俺は、封印執行時にその組織の手によって殺された死人つてことになってるんだ」

凛の驚愕した表情と流れる思考を盗み見た久郎は、あつさりと驚愕的事実を曝け出した。

衛宮久郎は時計塔に留学する際、自分の容姿を偽ったままイギリスに居住していた。

そう言っていた。

組織に身を寄せた——名門の集う派閥や権威の強い家柄に取り入るのような形ではなくではなく、また組織の一員になったとも言っていない。

身を寄せた——その曖昧な表現に、凜は魔術師らしく非情に考えた。

考えること自体は、魔術師としての教育の基礎として理解はできている。初代の魔術師はその知識を学んだ人からなるものだが、魔術を扱う魔術師の子供は、人の世から外れた魔術師としてその生を受ける。人として生きるのを止めて、人の道を外れることで魔術師は魔術師として生き、魔導の道を進むことができる。その障害を乗り越えるためなら魔術師は何でもする覚悟を決めなければならない。そう、——魔術を、『』へと、根源へと至るために昇華させるのなら魔術師は自分の研究を次世代へと受け継がせるために何が何でも生き残らなければならない。例え、自分を一度殺してでも……。

考えてみれば、簡単なことだ。誰も本当の顔を知らなければ、死体の偽装くらい容易い筈だ。

凜は改めて、魔術師同士の命の遣り取りの経験の無さ故に久郎の行動力に恐れ戦いた。十年前の第四次聖杯戦争によって父を亡くし、兄弟子である綺礼の師事の下、魔術の鍛錬を行ってきた。手を抜くような脆弱な態度で魔術を学んでなどいない。凜は、魔術師としての基礎を早々に収めた後に遠坂家伝来の宝石魔術の研究と自己鍛錬に明け

暮れていた。

だが逆に言ってしまうえば凜は、それ以上のことはしていないということ。遠坂凜の圧倒的に足りていないのは、他者との命の遣り取りであった。あえて経験があるとすれば綺礼が魔術とともに教えてきた実戦並みの八極拳の稽古ぐら이었다。

実質、久郎自身が封印指定から逃れたのは不死性を持たせる能力の限界まで殺され続けられる可能性を危惧しての行動であって、自分の魔術の保護などは二の次であったのだが、凜がそのことをするのは大分後のことになるだろう。

「ということとは、衛宮くんは偽名も使ってイギリスに行っていた……ってことか」

「時計塔で登録した俺の名前は小桜<sup>こざくら</sup>。衛宮切嗣<sup>父</sup>に引き取られる前の、俺の本名だよ」

勿論、最初は衛宮の名前で魔術協会に登録する予定であったが、それは主治医の人形師に止められた。二代前の衛宮矩賢<sup>のりたか</sup>の代……つまり、わずか四代で根源への足掛かりとなる理論を構築した偉業は封印指定の烙印を押され、その息子<sup>きりこ</sup>は魔術師の天敵である魔術師殺しとして大成したのだ。祖父、養父と悪い意味で有名すぎる家名のまま巢窟と名高い時計塔に潜り込むのは無謀であった。

今思えば、苗字のみで登録したのは本当に幸運であった。日本からの留学生が皆無であって同じ名前の者がいなかったために重複のような問題が無く過ごすことができ、憶

え慣れていた名で呼ばれる分には反応に違和感がないのも大きなメリットだった。

「人形師『赤』の弟子未満『小桜』の死体を用意した後、衛宮久郎で時計塔に登録するのにも結構大変だったんだぞ。偽の戸籍に、偽の経歴、全てを揃えて」

そう懐かしむように久郎は過去の思い出を語りだした。

「この魔術協会の冬木滞在の証明書も偽物ってこと？」

「いや、それは本物。あくまで嘘は魔術協会に登録する時に都合の悪くなる部分だけ改竄しただけで、その他の書類は全部本物だぞ」

つまり、本物の書類を作るために嘘の経歴で組織に加入したということになるのだが、何が本物で偽物なのかは当人の判断と行ったところだろう。

「で、そんな重要機密を私に暴露した理由は？ 聖杯戦争中だろうと冬木教会と聖堂教会との繋がり断たれているわけじゃない。寧ろ市街地のサーヴァント戦の隠蔽工作に人員をいつでも補給できる様になっているくらいよ。私はその気になれば、魔術協会に直接報告することだって可能よ」

「有り得ないからだ」

「は？」

「だから、遠坂が俺を魔術協会に売ることは有り得ないって言ったんだ」

「その根拠は、自信は一体どこから湧いてくるのかしら。私は霊地冬木の管理者として

この土地を守る義務を負っているのよ。こんな戦争の火種そのもののような魔術師をいつまでも置いておける訳が」

「だからこそだよ、遠坂。俺の存在を両組織きょううかいが確認した場合、冬木の住民のことなんかお構いなしに奴らは、ここを焼野原にするぞ」

何ら躊躇無く出たその言葉に凜は息を飲んだ。それは言外に冬木市民全員を人質に取っているということ。通常の管理セカンダリー人であれば、霊地の地中に蔓延る霊脈の無事さえ確認出来れば躊躇無く魔術協会に報告しただろう。しかし、後見人である言峰綺礼の鍛錬方針から魔術師として他者を切り捨てる覚悟に関して知識として有しているだけの凜は、本物の貴族の生き残りとされる理想の父の姿しか見ていない凜には、数千数万の一般人を犠牲にしてまで魔術の研究を続けることなど、彼女自身がそれを許さない。

「まあ、そんな訳だからさ。遠坂にしてみれば神秘の秘匿の延長上に衛宮久郎だけ明かして貰いたいんだ。封印指定の魔術師小桜の存在なんて知らない」

そうしてくれるよな。その余裕溢れる姿勢に凜は、自分が久郎の張った情報という罠に嵌ってしまったことに気付いた。

そもそも、衛宮久郎は自分が封印指定を受けられ掛けた魔術師であることは本人から聞き及んでいたことだ。そして彼は、自分が能動的に戦うつもりがないとそして、教会の保護も受けたくないという矛盾にも似たことを言っていた。凜がその理由を聞かざ

るを得ない状況に知らず知らずの内に追い込まれていたのだ。

本来、他者を蹴落として最後の一組になるまでの魔術儀式の一人に選ばれた魔術師が戦いを放棄しているのにも関わらず、戦場から立ち去らないどつちつかずの状態にいる。その違和感を敢えて付かせることで凜の逃げ道を完全に塞いでいた。

「え、ええ……そうね。その方が互いのためなもの」

これで遠坂凜は、衛宮久郎から逃げられない。

手を引く機会ならあった。久郎が教会に行きたがらない理由など放置して、同盟が組めないのなら次善策で攻めればよかったのだ。しかし、もう間に合わない……。久郎の言う通り、凜と結んだ協定の内容は教会と協会が敷いた暗黙のルールとされている『神秘の秘匿』の延長上のようなものであった。違うのは、その規模と危険性のみ。

もちろん、久郎の言っていたことが全て真実である証拠はないし、実際鼻で笑ってしまっただけの大法螺であると断ずるのが自然だ。調べるのにだって、それなりのリスクが伴う。だからこそ、ここは一旦相手の言葉に乗って後日調査するしかない。兄弟子のいる冬木教会へ！

そう覚悟を決めた凜に久郎は、話を戻すぞと仕切り直しの一声をかけた。



「出来るだけ穩便にこの聖杯戦争を終わらせるってのが俺の目的だ。そういう意味じゃ、遠坂の同盟自体は悪い話じゃないけど、そこまで肩入れする間柄でもないのも事実だ」

「分かったわ、当面の間は互いの攻撃的接触は避けるってことね」

チャンスが巡ってきたと凜は、即ライダーとバーサーカー陣営との戦闘を避けるために口を開いた。正直な話、これ以上久郎のペースのまま話が進むとなると、相手の要望に対して拒むことができなくなる。

そして、凜は矢継ぎ早にこれからの行動について提案と確定を出した。

学校生活内ではこれまで通りに、魔術関連の行動、仕掛け、言動、全てを禁止し、別陣営による襲撃の場合は各個で対応すること。

学内に施されている術式については明日の夜、ライダー（とバーサーカー）陣営が処理することとし、その時間に限りセイバー陣営はライダー陣営に対して一切の干渉を禁じる。使い魔による偵察、地脈探索や他陣営との情報交換を含める観察行為に類するもの全て対象となるが、後日（日の出後を目安に）であればそれらの行為は許容される。

以上これらの規約を守る限り、久郎と凜は互いを積極的に害することはないこととした。

「残りの問題は、学校内にいるもう一人のマスター候補の調査についてなんだけど」

「間桐と桜のことか?」

「間桐? ああ慎二のことね。心配しなくてもあの二人は罷り間違つてもマスターに選ばれるようなことはありえないから安心して」

「え……つと?」

その自信溢れる否、寧ろ無関心な態度とその言葉に実際に慎二がアーチャーのサーヴァントを従えて襲撃してきたことを知っている久郎は混乱のあまり、言葉に詰まった。

「間桐の家系は元々、この土地の魔術師ではない外来の血筋なの。それで土地の霊脈に合わなかった間桐の魔術回路は代を重ねるごとに減つて慎二の代で潰えた。だからあいつは魔術師じゃないし、同時にマスターにも成れないし、桜は養子だから当然間桐の魔術も使えない」

「……じゃあもう一人つて誰のことだ」

終に過去の御三家同士の事情に触れてまで解説し出した凛に、慎二がサーヴァントを従えていたことを伝えるとまた話がずれると思ひ久郎は一先ず、自分も知らないもう一人についての情報に主眼を置いた。

「衛宮くんのクラスメイト、リゅうどういっせい柳洞一成生徒会長よ」

「一成がマスターだと!? それこそありえない」

「こつちだつて当てずっぽうで言っている訳じゃないわ……。この冬木の地で一番強い龍脈を持つているのは円蔵山であることは知ってる?」

「ああ、切嗣父さんから聞いたことがある。あそこは日本じゃ上から数えたほうが早いぐらいの高位な土地らしいことは教えられて……」

というより、久郎は前の武家屋敷のような衛宮邸に住み着いたころからあの山には、薬草や山菜目当てでよく登っていた。山の中のことなら柳洞寺に住んでいる人より知っており、自然霊以外の霊的存在を拒絶する自然の結界のお蔭で雑念や怨霊のような存在が居ないのも当時の彼の目にあつた疾患に良い環境であつたのでよく訪れていた。

「そこに魔術師キャスターのサーヴァントが工房……いえ、あれはもう神殿と言つていいぐらいの拠点を作つて、新都の住民から魔力を強奪しているの」

魔術師キャスター、七つのクラスのサーヴァントの中で暗殺者アサシンに次いで最弱の英霊。主に知略や謀殺に長けた魔術を使った籠城戦を得意とするクラスの英霊だ。そのサーヴァントが魂食いを行っている情報に久郎は聞き耳を立てる。

「確かなのか?」

「ええ、セイバーを召喚した次の日にはガス漏れ事故として処理されている現場から霊脈筋を辿つてみたんだけどもうさきんさんよ」

その日の夜に強襲した凜とセイバーは、あの土地特有の結界の所為で参道以外の侵入経路はセイバーの動きを阻害されるために、正面からの凱旋を余儀なくされた。

しかし参道はキャスターの仕掛けた固定魔法陣が容赦なく襲って侵入を許さない状況であった。セイバークラスの対魔力も魔術による高度な術的効果を対象にされたものであって、純粋な魔力の塊から生じる物理的なダメージからは守ってくれない。

つまり、最低でも三日以上キャスターは魂食いを繰り返し、力を蓄えているということ。その間が長引けば長引き程にキャスターの神殿は攻略難易度を上げていく。

「それは厄介だな」

「当面の問題は、キャスターに絞るといいうのが私の方針よ」

「なるほどな。だけど、いくら柳洞寺を行き来しているからといって一成がマスターだと考えるのは無理があるんじゃないか？」

「だからあくまで候補よ、候補。マスターじゃなくても何か情報……、もしくはその情報を隠した痕跡が見つければ御の字でしょう」

「……わかった。先ずは俺の方で探りを入れてみるから、授業が終わった放課後に今度はイリヤも交えて話し合おう」

正攻法でキャスターに敵わないとなれば、そのマスターの方から攻める彼女の切り替えの早さに、久郎は凜に対する警戒心を上げることとし、最後に一成の件に自分も嘯む

ことを伝えてこの話し合いを終えた。

暖房の効いた車内でイリヤは久郎と凜の同盟以下共戦以上の微妙な関係に、いまいち腑に落ちない点があった。

「ねえ、お兄ちゃん。どうして態々凜に本当のことを話したの？ その気になれば煙に巻くくらいのことはできたと思うんだけど」

「それができるのが一番手っ取り早かったんだが、ああいった芯がしっかりした人間臭い奴には、包み隠さないことの方が物事は上手く運ぶことの方が多い」

それに久郎にしてみれば、凜は魔術師としての腕前が一流なだけ、人としての性分が歪んでいない分、生半可な脅しだと対抗意識を上げて予想できない行動をされる方がよっぽど怖かった。

人間は複数で行動する分には集団心理が働き、ある程度の法則が出来上がって対処がし易くなるものだが、個人となると行動パターンの個体差が激しく前例が全く役に立たないことが多い。

特に凜のような、基礎をしつかり学び独学で一流に手が届く天才型は癖が強く、こち

ら側の思い通りに動くことの方が稀である。互いに信頼関係が成立できない以上、敵でも味方でもない位置に置いておくのが一番対処しやすいものだ。

「まあ、遠坂もこつちが話したことを鵜呑みにはしないだろうから、深く関わらない程度にしておけば……」

問題無いさ。と、続いてイリヤにアインツベルンの森までもう少しだと伝えようとしたとき、進行方向の車道に立つ二つの影が見えた。久郎が、とつさに急ブレーキを掛けた高級車は、融けかけた雪に滑り甲高いスリップ音を響かせながら斜めに車体をずらし、棒立ちに立っていた二つの人影の十五メートル手前に停車した。

その人影は、両方とも久郎にとつても見覚えのある人物の物だった。一人は、大きく日本人にしては浅黒い肌と白い髪が特徴的であったアーチャーのサーヴァント。目立つ赤い外套を着ていない黒いカーボン製の装甲のみの姿が気になったがもう一人の人物の姿に久郎はそんな疑問を彼方へと追いやり言葉を失った。

シヨートカットに切り揃えられた茶髪に、同年代の中では幼げな顔立ちをした大人しそうな眼差し。

そして、コートとマフラーの下に着衣している穂群原学園生指定の制服に右手に持った買い物帰りであろうと思われるビニール袋を下げた、どこか昭和の女子高生思わせるその姿は、三枝由紀香。

——目を盗む

その姿を確認した久郎は先ず、幻術によるまやかしである可能性を危惧し、窓から目を赤く光らせ三枝らしき人物の思考を盗み見る……。結果、彼女は何も感じておらず、何も考えていないことが分かった。

結果は最悪の状態であった。

暗示によって意識を奪われそして何より、アーチャーと擬似的な経路の繋がりがあることが分かったのだ。

「この外道め。 劍<sup>sword</sup>!!」

「ちよつとお兄ちゃん!?!」

車外に現界していたライダーとバーサーカーを置いて久郎は、劍を持って車を飛び出し三枝の首元に刀身を添え叫んだ。

「動くな!!」

そしてアーチャーもまた、迫り来る久郎の首に投影した夫婦劍の莫耶を突き立てんと構え……。戦況は二人の叫びとともに膠着状態に陥った。

## 17 剣銃の森轟

警告と威嚇を込めて異口同音に相手の静止を叫んだ両者は、構えた剣を動かさずに相対する敵を警戒し、視野を広く持つ。そして彼らは互いに表情には出すことなく、相手が向きえる刃の先に動揺していた。

魔力消費を抑えるために赤い外套の武装を外し、黒いカーボン製の装甲のみ纏うアーチャーは、前マスター（恨）（仮）から聞いていた限りの情報と、前夜に実際に戦った時の印象では、自らが封印指定者であることから大事を避けるための打算があっただろうが、セイバー（適）のマスター（坂）と同様に少なくとも一般人の被害を良しとしない今時でも珍しい良心的な魔術師であると。嘗ての自分がそうであったからこそアーチャーは、そう思っていた。

しかし、薄茶色の穂群原学園学園生指定の制服には似合わない製錬された美しい両刃の細剣（レイビテ）を手にした彼が標的として狙ったのはアーチャーではなく、こともあろうか同じ学園の級友である三枝由紀香（さえくさゆきか）の方であった。

“ありえない” そんな言葉がアーチャーの心中で反響し、彼の思考を奪う。



同時に久郎もまた、アーチャーが魔力供給に経路パスを繋いでいるであろう一般人さえぐさを人質に、こちらの動きを封じる腹であると思っていた。聖杯戦争の最中、一般人に犠牲が出たことは珍しくないが、現状全陣営ではキヤスターによる魔力の搾取以上の被害は確認されていない。その中でバーサーカーバースカーのマスターマスターと共にアーチャーを引き連れて来たであろう一般人ごと吹き飛ばすといった強引な手段は、他陣営を始め曳いては監督役の目を引いてしまう。

だからと行って定石通り、久郎がライダーにアーチャーの殲滅ではなく救助を任せただけ、アーチャーが三枝に武器を突き付けて人質にすれば、火力重視の宝具を切り札とするライダーでは迂闊には手を出せなくなってしまう。

だが、久郎単体でなら例えアーチャーが人質に武器を向けようと、盾代わりにしようとして三枝を救出することが出来る見通しがあった。イリヤにバーサーカーのサポートの指示を仰ぐ時間も惜しみ、久郎はライダーを現界させることなく、赤い外套を解いていた弓兵に立ち向かったのだ。

——目を醒ます

淡い緋色に輝く瞳に込められた不死身の肉体を再現する能力を全開に駆け抜け、久郎は武器に転換した『剣sword』の魔法礼装の切っ先を棒立ちの三枝へ目掛けて突き刺そうとしたのだが、人質ではなく久郎に対して向けられたアーチャーの白剣によって失敗した。

人質の首筋に沿えるだろうと予想していた刃は、久郎の予想を裏切って彼の横顔を写す鏡のように添えられたのだ。

寒空の中では幾らか薄着であろうかと思われる刃物を持った少年と男を高級車のサーチライトと道脇に沿って点在する街灯が、彼らの姿を照らす。

両者が物騒に対面した後、遅れて、その高級車から紫色の防寒用コートを着たイリヤがバーサーカーを傍らに現界させて道路に出る。車体の上にはライダーが既に現界しており、彼女の武装である釘剣に付いた鎖が細長い蛇のように車体を嘗め、コンクリートの上に這い垂れていた。

「バーサーカーのマスター、自分のサーヴァントの手綱はしっかりと握っていないさい。今我々が動くことは我が久郎<sup>マスター</sup>の足を引っ張ることになり兼ねません」

バーサーカーのクラス属性を危惧してのことだろうか、ライダーがイリヤにサーヴァントの待機の指示と警告をする。

「その心配はないから安心して。でも……」

歴代のホームクルスの中で最高のマスターとして、魔術回路を走らせたイリヤは、戦々恐々と岩剣を握るバーサーカーに傍らから離れないよう命じながら、沈黙の応酬を

続ける車線上の二人を見据えると。

「あの女を助けるために、お兄ちゃんが怪我をするのは許さないつもりだから。そこら辺のことは譲歩して頂戴ね？」

意地の悪そうに笑い、ライダーもまた無表情ながらも手に持った釘剣を構え直して鎖の乾いた金属音を鳴らしてその言葉に同意した。

念話より後から指示された久郎の意向を第一に考えているライダーだが、仕えるサーヴァントとして主人が必要以上に傷付くのは彼女とて見たくはないのだ。

互いに深読みし続ける中で、アーチャーは視界の先に捉えた久郎の剣に違和感を持つ。

前回の戦いで雪を媒体とした氷の人形を自在に操る手腕を確認出来たが、久郎自身が持つ礼装を直接見たのは初めてであった。

アーチャーは、古今東西の刀剣の類を見ただけで解析し、己の宝具そのものである固有結界内に投影として複製し貯蔵する能力を持っている。その特性上、彼は解析の魔術には絶対の自信を持っており、刀剣として製作されたものであるなら、斬る以外の用途として作られた物品であろうと、複製は可能であるのだ。

そこで湧き上がる違和感とは、アーチャーが保護した三枝に突き付けられた剣の形を

象った礼装の解析にノイズが生じていることに他ならない。

—— 対象の大凡の形状を把握……視覚観測、成功。

—— 創造の理念の鑑定……原型構造の把握、失敗。

—— 基本となる骨子の想定……解析不能のため、失敗。

—— 構成された材質の複製……系統外構成のため再現不可、失敗。

—— 製作に及ぶ技術の模倣……同質系統による技法を確認、成功。

—— 成長に至る経験の共感……時間経過に生じる技能蓄積皆無のため、失敗。

結果——性能、構成物質、経験の複製失敗。既存既知の物質による代替を用いた形状複製のみ投影可能。

結論、衛宮の名を持つ少年が握る剣は、形こそ刃の用途を成す品だが、その本質は決して人の手が及ぶことのない神霊や精霊のような超越種と同等の次元が異なる存在に近しいことが分かる。

かの星によつて鍛え上げられた聖エクスカリバー剣とは異なる、その剣は魔を宿した剣ではなく、悪

魔が剣の形にその正体を偽っていると云われてもアーチャーは納得するだろう。それほどまでに美しく、夫婦剣、干将・莫耶を始めとした数多の刀剣を映した鋼色の目には理解できない神秘が込められていた。

身動きの取れないアーチャーが久郎の持つ細長剣の複製を試みている間、久郎もまた不可解な行動をとるアーチャーの思惑を看破するために淡く輝く双眸の内、弓兵にほど近い左目の色のうりよくを変えた。

——目を盗む

思考を覗く読心の魔眼を輝かせる。

前夜、慎二との戦闘時に試みた時にアーチャーの心を見ることが出来なかった久郎だが、対魔力を持つ四騎士の内、アーチャーを除く三騎の記憶を見るまでは至らなかったものの思考を読むことに成功していた事実の齟齬に違和感を持つていた。

全七騎のサーヴァントの内、対魔力スキルを保有する四騎の中で一番低いステータスである筈のアーチャーにのみ魔眼の干渉に失敗したことに、その原因について考えた結果、アーチャーの持つ特殊能力か加護に相当するスキルか、ライダーの眼帯のような身に着けるタイプの宝具、武装による効果であると予想する。

消費魔力の節約か、以前武装していた赤い外套を身に着けていないアーチャーの姿に、久郎はその変化に賭けたのだ。

そして久郎は、アーチャーの思考を心の内を盗むことに成功し、自分の魔法礼装が解析され複製され掛けていることに驚愕する。

自らが知覚した物体に解析を施して、その存在を模倣した複製品を固有結界内に貯蔵する能力。それは、久郎自身が習得した魔術の中で一番体に馴染んだ、自分の手足の如く知る異端の技。

その力をよく知るが故に久郎の行動は速い。横顔を移す白い刀身から逃れるように体を捻って左足を軸に右足を後方に運ぶと三枝に添えていた細長剣をアーチャーに向けて下段の構えから振り上げる。

急に攻撃的な行動を執る久郎に、アーチャーは『剣』<sup>sword</sup>の解析を取り止め、流れるような動きで莫耶を用いて迎撃する。しかし、互いに地平の刃に触れた瞬間、白刀が鎬を削り合う金属音が響くことも剣圧による衝撃を受けることなく豆腐かケーキのように細長剣の刃が吸い込んだ。

刀身を沈ませるように迫りくる剣をアーチャーは、迎撃を諦め身を斜め後ろに反ることで躲す。自身の得物が敵わない予想を超えた想定外の危機に対してもアーチャーは怯むことなく空いている右手に干将を呼び寄せ、半端な刀身になった莫耶を捨て去り、今度は両手で干将の柄を握る。

久郎が、初撃を躲されたことによつて空を切った細長剣を引いて、本来の用途である刺突に適した突きの構えで以て向かつて来ることを確認したアーチャーは、胴目掛け迫

り来る細長剣に向かつて思い切り干将を叩き付けた。

黒い干将の刀身は、相方と同じように神秘の絶対的な強弱によつて無慈悲に切り裂かれる。しかし、アーチャーは刀身半ばを過ぎた頃合いを見計らつて体ごと回すように足を運ぶと干将を捻り、刃ではなく側面の紋様である樋に對して力を向けることで刀身を突き押すことで久郎の手から細長剣を絡め取ることに成功し、そのまま細長剣が刺さつた干将を投げ捨て、久郎の鳩尾に瀕死一步手前までの本氣の脚力で蹴り上げる。

敢えて自分の剣を切り込ませて捻じ込むように絡め取られた久郎は、予想外の方向から加わつた腕力に手首を痛めアーチャーの蹴りを避けられずにその身に喰らう。アーチャーの脚が久郎の鳩尾に食い込み、その衝撃はフルスピードで突つ込む軽トラックと変わらない。大柄とは言えないまでも、その年頃の平均的な体格を持つている久郎が御弾きのように後方へ吹き飛び、緩い放物線を描きながら最後にアスファルトの上に重たいものを落としたかのような鈍い音が響く。

「マスター（お兄ちゃん）!?!」

サーチャイトを付けたままのパンツの傍らに見守っていた二人が、声を上げる事無く落下し蹲り倒れた久郎の姿を見て、生死の安否こそ心配してないが叫ばずにはいられなかつた。

「この……バーサーカー! あのアーチャーを」

激昂したイリヤが、魔術回路を走らせバーサーカーに弓兵を物理的に押し潰す命令を下そうと声を荒げたが、幽鬼のようにフラリと立ち上がった久郎が、右手で制する。治癒魔術と目を醒ます能力の重ね掛けで腹部の傷害を一瞬で完治させたのだ。

「イリヤ、あのアーチャーを相手取るにはバーサーカーでは相性が悪過ぎだ。奴は、敵の武器を読み解き、複製することが出来る」

飛ばされた時に口の中を切っていたのか、口端から流れ出た血を拭いながらライダーにも直接手を出さずに後方支援を念話で指示した久郎は、無数に剣戟を生み出すアーチャーと命のストックを持っているとはいえ十分に戦略を立てられないバーサーカーの優劣を告げる。久郎は無傷での人質の解放を諦め、治癒可能程度の傷を負わせる覚悟で、三枝由紀香の救出を確実なものとするために、敢えて一人でアーチャーに立ち向かう。

イリヤは、こういった絡繰りで久郎がアーチャーの能力を看破したのか、どこまでその情報があるのか知ることには出来ない。だが、久郎が語るその言葉を信じることは出来る。主人の言葉に従順に従い大人しく車上に待機するライダーを見習いながらイリヤは狂戦士のサーヴァントと共に義弟の一騎打ちを見送った。



無限に剣を生み出し、矢として形状を変化させ弓に番え放つ弓兵。<sup>アーチャー</sup>

最初の内は、一見奇怪に見える武装の特性に疑問を抱かなかつた。同じように生前の武装を瞬時に実体化させることのできるサーヴァントは、ライダーの釘剣やバーサーカーの岩のような斧剣、果ては宝具そのものである赤い槍すら自由に霊体、実体化させることの出来るランサーといった前例があつたためだ。

違和感を覚えたのは、アーチャーがライダーとの戦闘時に演じた剣戟であつた。無論、割り当てられたサーヴァントのクラス以外の武功、武勲を複数持つ英雄はヘラクレスやアーサー王を筆頭に別段珍しくはない。しかし、アーチャーが振るう剣は二刀流としては、非常に珍しい同じ質量と間合いを持つ双剣であつたのだ。通常二刀流による剣の大きさというのは、左右非対称であることが多い。利き手による握力や腕力の違いから、短い片方を防御に徹し、間合いを取る長剣で敵を屠る流派や、投擲や刺突に特化した軽い剣に毒を塗って戦うといったものが正統派なのだ。久郎の目はアーチャーの手にする夫婦剣は、それらを度外視した伝承によってのみ伝えられる持ち主のいない干将・莫耶であることを見抜いた。

低ランク相当の対魔力スキルしか持たないアーチャーに対して読心（目を盗む）能力が通じないことも含め、使い手の存在しない筈の宝具を所有し、さらにその宝具を十全に剣として使いこなす弓兵<sup>アーチャー</sup>に足して時間が経つほどその疑問は大きく膨れ上がった。

その疑問が、ようやく解決した。外界に対して着用者の身を守る聖骸布を基にした赤い外套の武装を外したアーチャーが剣の複製を試みた能力を衛宮久郎は知っている。

魔法にも匹敵するその能力は、宝具すら対象として取り込むほどであり、等価交換の原則を完全に無視しているため人間が扱う魔術ではなく抑止の一端を担う超能力級の代物だが発動に魔術回路を必要としているため、広義的にはやはり魔術として扱われる。

その力の名は——

自分の能力の一端を看破した久郎が立ち上がり、その覚悟を決めたような顔を見たアーチャーは、衛宮久郎という個体に警戒以上の評価を下した。

殺傷が目的でなかったとはいえ、全治数か月は確実の傷を瞬時に治癒するその腕前と二十m以上離れているのにも拘らず感じる魔力の多さもさることながら、一般人に対し躊躇なく武器を向ける情緒にアーチャーは感心すら覚えていた。もし言葉を交わす暇があつたら、現状で足手纏いにしかならない人質の始末を行おうとする手際の良さは、世界に操られる守護者顔負けであると皮肉の一つでも言っただろう。

しかし、虚空から現れ黒光りした短機関銃を左手に持ち、懐から二枚の礼装らしき

カードを取り出した久郎の様子を見たアーチャーも弓兵としての戦いを強いられたのも事実であつた。

I am the bone of my sword. Steel is my body, and fire is my blood.  
 「体は剣で出来ている。血潮は鉄で、心は硝子」  
 Shot Wood. Dance of double trap. The goal secured.  
 「撃、木。二段転換を付与し、敵兵を拘束」

アーチャーが黒い大きな和弓を、久郎が短機関銃を虚空より呼び出したその力は――

リアリテイマープル  
 固有結界。

悪魔や真祖の吸血鬼、精霊を始めとする、魔力を糧に生きる超越種が固有の能力として異界の常識を操る他に、人間が長い年月を経て個々の心象世界を形作る魔術として編み出した異界創造法。

世界を再現する点において錬金術師の最終目標に程近いその力は、禁忌と畏れられており魔術協会においても封印指定が確実の魔術として多くの使い手が記録されている。

その力の『使い手』でもある久郎もまた、その能力の利便性を理解しているからこそ、敵に回れば脅威になることは分かっていた。

だからこそ、だからこそ彼らは、互いのことを知り尽くしているからこそ、必要最低限の詠唱だけ済ませ短期戦に持ち込むことにしている。

「投影」 「鍊成」  
Trace Craft

二枚のカードが光の粒となり、久郎の体の周りに集まり次第に浸透し、アーチャーの弓に番えられた剣の矢を中心に虚空から刀身を覗かせる無数の刀剣が現れ……

「開始!!」

怒号のような詠唱を皮切りに銃口から噴いた弾幕と、放たれ射出された刀剣の劍幕が眩い金属の火花を咲かせた。

銃弾が刀身にぶつかり跳弾し、銃撃に耐えかねた刀身が砕け刃の欠片が飛び散る。

一瞬のみ拮抗していた鉄の嵐は、宝具である刀剣と魔力の込められただけの銃弾による競り合いにもならない激突によつてコンマ01秒を待たずにアーチャーの剣が押し寄せてきた。

久郎の後ろで待機しているライダーやイリヤスフィール達の所にも、久郎が撃ち漏らした剣が久郎の横を通り過ぎ、彼女たちにその神秘の籠った刃が迫るも、イリヤの騎士であるバーサーカーが巨大な斧剣の一振りで薙ぎ払われた。何本かがバーサーカーの剣技を逃れ肉体を貫かんと射し当たるも、一定以下のダメージを無効化する宝具の加護によつて弾かれ、四方に四散し、そのどれもが久郎に当たることはない。

当の久郎は、短機関銃の引き金を引いた瞬間から、道路の外に広がる冬木の原生林の

中へと駆け出していたのだ。林立する木々の間を蛇行しながらアーチャーを照準に銃弾の嵐は止むことを知らないかのように横殴りに噴き続ける。時折、銃声の音や銃弾の衝撃の度合いが変わることから、機を見て火器の種を変更しているのだろう。

木々が鬱蒼と林立する闇の中へと突き進む久郎を目で追掛け、自身の保有する無限の剣製を放ちながらアーチャーは、自分の傍らに立っている三枝を覆うように白銀に反射する剣の壁を作り上げ、跳弾する流れ弾から彼女の身の安全を確認すると、星明りすら届かない暗闇の奥へと進む流れ星のように瞬き目印のように火を噴く銃口を指し、黒い和弓に新たな矢となる剣を握り久郎の後を追う。

例え星明りすら届かない夜の宵闇に閉ざされた森林であろうと、夜の狩人である梟の目を遙かに凌ぐ目を持つ英霊と混血の末裔には関係無かった。彼らは、足場の悪い、土の香りのする柔らかい腐葉土の地上から半世紀を軽く超える樹齢を持った立派な成木の枝から枝へと飛び移る樹上戦へと乗り換えた。昨年度の台風にも折れずに太く伸びた枝から別の木の枝へ飛び移り、射出と射撃を継続しながら、相手の動きを先読みして足場となるであろう枝を撃ち抜き、刀剣を先へと放ち枝を切り落として経路を塞ぎ、時には幹を踏み台に方向転換をし、跳躍しながら射ち続けた。

武装した普通の人間で構成された軍団なら単体で翻弄し、一分を待たずに無効化できるであろう化け物か英雄染みた動きを見せる二人の戦況は火力では宝具の矢を放つ

アーチャーが勝り、速度では魔力を込めただけの銃弾を撃つ久郎が勝っていた。弓兵と射撃手は互いに射ち合い、身を躲しながら相手を追い詰め、追い込もうと手を緩めずに木々の間を複雑に右往左往しながら進み回り行く。

国道を外れて原生林の奥へと消えたアーチャーと久郎を見届けたライダーとイリヤは、木々の間に瞬く金属の火花や銃口の閃光を見ながら、少し小さく聞こえる銃声と風切り音が通り過ぎる様を見届ける。

「行っちゃったわね二人とも……。まったく、巻き込まれた一般人相手に体を張るなんて」

「イリヤスフィール」

実に魔術師らしくない。そう続けようとしたイリヤに、ライダーが車上から降りて名を呼ぶ。

「どうしたのライダー？」

「マスターからの指示です。『アーチャーの魔力供給を断つために協力して欲しい』と」

ライダーから聞かされるその簡単すぎる内容に疑問を持ったイリヤだが、断る理由もないのでバーサーカーを引き連れ、剣の壁に守られている阻まれている一般人に近付き命令を下して、その剛腕を振り上げ――

「つ!!」

アーチャーと共に木々の間を飛び回り、こまめに銃器を変えながら威嚇射撃を繰り返していた久郎は遂に自分の後ろを付いてくるアーチャーの剣の矢によつて足場となる枝を切り落とされ中空を掻くも、すぐに体勢を取り直してアーチャーに向けて発砲を続ける。

しかし背中から地面に打ち付けて倒れ伏し、一旦動きが止まる隙をアーチャーが逃がす筈もなく、久郎の肢体の関節も剣の刃を向けて縫い抑えるように地面に突き刺した。両脇、両肘、両膝と六本の刀剣が蝶の標本を支える留め具のように交差し、久郎が起き上がらないように動きを封じる。

「下手に動くことはお勧めしない、バラ肉には成りたくないだろう」

優位な立場を獲得しながらもアーチャーは、固有結界より新たに刀剣を顕現させ自分の周りに待機させながらも久郎を針鼠に出来るようにしており、手にした和弓には捻じれた剣が矢として番えられ弦を張つて久郎の赤く輝く右目をを射抜くように構えられている。

「……意外と優しいんだな、お前」

久郎は、アーチャーが視覚も喉も潰さずに肢体の拘束のみで済ませていることから、

魔眼保有者であり尋常ならざる治癒力を持つ様を確認してもなお人間扱いされていることを察し、アーチャーの不意打ちにも近い人情深さに驚く。

——目を凝らす

しかし久郎は、そんなアーチャーの手心に付け入って、緋色に目を更に輝かせ辺りを千里眼で見渡し目的の場所を作り上げたことを確認すると、口元を吊り上げて笑う。

「構え、狙え、切り裂け!!」

「何を言っている?……貴様?!」

魔力も大して込められていない単純な詠唱に面を食らい、案の定何の変化も起こらないことに魔術の不発を疑ったアーチャーの顔が一気に強張る。辛うじて繋いでいた魔力供給の経路が断ち切られた。これは即ち契約対象者の肉体的な死を意味し、魔力を糧にするサーヴァントにとって文字通りの死活問題である。

久郎のサーヴァントであるライダーか、はたまたイリヤスフィールのバーサーカーの仕業かと狼狽するアーチャーを置いて、久郎は続けて地面に触れている手に魔力を走らせ、無数の銃弾がのめり込んだ大地に向かって命令する。

「育ち育め!」

銃弾によって穴だらけになった原生林の地面から、木々の幹から、勢いよく吹き出す噴水のように飛び出し棘の生えた太い蔓がアーチャーと久郎を囲む。



空まで覆い尽くされたことを確認し逃げ道を塞がれたと分かると、悪態を付きながらアーチャーは、棘蔓の壁に向かって既に顕現させていた刀剣を一点に向けて放ち、断ち切られて薄くなつた壁を狙つて黒い和弓に番えられた渾身の一撃を放とうとするも後ろから迫つて来た無数の蔓が蛇のように絡まり、アーチャーの動きを封じた。矢を番えた姿のまま、棘蔓の繭に包まれついに顔にまで迫つた最後にアーチャーは、小気味よく乾いた拍手が一つ聞こえたような気がした。

「アーチャーの呪縛成功つと」

蔓が久郎を抑え込んでいたアーチャーの剣を掴み地面から抜き取つたのだらう、蔓の塊の傍で体を久郎の周囲をしなやかに蠢く蔓の先には、刀剣が絡まれていた。

<sup>w.o.d</sup>植物を自在に操り、召喚急成長を可能とする樹木の精霊を元に作り上げた魔法礼装の樹のカードを使った作戦は予想以上に上手く行つた。<sup>s.h.o.t</sup>撃のカードと併用することで弾丸を樹の召喚と成長基点の媒介とし、原生林の一角を一気に拘束術式を組み込んだ蔓で覆い尽くして簡易的な異界を形成してアーチャーの捕縛に挑んだのだ。

別段、アーチャーと同じく剣を媒介にすることも可能であつたが、彼らの使用する得物の違いは、状況と身体的実力の差やアーチャーの特別な魔術特性による得手不得手も

あるが、久郎の場合は、アーチャーを三枝から引き離して自分の傍に引き寄せるために、サーヴァントの霊核にダメージを与えるほどの脅威を持つ遊撃ができる武器の中から質量が小さく比較的簡単に連続で錬成出来る短機関銃を選んだのだ。

アーチャーの呪縛に巻き集まっている棘蔓以外の異界を形成している蔓に解除の命じ霧散させると、棘蔓で絡めとったアーチャーの生み出した剣の一本を手に取り真剣に見つめ、その完成度に惚れ惚れするも、自分たちが戦った後の原生林の見るも無残な姿に久郎は溜め息を漏らす。

銃弾によつて幹を抉られた木々や、矢として放たれた刀剣によつて切り落とされた枝の数々。これほどの伐採が行われた土地は最早原生林と称して良いのか分からないほどまで荒れていた。元々、アインツベルンの城へと通じる国道のため、民家は元より交通量も殆どない為、人除けの结界を張っていないのが気にはなつたが、銃声についての隠蔽は教会に任せるとして、戦場痕から手数を見破られるのを避けるために久郎は切り落とされた木の枝や銃痕を隠蔽するために手を合わせ、錬金術を行使する。

アーチャーの剣と銃弾は分解され塵となり、銃痕は木の繊維と皮を引き延ばして、切り落とされた枝は断面の細胞を再構築することで繋ぎ止めて、大凡元通りとなつた一帯を見て久郎は満足げに頷く。

アーチャーを林に誘いを掛けた後、久郎は木々をランダムに移動しているように見せかけ大きな円を描くように動き回っていたため、実際に被害を被った土地は5haもない。

棘蔓に覆われたアーチャーの様は支える蔓がなくなつたことで球体になり、西部劇の背景に出てくる転がり草か刺々しい毬藻のようであつた。久郎はそれを大玉転がしのように押して、木の根っこや石を乗り越えながら程なくして車道に出る。

途中で、痛みを訴えるくぐもつた唸り声が棘毬藻の中から聞こえてきたが久郎は特に気にせず、ライダーとイリヤとバーサーカーが待つ国道まで押し続けた。

「……お兄ちゃん、何それ」

「お疲れ様ですマスター。それは一体何ですか？」

巨大な蔓の塊を押し続けて戻つてきた久郎に二人は当然の疑問を上げる。

「ああ、これな。中にアーチャーが入っているんだ」

微かに蠢く棘毬藻を指差し、久郎は埃を払うように表面をなぞると蔓が消化の終えた蠅取草のように退くと浅黒い肌をしたアーチャーの顔が飛び出してきた。蔓の中が息苦しかったのか、咳き込みながら新鮮な空気を取り込み、状況を確認するため、首を回しライダー、イリヤスフィール、バーサーカーと順々に見渡し、そして怒りに燃える瞳を陰しく光らせ声を荒げる。

「なんとということ……貴様は、無関係の一般人を——!!」

——目を合わせる

久郎はライダー達に説明するためと、帰り道に騒がれるのも面倒なのでアーチャーの体感時間を停止させるためにアーチャーの頭部を出したのだが、眼を開けた途端に殺気を混ぜた怒号が発せられたので早々に停止の魔眼で黙らせ、再び棘毬藻の中に仕舞い込む。

「まったく、どの口が言うんだ？ 三枝を巻き込んだのはお前だろ？」

顔色一つ変えずに、激昂したアーチャーに疑問を持つ久郎の足元には、無残に砕かれた剣の傍らに倒れ、細長剣swordに胸を貫かれた三枝由紀香の姿があった。

「さてと、悪いんだがイリヤ。少し寄り道をするぞ」

原生林の時と同じように、錬金術を使って戦闘痕を隠蔽するために銃弾や刀剣を分解させ、抉られ切り裂かれたアスファルトを元通りに錬成し直すと、久郎は倒れている三枝の傍まで近寄り、彼女に刺さっている剣を抜き取りカード化させて戻すと、ライダーに三枝をベンツの後ろの収納スペースに入れるように頼み、アーチャーを包んだ棘毬藻の下から台車を錬成し、ベンツで引つ張ることができるように無理やり留め具を付け加える。

多少不恰好になったが、全員を連れて行けるようになった久郎は運転席に戻り、車の

キーを回してエンジンを掛ける。

「目撃者の保護に戦場の後始末なんて、それこそ教会の仕事じゃない」

バーサーカーを霊体化させて先に乗っていたイリヤが、頬を膨らませながら回り道することに文句を漏らす。

「教会だって中立とは限らない。特に前回の聖杯戦争に続いて監督役を務める言峰家は遠坂と親しい間柄だ。セイバー陣営に有利な情勢に調整を加えてくることを考えると、自分で後始末する方が安全だ」

久郎個人が教会側に好意的な対応をされたことがないことによる偏見もあるが、確かな筋の情報であることを言い含めてイリヤに説明し納得させる。

「ふうん、そんなものかしら。で、どこに向かっているの？」

「俺の家だ」

異様な台車を引く高級車は、何事もなかったかのように、来た道を戻り、一見寂れたように見える衛宮の洋館を目指し夜の道を進んで行った。